

中国の識別された民族のアイデンティティに関する社会学的研究  
—東北地方の達斡爾民族を事例に—

2013年9月12日

島根県立大学大学院北東アジア研究科博士後期課程

白 薩日娜

指導教員：井上 治教授

## 目次

序論	1
1. 問題意識と研究目的	1
2. 作業理論について	3
3. 先行研究	4
1) 民族概念に関する研究	4
2) 国民と民族統合の研究	7
3) 民族の創造に関する研究	8
4) 「小民族」研究	9
5) ダフル人／達斡爾民族 <sup>minzu</sup> について	10
4. 本研究の意義	13
5. 研究方法	14
6. 論文構成	14
7. 本論文の用語の説明	14
第1章 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の識別	16
はじめに	16
第1節 新中国における民族 <sup>minzu</sup> 識別工作について	17
1. 民族 <sup>minzu</sup> 識別工作の開始の背景	17
1) 民族政策規定の提出	17
2) 民族活動について	18
2. 民族 <sup>minzu</sup> 識別工作	20
1) 民族 <sup>minzu</sup> 識別工作の開始にいたる状況について	21
2) 民族 <sup>minzu</sup> 識別工作のプロセス	23
3) 民族 <sup>minzu</sup> 識別工作の基準について	24
3. 本節のまとめ	25
第2節 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の識別について	26
1. 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の識別までの動向	26
1) 単一民族への初期の動向	26
2) 黒龍江省地方のダフル人の動向	28
3) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> 識別前の動向にみるダフル人政治エリートの作用	29
2. 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> としての識別	30
1) 文献資料から見る民族 <sup>minzu</sup> 識別工作	30
2) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> 人が記憶する調査団の調査—座談会参加者へのインタビューに基づ	

いて—	34
3. 本節のまとめ	41
小結	42
<b>第2章 達斡爾民族の創造と民族文化の創出</b>	<b>44</b>
はじめに	44
<b>第1節 達斡爾民族の政治的創造</b>	<b>44</b>
1. 1950～60年代における達斡爾民族の政治的創造	45
1) 「達斡爾 (dawur)」という民族名称の認定	45
2) 達斡爾民族の民族自治地域の成立	47
3) 達斡爾民族幹部の養成	49
2. 1970、80年代から現在までの達斡爾民族の政治的創造	52
1) 民族工作の復活	52
2) 達斡爾民族の政治的創造の発展について	55
3. 本節のまとめ	57
<b>第2節 達斡爾民族文化の創出について</b>	<b>57</b>
1. 1950、60年代の達斡爾民族文化の創出	59
1) 学者たちの研究	60
2) 達斡爾地方の民族文化幹部による民族文化活動	64
2. 1970年代から80年代から現在までの達斡爾民族文化の発展	68
1) 学者たちの研究と文化工作者の宣伝	69
2) 達斡爾地方の政府側による民族文化の発展	71
3) 達斡爾学会の作業	75
4) 民衆の参与	81
<b>第3節 達斡爾民族文化の伝統化</b>	<b>82</b>
1. 伝統化の基礎—民族の歴史の構築	83
2. 伝統化された民族文化要素	85
1) 民族の文学	85
2) 民族の祭典	86
3) 民族の体育活動	90
4) 民族の踊り	91
5) 民族の食品	91
6) 民族衣装	93
3. 達斡爾民族の伝統文化	94
1) 達斡爾民族の文学	94
2) 達斡爾民族の祭典	95

3) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の体育活動 .....	95
4) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の踊り .....	95
5) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の食品 .....	96
6) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の衣装 .....	97
小結 .....	99
<b>第3章 達斡爾民族<sup>minzu</sup>のアイデンティティ .....</b>	<b>101</b>
はじめに .....	101
<b>第1節 ダフル人のアイデンティティに関する考察—とくにその多様性について .....</b>	<b>101</b>
1. 文献資料に見るダフル人エリート <sup>minzu</sup> のアイデンティティ .....	103
2. 口述にみるダフル人のアイデンティティについて .....	109
1) インタビュー内容 .....	109
2) インタビュー分析の結果 .....	112
3. ダフル人の複数のアイデンティティ .....	115
4. ダフル人の複数のアイデンティティの形成要因 .....	116
1) 歴史的要因—ダフル人の政治活動 .....	116
2) 地理的要因—地域による生活・生業の違い .....	117
3. 階層的要因—エリート知識人、学者、知識人、農民 .....	118
4) まとめ .....	120
5. 民族としてのアイデンティティの萌芽 .....	120
6. 本節のまとめ .....	121
<b>第2節 達斡爾民族<sup>minzu</sup>のアイデンティティ .....</b>	<b>121</b>
1. 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> という呼称によって形成した民族としてのアイデンティティについて .....	122
1) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> のアイデンティティの構造 .....	122
2) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> のアイデンティティの変化および特徴の要因 .....	127
3) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> のアイデンティティの変遷 .....	130
4) まとめ .....	133
2. 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の民族文化的アイデンティティについて .....	134
1) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の民族文化的アイデンティティの形成について .....	135
2) まとめ .....	149
小結 .....	149
<b>結論 .....</b>	<b>151</b>
1. 論文の内容のまとめ .....	151
1) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の識別 .....	151
2) 達斡爾民族 <sup>minzu</sup> の創造と民族文化的 <sup>minzu</sup> の創出 .....	151

3) 達斡爾 <sup>ᠳᠠᠳᠤᠷ</sup> 民族のアイデンティティ .....	153
2. 本論文における理論的意義 .....	154
参考文献 .....	156
付録 調査地 .....	160
謝辞 .....	161

# 序論

## 1. 問題意識と研究目的

周知のように、中国には 56 の民族、55 の少数民族が居住している。ここで、「民族」という漢字の上に minzu というルビを振ってあることに違和感を感じるかも知れない。このルビの訳は、序論を最後まで読めばわかることだろう。

さて、筆者自身もこの少数民族の一員であるモンゴル民族の者であり、出身地は内モンゴル自治区である。幼時からモンゴル民族実験小学校、モンゴル民族中学校に学んで、さらに大学と修士は中央民族大学モンゴル言語文学学部で修めた。

幼いころから、農業を営む内モンゴル東部の漢民族との混住が顕著な地方で育った筆者は、故郷の学校では先生とクラスメート、家では年長の家族とはモンゴル語で会話するが、学校と家以外では、ほとんど漢語を話した。高校まで、自分は言語を除いては漢民族とはあまり違いがないと考えていたが、そのような考えは大学進学を機に変わった。

筆者の通った中央民族大学は、少数民族の幹部を養成するために 1950 年代に北京に作られた大学である。中国の少数民族には人気のある大学である。入学当初、大学生活の新鮮さ以外に筆者が強く感じたことが三つがある。第一は、この大学には中国国内の各民族の学生が集まっていることである。まったく違う顔をしたウイグル民族の学生がいる。また、毎日頭巾を頭から取らない回民族の女性の学生もいる。第二は、大学で民族の文化活動がさかんに開催されていることである。今日はウイグル民族のグルバン節<sup>1</sup>があれば、明日はモンゴル民族のナーダム節<sup>2</sup>、という具合に、特色ある数々の民族文化活動が盛大に行われていた。第三は、学生たちの間には、中国では各個人が「民族身分」と言われるものを持ち、それぞれがどの民族に属する者であるかが明確になっており、大学内でもその「民族身分」による区別が明瞭であることにも気付いた。さらに、モンゴル民族の内部でも、牧畜地域出身の学生と農業地域出身の学生との間に区別があって、農業地域から来た学生は、自分の民族の生活、伝統文化をわかっていないと嫌がられることもあった。こうした経験があって、筆者は大学に入って初めて、民族とは何であるかという疑問を持つようになった。

興味を持ったまではよかったが、中央民族大学民族学部の授業や大学で頻繁に開催される民族学関連の講座に参加しても、いったい民族とは何であるかということはよく理解できなかった。来日後、指導教員と相談し、中国東北地方の内モンゴル自治区や黒龍江省などに居住する達斡爾民族に関する研究を志すこととなった。

---

<sup>1</sup> グルバン節とは「犠牲祭」の意味である。イスラム暦の 12 月 10 日に行う。

<sup>2</sup> ナーダムとはモンゴル語の *nayadum* である。意味は、遊び、娯楽である。今モンゴル民族の伝統的な体育運動の節日と見なされている。伝統の宗教儀式オボ祭りから発展した。毎年 7 月から 8 月の間に行う。

当初、達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>については知るところはほとんどなかった。その言語はモンゴル民族<sup>m i n z u</sup>の言語と似ているというイメージしかなかった。筆者はただ単純に、民族<sup>m i n z u</sup>とは何であるか、自分の民族<sup>m i n z u</sup>の文化を知らなかったら当該民族<sup>m i n z u</sup>の人ではないのか、といった程度の問題意識で、2008年12月から達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>の居住地で達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>の実態を観察する予備調査を行って、この達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>の研究に本格的に着手した。

数度にわたる現地調査の結果、達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>はもともと「ダフル人」、「ダフル・モンゴル人」、「蒙系人」と呼ばれたことがあったことを知った。筆者が調査した達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>人居住地のうち、内モンゴル自治区ハイラル市のエヴェンキ族自治旗の南屯の達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>人はモンゴル語が達者な方が多く、モンゴル文化をもよく理解し、筆者とモンゴル語で対話することができた。しかし、ここ以外の調査地である内モンゴル自治区のモリダワー達斡爾族自治旗ではほとんど漢語で対話した。ここにはモンゴル語ができる人は一人しかなかった。黒龍江省チチハル市のムルス3区とフランエルギ区<sup>4</sup>というところでは完全に漢語で対話した。こうした各地でのインタビューは、筆者に言語の状況やそれを取り巻く環境に起因する微妙な差を感じさせた。また、一部分の達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>の学者及び知識人が、自分たちはかつて中国東北地方に遼王朝を建てた契丹の後裔であると強く主張していることも知った。モリダワー達斡爾族自治旗の達斡爾学会職員の話からは、彼らが毎年、盛大な民族文化の活動を行っていることや、達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>に関係するとされる文献史資料を収集し次々と編纂、出版していることも分かった。このような現況を知るにつれ、筆者は、彼らには強い達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>意識があるというイメージを持った。

調査を通じて次第に感じられてきたのは、筆者が従来から持っていた、達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>は昔からあった民族<sup>m i n z u</sup>であるとのイメージが、自分の中で変わってきているということであった。明白な歴史的事実から言うと、「達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>」とは、新中国成立後の1950年代に中国中央政府によって公に認定されてはじめてこの世に現れ出たのである。この、中央政府による民族<sup>m i n z u</sup>の公的認定作業は「民族識別工作」と呼ばれ、達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>はこの結果としての「識別された民族<sup>m i n z u</sup>」なのである。筆者の中で達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>に対するイメージが変わりはじめたのは、筆者が、彼ら達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>とは「識別された民族<sup>m i n z u</sup>」であるということをはっきりと意識するようになったのがきっかけであった。従来の中であつた、民族<sup>m i n z u</sup>とは太古の昔から存在し続けて今ここにある、という考えが完全に崩壊したことが、図らずも筆者の研究の方向性を明確に示すこととなった。筆者の従来の民族<sup>m i n z u</sup>観を崩壊させた「識別された民族<sup>m i n z u</sup>」を切り口に、達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>のアイデンティティに関する研究に取り組むことに意を決したのであつた。

本論文の目的とは、公認された民族<sup>m i n z u</sup>と異なり、民族<sup>m i n z u</sup>識別工作の結果、民族<sup>m i n z u</sup>と認められた民族<sup>m i n z u</sup>が、どのような依拠や根拠によって、どのようなプロセスによって民族<sup>m i n z u</sup>と認められたのか。政府が行う作業の対象となった識別された側にはどのような動きがあつたか。識別

<sup>3</sup> 達斡爾語。氷という意味である。

<sup>4</sup> 達斡爾語。赤い丘という意味である。

された民族はどのようなプロセスを経て形成されたか。彼らのアイデンティティにはどのような変化があったか。彼らの民族としてのアイデンティティは何で支えられているか。これらの問題を中国東北部の達斡爾民族を事例として究明して行く。

筆者は以下の三点を本論文の仮説として研究を行いたい。

第一は、中国の識別された民族は、政府の支持、エリートの活動、民衆の参与による共同作業の力で形成される。

第二は、民族の形成を通じて伝統の一部が復旧され、また、新しい民族伝統も作られる。

第三は、一連の民族工作を通じて達斡爾民族の文化と民族のアイデンティティが形成される。

以上の仮説を立てたのは、識別された民族に対し、次のような見解が定着することを危惧しているからに他ならない。すなわち、一見したところ“政府によって創られた民族”と見えてしまう「識別された民族」が現れること、言い換えれば「“民族の創造”行為」が政府による民族識別作業と不可分の関係にあるため、「識別された民族」が、ともすれば「上（＝政府）が作った民族」である理解されてしまうことへの危惧である。本研究を通じ、筆者は、識別された民族の側も「“民族の創造”行為」に積極的貢献を果たしたことを実証しながら、中国における民族は、その内外の共同の力によって形成されてきたという観点を強く押し出していきたい。

## 2. 作業理論について

人々の集団の「形成」、たとえば国民の「形成」といえば、ベネディクト・アンダーソンの想像の共同体論がすぐに想起される。アンダーソンは『想像の共同体』の中で、

「むかしからある」と考えることは、歴史のある時点における「新しさ」の必然的結果だったのではないか。かりにナショナリズムが、わたしの考えたように、意識のあり方がそれまでとは根底的に変わってしまった、そういう新しい意識のかたちを表現したものであったなら、そうした当然のことながら「これにともなっておこる」もっと古い意識の忘却ということ、これがそれ自体の物語を創出するはずではないか。こうした角度から見れば、一八二〇年代以後の国民主義思想に特徴的な祖先返りの空想はその随伴現象にすぎないと言えるだろう。（アンダーソン 1997 : 14-15）

との一文を書いている。本論文の研究対象の達斡爾民族にもこのような現象が存在している。上の1.にも記したように、彼らは、自分の祖先を契丹と想定して、自分たちが昔から存在していたことを強調している。ここでは、アンダーソンが記した一文の内容を、現在の中国における達斡爾民族史研究の一大潮流をなしている「契丹起源説」になぞらえているわけであるが、これだけをとっても、アンダーソンの想像の共同体理論を、達斡爾民族のこのような現象や動向に関連づけることで、それらの多くを説明しうるのではないかと考えられる。したがって、筆者はこのアンダーソンの想像の共同体論を達斡爾民族の創造に関する研究の作業理論として用いる。



これも上の 1. に記したことだが、モリダワー達斡爾族自治旗の達斡爾学会は旺盛な出版活動を展開して今日に到っている。その成果として、1996 年から筆者が現地調査を終えた 2011 年までの間に『達斡爾資料集』を第 10 集も刊行している。これらは、達斡爾民族識別以前のダフル人が世に問うた彼らの出自に関する古典的とも言える研究文献の復刻が収められている他、“達斡爾民族の歴史、民俗、文学、言語”に関する研究成果の一大集成である。これら“達斡爾民族の”研究は、実は達斡爾民族の識別後に始まった研究なのである。これらの、言うなれば“達斡爾民族としての達斡爾民族研究”は、その対象が民族の歴史にせよ、民族の民俗にせよ、民族の文学にせよ、民族の言語にせよ、ほとんどが、達斡爾民族なるものが昔から存在していたことを前提に展開され、またそれが古来から存在していることを証明しようと試みているものなのである。エリック・ホブズボウムは、

英国という君主国家が儀式的、かつ公に示すページェントほど古色豊かで、はるか遠い昔にその起源を遡るものは他にないだろうと考えられている。しかしながら、その形態の近代性という点から見れば、それは十九世紀後半ないし、二十世紀に創り出されたものなのである。「伝統」とは長い年月を経たものと思われ、そう言われているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたものもある。(ホブズボウム、レンジャー1992：1)

と書いている。この、ホブズボウムによる伝統の創造論は、まさに上に述べた“達斡爾民族としての達斡爾民族研究”になぞらえうる。筆者は達斡爾民族の中にもこの伝統の創造が存在していると考え、とくに本論文の第 2 章での考察の作業理論として用い、1956 年に識別された達斡爾民族の民族文化の創出の研究を進めていきたいと思う。

### 3. 先行研究

本研究にかかわる分野として、民族概念、国民と民族統合、民族の創造、「小民族」論、そしてダフル人/達斡爾民族に関するものに焦点を絞ってレビューする。

#### 1) 民族概念に関する研究

毛里和子は「民族（ネーション、ナーツィア）ほど定義しにくい言葉はない。そもそも民族概念というのが学問的に成立しうるのだろうか、という根源的な疑問さえある。個々の集団の願望が込められた『民族』は虚構であり、エトノスそのものさえ幻想、まぼろしに過ぎないという思想もある」（毛里 1998：66）と述べて、民族の概念を定義することの難しさを提起している。さらに毛里は、『「民族とは何か」を問うことが中国ではきわめて重要な政治的過程だった』（毛里 1998：67）とも述べ、民族の意味を定義することが中国においては政治的過程にまで及ぶ一大事であったことも紹介している。このような民族の概念を定義することの難しさと重大さを踏まえた上で、毛里は中国における「現在の公認された民族は、国家という上からの方向と現実に生活する人々の帰属意識という下からの方向が交錯する局面で、第三のカテゴリーとして生み出されたものである」（毛里 1998：

75) と述べている。

こうした民族の概念定義の難しさは、当然のことながら、民族をどう定義するかの論争を惹起した。これについて松田素二は「民族をめぐる論争は、大きく二つの系譜にまとめることができる。それは、民族本質論と民族構築論である」(松田 1999 : 94)。「本質論か構築論か、という択一的議論が争われると、当然のことながら両者を折衷した意見がもっともらしく登場してくる」(松田素二 1999 : 94)。毛里の言う「第三のカテゴリー」とは松田の言う「両者を折衷した意見」と相当するものであると考えられる。毛里の言う「国家という上からの方向」と「現実生活する人々の帰属意識という下からの方向」とは、松田の言う「民族構築論」と「民族本質論」とにそれぞれ対応しているのである。

では、民族、あるいは少数民族とはそもそもどのような概念の、いかなる対象を指す言葉として考えられてきたのだろうか。綾部恒雄によれば、少数民族という言葉が初めて用いられたのは、十八世紀末から十九世紀初頭にかけてのヨーロッパにおいてであり、フランス革命の国民国家の出現とナショナリズムの昂揚の所産として表れている。近代ヨーロッパの政治的境界の変化の結果、国家権利を握った強大な民族へ従属する地位に追いやられた少数民族集団をさすのに用いたのである。少数民族を「マイノリティ」という言葉で、社会科学の分析概念として初めて用いたルイス・ワースは、この言葉を次のように定義している。形式的ないしは文化的特徴の故に、彼らの属している社会の中で他の集団から区別され、異なった不平等な状況下に生活しているため、自らを集団的差別の対象とされていると見なしている人びとである(綾部 2007 : 4-5)。

シンジルトは、「民族」という和製漢語が中国に移入された可能性が高く、中国において「民族」という言葉が最初に使われたのは 1895 年であったとする<sup>5</sup>。そして、中国語でいう「民族」(minzu)には三つの意味が含まれるとする。その一つ目は、国家の構成員である国民を表わす時の「国民」(nation)と「市民」(citizen)つまり中国国籍者を指す。二つ目は、国家の認定を受けた公定の民族、つまり十数億人の人口をもつ漢族とそれに比べて絶対的人口の少ない 55 の少数民族、計 56 の民族を指す。三つ目は、漢族以外の 55 の少数民族のみを指す(シンジルト 2003 : 38)。このようにシンジルトは、中国で用いられている民族には三つの指示内容があると述べている。

中国の研究者は、中国の 56 民族は新中国成立後に科学的な調査と識別を通じて政府が認定したものであることを承認してはいる(楊建新 2005 : 3)が、実際に精力的に取り組まれているのは、民族は歴史的に存在したことを強調した研究である。このような研究にあっては、スターリンの民族理論<sup>6</sup>に基づいて、民族の形成は部落から発展されたものである

<sup>5</sup> 馬戎は、「民族」という言葉は 20 世紀初期に日本語を経由して移入された、と言う(馬戎 2004 : 6)。

<sup>6</sup> スターリン「マルクス主義と民族問題」(1913 年)での「民族(ロシア語: ナーツィヤ)」の定義は、「民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人間の堅固な共同体である。……すべての特徴が同時に存在するばあいには、はじめて民族があたえられるの

という筋を展開する。民族の概念も広義と狭義で分け、狭義の民族とはモンゴル民族とチベット民族のような歴史的に実際に存在した内在的共同性を有する人々の共同体のことであり、広義の民族とは民族中の一部分が歴史的に公認された、特定の国家、地域、共同性がある民族集団、つまり「中華民族」、「インド民族」、「アラビア民族」のような集団を指すとする（楊建新 2005 : 3）。楊はさらに「民族とは共同言語、共同経済生活および共同特徴がある部落あるいは部落連盟、長い発展の途中で社会と政治に結びついた民族意識、民族のアイデンティティの中核になる民族文化がある人々の安定的な共同体である」（楊建新 2005 : 3）と定義している。

納日碧力格は「民族とは特定の歴史的な人文と地理の条件で形成された、共同の血縁意識と祖先の意識に基づいて、共同の言語、風俗とほかの精神と物質要素で組織されたシステム的な特徴がある人々の共同体である」（納日碧力格 1990-5 : 5）とする考えを示している。

熊坤新は「民族とは一定の歴史の段階で形成した、共同の地域を基礎とし、共同の経済を条件とし、共同の言語を紐帯し、共同の心理素質を凝集の要素とする、共同の歴史、共同の文化、共同の習慣と民俗、共同の族称、共同の族体の意識及び共同の血縁の要素と特徴がある安定と変動が伴った人々の共同体である」（熊坤新 1998 : 16）と定義する。

何潤は「民族とは、人々のある歴史の発展段階で形成した、共同の地域、共同の経済生活、共同の言語と文化、共同の族体性格と族属の意識がある、安定的な社会共同体である」（何潤 1998 : 12）と述べる。

龔永輝は「民族とは、人々が社会の複雑な系統の下で形成した、相対的に安定し、相互作用が持続し、境界が曖昧で、各層が入れ子状態になっていて、あなたの中に私がいて私の中にあなたがいる歴史文化と現実利益の共同体である」とする。（龔 2004 : 18）

以上の幾つかの概念から見れば中国の学者たちは「共同地域」、「共同歴史」、「共同文化」を強調してもおり、血縁を強調している。中国の民族概念は今でも一本化されているわけではないが、スターリンの定義に基づく共同体ではあるが、それには変動と安定があるものとする考えが主流になりつつある様相がうかがえる。

最近では、馬戎は「民族」(nation)とは常に政治実体を指すものであり、エスニック・グループとは言語、宗教と文化習慣などの非政治性がある点での区別を強調し（馬戎 2004 : 37）、中国の民族研究では「エスニック・グループ」という語を用いることを提起している。

また、菅志翔は「国内（中国一筆者注）でエスニックあるいはエスニック・グループに名称を付けることを通じて政治、経済生活の地位と利益を与えられ形成された新しいエスニックあるいはエスニック・グループが民族である」（菅志翔 2006 : 48）という見解を示している。これは、民族識別活動と民族自治政策が「識別された民族」にもたらした事柄を手際よく結合した定義である。

これら中国国内での民族論の現時点での到達点は、毛里の言う「第三のカテゴリー」、松である」（スターリン 1953 : 50-51）。

田の言う「民族構築論」と「民族本質論」の「両者を折衷した意見」によく対応していることがわかる。このように、中国の民族あるいは少数民族とは、毛里のいう「国家という上からの方向」と「現実に生活する人々の帰属意識という下からの方向」との相関関係の上に立つものである以上、その関係性如何によって常に変動しうるものであるとの認識を持たざるをえない存在であることが浮き彫りになっている。

## 2) 国民と民族統合の研究

国民統合の視点から多民族と国家の関係について研究を行った毛里和子のいくつかの見解は、本研究における基本的見解を構築する上で示唆的である。

とくに「中国の場合とくに強調しておくべきなのは、民族識別工作を通じて、民族が『上から作られて』きたことである。統治が及ばなかった辺境の原住民を中華人民共和国の『人民』として統合していくために、彼らに帰属意識を植え付けるために、一九五〇年代初めから精力的に行われた民族調査・識別工作・言語創造工作は、現代的言葉で言えば『上からの国民形成』であり、欠くことのできないプロセスだったのである」(毛里 1998 : 74)と述べた中に見えている「上から作られて」や「上からの国民形成」という言葉は、筆者の注意を強く引いている。この「上」とは国家あるいは中央政府と理解される。しかし筆者はすでに、このような見方が定着することに危惧を覚えている旨を上記の1.の末尾で表明した。確かに、「上から作られて」や「上からの国民形成」に類する状況があったことは否定できない。しかし、このような毛里の書き方は、ともすると、識別された民族側が民族識別活動においては一方的に受動的であって何らの反応も示さずに国家の言うがままに国家が規定した民族呼称を受け取ったのだ、との理解を容易に惹起しはしまいか。識別された民族側の主体性を発見して行く過程で、このような毛里の見解は一定の障害となる。

毛里の言うところに忠実に従えば、民族識別作業は国民形成の作業であると考えられることになる。しかし、民族識別作業の結果として生み出されるのは、識別された「民族」である。もう少し精緻にかつ論理的に言うならば「国民化するために識別された民族」ということになる。「民族統合」そのものを考察することになしに、直ちに「国民統合」に論を進めるのは飛躍していると思われる。筆者は毛里の見解に「民族統合」という観点を付け加えて、「識別された民族」とは「国民統合のための民族統合」の成果と考えたい。

また毛里の言う「帰属意識」にも問題がある。人は、自分の国籍や居住する地域の間であることに一定の帰属意識を持つ場合が多いであろうが、単に国籍や地域だけが、人の帰属意識を規定するものではない。ある時期まで、一定範囲の人の集団を指す呼称であったものが、国家によって正式に民族であるとされたとき、その集団呼称に帰属意識をもっていた人々は、新たに決められた民族としてどのような帰属意識を持つのであろうか。とりわけ、何らかの点で異なる要素を有しながらもひとつの大きな民族を構成するとされてきた集団や、その周囲に存在する複数の大きな民族に分散させられていた諸集団の間に何らかの共通点が見出された結果、ある時から独立した一つの民族であると国家によっ

て規定された人々は、旧来の帰属意識を改廃して新しい帰属意識をもつのだろうか。そして、その帰属意識とはどこに向けた意識なのだろうか。それは直ちに国家への帰属意識に収斂するのだろうか。毛里は「帰属意識」という言葉を使いながらも、実はその帰属先がどこなのかを明らかにしないまま、おそらくは国家への帰属意識へと論を整理しているかのように思われる。筆者は、毛里の言う“「帰属意識」の付与”を誤りとは見ていない。これを踏まえて筆者は、そのように新たな帰属意識の可能性を付与された人々はその可能性に向けてどのような行動を起こすのか、新たな帰属意識の可能性を達斡爾民族人自身がいかに認識しているのかなど、彼らのアイデンティティを分析する上での重要な視点を引き出す鍵となると評価するものである。

### 3) 民族の創造に関する研究

次に取り上げたいのは、多民族国家における民族の創造に関する研究である。例えば、五十嵐武士の『アメリカの多民族体制―「民族」の創出』（2000年）、伊藤正子の『エスニシティ〈創生〉と国民国家ベトナム』（2003年）、伊藤正子の『民族という政治―ベトナム』（2008年）である。本研究でも、民族の創造については特別の興味を持って考察の対象にしている。その検討は第2章の第1節の冒頭で詳しく行っている。

近年、「満族」の形成に関する研究を行った劉正愛のように、中国の民族形成に関して民族の側に注目した研究が現れている。劉は、『民族』とは、国家という枠組の中で国家によって正式に認定され、制度的保証を与えられた、同一の文化や習慣、宗教、言語、あるいは民族意識をもつと想定される人々の集団である」（劉正愛 2006 : 29）とし、中国の民族識別と識別後の「民族の創造」を結びつけ、正確な民族（筆者の表記では民族）の概念を提示している。また、劉は歴史人類学の研究方法で、現代中国の公定された「満族」の研究を通じて「満族」は《満州―旗人―満族》という歴史の変遷で形成された民族であり、「集団の名称は、名付けであろうと、名乗りであろう、それが生まれた時点から、遡及的にそれにアイデンティティを求める運動が起きる。『満州』と『満族』という語はそういった意味でも、人々のアイデンティティの形成においては特に重要な意味を持つものであると言えよう」との観点を示した（劉正愛 2006 : 29）。さらに、「民族が『上から作られて』きたというのは、ある程度の妥当性を持つかもしれないが、作られる側の主体性を剥奪してしまう危険性も常にあることを忘れてはならない。その主体性を確立させるためには、もう一つの側面を視野に入れなければならない。つまり、それは『作られる』ことへの少数民族側の積極的な呼応の側面であり、国家によって『創出』された『民族』への少数民族側の『想像』の側面である。それらの一方だけを強調せず、二つあるいはそれ以上の力学を視野に入れてはじめて、中国における少数民族の本質を理解することができるのである」（劉正愛 2006 : 331-332）との観点も示した。この劉の言う「危険性」は、筆者が本研究を進めるにあたって抱いた危惧とまったく同じ意味内容を指している。

#### 4) 「小民族」研究

最近中国の何群は、「小民族」という新しい概念を用い、達斡爾民族<sup>mi n z u</sup>と同様に国家によって認定された結果民族となったオロチョン（鄂倫春）を事例とする研究を発表した。「小民族」とは未だに一定の科学的定義がなされていない用語であるが、『人口の比較的少ない民族』であり、伝統文化が相対的に簡単で、現代社会の急激な環境の変化に適応できず、伝統文化が断絶し、生存の危機に瀕しているような民族である」（何群 2006：1）と定義されている。

この定義について坂部は、何群の提示した小民族の概念（定義—筆者注）について分析を行って、「ここで規定されている『小民族』という定義は、西洋人類学、民族学で使用されている「部落民」、「部族民」、「原住民」、「先住民（土着）」、「原始民族」という呼称でよばれる対象としても位置づけられている。本書では、『小民族』概念が、第三世界からさらに区別され、周縁化された国家、領域を示す『第四世界』の概念にも啓発をうけていると述べられる。第四世界とは「貧しく、グローバリゼーションから切り離され、無視され、遺棄された社会」であり、「過度に周縁化」（何 2006：6）されているという。こうした議論は、たしかに、「先住民」という呼称を使用する民族集団の位置づけに類似しているようにも感じられる。しかし、たとえば、現代社会においては「先住民」という概念に関連して、多文化主義やなんらかの社会運動の文脈に置かれて、民族意識や「差異の政治」などが強調されることが多いのにたいして、本書の「小民族」概念は、そうした位置づけから丁寧に切り分けられた、人口論的、生態学的な規定となっているといえよう」（坂部 2011：131-132）と論じている。

確かにオロチョン民族<sup>mi n z u</sup>はそのような定義に合致するが、何群の用いる「小民族」には、識別されたマイノリティという観点は存在しない。何群の主な関心は、現代中国における「小民族」の住環境や生活環境の変化がその文化をどのように変化させるかという点にあり、アイデンティティの変遷自体を研究対象としてはいない。また、何は「小民族」の人口を 10 万人以下と設定しているため、この中に達斡爾民族<sup>mi n z u</sup>は含まれない。この何群の新しい研究は、筆者の目指す研究の方向や対象として扱った民族<sup>mi n z u</sup>の状況は異なっているが、現代中国における少数民族<sup>mi n z u</sup>を“人口の多い少数民族<sup>mi n z u</sup>”と“人口の少ない少数民族<sup>mi n z u</sup>”にわけて考える可能性から大いなる示唆を受けている。これから得た示唆とは、現代中国における識別工作を通じて認定された一部の民族<sup>mi n z u</sup>を「小少数民族<sup>mi n z u</sup>」として考えることである。なぜならば、達斡爾民族<sup>mi n z u</sup>の居住する地域においては、モンゴル民族<sup>mi n z u</sup>や満民族<sup>mi n z u</sup>という少数民族<sup>mi n z u</sup>に比べ、達斡爾、オロチョン、エヴェンキの三つの民族<sup>mi n z u</sup>は“人口の少ない少数民族<sup>mi n z u</sup>”であるからであり、この“人口の少ない三つの少数民族<sup>mi n z u</sup>”を指す「三少数民族<sup>mi n z u</sup>」という言い方が現に存在しているからである。単なる少数民族論<sup>mi n z u</sup>ではとらえきれない対象をとらえるために、小少数民族<sup>mi n z u</sup>という考え方は有効であると考えられる。この「小少数民族<sup>mi n z u</sup>」あるいは「三少数民族<sup>mi n z u</sup>」をめぐっては本論の第 3 章の第 2 節でくわしく検討を行った。

## 5) ダフル人/達斡爾民族について

最後に、本研究の対象であるダフル人/達斡爾民族の紹介も兼ねて、関連する研究を概観しよう。

現在、中国で達斡爾民族と呼ばれている民族は、1950年代に中国の政府が行った民族識別作業を通じて認定された民族である。人口は、2010年の第六回のセンサスでは131,992人<sup>7</sup>である。主に中国の内モンゴル、黒龍江、新疆に分布している。もう少し細かくその居住地点をあげれば、内モンゴル自治区のモリダワー達斡爾民族自治旗、扎蘭屯市達斡爾民族自治旗、エヴェンキ族自治旗バヤンタラ達斡爾民族郷、アロン旗の音河達斡爾エヴェンキ民族郷、黒龍江チチハル市梅里斯達斡爾民族区の臥牛吐達斡爾民族鎮、莽格吐達斡爾民族郷、富拉爾基区杜爾門沁達斡爾民族郷、富裕県友誼達斡爾滿柯爾克孜民族郷と塔哈滿達斡爾民族郷、新疆ウイグル自治区塔城市阿西爾達斡爾民族郷である(祁恵君・叢静 2006:19)。これらのうち、内モンゴルのモリダワー達斡爾民族自治旗、エヴェンキ族自治旗、黒龍江省のチチハル市梅里斯達斡爾族区に集中的に居住している。

生業形態は多様で、居住する地方によって区別があるが、主には農業、狩猟、牧畜、漁業、林業である。内モンゴル自治区フルンボイル盟のハイラル市、エヴェンキ族自治旗の南屯では牧畜業を主とし、他の地方では農業を主としている。

言語はモンゴル語族であるが、固有の文字はない。中国内の少数民族、とくに文字をもたない少数民族に普遍的に看取される漢語化の傾向は達斡爾民族内にも見られる。

達斡爾民族は識別される前には、達呼爾(dahur)人と呼ばれた。民族識別の時の調査によれば、当時、ダフル人の中ではダフルという呼称は満洲人の建てた清王朝に帰順した後にできた名称だと考えられていた。発音が満洲語の「投降」(達哈熱—dahar)と似ているので、意味は満洲語の「投降」という意味であると一般的に認識されていたとする説がある(中央民族学院研究部編 1955:2)。

民族識別以前のダフル人は清朝期から官吏を多く輩出した。また、20世紀初頭のフルンボイル地方の政治活動において、ダフル人のエリートは中心的な役を果たした。大きな事件と言えば、1912年1月15日フルンボイルの副都統のダフル人の勝福(後の114頁参照)がフルンボイルの独立活動を公布したこと(蘇勇 1997:7051)、1917年にダフル人の郭道甫(メルセ)がフルンボイル青年会(後の115頁参照)を結成したこと、1936年4月のいわゆる「凌昇事件」(後の注109参照)で日本の関東軍がダフル人の凌昇を“通蘇通蒙”の罪で殺したことなどがある。この時期のこれら政治活動に、ダフル人のエリートたちは積極的に参加していた。

ダフル人の学者は19世紀には自己の特殊性に何らかの注意を払っていたらしく、ダフル人の出自問題に関する著作が著された。華靈阿は『達斡爾索倫源流考』(1833年)で、唐代室韋部あるいは室韋部中の「達妬部」の後人と論じた。郭克興は『黒龍江郷土録』(1926

<sup>7</sup> (<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/6rp/indexch.htm>) 2013年1月3日 国務院人口普办公室国家統計局人口和就業統計司 中国2010年人口普査資料。

年)で、ダフルは遼代契丹の後裔としている(『達斡爾資料集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1996: 338)。また、阿勒坦噶塔『達斡爾蒙古考』(1931年)と何維忠『達古爾蒙古嫩流志』(1943年)はモンゴルと同じ族源であると述べた(『達斡爾資料集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998: 6; 『達斡爾資料集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998: 143)。孟定恭『布特哈志略』(1931年)では、隋唐時の黒水国(後の注 142 参照)の後人と判断し(『達斡爾資料集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998: 43)、欽同普『達斡爾民族志考』(1938年)は、宋元のタタル部或いはその中の「白韃靼」であると論じている(『達斡爾資料集』編集委員会 全国少数民族古籍整理研究室 1998: 185)。

ダフル人の出自はダフル人研究者以外にも多数の学者の注目を受けてきた。たとえば白鳥庫吉は「契丹語の調査研究によりて、殊にその數詞の比較考究の結果、契丹の數詞が、通古斯語系に属する索倫(Solon)語に類似せずして、蒙古語系に属する達瑚爾(Daxur)語に該当することに依つて、契丹民族が今日の達瑚爾の祖先にして、蒙古分子の多き通古斯分子の少なき雜種である」(白鳥庫吉 1970: 531)と述べ、ダフル人は契丹の後裔と見なしている。シロコゴロフは「ダフルは疑ひもなく北方ツングース起源の若干の氏族名を含んでゐる。ダフル、少なくともその一部が起源上から見て蒙古族群團ではなく、恐らく蒙古群團に起源を有するハルチンによつて支配されてゐた一ツングース群團であることが推測されよう。このツングース群團は、丁度今日ソロンに起りつゝあるが如き、直接の混血と文化の同化とによつて蒙古人化されたのである。なほ人類學上の見地からすると、現在ダフルは北ツングースと同族とは思われない。しかし、ダフルが暨に混合群團となつてゐた契丹族の政治生活に或る役割を演じたことは、全くあり得べきことである。何となれば、今日と同じくツングース語を話す群團であつたソロンは、副次的であるが、大遼の治下に在つて或る役割を演じたと稱し、ダフル人は契丹族直系の後裔であると自任してゐるからである」(シロコゴロフ 1982: 163)と述べ、白鳥と同じ結論に到っている。池尻登は、『達斡爾族』(1945年)を書き、達斡爾族(ダフル人)の外貌、人類学、歴史、教育、衛生、民俗の面から考察を行った。

新中国では 1950 年代にダフル人にたいする調査がおこなわれた。その結果は、呼倫貝爾民族事務局『内蒙古呼納盟民族調査報告』(1997年)、内蒙古自治区編集組『達斡爾族社会歴史調査』(1985年)としてまとめられた。『内蒙古呼納盟民族調査報告』(1997年)は主に 1950 年代に、燕京大学、清華大学、北京大学に務める教員の学生が内モンゴルのフルンボイル地方のダフル人を含めた「少数民族」(当時ダフル人はまた民族と認定されていなかった)の歴史、経済、政治、家族、教育について考察を行った。『達斡爾族社会歴史調査』(1985年)は 1985 年で出版された書籍で、達斡爾民族の経済、社会関係、生活習慣、宗教信仰、文学芸術、体育の方面から検討を行った。

現在、特に 1956 年にダフル人が単一民族と識別された後は、ダフル人研究は達斡爾民族研究になった。孟志東・恩和巴図・吳団英『達斡爾族研究』(1987年)は、達斡爾民族



の歴史、文学、言語を網羅して総合的な研究を進めた成果である。また、『達斡爾族簡史』（内蒙古人民出版社 1989 年）は達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の歴史研究を、『達斡爾語話語材料』（恩和巴図 内蒙古人民出版社 1985 年）や『達斡爾語和蒙古語』（恩和巴図 内蒙古人民出版社 1988 年）は達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の言語の研究を志向したものである。近年でも、『中国達斡爾族史話』（巴図宝音、鄂景海 民族出版社 2005 年）という達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の歴史研究や、丁石慶『双語族群語言的調适与重构-达斡尔族个案研究』（2006 年）という言語の研究、祁惠君・叢静『伝統与現代达斡尔族農民的生活』（2006 年）という生活状況に関する研究、そして現在の達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>研究の第一人者である孟志東は、『中国達斡爾族民間故事選集』（孟志東 内蒙古文化出版社 2007 年）と『中国達斡爾語韻文体文学作品選集』（上、下）（孟志東 内蒙古文化出版社 2007 年）、『中国達斡爾族古籍彙要』（孟志東 内蒙古文化出版社 2007 年）を一挙に発表し、達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の文学と文献の一大集成を成し遂げたばかりである。

最近では、ダフール人/達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>と民族識別工作に着目した研究が日本で発表された。中国の民族識別<sup>mǐn zú</sup>を通じてダフール人はモンゴル人から引き出されたという観点を持っているユ・ヒョジョンの「ダウールはモンゴル族か否か—1950 年代中国における『民族識別』と『区域自治』の政治学」という研究は、今の達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>はモンゴル民族<sup>mǐn zú</sup>であるかという問題について検討を行ったが、最後には、「これらの諸学会の活動や成果に見られる大きな特徴の一つとして、『族源』問題にかかわるものが多いことと、その中に『契丹説』を裏付けようとするものが『モンゴル説』など、ほかの諸説により多いことが挙げられる。これは独自の民族としての『識別』への強いこだわりを示すと同時に、『識別』以前には戻れないと考える人々が多いことを示していると思われる。『識別』にこだわりつつも、『識別』や『区域自治』をめぐる、あのすさまじい時代のことを振り返ることには抑制的であることにも同様のことがいえよう。このような状況は『識別』そのものの結果や独自民族としてのその後の歩みをそれとして受け入れ、『中華民族』の一員として生きていこうとする方向へ人々の気持ちが向かっていることをあらわすのか、それとも、『識別』以降のあのすさまじい記憶がまだ新しく、まだそれを表に出すことが躊躇されていることを意味しているのかについては容易に判断できることではない。しかし、そのどちらにしても、こうした状況は大きな民族に囲まれ、自らの運命を自らの意思や努力だけでは切り開くことができない、小さな民族の悲哀を示していると言える」（ユ 2009 : 266-267）と述べるに到った。ユの研究は、一次的資料をふだんに用い丁寧な分析を加えた優れた研究である。ユは、ダウール人の運命は政治活動の影響を受けて、自らの運命を自らの意思や努力だけでは切り開くことができないと見ているかのような論を展開している。ダフール人/達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>を取り巻く政治的状況は、確かに自由に身動きを取りづらい状況にあった。しかし、筆者は、達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>が完全な閉塞的状態にあったとは考えていない。達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>が識別される時には、ダフール人の幹部と知識人たちが大きな役割を果たしたという事実があり、このような事柄に識別される側の主体性を積極的に読み取って行くことが求められるように感じてならない。

最後に、ダフル人のアイデンティティにまで踏み込んだ研究として、暁敏の業績を取り上げたい。暁敏はダフル人の政治活動を切り口として「近代におけるダフル人の政治活動—そのアイデンティティに関する一考察」というテーマでダフル人のアイデンティティについて考察を行った。彼は「フルンボイル地域はモンゴル民族主義の強い地域で、近代において 3 回の独立自治運動が起こっていることである。その中で、強いモンゴル意識を持って中心的な役割を果たしたのはダフル人である」（暁敏 2008.2: 15）と検討している。暁敏の研究は、政治活動からダフル人について考察を行ったが、単に政治活動だけからダフル人とはどのような人であるか、彼らのアイデンティティはどうであるかという問題を検討するのは、アイデンティティの検討という点ではアプローチが不足していると思われる。アイデンティティの研究では、実際の人々がどのようなアイデンティティを持っていたかを事例に基づいて実証的に研究を行う必要があると考える。暁敏は、仮説的にモンゴル人のアイデンティティが持っていたと考えている。確かに一部分の政治エリートたちはモンゴル人のアイデンティティが持っていたと言えるのだが、さらに視野を広げてダフル人全般のアイデンティティを論じないことには、真の意味でのダフル人のアイデンティティ研究にはならないのである。

以上に示したダフル人/達斡爾民族に関する研究は、主に、歴史、言語あるいは、達斡爾民族の生産生活と民俗、政治と絡めた政治学的研究であるが、民族識別を切り口にしてダフル人から達斡爾民族までのアイデンティティの変遷、とりわけ、達斡爾民族になった後のアイデンティティの変遷に関する研究は未だなされていないことが明らかである。

#### 4. 本研究の意義

本研究は以上の学者たちの研究を踏まえて、中国国内の研究者たちの中国の民族は太古からあった民族であるという観点を批判して、民族とは想像され創造された人々の共同体であるという定義を試みる。民族の創造とは、日本の学者たちの提示した国民統合の為に上から作ったという観点をも批判して、民族の創造は上の政策の動き以外には、民族側の力も無視できないことを強く主張する。これが成功裡に進んで結論に至るならば、本研究は、従来の中国の民族論に対して、政府と民族の側による想像と創造の共同体であるという新たな観点を提示することになる。これが本研究が挙げると予想される最大の意義である。また本研究では、文献資料と民族側の人々に対する貴重なインタビュー資料を通じて、民族の識別、創造の実態を明らかにして、上の観点を具体的に証明する方法を採用している。筆者が用いているインタビュー資料は、以往の研究者たちには用いられていない独自のものであるばかりでなく、現在すでにかんりの高齢に達したインフォーマントが自ら語ったものであるため、資料の希少性と一次性の点で高い価値を持つ。この点にも本研究の意義があると考えている。

## 5. 研究方法

本研究では、文献資料の分析、フィールドワーク調査と比較の三つの研究方法を使用した。現地調査は、2008年12月から3月まで、2010年7月から11月まで、2011年6月から9月まで関連地域（内モンゴルのフフホト市、ハイラル市、エヴェンキ自治旗、モリダワー達斡爾自治旗、アロン旗、黒龍江省のハルビン市、チチハル市、チチハル市ムルス区、ホランエルギ区）で行った（現地調査地域は付録を参照）。また、この現地調査期間中には、可能な限りでの档案資料や個人が所蔵している関連文書の収集にも取り組んだ。

## 6. 論文構成

この論文は、序論、本論、結論、参考文献で構成されている。

序論の部分では、問題意識と研究目的、作業理論、先行研究、論文構成について検討を行っている。

本論は三つの章で構成されている。第1章は達斡爾民族<sup>minzu</sup>の識別について論じている。文献研究とインタビューを通じて、主に1953年の達斡爾民族<sup>minzu</sup>の識別活動について研究を行った。第1節は新中国成立後の民族識別作業<sup>minzu</sup>を概観し、第2節では達斡爾民族<sup>minzu</sup>の識別を上げてその過程を明らかにすることを試みている。

第2章では、達斡爾民族<sup>minzu</sup>の創造と民族文化<sup>minzu</sup>の創出を扱っている。主に、達斡爾民族<sup>minzu</sup>が認定されたのち、民族<sup>minzu</sup>の呼称の認定、民族史・民族文化あるいは民族文化活動<sup>minzu</sup>が創出された状況について検討を行う。第1節は達斡爾民族<sup>minzu</sup>の政治的創造、第2節は達斡爾民族文化<sup>minzu</sup>の創出、第3節は達斡爾民族文化<sup>minzu</sup>の伝統化をそれぞれ扱う。

第3章では、達斡爾民族<sup>minzu</sup>の民族としてのアイデンティティについて検討を行う。第1節はダフル人のアイデンティティについて、第2節では達斡爾民族<sup>minzu</sup>のアイデンティティについて検討を行う。

最後に結論として、本論文での論点をまとめる。そして、本論文で明らかにしたことを踏まえて、本論文の作業理論とした想像の共同体論と伝統の創造論に検討を加え、最後に本研究から導き出せる新たな中国少数民族理論<sup>minzu</sup>を提示する。

## 7. 本論文の用語の説明

人為の加わった人間集団を、方法仮説的に nation や ethnos、それを意味する日本語「みんぞく」とは区別するため、現在の中国における民族の意味の多様性に鑑みて、中国語の発音 minzu を利用して「民族」のようにルビを振って記したい。日本語では「中国の公定された民族」と読むところを、本論文では「中国の公定された民族」と表記するのである。したがって、少数民族は「少数民族」と、「モンゴル民族」は「モンゴル民族」と、そして「達斡爾民族」は「達斡爾民族」と記すことになる。一方、民族識別される前の時代にかかる「民族」、「族」にはルビを振ることはしない。そのまま表記する。人の語りによってその意味が異なっていくことが想定される。

このような中国における民族<sup>mínzú</sup>の意味の多様性に鑑みると、本論文では仮説的に達斡爾民族<sup>mínzú</sup>という語を1956年以降の公定民族<sup>mínzú</sup>としての「達斡爾民族<sup>mínzú</sup>」のみを指す語として用いる。識別される前の人々として「ダフル人」という語を用いる。

## 第1章 達斡爾民族の識別

### はじめに

本論文で扱う“民族問題”、とくに「“民族”の創造」について研究するためには、1950年代に行われた民族識別工作の研究を前提としなければならない。なぜならば、現代中国の“民族問題”は1950年代の民族識別工作の結果として存在することになったからである。

黄光学と施聯朱は『中国的民族識別—56個民族的来歴』(黄・施 2005)の中で、中国の民族識別工作が行われたプロセスを系統的に言及した。本書は「中国は歴史的に多民族国家である」(黄・施 2005: 59)との観点をもっている。著者らは民族識別工作とは「ある地方で居住している人々のグループの言語、経済生活、文化と心理的資質および歴史的由来などの要素に対して総合的分析と研究を行い、民族の帰属と民族の名称を認定することである」(黄・施 2005: 76)と論じている。本書は、中国の民族識別工作のプロセスを詳細的に紹介した民族識別工作史概論ともいべき著作である。本書中に繰り返し現れる、中国は歴史的な多民族国家であるという国家論や民族識別工作は元々あった民族を認定する作業であるという観点(黄・施 2005: 59-63)は、たとえば費孝通など中国の研究者たちが広く持っている観点である。しかし筆者は、序論で明らかにしたような想像の共同体理論や作られた伝統理論に基づく、こうした中国の多民族国家論や民族識別工作に対する観点に、異なる視点から問題を提起をすることが可能であると考えている。たとえば毛里和子は「中国の民族問題を議論するとき注意しなければならないのは、歴史的にずっと『五五少数民族』が住んでいたわけではなく、建国後も最初は九民族、その後三八民族、五四民族、そして八〇年代に五五民族と言われるようになったことである」(毛里 1998: 55)と述べており、1950年代からの民族識別活動工作を通じて中国の民族が形成されたことを指摘している。また余志清も民族識別工作について「民族識別に対する再反省と再検討が重要である」(余志清 2002: 137)という観点を提示している。こうした意見も踏まえ、筆者は、中国の民族識別工作は新中国の政府によって行われた新しい作業であり、この作業によって形成した民族も新しいものであるという観点をもって考察を進めたいと思う。

本論で着目する達斡爾民族に代表される識別された民族の視点に立って、民族識別工作の過程や、この作業が民族の形成ならびにその民族に属することとなった人々に与えた影響などの問題に注目して、その発生から意義までを詳しく検討した研究は管見の限りまだ現れていない。

本章では、中国における民族識別工作の発生と達斡爾民族の識別、それに由来する“民族問題”について論じている。第1節では、民族形成の前提条件である民族識別工作を大局的に観察する。具体的には、民族識別工作の起こり、民族識別と認定のプロセス、認定の基準について検討する。第2節では、達斡爾民族の識別について、そのプロセスと民族として識別されるに至った原因を文献とインタビュー資料によって考察する。

## 第1節 新中国における民族識別工作について

周知のように、中国では公定された56の民族がある。各少数民族地方では民族地域自治政策を行っている。民族地域自治とは国家の統一的指導の下で、各少数民族が集まっている地方に自治機関を設立し、自治権を行使することである。新中国において、民族地域自治政策が初めて実施され、省<sup>8</sup>のレベルの民族自治地域が成立した地方は今の内モンゴル自治区である（李資源 2000：193）。この後、民族地域自治政策の実施に伴い、2003年までに155個の民族自治地域が認定された。その内訳は自治区が5、自治州が30、自治県（旗）が120となっている（羅・徐 2005：177-179）。

### 1. 民族識別工作の開始の背景

民族地域自治政策の実施は、以下で検討する民族識別工作の開始と直接的な関係がある。関連の先行研究では、中国の民族識別工作のプロセスに言及しても、この工作が開始された背景については述べたものは少ない。すでに上で紹介した黄・施 2005で主に言及されるのは、民族の概念と識別工作のプロセスである。したがって、民族識別工作について検討するにあたっては、まず、なぜこの作業が起こったのか、その背景を明らかにしておく必要がある。以下ではこの問題に注目して、民族識別工作以前にかかる新中国の民族政策の規定について論じる。

#### 1) 民族政策規定の提出

新中国成立後の民族政策の基礎と方針は、中国人民政治協商会議第一回全体会議（1949年9月29日）が作った民族に関する四つの規定と、第一回全体委員会第三回会議で周恩来の提示した「民族関係」（1951年10月23日）という報告書であった。つまり、国家が少数民族に対する民族政策を制定したのである。

この四つの規定は「中国人民政治協商会議共同綱領第六章」（人民出版社編 1953：1）に以下のように書かれている。

第五十条 中華人民共和国内の各民族<sup>9</sup>の一律平等、団結互助を実行する。帝国主義と各民族内部の人民の公の敵に反対し、中華人民共和國を各民族の友愛の大家庭にする。大民族主義と狭隘民族主義に反対し、各民族間の差別、圧迫と民族分裂の行為を禁止する。

第五十一条 各民族の居住地に、民族地域自治を実行するべきである。民族の居住地の人口と地域の大きさに依って、各等級の民族地域自治機関をそれぞれ樹立する。

<sup>8</sup> 中国の最も大きい行政単位。

<sup>9</sup> 四つの規定には“民族”ではなく“民族”と表記されているが、この“民族”は筆者の用いる“民族”と同じ意味であるので、本論文では“民族”と表記したことを断っておく。

第五十二条 中華人民共和国境内の各少数民族は国家の軍人制度に統一的に従って人民解放軍に参加し、地方的な人民公安部を組織する権利がある。

第五十三条 各少数民族は等しく自らの言語文字、民俗習慣を保持、あるいは改革する権利及び宗教信仰の自由がある。人民政府は、各少数民族の政治、経済、文化、教育を建設する事業を助けなければならない。

1951年10月23日の中国人民政治協商会議第一回全体委員会第三回会議で、周恩来は民族関係という報告書を提出し、民族区域自治の推進と民族民主連合政府の樹立という方針を示した（人民出版社編 1953：3）。

民族地域自治とは、各民族が中国人民政治協商会議共同綱領<sup>10</sup>の基本精神と中央政府の統一指導のもとに、少数民族の大多数の人民の意志に従って、少数民族自身が好む方法で、その民族の事務を管理することである（人民出版社編 1953：16）。つまり、中国の民族地域自治は、中国共産党の民族問題を解決する基本政策であると同時に中華人民共和国の重要な政治制度である。これが基本的に含み持っている意味とは、国家の統一指導によって各少数民族が集中して居住している地で地域自治を行い、自治機関を建立して、自治の権利を行使する（布赫 1989：25）ことである。

自治地域の行政単位は自治区、自治州、自治県（モンゴル族地区では「旗」、自治郷である。これらは単一の民族の自治地域であるとは限らず、民族の雑居地では、各民族の人民代表会議を通じ、民族民主連合政府をもつ自治地域もある（人民出版社編 1953：16）。このような自治地域の例としては「積石山保安族東郷族撒拉族自治县」がある。

以上が、新中国の成立初期の民族政策の概要である。実際、この民族政策の実施が直接的に民族識別工作の展開を促進した。この展開については、下の2. で詳述する。

## 2) 民族活動について

上述した民族政策の実施に伴い、中央政府は、民族識別工作の前に、民族政策を宣伝するため以下のような一連の民族活動を行った。これら民族活動の開催は各地の人々の民族創造に向けた雰囲気を作った。具体的な活動は以下の通りである。

### (1) 中央政府による中央民族訪問団の派遣

1950年6月から、中央政府は各少数民族地方に訪問団を派遣した。主に中央人民政府と毛沢東の全国の少数民族に対する深い関心を伝達し、また人民政府協商会議で決定した共同綱領の民族政策を宣伝するためである（人民出版社編 1953：27）。中央民族訪問団は西南、西北、中南、東北地方と内モンゴル地域に派遣され、各地域で慰問と民族政策を宣伝

<sup>10</sup> 共同綱領には、序言、総綱領、政権機関、軍事制度、経済政策、文化教育政策、民族政策、外交政策という内容が含まれており、第六章に民族政策計4条（第五十～五十三条）が記されている。その内容はすでに直前に示したとおりである。

する活動を行った。(黄・施 2005 : 105)。例えば、「中央民族訪問団訪問西北各少数民族的  
総結報告」では、訪問団の工作の進行は、一般的には、一つの所に到着後には、まず、当  
地のエリートの紹介を受けて、少数民族幹部の意見を聞いて工作の計画を策定し、当地の  
エリートたちの同意を得た後に工作を展開した。工作は以下の三つの方式を採用した。一  
つは、各民族のエリートと代表的人物に対して個別的訪問を行った。二番目は、当地の事  
情を考慮した上で民族あるいは職業に応じた各種の座談会を行った。三番目は、 minority  
を主体として、京劇を上演したり映画を放映するなどの民衆の大会を行った (人民出版社  
1953 : 28-29)。

## (2) 北京での国慶節祝賀行事への招待

1951年10月、各民族<sup>11</sup>の代表団159人と文芸工作団の222人は、当時の中央人民政  
府政務院の周恩来総理の招きにより、北京で新中国成立一周年の国慶節に参加した。各民  
族代表団は各級の軍政関係者、労働者、農民、牧民、狩猟民、労働模範、革命軍人家族、革  
命烈士家族、教師、学生、文芸工作者、活仏、王公、僧侶、堪布<sup>12</sup>、ラマ、土司<sup>13</sup>、頭人<sup>14</sup>か  
ら構成されていた。1950年11月24日、政務院の第六十回政務会議での李維漢の報告「中  
央人民政府民族務委員会の各民族代表団が国慶に参加した報告」(人民出版社編 1953 : 21)  
によれば、当時国慶節に参加した代表には、

- ①国慶大典に参加し、毛沢東主席と会って、尊敬の気持ちを表す。
- ②中央政府に対して自身の民族<sup>民族</sup>の状況と希望を伝える。
- ③全国の各民族が大団結し、中央の指示を聞く。
- ④首都を参観し、各方面から少数民族<sup>少数民族</sup>に対する態度を見る。

という四つの希望があった。

この活動は各地の代表に民族政策<sup>民族政策</sup>を宣伝したが、これについてユ・ヒョジョンは「国慶  
節への少数民族代表団の招致は、新国家の民族政策の推進において重要な意味を持つもの  
として綿密に準備され、推進されたものであった。それは、新国家の成立を記念する大祝  
典に代表を参加させ、かれら少数民族もその堂々たる構成員であるという実感と自覚をも  
たせ、新国家の体制内にしっかりと引き込む意図から発想されたものである。そして、民  
族平等の原則に基づく諸々の政策がすべて『区域自治』の実施にかかわっていたこともあ  
り、代表の具体的な人選もそれを強く意識し、『区域自治』の対象地域及び民族の代表が網  
羅できるように工夫されていた」(ユ 2008 : 140) と論じている。

---

<sup>11</sup> このときには、まだ正式に民族<sup>民族</sup>が識別されていなかった。正式に識別されるのは1953  
年に入ってからである。

<sup>12</sup> チベット仏教における僧の学位のひとつ「ケンポ」。チベット仏教僧は九年から十五年の  
仏教の修業を経てこの呼称を得られる。

<sup>13</sup> 中国に隣接し、一国を形成せずに分立し、中国王朝と君臣関係にある諸民族の支配者た  
ちのうち、軍事指揮官に任じられた者の総称。

<sup>14</sup> 諸民族下の小集団(部落)の一番上のリーダー。



ユの述べたように、今回の民族活動は、各地の代表の人々の「民族になる」という希望を高めた。この招待を受けた人々を見ると、彼らは主として各地のエリートたちであった。彼ら代表は「民族になる」という強い希望を持って、民族政策の宣伝と民族になる努力を行った。たとえば、当時は苗族に含まれていた今の土家民族は元来から単一民族であるという観点を招待会で最初に提出したのは、今の土家民族の知識人田心桃である。このことについて彭勃は「50年代の土家民族の識別の過程で、田心桃は大きな役割を果たした。民族政策の宣伝にも多くの工作を行った」（彭勃 1997：18）と評価している。1950年、田心桃は中南部地域の少数民族の代表として今回の招待に参加した。この招待の会で彼女は、自らを、人々に認められている苗族ではなくて、また認定されていない土家民族であると強調した。これが、中央政府の注意するところとなって、人類学・民族学・言語学者である楊成志を派遣して、田心桃に対して土家人の状況についてインタビューを行った。この時には、ただちに単一民族と認定されなかったが、1950年から7年の時間をかけて、1957年3月には単一民族と認定された（彭勃 1997：20-25）。

土家民族の場合、単一民族と認定されるまでには長い時間を要したが、民族として識別される過程では、民族側の努力が不可欠の成功要因であったことがわかる。

### （3）他の活動について

以上の訪問団と代表団の活動以外に、中央政府はまた、民族地方で少数民族幹部を養成する民族高校を設立し、少数民族の貿易、教育、衛生に関する調査などの活動を行った。

以上に述べたような民族政策の宣伝、民族活動の展開に伴って、全国各地方のマイノリティ・グループの中に少数民族と認められようとする雰囲気広がった。民族識別が行われる前に、すでに400ほどのマイノリティ・グループが民族になるための申請を行った。申請がこのような多数に及んだため、どのマイノリティ・グループを民族として認めるかという問題が起こった（黄・施 2005：104）。この、民族になろうとして申請した400のマイノリティ・グループを民族として識別するために、中央政府は各地に調査団を派遣して以降、本格的な民族識別活動が実施された。

## 2. 民族識別工作

中国の民族工作の関係者は、民族識別とは、「ある地域に居住している人々の共同体の言語、経済生活、文化と心理的資質及び歴史的来歴についての総合的考察と分析・研究を通じて族体<sup>15</sup>の民族成分<sup>16</sup>と民族呼称を確定する」（黄・施 2005：76）ことであると定義している。毛里は「民族識別とはあるエスニック・グループ（族体）の民族的出自（民族成分）と民族呼称を弁別する」（毛里 1998：61）ことと定義している。

---

<sup>15</sup> 民族グループのこと。

<sup>16</sup> 民族の出自のこと。

では、中国の民族識別とはどのようなことを行ったのか。その行ったことの本質は何であるのか。以下では、民族識別工作の開始にいたる状況、民族識別工作プロセス、民族識別の基準を明確にしておく。

民族識別工作について研究した余志清は、民族識別工作を行なった原因を分析した。具体的には、

①各レベルの人民代表大会において、どの民族が何人の代表を選出すべきかを決めなければならない。

②民族政策の一つである民族区域自治を実行するために、各地方がどの民族の集中している地域であるかを明らかにしておかなければならない。

③個人においても、新中国政府が戸籍制度を導入し、それを民族平等の政策とむすびつけるため、住民一人一人が自分の「民族成分」を明確に申告しなければならない。という三つの原因があった（余志清 2002：132）、と述べている。余の分析は、国家による政策実施という面では正しいと考えてよい。しかし、識別された側の要因が分析されていない点に問題を残しているとも言える。

この民族識別工作は国家による政策的活動である。言うまでもなく、政策的活動とは本質的には政治的手段に他ならない。しかし、識別された側の人から見た場合、この識別工作はどのような意味を持っていたのだろうか。彼らは、ただ単に、国家による政策的活動であり政治的手段でもあった民族識別工作を受け入れただけだったのだろうか。

## 1) 民族識別工作の開始にいたる状況について

上では、400 ぐらいのマイノリティ・グループが民族になる申請をしたと述べたが、中国の民族識別工作の過程や結果は相当複雑であった。民族となることを申請したマイノリティ・グループの中には、本論文で扱うモンゴル人の中のマイノリティとしてサブ・グループに位置づけられていた達斡爾民族のように、大きな民族から離れて、単一民族になることを希望したマイノリティ・グループがある<sup>17</sup>。また、納西民族のように、大きな民族に含まれることを希望したマイノリティ・グループもある。納西民族について言えば、納西民族として識別された塩源と木里の人びとの中には、1952 年の時点で、自分たちは納西民族よりも大きなモンゴル民族であると強調したことがある（雲南大学歴史研究所民族組 1976：12）。

費孝通は、民族識別活動で遭遇した複雑な状況を以下の八つ（費 2006 上：291-292）にまとめている。

①民族の中には、少数民族地方に移住した後、漢民族<sup>18</sup>の特徴を持っているにもかか

<sup>17</sup> この希望については、第 2 節で詳述する。

<sup>18</sup> 費は文中「漢族」と表記しているが、これは筆者の言う漢民族の意味であるので、筆者はここでは「漢民族」と表記することとした。

ならず、自分たちがもともと漢人<sup>19</sup>であると知らず、人から呼ばれた呼称を自分の民族<sup>mǐn zú</sup>の名称にし、少数民族<sup>mǐn zú</sup>として認定してほしいと申請したグループがある。雲南の庶園、広東の疍民などがこのようなケースである。

②少数民族<sup>mǐn zú</sup>地方に移住した漢民族<sup>mǐn zú</sup>の中には、先に移住した漢民族<sup>mǐn zú</sup>と後に移住した漢民族<sup>mǐn zú</sup>がある。先に移住した漢民族<sup>mǐn zú</sup>は内陸に住んでいる漢民族<sup>mǐn zú</sup><sup>20</sup>と長く離れて暮らす中で、言語や風俗、習慣が漢民族<sup>mǐn zú</sup>と相違を見せるようになった。このため後に移住してきた漢民族<sup>mǐn zú</sup>に差別され、自分たちには漢民族<sup>mǐn zú</sup>との間に区別があると意識するようになり、少数民族<sup>mǐn zú</sup>として認定してほしいとの要望が生まれた。たとえば、貴州の穿青、広東の六甲などがこのようなケースである。

③ある少数民族<sup>mǐn zú</sup>は自分たちを漢民族<sup>mǐn zú</sup>として区別されるのを嫌っていた。なぜなら、建国前、ある民族<sup>mǐn zú</sup>の一部エリートたちが、当時の政府によって、その他の少数民族<sup>mǐn zú</sup>を統治するのに利用されていたため、そのことによって何らかのマイナスな影響を受けるのではないかという危惧があったからである。たとえば、湖南西部の土家族<sup>mǐn zú</sup>などがこのようなケースである。

④少数民族<sup>mǐn zú</sup>は他の地域に移動する過程で漢民族<sup>mǐn zú</sup>と出会い、漢民族<sup>mǐn zú</sup>の影響を強く受けたため言語が変化し、本来の民族<sup>mǐn zú</sup>の特徴が消失した。経済面でも漢民族<sup>mǐn zú</sup>に強く依存していたため、差別を受けていた。居住地域は漢民族<sup>mǐn zú</sup>とは異なっており、「少数民族<sup>mǐn zú</sup>」と自認している人々、たとえば、福建省や浙江省の畚民などがこのようなケースである。

⑤かつて同一民族<sup>mǐn zú</sup>だったグループで、基本的に民族固有の言語や風俗習慣、歴史伝統を残しているが、違う地域に移動したため、(元来の民族と一筆者補)長期間にわたって離れていたため、また他の民族<sup>mǐn zú</sup>に別の名称で呼ばれたため、同時にいくつかの名称で民族<sup>mǐn zú</sup>に申請した状況がある。たとえば、広西(省)の布壮、雲南(省)の布沙、布依などがこのようなケースである。

⑥民族集団がいくつかの違う地域に分布しているため、それぞれ近隣の民族<sup>mǐn zú</sup>の生活様式の影響を受けたが、現在でも共通の言語を持ち、共通の名称で呼ばれている。たとえば、四川(省)、雲南(省)の「西番」などがこのようなケースである。

⑦民族集団の分布が広く、お互いに離れた居住区が形成されたため、言語や文化などの面において同様な点も見られるが同時に相違点もある。長い期間にわたって他の民族<sup>mǐn zú</sup>と同一名称で呼ばれたため、彼ら自身もその<sup>21</sup>民族<sup>mǐn zú</sup>と同一民族<sup>mǐn zú</sup>であると自認している。たとえば、苗民などがこのようなケースである。

⑧民族<sup>mǐn zú</sup>の内部において、自分たちが単一民族<sup>mǐn zú</sup>であるか、または他の民族<sup>mǐn zú</sup>の一部分であるかという問題に対して意見が一致しない。たとえば、東北地方の達斡爾などがこのようなケースである。

19 費は文中、「漢族」と「漢人」の概念を区別して使っていない。

20 少数民族地域外に居住する漢民族<sup>mǐn zú</sup>のこと。

21 同一名称で呼ばれた民族<sup>mǐn zú</sup>のこと。

では、以上のような状況に対して中央政府はどのように識別工作を行ったのだろうか。言い換えれば、民族識別とは具体的にどのような作業を行ったのだろうか。

1953～1956年にかけて中央民族事務委員会は各民族を弁別するために調査団を各地に派遣した（毛里 1998：61）。調査団の目的とは、「民族識別は各民族が少数民族になるかあるいは単独の民族と承認することを決めることではなく、民族の特徴を各側面から研究して、資料と分析を提供し、すでに民族名称を提出したグループを助けて少数民族あるいは単独の民族であるかの認定について考慮するため」（費 2006：199）であった。これをまとめて余志清は、「1953年中央民族事務委員会が『畚民』を識別するための調査団を派遣したことを第一歩として、民族識別と呼ばれるある民族的な集団（エスニック・グループ）の民族出自（民族成分）と民族呼称を認知し、弁別する大規模な作業が民族学研究の重要な任務として行われていた」（余志清 2002：132-133）と述べている。

以上が民族識別工作の状況である。下の2)の冒頭部にも示したように、黄らは、民族識別工作が建国の年から始まったと述べている（黄・施 2005：104-115）。しかし、調査団を派遣したことが民族識別工作の直接的なきっかけとなったと見るならば、実質的な民族識別工作は1953年から始まったといえるのであり、それ以前の関連する出来事は、民族識別工作の準備作業であったと考えるべきである。

## 2) 民族識別工作のプロセス

上述したように黄らは、民族識別工作をその準備段階からとらえ、建国から1990年までの期間を以下の四つの段階に分けている（黄・施 2005：104-115）。

○第一段階：民族識別の発端の段階（建国から1954年まで）。この時期は中央政府が民族政策を宣伝した段階である。この時期には38の民族が公認された。この中には従来から広く民族として認識されていた、モンゴル、回、チベット、ウイグル、苗、瑶、彝、朝鮮、満、黎、高山の他に、壮、布依、侗、白、哈薩克、哈尼、傣、傣、佤、東郷、納西、拉祜、水、景頗、柯爾克孜、土、塔吉克、烏孜別克、塔塔爾、鄂温克、保安、羌、撒拉、俄羅斯、錫伯、裕固、鄂倫春が認定された。

○第二段階：民族識別の高まりの段階（1954年から1964年まで）。この段階では15の民族が認定された。具体的には土家、畚、達斡爾、仫佬、布朗、仡佬、阿昌、普米、怒、崩龍（今は徳昂）、京、独龍、赫哲、門巴、毛難（今は毛南）である。

○第三段階：民族識別が防げられた段階（1965年から1978年まで）。1965年に珞巴民族が識別された。1966年に始まった文化大革命により、民族識別工作は一時停止を余儀なくされた。

○第四段階：民族識別の回復段階（1978年から1990年まで）。この時期は主に一部分の人々の民族出身について識別を行った。また、「〇〇民族」と自称したグループがあったが、これらグループについても弁別を行った。その結果、1979年に基諾民族が中国の最後の少数民族として認定された。

そして1987年2月10日、当時の国家民族事務委員会の副主任であった黄光学は「民族識別工作が基本的に完成した」（黄・施 2005：114）と宣布した。1990年に実施された第四回人口センサスまでに55の少数民族事務委員会が形成された。1995年5月1日に国家民族事務委員会、國務院第四回人口センサス指導小組、公安部は中国公民の民族出自に関する規定「（1995年5月1日）（政）字[1990]217号」を公布した（羅・徐 2005：62）。この規定の第一条では、公民の民族出自を確認する時、国家により認定された民族の名称を基準とし、誰であっても国家が認定しなかった民族名称を使って民族の出自を表わすことを禁止することが定められた。つまり、基本的に完成した民族識別工作によって定められた民族名称しか使ってはならないということになった。このようにして、中国の56民族、55少数民族の数字と名称が決められた。

### 3) 民族識別工作の基準について

民族識別工作は1950年代から1990年代まで行われ、その結果、56の民族が識別された。では、これら民族を識別するときの基準は何であるかといえば、民族識別工作の関係者によれば、民族特徴と民族意願<sup>22</sup>である（黄・施 2005：81）。56の民族は新中国成立後に科学的調査と識別を通じて中央政府によって認定された、政治地位がある<sup>23</sup>民族であり、このように認定された民族には漢民族、チベット民族、ウイグル民族、モンゴル民族のような民族がある一方、中国の民族識別の基準に依拠して、歴史的根源、言語的状況、文化的特徴、地域間関係および各グループの（民族一筆者補）願望と民族意識によって新しく確認された民族もある。下では、このような民族識別の基準となった事項について分析する。

#### (1) 民族特徴

「民族特徴」とは、共通の言語、共通の地域、共通の経済生活、共通の心理要素という四つの特徴を指す。この基準について、余志清は、実際の民族識別にあたっては、中国の学者たちはスターリンの民族概念を参考にしながら、この四つの特徴を柔軟に理解しており、中国の各民族においては四つの特徴が非常に不均衡であると述べている（余志清 2002：134-135）。この見解を容れるならば、中国の民族とはこの四つの要素を、場合場合に応じて恣意的に適用して作り出されたということになる。

#### (2) 民族意願

黄光学は「民族意願」を以下のように定義している。民族意願には、民族意識と民族願望が含まれている。民族意識とは、ある族体<sup>24</sup>のエリートと上層の人々を含んだ民衆の族体

<sup>22</sup> 民族意識と民族願望を指す。下の（2）を参照。

<sup>23</sup> 「政治地位がある民族」とは、たとえば人民代表大会に民族の代表を送ることができる権利があることなどを指す。

<sup>24</sup> 「族体」とは「民族グループ」の意味である。

への帰属意識、つまり自己の族体へのアイデンティティである。民族願望とは、自己の族体は漢民族でありたいのか、それとも少数民族でありたいのか、もし少数民族であれば、単一民族でありたいのか、それとも他の民族の支系でありたいのかという願望である（黄・施 2005 : 102）。

### （3）基準の適応事例

以上に述べたように、民族識別工作には明確な基準があったが、余志清は具体的な事例は示さずに、全ての場合が上で述べたような民族特徴によって識別されたわけではなく、四つの特徴を満たさなくても、回族のように単一の民族に認定された例があることを述べている（余志清 2002 : 134）。

また、現在は、貴州省に住む穿青人と呼ばれる人々は、1953年の時には、自分たちを穿青民族として申請したが、少数民族とは識別されなかった（黄・施 2005 : 185）。今でも、穿青人は自らはっきりとした民族特徴を持っていると自認している。この状況に対し中央政府の公安部は、2003年8月28日に〔公治字（2003）118号〕公文書「関与貴州省\_\_家人和穿青人居民身分証項目填写内容填写問題的批復」で、“民族団結と社会の安定を保護するため、\_\_家人と穿青人はすでに少数民族と見なされていた状況が続いて、民族成分を書き入れるときにはもともとの書き方を書く<sup>25</sup>。“\_\_家人”、“穿青人”と書き入れても良い”とする規定があった（戴・盛・劉 2011 : 83）にも関わらず、単一民族とは認定されなかったのである。この場合、彼らには明らかな民族特徴があり、強い民族意願があったにも関わらず、少数民族として識別されなかったのである。つまり、民族特徴や民族意願が必ずしも民族識別の有力な基準にはならなかったものと考えられる。この点については、次の部分で取り上げる達斡爾民族の識別においてさらに検討を加えることにしたい。

## 3. 本節のまとめ

以上の内容をまとめておこう。新中国の成立にともなって、中央政府は共同綱領の中の民族政策を実施するために、民族識別工作を行った。各地に民族識別調査団を派遣して民族識別を行った。筆者の見解では、この識別工作とは、ただ単に民族識別調査団を派遣したことだけに限ったことではなく、民族識別調査団を派遣する前段階があり、中央政府が民族政策を宣伝するために中央民族訪問団を派遣したり、各民族の代表団を北京での国慶節祝賀行事に招待したりという作業を行っていた。中央政府はまた、民族地方で少数民族幹部を養成する民族高校を設立し、少数民族の貿易、教育、衛生に関する調査などの活動を行うことを通じて、民族地方において民族という雰囲気を作った。主に、これら活動を通じて、各エスニック・グループのエリートたちには民族というイメージが作られ、彼らの思想に影響したと考えられる。こうしたエスニック・グループのエリートたちに芽生えた民族というイメージは、識別される側に「民族になる」という「意願」の形成に一定の役割を

<sup>25</sup> \_\_家人、穿青人と書く、という意味。

果たしたことは想像に難くない。民族識別工作の展開は、《共通の言語、共通の地域、共通の経済生活、共通の心理要素》という四点の特徴によってのみ進行したのではなく、識別する側とされる側の相互関係から捉える必要がある。こうした視点を持して、以下では達斡爾民族の民族識別について考察を行いたい。

## 第2節 達斡爾民族の識別について

ダフル人を達斡爾民族として識別する作業は1953年に開始され、民族として識別されたのは1956年だった。この識別工作に三年間もの長い時間を要したのはなぜだろうか。この節では、ダフル人が民族として識別されるべきであると認識し認識されるようになった状況、この工作のプロセス、識別の基準を明らかにし、達斡爾民族が識別された過程の全面的な把握を試みたい。そして、識別する側の国家と識別される側の人々が、一連の識別過程にどのように関わっていたかを明らかにする。

### 1. 達斡爾民族の識別までの動向

ここではまず、達斡爾民族の識別への動きはいつから始まったか、その際に中央政府側の民族政策による作業以外にダフル人側に何らかの動きがあったのか、という問いに沿って、ダフル人が達斡爾民族として識別されるまでの動向について検討する。

#### 1) 単一民族への初期の動向

ダフル人は達斡爾民族として識別される以前は、「伝統的に自らをモンゴルの一部と認識してきた」（暁敏 2008：3）とも、「ダフル人の中には自らをモンゴル人の一部として捉え、そうした意識をもって、モンゴル人として生きて来た人々も少なくなかった、とも言われる（ユ 2009：129）。言い換えれば、モンゴル人の分枝であったという論がある。確かに、下に見るように、ダフル人知識人の阿拉坦噶塔のように、「達呼爾蒙古」という表現を用いてダフル人をモンゴル人の一部あるいはサブ・グループに位置づけていた事実がある。

ダフル人にはいつから単一民族への動きが起こったのか。新中国の中央政府による一連の民族政策の宣伝が原因となってダフル人が単一民族になれると考えるようになったのか。このことについてユ・ヒョジョンは、「ダフル人として生きるか、それともモンゴル人として生きるかは、固定的なものではなく、できあがりつつあった新しい国家の理念や政策次第で揺り動かされうる可能性をも含んでいた。そして、そうした（単一民族になれると考えるようになった一筆者注）微妙な変化はすでに建国前夜の段階で実際におこっていた」と判断して、国共内戦中に内モンゴル工作に中心的に関わった漢族の共産党員の一人である王鐸の以下のような回想を引用して分析している。

わたしが最初にダウル（ダフルー—筆者注）問題にふれたのは、ウランホトで中共内モンゴル工作委員会書記長として働いていた 1948 年であった。当時、わたしは数人のダウル（ダフルー—筆者注）族幹部を知っていたが、かれらのなかのある人々は自らをモンゴル族と名乗っており、自分の幹部書類にもモンゴル族と書き込んでいた。ただし、一部分の人はわたしに対してダウル（ダフルー—筆者注）はモンゴル族以外の独自の民族（「単一民族」）であると言っていた。言語、生活習慣などの特徴からダウルはたしかにモンゴル族に似ていた上に、当時私たちの工作の中心は解放戦争を支援し、内モンゴル自治を押し広めることであったので、ダウル（ダフルー—筆者注）問題について突っ込んだ調査研究を行うことはできず、ダウル（ダフルー—筆者注）族幹部に対しても一律モンゴル族に準じて扱っていた。全国解放後、若干のダウル（ダフルー—筆者注）族幹部、大衆、歴史研究に携わる学者たちが丁重にダウル（ダフルー—筆者注）の族称問題を提出しはじめ、わたしたちもダウル（ダフルー—筆者注）族問題を重視するようになった。1952 年 8 月、中央人民政府が『中華人民共和国民族区域自治実施綱要』を頒布した以後、われわれはこの問題をより重視するようになった（後略）。（ユ・ボルジギン 2009：129）

そして、ユは、

ダウル（ダフルー—筆者注）人のなかに自らをモンゴル人ではなく、個別の民族であると主張する人々がいることに王が初めて触れたのは具体的に 1948 年の何月ころなのかは分からないが、いずれにしても、このいわば共産党による「ダウル（ダフルー—筆者注）問題」の「発見」ともいべき状況がこの 1948 年にあらわれたことは極めて興味深い。（ユ・ボルジギン 2009：129-130）

と論じた。ユは、共産党による「ダウル（ダフルー—筆者注）問題」の「発生」は 1948 年にあらわれたことは興味深いと述べているが、筆者は、ダフル（ダウル）人が自らを単一民族であると強調することが、ダフル人幹部の中から発生したことに興味深く注目している。上掲の引用資料から見れば、1952 年 8 月に「中華人民共和国民族区域自治実施綱要」を頒布した後に、共産党がこの問題をより重視するようになったということは、国家が重視し始めたということであり、それは 1952 年のことだということになる。ところが、これより早い 1948 年の時点で一部のダフル人幹部は自らを「モンゴル族以外の独自の民族である」と言っていたのである。この王の回想は、新中国の民族政策の宣伝が行われる以前から、ダフル人の内部に「モンゴル族以外の独自の民族である」という考えが存在していたことを証明している点で、非常に重要である。

また、孟志東らは、当時のダフル人の中に自らの出自をめぐる討論があったことを以下のように述べている。「1951 年ウランホト<sup>26</sup>に勤務していたダフル幹部が、内蒙古東部

---

<sup>26</sup> 今の内モンゴル自治区の東部の町。ウランホトとはモンゴル語で「赤い町」という意味である。



区党委の夏輔仁<sup>27</sup>の指示で、ダフル人の民族の出自について討論する座談会を行った。そこで、書面の資料を作り中央と内モンゴル機関の行政機関に提出した」(孟志東、恩和巴図、呉団英 1987 : 4)。この提出した資料の内容は現在では知ることはできないが、ダフル人の民族の出自について討論する座談会が開かれたことを伝える書面資料が提出されたことは間違いない。また、モリダワー旗で老年座談会も行ったとも述べている(孟志東、恩和巴図、呉団英 1987 : 4)。このことは、1951年当時、ダフル人の中に、単一民族であるかどうかという疑問があったことを言い表している。つまり、ダフル人が単独の達斡爾民族となる過程の初期段階には、単一の民族か否かという議論や、そもそも自分たちがいかなる出自を持つ者なのかをめぐる議論がダフル人側の中にもあり、そこにさらに党・政府の関与もあったことがわかる。

つまり、ダフル人が単独の達斡爾民族となる過程の初期段階とは、新中国建国以前から一部分のダフル幹部の中に確認された「モンゴル族以外の独自の民族である」との考えがまずあり、新中国建国後、それに党・政府が注意を払い具体的な活動に結びつけたという流れであったのである。ここでは、この流れは1953年に始まる民族識別工作以前に存在していたこと始まっていたことなのである。

## 2) 黒龍江省地方のダフル人の動向

新中国成立後の民族工作の展開に伴って、上に引用した王鐸の回想に見えていたようなダフル人幹部の中にあつた単一民族になるという願望は、1953年の民族識別工作開始以前にかかる1952年8月に黒龍江省にチチハル市に「オニト<sup>28</sup>・ダフル族自治区」が成立したことに、その具体的反映を見ることができる。

新中国初期に存在した龍江県のチチハル市に位置するオニト区は、ダフル人が集中して居住するところであつた。1952年8月3日、当時の黒龍江省人民政府主席であつた于毅夫(漢族)は黒龍江省と龍江県とオニト区の調査団を率いて、「オニト・ダフル族自治区」を成立させるための調査を行った(杜興毅 1999 : 40)。その後、「民族区域自治実施綱要」(1952年8月)に依拠して、黒龍江省共産党委員会と省政府の決定によって、チチハル市のオニトで龍江県オニト達斡爾族自治区<sup>29</sup>が1952年8月18日に成立した(杜興毅 1999 : 76)。これは、ダフル人の歴史上初めての人民政権であり(馬・劉 1989 : 287)、言い換えれば、ダフル人の初めての行政機関であつた。この人民政権について、1950年代の資料では「1952年8月、黒龍江省人民政府は、ダフル人の要求で「龍江縣ダフル族自治区」を成立させた」というように、ダフル人側の要求で「龍江縣ダフル族自治区」が成立したことをはっきり記録している。しかし、1956年に達斡爾民族が正式に識別され、

<sup>27</sup> 解放後、最も早く達呼爾地区で働いた人の一人。漢民族。かつて中共納文慕仁盟の書記、内蒙古東部区党委宣傳部長などの職にあつた(孟志東、恩和巴図、呉団英 1987 : 13)。

<sup>28</sup> 漢字で「卧牛吐」。「小さな谷のある」という意味のダフル語。

<sup>29</sup> 杜興毅は「卧牛吐達斡爾族自治区」(下線筆者)と書いている。

新たに達斡爾民族の自治機関を所在させる自治地域を設定する必要が出てきたことに伴って、1956年8月に廃止された（何・敖 2007：517）。そして達斡爾民族の自治機関は1958年に今のモリダワー達斡爾民族自治旗に設立された。

### 3) 達斡爾民族識別前の動向にみるダフル人政治エリートの作用

以上は、達斡爾民族が正式に認定される前のダフル人の動向である。黒龍江省の龍江県オニト・ダウル族自治区と新疆のゴルベンシェル・ダフル族自治区<sup>30</sup>について、ユ・ヒョジョンは、

この新疆ダウル人の「自治区」がこの時期に成立したことは、先にできた龍江県の「自治区」と同様に、独自民族としての認定に対する反対論または消極論を抑え、政府の既定の方針を貫徹するための有効な手段として選ばれた可能性が高く、結果としてもそのような役割を果たせたとみなすべきであろう。このように考えるならば、調査団などによる「意思」確認作業は、同時に、当局の結論に合わせる方向にダウル自身の「意思」を形成し、強化するものであったともとらえることができよう。（ユ・ボルジギン 2009：180）

と述べている。ユは政府側の作用を強調し、単一民族になる問題の発生は政府側の意識的な作業と考えている。しかし、筆者は、政府の作業ばかりではなく、ダフル人側の政治エリートたちの作用も重視する必要があると考えている。

毅赫は「民族幹部是民族事業發展的脊梁」という一文を草し、「1951年末に国家が開催した民族工作會議で、吳維榮<sup>31</sup>たちは積極的に達斡爾族が単一民族であるという要求を提出した。これが国家からの注意を引いた」（何、楊 2000：26）と証言しており、チチハル市ムルス区のエリートであった吳維榮らが単一民族であることを公に主張していたことがわかっている。

確かに、中央政府が定めた民族政策の方針を貫徹するために、中央ならびに各地方の政府が民族政策を宣伝し、中央政府は調査団を派遣した。しかし、ユの述べたように、中央政府がダフル人側の「意思」を確認し、さらにその「意思」を「当局の結論」に合わせて形成・強化する方向での作業を行ったと見るだけにとどまり、識別された側の政治エリ

---

<sup>30</sup> 傳は「瓜爾本設爾達呼爾族自治區」と表記している。1764年に新疆に移住させられたダフル人（移住当時は「ソロン」という総称のもと「ダフル・ソロン」と呼ばれていた）が居住していた塔城地区に、1954年3月に成立し、1958年に廃止された。なお本稿は中国東北地方の達斡爾民族を考察の対象としているので、新疆に成立したゴルベンシェル・ダフル族自治区については言及しない。「ゴルベン」はダフル語で「三」、「シェル」は満洲語で「泉」の意味。

<sup>31</sup> 吳維榮（1932～）。達斡爾民族。黒龍江省チチハル市ムルス区の人。1952年オニト・ダフル族自治区の副区長を務めた。文化大革命の時には“右派”と認定されたが、1979年に復活してホランエルギの裁判所に勤務した。1987年、チチハル市ムルス区の政治協商委員会の副主席を最後に定年退職した。

ートの行動に関する検討を行わないままでは不足だと思われる。上述したように、単一民族となるための動きにおいて、ダフル人の政治エリート側の人々は大きな役割を果たしたのである。

## 2. 達斡爾民族としての識別

本章の第1節で述べた国慶節への招待と訪問団が派遣されたことについては、モリダワ一達斡爾族自治旗の『莫力達瓦達斡爾族自治旗志』にもその記録がある。すなわち、「1950年の10月1日、孟希舜は達斡爾族の代表の身分で国慶の一周年の活動に参加した」（鉄林嘎 1998 : 37）、「1952年の8月、中央人民政府は少数民族慰問団を派遣してわが旗に到らせ、中央人民政府と毛主席（毛沢東一筆者注）を代表して、錦の旗と記念章と慰問品を贈った」（鉄林嘎 1998 : 39）という記録である。以上の記述には、1950年代当時のダフル人が全国的に行われていた民族政策の宣伝とこれに続くであろう達斡爾民族としての識別が現実味を帯びてきているという雰囲気に取り囲まれていたことがうかがえる。

達斡爾民族を識別する作業は1953年から始まった。具体的には、中央の民族事務委員会の指導で達斡爾民族識別調査団を黒龍江省と内蒙古自治区フルンボイル盟のダフル人居住地方に派遣して、識別調査活動を行った（黄・施 2005 : 147）。期間は1953年8月から10月の間であった。調査団は、中央民族学院研究部の者によって組織され、林耀華、王輔仁、阿勇綽克図、陳雪白、傅樂煥らが参加した。このときの識別工作の手段には資料収集と座談会の二つの方法があった（中央民族学院研究部編 1955 : 1-2）。この識別工作に関する資料は少なく、管見の限りでは、文献資料としては調査団がその成果としてまとめた一つの資料があるだけである。ここでは、数少ない文献資料と、筆者が現地調査で収集した識別工作に関するインタビュー資料によって、このときの識別工作进行を考察する。

### 1) 文献資料から見る民族識別工作

上でも述べたように、1950年代の識別工作に関する文献資料は少ない。このときの調査団が成果としてまとめた『中国民族問題研究集刊 第一輯』（非公開出版物、1955年9月）に収められている傅樂煥<sup>32</sup>の「關於達呼爾的民族成分識別問題」（『中国民族問題研究集刊 第一輯』：1-32）という論文では、この時に行われたダフル人の識別について検討を行っている。この論文では、識別問題よりはダフル人の状況について多くのことをまとめているが、ダフル人が単一民族であると考え得る証拠を多く示している。以下、この文章をもとに、達斡爾民族の識別工作の状況を考察する。

まず、傅の論文の目次を示そう。

---

<sup>32</sup> 傅樂煥（1913-1966）：漢族である。民族史学者。1932年北京大学の歴史学部に入学生、1947年イギリスのロンドン大学で留学し契丹、モンゴル及び中国アジアの民族歴史の研究を行った。1952年中央民族学院で務めた。満民族と達斡爾民族の民族識別と社会歴史調査に参加した。

壺 基本状況

- 一 名称 (2-4)
- 二 人口と分布 (4-7)
- 三 歴史の由来
  - (1) 達呼爾伝説の中の英雄「薩吉爾迪汗」(7-8)
  - (2) 達呼爾人の歴史の由来に関するいくつかの古い説 (8-10)
  - (3) 信頼できる達呼爾人の歴史の発端 (10-13)
  - (4) 十六、七世紀における達呼爾人とモンゴル族の関係 (13-15)

式 四点識別

- 一 言語 (15-19)
- 二 地域 (19-20)
- 三 経済生活 (20-23)
- 四 社会文化心理状況 (23-26)

参 達呼爾は一つの単一民族として承認されるべきである

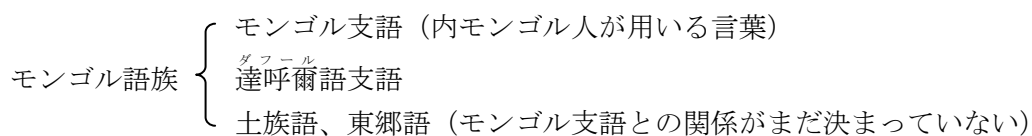
- 一 自願の原則 (26-27)
- 二 達呼爾を一つの単一民族として承認することが彼らの発展の前途に有利である (27)
- 三 なぜ少数の達呼爾人は自分たちをモンゴル族の支族だと主張するのか (27-30)

以上の目次に見える項目は、傳が達呼爾民族の識別に際して特に注意を払った事柄が示されていると考えられる。以下、項目別に詳しく見てみよう。

「壺 基本状況」の部分では、主にダフル人の基本的な状況について紹介し、式と参の部分ではダフル人を民族として識別できる要因と必要性について検討を行っているが、特に、民族識別の基準になる「民族特徴」を構成する「共通の言語、共通の地域、共通の経済生活、共通の心理要素<sup>33)</sup>」という四点の特徴と民族意願<sup>34)</sup>について述べている。

まず、「一 言語方面」を見てみよう。この部分では、ダフル語はモンゴル語族に含められるが、モンゴル語ではないという観点を出している。つまり、ダフル語（「ダフル支語」）とモンゴル語（「モンゴル支語」）はともにモンゴル語族に含まれ、一つの語族の中の同じレベルの「モンゴル支語」「ダフル支語」であるとし、ダフル語とモンゴル語は各自で発展した独立の言語であると論じた。

彼の引用したダフル語とモンゴル語の関係を表わした図式（中央民族大学研究部編 1955 : 18）は下の通りである。



<sup>33)</sup> 傳は「社会文化心理状況」と表記している。

<sup>34)</sup> 傳は「自願原則」と表記している。

実はモンゴル民族<sup>mnz</sup>とダフル人との関係の問題は、モンゴル語とダフル語との関係にも表れている。ダフル語がモンゴル語の一方言であるか独立言語であるかということは、ダフル人が単一民族<sup>mnz</sup>として識別されることに大きな影響を与えていると考えられる。かつて、ダフル語をモンゴル語の一方言に含めると見た学者がいた。著名なモンゴル言語学者のウラジーミルツォフは『モンゴル文語とハルハ方言比較文法（*Сравнительная грамматика монгольского языка и халхаского наречия. Введение и фонетика*）』

（1929年）の中で、ダフル語<sup>35</sup>をモンゴル語の方言の中に含めている（恩和巴图 1988：19；符拉基米尔佐夫 1988：19）。このように、権威あるモンゴル語研究者はダフル語をモンゴル語の一方言と位置づけたが、中国ではこれをモンゴル語族の独立言語であると決定したのであった。「民族を分類する上で最も重要な基準の一つが言語である」（綾部 2007：4）とも言われるように、この傳の結論によって独立の言語を持つとされたダフル人は、独立の民族<sup>mnz</sup>となるための有力な根拠を得たことになる。

次に、「二 地域」を見てみよう。傳は、ダフル人の今の居住地が清代にはモンゴル人の居住地ではなかったことを示している。そして、この歴史的事実を、四点の特徴の一つである「共通の地域」に適用して、ダフル人の居住地とモンゴル族の居住地は異なっていた、つまりそれぞれが異なる「共通の地域」を有していたと結論した。この居住地に関する結論も、ダフル人が単一民族<sup>mnz</sup>と識別される上でのもう一つの要素をなした。

「三 経済生活」では、傳は、ダフル人の主たる生業は農業であり、さらに狩猟、木材の河川輸送、牧畜を営んでいたとし、モンゴル族の生業である遊牧とは異なるという点を強調している。

「四 社会文化心理状況」では、主に日常生活、姓、結婚式、葬式、儀礼、宗教の側面からモンゴル族の伝統習慣と比較した結果、ダフル人は自分の文化を持っているということを証明した。

以上の四点の特徴に基づく識別の結果は、民族識別調査団がダフル人の独自性を強調するための調査を行ったことを示している。言い換えれば、ダフル人とモンゴル民族<sup>mnz</sup>の区別を探求して明らかにした研究を行ったのである。この調査結果は、ダフル人が単一民族<sup>mnz</sup>として識別されるための根拠をなしたのであった。

次に、「参 達呼爾<sup>ダフル</sup>は一つの単一民族<sup>mnz</sup>として承認されるべきである」の部分を見てみよう。まず、「一 自願の原則」について考察する。すでに上述したが、民族識別<sup>mnz</sup>の重要な一つの基準は、民族として識別されようとしている側の人々が、単一民族への「自願」、つまり自らが単一民族<sup>mnz</sup>になりたいという「願望」を持っていることである。傳の論文には、ダフル人の場合、調査の当時、黒龍江省と新疆<sup>36</sup>のダフル人は自ら単一民族<sup>mnz</sup>と考えていた。内

<sup>35</sup> 筆者が用いた *Сравнительная грамматика монгольского языка и халхаского наречия. Введение и фонетика* の漢語訳（符拉基米尔佐夫 1988）では「達斡爾語」と訳されている。

<sup>36</sup> 1764年に新疆に移住させられたダフル人（移住当時は「ソロン」という総称のもと「ダフル・ソロン」と呼ばれていた）が居住していた塔城地区に、1954年、瓜爾本設爾ダフ

モンゴルのモリダワー旗のダフル人には単一民族になりたいという願望があった。一方で、ハイラル地方のダフル人は自分をモンゴル民族と考へ、自らをモンゴル民族であると主張した人々が多くおり、ハイラル地方の南屯というところでは単一民族と主張する人とモンゴル民族と主張する人が半分半分だった、と記されている（中央民族学院研究部編 1955:27）。以上から、当時は、ハイラル地方を除いた地方の大部分のダフル人が単一民族になる希望を持っていたことが明らかにされていると言えるのである。

次に「二 達呼爾を一つの単一民族として承認することが彼らの発展の前途に有利である」の部分を見よう。この部分で傅は、ダフル人を単一民族として識別しないならば、「自願」に基づいて既に成立した「龍江県ダフル族自治区」と新疆の「ゴルベンシェル・ダフル族自治区」の名称を変更せざるを得なくなる。これら地域の人たちの伝統的な固有の自称を放棄させ、受け入れることを望まない民族名を受け入れさせ、彼らが主となってから現在發揮している積極性を挫けさせることになる。われわれは内モンゴルの大部分のダフル人の要求を拒絶し、長期間にわたる説得教育を行わなければならなくなる。したがって、中国の民族政策とは合わない（傅 1955:27）、と論じている。傅の言う「長期間にわたる説得教育」で教育しなければならないことは、ダフル人が単一民族ではないということであろう。

また、傅は、彼らの前途の発展のためには、民族の文字を作ればダフル人の教育のレベルを向上させ、内モンゴルのダフル人が抱える教育問題<sup>37</sup>を解決できるとも論じている。

続いて、「三 なぜ少数の達呼爾人は自分たちをモンゴル民族の支族だと主張するのか」の部分を見てみよう。この問題について傅は次のようなことを指摘している。辛亥革命が勃発して清朝の統治が終わると、ダフル人たちは新たな政治の拠り所を探求した。この状況で上層のダフル人たちは、民国の初年にモンゴル人と連携する活動を始めた。また、南屯のダフル人は、長期にわたってモンゴル人と共に生活していたことが原因となって自分をモンゴル民族と主張している（傅 1955:28-30）、と分析している。

以上から見ると、この調査団の主な作業とは、ダフル人とモンゴル民族とを区別し、ダフル人を単独の民族として識別することであったことが非常にはっきりと見てとれる。このことは、傅が論文の初めの部分で「達呼爾人の言語、居住地域、社会文化心理状況は漢族とは違う。漢族ではないと判断できる。主な問題は、彼らとモンゴル民族との関係である。モンゴル民族の一支系であるか、単一民族であるかという問題である。以下の資料の整理もモンゴル民族との関係を重点にしている」（中央民族学院研究部編 1955:2）と述べているところからも分かる。

この傅の論文についてはユ・ヒョジョンも丁寧な分析を行っている。ユは

傅論文は、ダフルの識別の際に検討されたすべての事柄を網羅している。その上、「参

---

一族自治区が設立された。

<sup>37</sup> この「内モンゴルのダフル人が抱える教育問題」については、下の2)(2)で再び論じる。

達呼爾人は一つの独自〔「単一」〕の民族として承認されなければならない<sup>38</sup>というタイトルやその目次に明示されているように、ここには識別作業全体の結論とも受け取れる主張が提示されているという点でももっとも注目される論文である。(ユ・ボルジギン 2009 : 152)

と評価している。さらにユは

ただ、ダウル識別工作では、政府の「意見」が最初から既に決まっていたこともあり、「意思」(＝願望)さえ確認できればそのまま最終結論が下され得るという状況であったので、この「意思」の確認作業は、どちらかといえば、独自民族としての識別を支持する人々の割合が大きいということを「確認」するためのようなものであったといえる。(ユ・ボルジギン 2009 : 176-177)

と論じ、続けて、調査団の彼らの「意思」を「確認」した過程とその解釈を明らかにしたのち、傅の論文が、「意思」の確認がかなり丁寧に、かつ綿密に行われたという印象を読者に与えていることは、とりわけ、独自民族としての識別に否定的な人々が現にいることを踏まえ、そのような人々も納得できるような形にしようと努力した結果と思われるとも指摘している(ユ・ボルジギン 2009 : 176-179)。ユの述べたところを踏まえると、傅の論文はダフル人を単一民族とみなそうとした研究であると言えよう。さらに言うならば、傅の論文は、調査団の調査成果だけではなく、民族識別工作の基準である民族特徴と民族意願に結びつけて、ダフル人の言語・歴史の研究、調査時に開催された座談会におけるダフル人側の意見も含めこんだ研究成果であるといえよう。したがって、1955年に印刷されたこの資料は、中央政府とダフル人側両方の意見を反映したものと筆者は考えている。

## 2) 達斡爾民族人が記憶する調査団の調査—座談会参加者へのインタビューに基づいて—

では、調査団は達斡爾人からどのようにして識別に資する情報を得たのだろうか。ここで筆者は座談会の内容に着目したい。以下、この時にモリダワー達斡爾自治旗で開かれた座談会に参加した経験を持つ達斡爾民族人(当時はダフル人)に対して行ったインタビューから得られた回答に基づいて分析を進めよう。

### (1) OM さん(達斡爾民族人 女性 76 歳 モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会員 2011年7月15日)

筆者：先生、私は民族識別のことや1950年代のことを知りたいです。1950年代の時には先生はアルラ<sup>39</sup>の小学校の先生でしたか？

OM：アルラ中心小学校でした。

<sup>38</sup> この「達呼爾人は一つの独自〔「単一」〕の民族として承認されなければならない」を筆者は「達呼爾は一つの単一民族として承認されるべきである」と訳している。

<sup>39</sup> 今のモリダワー達斡爾族自治旗の下の一つの鎮である。アルラは達斡爾語である。轅という意味である。

筆者：先生は何年から何年までアルラ中心小学校にいましたか？

OM：私は1950年に教師の仕事を始め、1951年にアルラへ行きました。1952年はハングル（漢古爾）河に一年いました。

筆者：そこでも学校に務めたのですか。

OM：学校です。中心学校です。あそこは（ハングル〔汗古爾〕河一筆者補）は混住地域です。ダウール人<sup>40</sup>とかエヴェンキ人とかがいます。（ダフール人の人口は一筆者補）半分ぐらいでした。1953年にはシワルト<sup>41</sup>に転勤してそこに半年いました。次の半年はまたアルラに戻りました。1955年には（モリダワー一筆者補）旗<sup>42</sup>に転勤しました。この時は長くいました。二年間です。（中略）1953年、その年に、党中央は調査団をアルラに派遣しました。アルラは（調査の一筆者補）重点地方なのでした。この時、（調査団が一筆者補）座談会を行いました。ダウール族<sup>43</sup>の歴史などについて聞きました。（ダフール人のことを一筆者補）知っている人は（知っていることを一筆者補）発言しました。あの頃は（ダフール人の一筆者補）歴史を研究した人はまだいませんでした。（みんな歴史について一筆者補）あまり知りませんでした。（人民一筆者補）公社の幹部もあんまり（知りませんでした一筆者補）。あの時は公社とは言いませんでした。努図克<sup>44</sup>と言いました。努図克の幹部たちの中で、勉強したことがある幹部たちは少し発言しました。私たちのような人は（ダフール人のことを一筆者補）よく知りませんでした。歴史などについて研究しませんでした。私たちの（アルラ中心小学校の一筆者補）校長は（ダフール人のことを一筆者補）少し知っていましたから少し発言しました。彼は（当時すでに一筆者補）比較的年長で、満洲国の時にも仕事をしたことがありました。旗（ニルギ鎮一筆者注）からも（旗政府の一筆者補）人がやってきました。旗（尼爾基鎮一筆者注）から来た人も比較的よく（ダフール人のことを一筆者注）知っている人でした。共同でそこ（アルラでの座談会一筆者注）で討論しました。あの（調査団の一筆者補）人たちが来た時、私たちにはご馳走するものもなく、臭李子<sup>45</sup>で接待しました。（後略）

筆者：その（調査団の一筆者補）人たちは全部北京の人でしたか。

OM：北京の人でした。この（調査団の調査の一筆者補）作業をしている人でした。選

---

40 OM氏は漢語で「達斡爾人」と答えたので、ここでは「ダウール人」と訳した。OM氏がハングル（汗古爾）河にいた1952年の時点では、まだ達斡爾民族は識別されていなかった。

41 ダウール語で「泥のある」という意味。漢字では「西瓦爾図」と書く。

42 モリダワー旗の中心であるニルギ（尼爾吉）鎮を指している。

43 OM氏は漢語で「達斡爾族」と答えたので、ここでは「ダウール族」と訳した。

44 達呼爾語 nutug。人民公社のレベルの単位を表す。OM氏は漢語で発音したので「努図克」と表記した。

45 クロツバラの一種の果実。



ばれて作業を割り当てられた人々です。この（調査の一筆者補）のち、短い時間  
の間に（達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>と一筆者補）決められましたね。（達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>と一筆者補）  
決められたのち、1958年にはモリダワー旗が（達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の一筆者補）自治旗  
と決められました。

筆者：先生、当時座談会に参加したのはどんな人ですか。覚えていますか。

OM：参加したのは全部著名人です。ここ（当時のモリダワー旗一筆者注）には、孟希  
舜と言う人がいました。この人はダウール族<sup>46</sup>に信望がある人でした。

筆者：（孟希舜さんは一筆者補）知識人ですか？あるいは……

OM：【筆者の質問をさえぎって】知識人です。また、解放当時、モリダワー旗に臨時  
政府が成立した時に、何委員会でしょうか（忘れましたが一筆者補）、その人を  
旗長に選びました。彼は満洲語と漢語に通じています。この人のレベルは高いで  
す。大学の教育を受けたことはないですが、私塾に通って、自分で歴史について  
も研究しました。頭がいいです。書道も（中略）。当時はもう年を取っていて40  
代でした。自治旗成立後には副旗長になったことがあります。高齢に達した後に  
退職しました。70歳代まで生きてました。あの人の子供は（後略）

筆者：知識人以外に、誰が参加しましたか？民衆<sup>47</sup>はいましたか？

OM：民衆も参加しました。参加しましたが、私はだれが参加したかまでは覚えていな  
いです。

筆者：すると、旗のリーダー（ニルギ鎮の幹部一筆者補）、知識人、民衆……

OM：【筆者の質問をさえぎって】民衆、農民、【考慮に入る】

筆者：全部（幹部、知識人、民衆、農民一筆者注）参加しましたか。

OM：はい、全部参加しました。（ダフル人を一筆者補）代表する人が参加しました。  
人はそれほど多くなかったです。

筆者：どのくらいですか。

OM：会議室には20、30人ぐらいいました。

筆者：その時には（座談会以外に一筆者補）他の活動を行いましたか？

OM：なかったです。座談会ののち（調査団の人たちは一筆者補）帰りました。（調査  
団の人たちは一筆者注）たぶん昼ごはんを食べました。そのときには私たちはも  
う帰りました。（調査団の人が北京に一筆者補）帰った後に、単一民族<sup>mǐn zú</sup>と認めら  
れました。こうして私たちのモンゴル語の授業も終わりました<sup>48</sup>。

<sup>46</sup> OM氏は漢語で「達斡爾族」と答えたので、ここでは「ダウール族」と訳した。

<sup>47</sup> 筆者がここで用いている「民衆」とは、幹部、公務員、学者を除く人々のことを含意している。「民衆」の中には、退職した幹部と公務員は含まれるが、学者には「退職」がないため、「民衆」の中には含めない。

<sup>48</sup> 「こうして私たちのモンゴル語の授業も終わりました」とは、民族識別以前のダフル人たちは小学校でモンゴル語の授業を受けていたが、達斡爾民族として識別されて以降は、モンゴル語の授業が廃止されたことを言っている。

筆者：先生はその座談会について、さらに何か覚えていますか？

OM：私はその時のことはよく覚えていません。座談会に参加した他の人は発言していましたが、私たち（のようなダフル人のことをよく知らない人々―筆者補）には発言する機会がありませんでした。他の人は私たちより多くのことを知っていました。私たちは何も知りませんでしたから、何を言えるのでしょうか。他の人の発言を聞くだけでした。

筆者：農民たちも（ダフル人のことを一筆者補）よく知っていましたか？

OM：農民は（ダフル人の一筆者補）歴史についてはあまり知りませんでした。（農民たちは一筆者補）解放前（新中国成立前一筆者注）のことについて少し話しました。（座談会に参加した一筆者補）民衆は年を取った人たちでした。

筆者：あの人（座談会に参加した農民一筆者注）たちは教育を受けていましたか？

OM：いいえ。でも何も知らない人と比べて、国家の形勢を少しは知っている人でした。こんな感じです。

以上のOMさんの話から、当時の座談会の状況について一定の情報を得ることができる。この座談会には、調査団のメンバー以外に、地元のダフル人の幹部、知識人、農民も参加した。インタビュー中、OMさんが言った「著名人」とは主に地元の幹部、知識人であり、その他は国家の形勢を知っている農民であった。

座談会に参加したOMさんは、当時はダフル人のことをよく知らなかったのが発言はしなかった。彼女は座談会の具体的な内容についてははっきりと話していない部分があるが、ダフル人の知識人は自分が知っているダフル人の歴史について話し、農民たちは自分たちの生産や生活状況について紹介したようである。興味深いのは、この座談会に、前述した1950年の国慶節の式典に招かれ参加した孟希舜がこの座談会にも参加したことである。つまり、国慶節に招かれ、国家による民族工作の一斑にすでに触れていた孟希舜は、座談会という民族識別工作にもダフル人側を代表する人物として参加していたのである。彼は、国慶節の式典招待に始まるダフル人が達斡爾民族として識別された一連の過程に積極的に参加していたのである。

OMさんが話してくれたことの中には、この座談会は、調査団とダフル人を代表する人たちの共同討論の場であったという認識が明確に表れている。つまり、この座談会の成果は、中央政府とダフル人側の共同行為の結果であると筆者は考えている。

次に、同じく座談会に参加したNさんに対するインタビュー内容を示そう。

**(2) Nさん（達斡爾民族人 男 78歳 モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会員 2011年7月17日）**

筆者：先生は昔教育の仕事をしていたそうですが。

N：はい。教育の仕事です。でもそんなに長くはありませんでした。五年ぐらいです。後は行政の仕事をしていました。

筆者：先生、1956年の民族識別<sup>m i n z u</sup>の状況はどうでしたか。

N：国家は人々を組織して調査しました。教育に関して言えば、私たちは（民族識別以前は一筆者補）モンゴル民族<sup>m i n z u</sup><sup>49</sup>と言われて毎週二、三回のモンゴル語の授業を受けていました。（後略）

筆者：1956年以前はダフル・モンゴルと言われていたのに、1956年の後に達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>と言われるようになったのですか。

N：いいえ、（1956年以前は、自分の一筆者補）民族名を言う時にはモンゴル民族<sup>m i n z u</sup>と書いていましたが、私たちダウル<sup>50</sup>はダウルです。（後略）

筆者：先生は1956年の民族識別活動<sup>m i n z u</sup>に参加しましたか。

N：はい。あの時、調査した時に座談会が開催されました。その時に（座談会に一筆者補）参加しました。

筆者：何回座談会を行いましたか。

N：あの時は、1954、1955年、二、三年間の調査を行っていました。一回だけではありませんでした。何回も行いました。中央から、あるいは内モンゴルから（人が一筆者補）来ました。あの時<sup>51</sup>にはソ連の専門家、一人の女性も来ました。ここ（モリダワー一筆者補）に一ヶ月いました。

筆者：その座談会にはどのような人が参加しましたか。

N：ダウル人<sup>52</sup>を集めて、座談会を行い、自分の民族<sup>m i n z u</sup>を何民族<sup>m i n z u</sup>と考えているのか、モンゴル（民族一筆者補）なのか、ダウル<sup>53</sup>（民族一筆者補）なのか。この（モンゴルかという問題と、ダウルかという問題の一筆者補）二つの問題について話し合いました。私たちの東北地方は1945年に解放されました。中国の前は満洲国でした。日本人がここに来て満洲国を作りました。旧中国（中華民国一筆者注）では、四つの民族を民族と認めていました。他を民族とは言いませんでした。漢、モンゴル、満、回です。（現在の一筆者補）ウイグルのような大きい民族も（民族には一筆者補）数えられませんでした。更に小さい私たちダウルも（民族には一筆者補）数えられませんでした。ダウル、エヴェンキ、オロチョンはモンゴルの下にありました<sup>54</sup>。私たちは“本当のモンゴル”とは言われませんでした。モンゴル系、蒙系族と言っていました。

筆者：その座談会にはどのような人が参加しましたか。

---

49 N氏は漢語で「蒙古族」と答えた。これは筆者の定義では「モンゴル民族<sup>m i n z u</sup>」にあたる意味なので「モンゴル民族<sup>m i n z u</sup>」と訳した。

50 N氏は漢語で「達斡爾」と答えたので、ここでは「ダウル」と訳した。

51 N氏は「あの時」と述べ、それが19何年のことであったかまでは明確に話さなかった。

52 N氏は漢語で「達斡爾人」と答えたので、ここでは「ダウル人」と訳した。

53 N氏は漢語で「達斡爾人」と答えたが、この時点では「達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>」は識別されていなかったので「達斡爾」とは訳さずに「ダウル人」と訳した。

54 「モンゴルの下にありました」とは「モンゴル人に含まれていた」という意味。

N：【筆者の質問の意を踏まえずに】（調査団は一筆者補）農村でも調査を行いました。

（モリダワー一筆者補）旗の各機関の人を集めて、会議もしました。（各機関の一筆者補）幹部たちは調査団の人々を連れて農村によく行きました。座談会の参加者は幹部だけではなく、民衆も参加しました。

筆者：当時民衆は（自分の民族について一筆者補）どのように考えていましたか。

N：あの【しばらく考慮してから】（民衆は一筆者補）自分の民族が何民族であるとは言いませんでした。昔はどのような生活をして来たのかを話しました。モンゴル民族と同じなのか、違うところは何かについて話しました。「私は何民族です」と言う人がいましたが、それはそんなに重要なことではありませんでした。調査している人たちは、（モンゴル民族と一筆者補）同じところと違うところを聞き取りはしましたが、他のことにはあまり興味がなかったですね。

筆者：先生、1956年の民族識別の状況について他に何か知っていますか。

N：1956年以前の状況について言うと、私が従事していた教育方面では、（単一民族になると一筆者補）民衆の声が多くありました。教育の仕事での（民衆の一筆者補）主張は、モンゴル語を勉強することに向けられていました。モンゴル語を勉強するならば、どうしても一週間に何回もモンゴル語の授業がありますね。他の科目の授業に影響を与えます。例えば、漢民族の学生の授業の時間は一週で九回あるのに対して、ダウールの学生の授業の三回は（モンゴル語の授業に一筆者補）取られます。だから、わずか六回だけ授業の時間が残ります。この問題について（ダフル人の一筆者補）反対の意見が比較的強かったです。この状況によって、私たちは、正直に（モリダワー一筆者補）旗の（モンゴル語の授業に反対する一筆者補）意見を（フルンボイル一筆者補）盟まで、盟の意見は内モンゴル自治区まで、自治区の意見は中央まで伝えました。この状況で、中央は私たちの民族の出自について1954、1955、1956年、二、三年間の間に、上（級の政府一筆者補）、内モンゴル（自治区政府一筆者補）や中央（政府一筆者補）が、幾つかの調査団を派遣して、ここ（モリダワー一筆者補）で調査しました。このうち、1956年にダウール族<sup>55</sup>は単一民族であるということが確認されました。このような過程でした。民国時代でも、偽満洲（満洲国一筆者注）の時代でも、私たちはモンゴル民族と言っていました。

筆者：そのように、以前はモンゴル民族と言っていたのに、今は達斡爾民族と言っていることについて、どう考えていますか。

N：どうとも思わないです。私たちは（民族識別の当時は）一筆者補）モンゴル民族と統一した民族になるか、あるいは単一民族になるかという考え方はしていなかったです。ただ、自分の民族がどのような民族であるかということを確認したかったのです。モンゴル民族だったらモンゴル民族、モンゴル民族でなかったらモンゴ

<sup>55</sup> N氏は漢語で「達斡爾族」と発言した。ここでは「ダウール族」と訳した。

ル民族ではないです<sup>56</sup>。(達斡爾民族は一筆者補) モンゴル民族との違いが多く、(その違いは一筆者補) 大きいです。モンゴル民族の中でも幾つかの部分に分けられます。ハラチン、ホルチン、バルガがあります。

筆者：(民族識別一筆者補) 当時の(ダフル人一筆者補) 民衆はこのこと<sup>57</sup>についてどう考えていましたか。

N：農民には、(自分が一筆者補) 何民族かということは関係がないです。農民だったら、畑があって、食べ物があったら、これ(畑、食べ物一筆者注)を心配する人が多いです。(農民は一筆者補) 他のことには無関心です。(達斡爾民族の一筆者補) 祝日の行事を行っているのは知識人たちです。

筆者：農民たちは全然無関心ですか。

N：全然無関心というわけではなくて、気にする人が少ないのです。どんな民族であろうとも変わらずにただ生活するという考え方をする人が多いです。

以上の N さんの話からも、当時の民族識別の実際状況に関する有益な情報を得ることができる。

まず N さんは、中央の調査団が重視した調査内容をはっきりと語っている。それはつまり、モンゴル民族とダフル人はどのようなところに共通点と相違点があるかという問題である。これは座談会での討論の焦点にもなったとも言っている。このことは OM さんが語らなかったことである。N さんが記憶していることは、調査団は座談会を通じ、民族識別の二つの基準である「民族特徴」と「民族意願」のうち、共通の言語、共通の地域、共通の経済生活、共通の心理要素という四つの特徴からなる「民族特徴」に注意を払っていたことを示唆している。

上述したように、傳は、調査団が 1953 年の 8 月から 10 月までの二カ月間、調査を行ったと述べている(傳 1955: 2)。しかし N さんは、1953 年から 1955 年の間には何度も調査が行われた、と話している。管見の限り、このことが事実であるかについては、他の資料によって確証を得ることができていない。しかし N さんは 1953 年に 20 歳を越えた教員であったので、彼が記憶していることが信用に全く値しないとは思われない。したがって、本節冒頭に提示した、どうして三年もの長い時間がかかったかという筆者が設定した問いへの一つの答えとして、こうした複数回の調査が行われたことを挙げてよいと思われる。ユは、中央調査団の調査結果が出るまでに二年近くの長い時間がかかったことには、簡単には結論を出せない何らかの困難な状況があったことや、結論を出せていてもそれを公表する時期を慎重に見計らっていた可能性もあると述べている(ユ・ボルジギン 2009: 150)。N さんの言うところの複数回の調査が行われたらしい理由はいまだに不明であるものの、

---

<sup>56</sup> 「モンゴル民族だったらモンゴル民族、モンゴル民族でなかったらモンゴル民族ではないです。」とは、自分たちがモンゴル民族であると確認されたら自分たちはモンゴル民族であり、モンゴル民族ではないと確認されたらモンゴル民族ではない、という意味である。

<sup>57</sup> ダフル人がモンゴル民族の一部となるか単一の民族になるか、ということ。

ダフル人を単一民族として識別するために、三年間もの時間をかけた丁寧な調査活動が行われた可能性があることを、達斡爾民族の実体験者が語っているのである。

Nさんは、当時行われていたダフル人へのモンゴル語教育に対し、モンゴル語の授業が有る分だけ漢族に比べて授業時間数が少ないことを理由に、ダフル人が反対していたと語っている。中央政府は上述の民族識別調査団を派遣した以外にも、各地に言語の調査組を派遣した。フルンボイル地方には、1953年6月26日から9月21日まで中国科学院語言研究所、中央民族学院、内モンゴルモンゴル語文研究会所属の研究者からなる調査組を派遣してダフル語に関する調査を行った。この時の調査報告『關於達呼爾族的文字問題』でも、ダフル語はモンゴル語族の独立言語とされたのであった（少数民族語言調查第五工作隊達呼爾語調查組：3）。さらに、ダフル人は、モリダワー旗およびその他一部の山区の人を除き、各地区の青壮年はだいたい漢語とのバイリンガルか漢語を聞いてわかり、ソロン旗のダフル人はだいたいモンゴル語とのバイリンガルである、と報告している（『關於達呼爾族的文字問題』：3）。この報告が意味するのは、モリダワー旗や山奥のダフル人はダフル語のみに通じ、チチハル地方を含む各地区のダフル人青壮年は漢語に通じ、ソロン旗つまりハイラル地方のダフル人青壮年はモンゴル語に通じている、ということである。言い換えれば、当時のモリダワー旗とチチハル地方のダフル人の多くはモンゴル語ができなかったのである。モリダワー旗とチチハル地方のダフル人にとってモンゴル語は不要であり、その授業は無駄だったのである。よって彼らはモンゴル語の授業に反対したのである。さらに言えば、もしダフル人がモンゴル民族として識別されたならば、当時のモリダワー旗と黒龍江省のダフル人の生活は、民族言語でありしかも彼らにとっては不要なモンゴル語によって一定の影響を被ることになる。モリダワー旗と黒龍江省のダフル人が、自分たちをモンゴル語を必要としない状態に置こうと努力したことはわかりやすいことである。こうした危惧も1950年代のダフル人が抱えていた現実的な難題であった。

N氏は、彼らは、モンゴル民族になるか単一民族になるかという考え方はしておらず、単に自分の民族を確認したかっただけだ、と述べている。さらに、農民たちに至っては、自分たちが何民族であるかにはほとんど関心を持たなかった、とも述べている。このことから、自分は何民族であろうか、自分たちは何民族でありたいか、といった意識を持っていたのは、幹部や政治エリートといった限られた範囲の人たちであったと思われる。

### 3. 本節のまとめ

達斡爾民族の識別過程で展開された調査活動は、ダフル人とモンゴル民族とを区別し、ダフル人を単独の民族として識別するためになされたものであった。そして、民族識別の基準である「民族特徴」と「民族意願」を明確にするために調査時に開催された座談会を通じてダフル人側の実際の意見を得て、それが調査研究成果に取り入れられた。それがゆえに、達斡爾民族の識別に大きく作用したこの調査研究成果は、中央政府とダフル

人側両方の意見が反映されたもの、つまり識別する側とされる側の相互作用の産物であると言える。

実際に座談会に参加した人の回想から、識別される側の意見を徴する座談会には次のような特徴があったことが判明する。座談会には、識別される側から、地元のダフル人の幹部、知識人ばかりでなく、農民も参加した。そこで参加者は各々の立場から、ダフル人の歴史、自分たちの生産や生活状況を紹介した。座談会において、識別される側の意見が示されたことは明らかであり、この座談会は、調査団とダフル人を代表する人たちの共同討論の場であった。この共同討論の場で、識別する側である中央の調査団は、共通の言語、共通の地域、共通の経済生活、共通の心理要素という四つの特徴からなる「民族特徴」を明確にしようと、識別される側のダフル人から、モンゴル民族とダフル人の異同の在処を尋ねた。識別される側から参加した知識人の N さんは、モンゴル民族になるか単一民族になるかという考え方はしておらず、単に自分の民族を確認したかっただけであり、農民たちに至っては、自分たちが何民族であるかにはほとんど関心を持たなかった、という。この証言から考えると、識別される側から抽出されて座談会に参加したダフル人たちの“単一民族への「民族意願」”は希薄であり、この状況は広範なダフル人大衆にも当てはまることであろう。この“単一民族への「民族意願」”を強く持っていたのは、幹部や政治エリートといった限られた範囲の人たちであったと考えられる。

## 小結

「数千年にもわたる混住、複雑な接触によってさまざまなエスニック・グループが入り組んでいる中国のようなところで、また固有の文字や言葉をもたない集団をどうやって弁別するのだろう。結論的に言えば、科学的、客観的基準が必ずしもあるわけではなく、状況的で、ある時は政治的なのである」（毛里 1998 : 62）と毛里が述べたところを裏返して言えば、中国の民族識別工作を評価する際、ただ政治作業、中央政府側の角度から研究するだけでは足りない、ということになる。識別される側に関する研究も必要である。

新中国成立後、新しい民族政策を実施するため、中国国内では民族識別工作が行われた。しかし、この作業が行われる以前、すでに中央政府は、一連の民族政策を宣伝するため、民族地域への中央民族訪問団の派遣、北京での国慶節祝賀行事への民族代表団招待といった具体策に着手していた。また中央政府は、民族地方で少数民族幹部を養成するための民族高校を設立し、少数民族の貿易、教育、衛生に関して調査を行うなどの活動も展開させた。そして、各少数民族の地方に民族識別調査団を派遣し、民族識別を行ったという経過があった。筆者は、民族識別工作とは、この識別調査団派遣以前の一連の活動も含むべきものであると考える。

達斡爾民族とはこのような民族識別工作を通じて識別された一つの民族である。達斡爾民族が識別される前はダフル人であった。達斡爾民族の具体的な識別過程を追うと、こ

れは単に中央政府側の作業ではなく、「民族意願」を強く持つようになったダフル人側のエリートたちの積極的関与があって成就したこと、つまり識別する側とされる側の共同行為であったことが判明する。

興味深いことに、識別調査団がダフル人一般大衆が現に住む場から得たのは、モンゴル民族とダフル人の違いを明確にしてダフル人を達斡爾民族と識別するに足る「民族特徴」であり、広範なダフル人一般大衆の中にある“単一民族への「民族意願」”は確認しなかった。広範なダフル人一般大衆の中にあつたのは、せいぜい、自分の民族を確認したいという意欲にしか過ぎなかった。この“単一民族への「民族意願」”を強く持っていたのは、幹部や政治エリートに限られていたのであつた。このことは、民族識別当時のダフル人における達斡爾民族への意識の高揚は、決して大衆的な基盤を有していなかったことを意味する。この事実と、結果的には達斡爾民族と識別されたもう一つの事実とは、達斡爾民族誕生におけるダフル人幹部や政治エリートによる活動が極めて重要であつたことを指し示していると言えるのである。



## 第2章 達斡爾<sup>minzu</sup>民族の創造と民族<sup>minzu</sup>文化の創出

### はじめに

1956年、中国政府によってダフル人は正式に中国の一つの民族<sup>minzu</sup>になった。このことはダフル人に大きな変化をもたらした。識別される前、「モンゴル人のサブ・グループ」(ユ・ボルジギン: 115)の位置にあったとされる人々は、1956年にモンゴル民族<sup>minzu</sup>と同じ「民族<sup>minzu</sup>」のレベルになった。この時から、どのようにして民族<sup>minzu</sup>として存在して行くかということが彼らにとってきわめて重要な関心事になったはずであると筆者は考える。

本章では、民族<sup>minzu</sup>として識別された後の達斡爾民族<sup>minzu</sup>の「存在状況」を以下の三つの側面から把握する。本章の第1節では、達斡爾民族<sup>minzu</sup>が政治的に創造されて存在している状況を論じる。第2節では、達斡爾民族<sup>minzu</sup>は自らの民族<sup>minzu</sup>文化を創出しつつ存在している状況を論じる。第3節では創造された民族<sup>minzu</sup>文化の伝統化について論じる。

### 第1節 達斡爾<sup>minzu</sup>民族の政治的創造

現代中国における「民族」という概念は、既に序論の部分で触れたように、近代の概念であり、多義語でもある。現在の中国で用いられている「民族<sup>minzu</sup>」についていえば、1950年代の民族<sup>minzu</sup>識別工作後、中国の国家によって正式に識別された56の民族<sup>minzu</sup>、55の少数民族<sup>minzu</sup>の呼称において、より広く使われるようになった。

毛里和子は著作の中で「民族は作られる」という章を特別に立て、そこで民族<sup>minzu</sup>識別の問題を扱っている(毛里 1998: 55)。そして、明確に民族<sup>minzu</sup>識別が「民族『創造』のメカニズム」であると見なしており(毛里 1998: 61)、筆者もこの「創造」という観点を受け入れるものである。また、民族<sup>minzu</sup>理論についても「中国の民族論は理論的に吟味されたものではなく、むしろ中国に実際に住んでいる諸エスニック・グループのありようから出発して、あるいは識別や民族政策を進める際の行政上ないし政治上の必要から生まれたもので、プラグマティックな性格を持っている」(毛里 1998: 70)、と論じている。多民族国家であるベトナムの民族に関する研究を行った伊藤正子は、ベトナムは国民を明確に民族ごとに分類してふさわしい名称を決定し、それぞれに適切な政策を施すことで、諸民族の平等が達成でき国民統合につながると考えているのである(伊藤 2008: 14)と論じている。以上の二つの研究は、国民統合の角度から多民族国家の民族の創造あるいは形成について論じた研究である。これらの研究は、国家による政治や政策の角度から論じた研究である。しかし、アメリカにおける民族に関する研究を行った五十嵐武士が「民族」の創出としているのは、アメリカ社会にみられる民族集団の特徴＝「民族性」は、出身民族や国から継承したものばかりでなく、アメリカへ移住後、主流社会や他の民族集団との相互作用を通して、変形させられたり、新たに創出されたものも少なからずあり、「多民族体制」には、民族性

の有為転化をもたらす、ダイナミックな性格も備わっているとみることができる（五十嵐 2000：7-8）と述べて、民族を変動的に、具体的に存在する環境において研究を行っている。

中国において民族識別を通じて創造された民族を研究するにあたり、毛里のような観点からする研究は当然取られるべき研究のあり方ではある。一方、五十嵐の研究のように、政治や政策からのみ問題を捉えずに、民族集団とその他の要素との相互作用に着目し、民族を変動的かつ具体的に存在する環境において研究することも重要であると思われる。これを中国に置き換えて言うならば、中国の民族創造の問題は、国家による政治的作業あるいは政策という側面からだけでは論じきれないということである。なぜならば、国家による政治的作業あるいは政策を実際に受け止めた側の創造された民族が現に存在するからであり、この、創造された民族と政治・政策あるいは政府との相互作用にも注意を払うべきだと筆者は考える。

中国の達斡爾民族はどのようにして民族となっているのか。識別され創造された達斡爾民族の人々が自分たちを民族であると「想像」するその基礎は何であるか。また、これら民族を構成している人々は民族として存在するための要因が何であると理解しているかなど問題は、識別され創造された側からの民族識別と民族創造の研究において扱われなければならない問題であると筆者は考えている。以下の部分では、このような問題意識に基づいて、達斡爾民族が創造され、現に存在するようになっている状況に関する研究を行う。

## 1. 1950～60年代における達斡爾民族の政治的創造

ここでいう「政治的創造」というのは、中国に国家による政治活動である民族識別工作によって行われた民族の創造作業を指している。

1956年4月1日、中央政府は「達斡爾族」を単一民族として正式に批准した（鉄林嘎 1998：41）。これ以降、ダフル人たちは達斡爾民族という身分で中国の56の民族の一員として生きてきた。

第1章で述べたように、民族識別の目的は、国家の民族政策を実施するためである。民族政策を実施される対象になった民族は中国の民族政策と規定を遵守する必要がある。では、国家によって識別された民族に対し、中央政府はどのような作業を行い、民族側はこれをどう受け取り何をしたのだろうか。そして民族を創造する作業は実際にどのように展開されたか。

### 1) 「達斡爾 (dawur)」という民族名称の認定

余の研究によれば、民族を識別して認定した際、民族名称を決める場合には、ある民族の人々、特に代表的な人物との協議を通じて、多くの自称あるいは他称の中から一つの名称を採用した（余志清 2002：135）。識別された民族名称の認定の由来は様々であった。自称に基づく例以外のいくつかの事例を示すと、たとえば、当該の民族が居住していた場所の名前に由来した場合があった。保安民族は「保安城」、「保安站」に由来した（曲木鉄西 2007：

30)。また、他称によって命名した場合もあった。珞巴（「ロッパ」）という民族<sup>m i n z u</sup>の名称はチベット語である。チベット語では、「ロツ」は「南」という意味で、「バ」とは「人」という意味であり、珞巴（「ロッパ」）は南の地方で居住している人々という意味である（黄・施 2005 : 109）。以上のように居住地や他称によって命名された民族<sup>m i n z u</sup>がある。

達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>の場合、1950年代の民族識別調査団の研究によれば、ダフル（達呼爾）とはダフル人の自称である。現在は「達斡爾」と漢字で表記し、達斡爾語では「dawur」（満都爾図 2007 : 1）と発音される。この名称は、史書で確認できる範囲では、『清実録』康熙五年（1666年）<sup>58</sup>に「打虎兒」と見えているのが初出であるとされる（中央民族学院研究部 1955 : 3）。現在の「達斡爾」に該当する漢字表記は文献によって様々な書かれ方が認められており、達胡爾、達瑚里、達呼里、達古兒（中央民族学院研究部 1955 : 2）、達斡爾、達呼爾、達古爾、達古日、達瑚爾、打虎兒、打虎力（暁敏 2008 : 3）、達呼兒、達虎里、打虎爾、達烏爾、達烏里（満都爾図 2007 : 13）などがあった。戦前戦中の日本の研究者によるカナ書きでは、ダフル、ダグール、ダゴール、ダウル、ダウール、ダホール、ダホリーなどと表記されている（暁敏 2008 : 3）。満州語では dakur、dagur、dahur の三種類がある（中央民族学院研究部編 1955 : 2）。モンゴル語では dagur である。ロシア語ではダウリヤ（Д а у р и я—筆者補）、ダウール（Д а у р —筆者補）（池尻登 1949 : 4）と呼ばれる。英語では Daur と表記している（暁敏 2008 : 3）。民族識別以前の漢字で書かれた書籍と公文書では「達呼爾」と書き方が最も通用していた（中央民族学院研究部 1955 : 2）。しかし地方によっても書き方に違いがあった。チチハル地方では「達古爾」という表記があった（何・敖 2007 : 107）。ハイラル地方を調査した内蒙古呼納盟民族調査組の調査報告には「達呼爾」と表記された例がある（燕京、清華、北大 1950年暑期内蒙古呼納盟民族調査団 1997 : 6）。また、以上の名称以外に、モンゴル人を構成する下位集団として「ダフル・モンゴル」、「蒙系人」という呼称もあった<sup>59</sup>。ダフルの意味については、モンゴル語で「付き従う」を意味する語であるという見解がある（方徳修 1948 : 80-81）。また、「帰順」という意味の満州語「dahūr」であるとの見方もある（黒龍江省民族研究会、黒龍江省民族研究所 1997 : 326）。

以上のような多くの表記があるが、民族識別<sup>m i n z u</sup>当時には、ダフル人の自称は「daur」である。この民族の人によれば、「達斡爾」という漢字音訳はダフル語の発音と比較的近く感じられたので、ある地方のダフル人（モリダワー旗とバトハン旗<sup>60</sup>）が民族名称を「達斡爾」と翻訳することを民族識別調査団の人に意見を提出した（中央民族学院研究部 1955 : 2）。その後、1956年4月になって、国務院がダフル人を単一民族<sup>m i n z u</sup>と識別した後に、漢字表記を「達斡爾」に統一し、達呼爾（ダフル—筆者補）という表記は用いられなくなっ

<sup>58</sup> 康熙六（1667）年説もある。傅・楊暘 1983 : 166。

<sup>59</sup> 筆者が 2008 年にチチハル市フランエルギ区でインタビューした W 氏（達斡爾民族<sup>m i n z u</sup> 男 71 歳 定年退職）の回答による。

<sup>60</sup> バトハンは漢字では「布特哈」と書かれる。

た（満都爾図 2007 : 13）。以上のような経緯を経て、中国の国家によって認定された 56 の民族の中の達斡爾民族は、「達斡爾」という正式の民族名称を獲得し、これが正式な表記となっている。

国家によって達斡爾民族と識別されたことは、ダフル人にとって重要な意義をもった。なぜならば、これ以降、彼らに認められた民族名称の下で民族創造の作業を始めることになったからである。

## 2) 達斡爾民族の民族自治地域の成立

民族識別を受けた後のもう一つの重要な行政作業は、当該の少数民族が集中して居住している場所に民族自治地域を成立させることである。これは中央政府が民族を管理するために必要な措置である。民族自治地域は自治区、自治州、自治県・旗と三つのレベルに分けられ、自治の権利を有する（布赫 1989 : 26）。1956 年、達斡爾民族が識別された後、1956 年 9 月にジャラント<sup>61</sup>市達斡爾民族郷、1956 年 12 月にアロン<sup>62</sup>旗音河達斡爾鄂温克民族郷が作られた（満都爾図 2007 : 64-65）。しかし、民族郷は上で言及した自治地方のレベルには含まれず、これら地方には自治権はない。1958 年 8 月 15 日に、それまでのモリダワー旗（1930 年代に成立し、1949 年にはバヤン<sup>63</sup>旗と合併した<sup>64</sup>）に「モリダワー達斡爾族自治旗」が成立した。これは達斡爾民族が自治権を行使する唯一の地方である。

民族地域自治政策とは、中国共産党の国内問題を解決する基本政策である。また、中華人民共和国の重要な政治制度でもある。基本的意味は、国家の統一的指導で、各少数民族が集中している場所で地域自治を行うこと、自治機関を成立させること、自治の権利を行使することである（布赫 1989 : 25）。毛里和子の研究によれば、「区域自治（地域自治—筆者注）とは、分離権と連邦制を否定して、少数民族が集中している地域を区画してそこに一定の自治権を与えるものである。自治権には、民族の文字・言語を使用する権利、一定の財政管理権、国家軍事制度に抵触しない範囲で公安部隊を組織する権利、地域の単行条例の制定権などが含まれ、この自治権の実質は、特殊な地方に与えられた若干の地方自治と『民族の文化的自治』（オットー・バウアー）が混合したものと言える」（毛里 2001 : 20）。

現在のモリダワー達斡爾族自治旗は、中国で唯一の達斡爾民族による県レベルの自治地域である。内モンゴルのフルンボイル市の東南部に位置している。面積は 10386.68 平方キロメートルである。旗内にはニルギ、ハングル河、シワルト、宝山、赤彦、タウンオボ<sup>65</sup>、登特科、騰克、アルラ、哈達陽、奎勒河など 11 の鎮と庫如奇、額爾和、坤密爾提、臥羅河、杜拉爾鄂温克郷、巴彦鄂温克郷など 6 つの郷（満都爾図 2007 : 57）がある。1996 年の統計では、旗内には、達斡爾民族 29,014 人以外に 19 民族が居住しており、漢民族 261,190 人、

61 ジャラントンは漢字では「扎蘭屯」と表記する。

62 アロンは漢字では「阿榮」と表記する。

63 バヤンは漢字では「巴彥」と表記する。

64 満都爾図 2007 : 57。

65 タウンオボは漢字では「塔温敖宝」と表記する。

鄂温克民族<sup>m i n z u</sup>5,008人、モンゴル民族<sup>m i n z u</sup>7,725人、満民族<sup>m i n z u</sup>18,216人、朝鮮民族<sup>m i n z u</sup>1,213人、回民族<sup>m i n z u</sup>245人、鄂倫春民族<sup>m i n z u</sup>317人、錫伯民族<sup>m i n z u</sup>110人、白民族<sup>m i n z u</sup>18人、納西民族<sup>m i n z u</sup>1人、苗民族<sup>m i n z u</sup>24人、土家民族<sup>m i n z u</sup>6人、佯僳民族<sup>m i n z u</sup>5人、柯爾克孜民族<sup>m i n z u</sup>15人、高山民族<sup>m i n z u</sup>3人、黎民族<sup>m i n z u</sup>11人、壯民族<sup>m i n z u</sup>16人、景頗民族<sup>m i n z u</sup>2人が居住している（卓仁・孟 2008：153）。2000年の人口は314,584人である。モリダワー達斡爾族自治旗とはいえ、漢民族が人口の大半を占めており、達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>は全人口の9.5%を占めるにすぎない（満都爾図 2007：57）。

1956年4月22日に中国共産党内モンゴル自治区委員会（以下、内モンゴル党委と略す）が中央政府の同意を経て「達斡爾族の単一民族としての確立、及び重要な居住地での自治機関の成立に関する指示」（鉄林嘎 1998：41）を発表して達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>の自治旗が決定された。

民族地域自治政策によれば、民族自治の場所を選ぶ場合には、少数民族が集中して居住している場所が基礎になる（人民出版社 1953：83）。これに基づいて、達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>人の居住地である内モンゴルと黒龍江省、新疆ウイグル自治区の三つのうち、達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>の人口がもっとも多い内モンゴル自治区フルンボイル市のモリダワー旗に1958年8月15日に唯一の達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>の自治旗が成立した。

しかし、単一民族<sup>m i n z u</sup>としての識別と自治旗成立の決定は1956年の4月であるが、上述した扎蘭屯市達斡爾民族郷とアロン旗音河達斡爾鄂温克民族郷の二つの民族郷<sup>m i n z u</sup>の成立が1956年の9月と12月、そして、今の達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>の最高の自治地域であるモリダワー達斡爾族自治旗が成立したのは1958年の8月であった。この間、約2年間の時間を要している。なぜこれほどの時間がかかったのかと言うと、当時、達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>の側には自治旗ではなく自治州を成立させたいという希望があった。

この一連のプロセスを具体的に見てみよう。『莫力達瓦達斡爾族自治旗志』の記録によると、1956年6月30日に中国共産党モリダワー旗委員会（以下、モリダワー旗委と略す）は、中国共産党フルンボイル盟委員会（以下、フルンボイル盟委と略す）に対して、自治地域を成立させる案を提出した。提案では、自治地域をニルギ鎮に設立すること、来年2月に開かれるモリダワー旗の第二回人民代表大会で、正式に自治旗を成立させる準備を行うことが示されていた。しかし、1956年8月20日のモリダワー旗三級幹部会議<sup>66</sup>において、一部の党員が自治州を成立させるべきとの意見を提出した。1956年8月30日に、内モンゴル党委は以上のフルンボイル盟委の提案に対してモリダワー旗に自治旗を成立させる方を添えて回答した。1956年9月10日、布西区をニルギと改称して、同じ日に、モリダワー旗委はフルンボイル盟委と内モンゴル党委から指示を仰いで、「モリダワー旗」を「バトハン達斡爾族自治旗」に変更した。1956年10月6日に、フルンボイル盟委は内モンゴル党委の指示を伝え、モリダワー旗の人民代表大会では自治旗の成立を公布しないことを決定した。1956年10月29日から11月12日の間に開催されたモリダワー旗の第二次人民代表大会では、フルンボイル盟委に対して「達斡爾、ソロン民族の連合自治州の成立に関

<sup>66</sup> 県、郷・鎮、村の三つのレベルの行政単位の幹部による会議。

する提案」を提出することを通過させた。1957年8月1日、モリダワー旗人民委員会は、フルンボイル盟人民委員会に対して、モリダワー旗第二回人民委員会第四次会議で通過した「達斡爾族自治旗の成立の方案」の報告を送った。1957年12月にフルンボイル盟で起こった「整風運動」の過程で、達斡爾族自治区域問題について一部の達斡爾民族幹部の民族主義的傾向が批判された。1958年5月10日から13日の間、モリダワー旗第三次人民代表大会が開催され、「中国共産党内モンゴル自治区委員会が達斡爾族自治旗を設立することを支持する決議」を通過させた。1958年5月29日に国務院は第七十七次全体大会を開催し、モリダワー旗の行政区画を取り消して、ここに、達斡爾族自治旗を設立することを発表した。1958年6月22日にモリダワー旗委はモリダワー旗の行政区画を取り消す方案を作成して、フルンボイル盟委、内モンゴル党委に報告し、あわせて、自治旗設立の計画委員会を設立した。1958年7月16日に内モンゴル人民委員会は、1958年8月15日に正式に自治旗を設立させることに同意することを通知して発表した。1958年8月15日にモリダワー達斡爾族自治旗の成立を祝賀する大会がニルギの広場で開催され、内モンゴル党委、内モンゴル自治区人民委員会など二十の代表団が参加した（鉄林嘎 1998 : 41-45）。

以上のように、モリダワー達斡爾族自治旗成立問題は、解決に長い時間を要した。問題の焦点は、達斡爾民族の「自治旗」を成立させるか、「自治州」を成立させるかという点であった<sup>67</sup>。以上のプロセスから見ればモリダワー旗の人民代表大会では、自治州あるいは達斡爾とソロン民族の連合自治州の成立に関する提案を出して自治州設立に向けた努力をしたが、結果は、自治旗レベルの民族自治地域を成立させることとなった。この未完に終わった自治州設立のための行動は、達斡爾民族が識別された後の達斡爾民族の政治エリートたちによる民族創造のための初めての努力であると考えられる。

自治州ではないにせよ、達斡爾族自治旗が成立したことは民族にとって非常に意義がある。なぜならば、これ以降の達斡爾民族は一定の自治権を行使できる自治地域を獲得したからである。また、後述するように、この自治地域が民族のイベントの展開及び民族文化機関の成立の重要な土台にもなったからである。

### 3) 達斡爾民族幹部の養成

「民族幹部の養成と使用は共産党の民族政策を実現させる上で肝心な事柄であり」（蘇勇 1997 : 439）、言うまでもなく達斡爾民族にとっても重要な意味を持っている。民族幹部を養成することは1949年から始まったが、1951年に毛沢東は「民族地域自治と民族幹部の養成は二つの重要な作業である」と指摘し、その重要性を強調した。1957年、民族工作を主たる任務としていた李維漢は「大量に民族幹部を養成することは、民族工作の本拠である。…（中略）…我が国の社会主義事業の発展に伴って、民族幹部を養成することをさらに重視することが要求されている。政治、経済、文化工作を担当できる幹部を養成する」

<sup>67</sup> この件についてはユ・ヒョジョンがかなり詳細に論じている。ユ・ボルジギン 2009 : 192-259。

(羅・徐 2005 : 197-198) と主張した。国家の民族政策を自治旗に深く浸透させ実施するためには、達斡爾民族の各等級の行政体において民族幹部を養成することは、達斡爾民族にとって非常な重要な作業であった。

自治旗が成立する前のモリダワー旗では、1946年の解放の時からダフル人幹部の養成が始まっていた(鉄林嘎 1998 : 694)。1958年にモリダワー達斡爾族自治旗が成立した後は、少数民族幹部の養成が本格的に展開し始めた(鉄林嘎 1998 : 695)。その様子を、『莫力達瓦達斡爾族自治旗志』(鉄林嘎 1998 : 695-696)に記された数で見てみよう。

《表 1》モリダワー達斡爾族自治旗全幹部に占める達斡爾民族<sup>68</sup>幹部の割合と全旗人口に占める達斡爾民族の人口比の比較

幹部				人口	
年	総数 (人)	達 斡 爾 (人)	割 合 (%)	年	全旗人口中の達 斡 爾 民 族 (%)
1949	454	207	45.59	1947	30.2
1950	554	199	35.92	1952	30.4
1958	956	215	22.48	1958	22.4
1965	896	261	29.12	1964	19.6
1979	2869	904	31.50	1982	8.9
1985	3077	684	22.22	1990	9.8
1992	3216	994	30.90	1996	9.6

(鉄林嘎 1998 : 655-696 により筆者作成)

《表 1》からわかることをまとめよう。幹部について見ると、建国の 1949 年から 1965 年を除いて 1992 年に至るまで幹部総数は増加しており、達斡爾民族幹部も 1950 年と 1985 年に減少したが、ほぼ横ばい状況にある。一方の全旗人口中に占める達斡爾民族の人口は 1947 年以来一貫して減少している。つまり、少数化する一方の達斡爾民族から多くの幹部が出る傾向が強くなっているということを表している。1958 年から本格化した少数民族幹部の養成の成果が達斡爾民族から出る幹部にも当てはまるのが、その割合からも首肯しうる。モリダワー達斡爾族自治旗が達斡爾民族唯一の自治権がある自治地域であることから考えても、比率上、達斡爾民族幹部の割合が高いことは当然のことと言える。モリダワー達斡爾族自治旗では、旗長は達斡爾民族の幹部が担当する他、各自治旗に属する部門にも達斡爾民族幹部が配置された(莫力達瓦達斡爾族自治旗概況編纂組 1985 : 47)。

こうして養成された達斡爾民族幹部は、民族側で国家の民族政策の実施を担う役割を果たし、達斡爾民族文化の創出を推進してきている。このことについては、次の第二節で詳

<sup>68</sup> 1950 年には達斡爾民族は識別されていなかった。

述するが、このような達斡爾民族幹部の養成も、達斡爾民族の政治的創造に深く関わっている。

自治旗幹部の基本的状況は下の表の通りである。

《表 2》モリダワー達斡爾族自治旗幹部の基本状況表：総数・性別・民族<sup>69</sup>

年	総数 (人)	性別 (人)		民族 (人)		
		男	女	計	達斡爾	他少数民族
1950	554	487	67	232	199	33
1958	956	812	144	326	215	111
1965	896			306	261	45
1973	2431	1795	636	765		
1979	2869	2054	815	1117	904	213
1985	3077	2124	953	1348	684	664
1986	3160	2204	956	1354		
1992	3216	2121	1095	1354	994	360

(鉄林嘎 1998 : 696 により筆者作成)

《表 3》モリダワー達斡爾族自治旗幹部の基本状況表：文化程度・政治状況

年	文化程度 (人)					政治状況 (人)		
	大 学 と 単 科 大 学	中等專 門学校	高校	中学	小学校以 下	党员	团员	非党员幹 部
1950	5		12	281	256	97	153	304
1958						332	248	376
1965						315		
1973	238		653	1048	492	668	627	1136
1979	145		1044	1403	277	1197	320	1352
1985	263	1067	549	1118	80	1140	357	1580
1986	303	1047	605	1135	70	1203	372	1585
1992	533	1118	688	877				

(鉄林嘎 1998 : 696 により筆者作成)

<sup>69</sup> 1950 年には達斡爾民族は識別されていなかった。



《表 4》 モリダワー達斡爾族自治旗幹部の基本状況表：年齢

年	年齢（歳、人）								
	-25	26-30	31-35	36-40	41-45	46-50	51-55	56-60	60-
1950	263	279	12						
1958	334								
1965	68	207	230	181	97	48	42	18	5
1973	195	776	863	446	97	54			
1979	307	894	921		581	128	38		
1985		810	1162	833		222	50		
1986	266	455	639		404	243	61	8	
1992	1053	395		542	377	144			

（鉄林嘎 1998：696 により筆者作成）

## 2. 1970、80年代から現在までの達斡爾民族の政治的創造

上述のように進められてきた達斡爾民族の政治的創造は、1966年から始まった「文化大革命」の原因で一時停止したが、1970～80年代から達斡爾民族の政治的創造が復活し現在まで続いている。この時期には国家の民族政策の面ではどのような変化があったか。達斡爾民族の政治的創造にはどのような変化があったか。以下、1970年代の末から現在までの中央の政策による達斡爾民族の政治的創造を検討する。

### 1) 民族工作の復活

「文化大革命」が原因して、1966年から1978年までは民族工作が全面的に停滞した。1978年末の中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議の開催後、民族工作の「撥乱反正（混乱をしずめて、正常な状況にもどすこと）」が行われ、民族工作の重点が変化し始めた。そして、1982年の中国共産党第十二回全国代表大会以降、民族工作は全面的に復活し発展した（李資源 2000：395）。

#### （1）民族工作の「撥乱反正」

1978年の中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議以後に行われた「撥乱反正」の具体的な内容は以下の五つ（李資源 2000：401-411）であった。

- 民族工作で無理に押し付けた「罪」を覆す。

1964年、中国共産党中央統一戦線部は、当時の民族・宗教工作を担った李維漢を「反党・反中央・反毛主席の修正主義路線で、無産階級独裁と社会主義革命に反対し、資産階級と封建農奴に投降した」として批判し中央政府に提出した。1979年、中国共産党中央統一戦線部は中央政府に対して、全国の統一戦線、民族、宗教工作部門と李維漢の「投降主義路

線を行って」という罪を破棄した。この会議では以上のような文化大革命で批判された人々の「罪」を覆した。

- 国境を守る会議を開催する。

1979年4月25日、北京で全国辺境保護工作会議が開催された。会議では、辺境の保護を強化することと中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議の提出した辺境の少数民族の経済を発展させる精神を徹底的に貫くことを宣伝した。

- 民族工作の誤りを正す。

文化大革命中、内モンゴル自治区の“新内人党案”<sup>70</sup>と“砂甸事件”<sup>71</sup>のような、少数民族の幹部を批判した誤りを正した。

- 民族工作の指導思想の混乱をしずめて、正常な状況にもどす。

例えば、当時は少数民族の特徴を尊敬しない、「民族融合」の左傾思想があったが、このような間違った思想を正した。

- 宗教工作の指導思想の混乱をしずめて、正常な状況にもどす。

文化大革命時、「四人幫」<sup>72</sup>が宗教信仰自由の政策に違反したので、これを正した。

以上から明らかなどおり、この時期は、主に文化大革命で発生した民族に関する誤り、すなわち、民族工作に従事した幹部に「罪」を着せたこと、各民族地方の民族幹部に対する批判、民族工作の誤った指導思想、宗教の自由に対する誤った観念、これらを正しながら、民族工作の復旧に取り組み、少数民族地区の経済文化建設を重点的に行っていくことになった時期であった。

## (2) 新時期の民族工作の任務と重点の変化

上述した、民族工作の復旧の具体的な現れは、以下に示すような、中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議後の新時期における民族工作の展開の中に現れている。

新時期の民族工作の任務とは、毛沢東思想の旗を掲げ、新時期の重要な方針と重要な任務を実施し、四つの基本原則を守り、共産党の民族政策を実施して、民族の団結を強め、国家の統一を強固にして、境界少数民族の地方の安定を守って、各少数民族の積極性を動員して、我が国を現代化した強国となるように努力することである。国家の現代化を実現する過程において、少数民族の経済発展と文化建設を助けて、共産党の意識が高い少数民族

---

<sup>70</sup> 文化大革命の時、滕海清は中国中央政府の示唆で、内モンゴル地方で、1967年後半期から1969年5月の間に、反革命分子を肅清する活動を行って。政府が自白を強要して、十万人が内蒙古人民革命党（略“内人党”）と認定された。この後、政府はまた、反逆者、特務を探る活動を展開した。この活動に内蒙古地方はまた巻き込まれた。この事件を“新内人党案”という。

<sup>71</sup> 砂甸は雲南省である一つの回民族の居住地である。文化大革命時、この地方ではイスラム教は封建的迷信と見なされ、回民族の礼拝を禁止し、イスラム教のアホンを批判し闘争する事件を行って。この事件を“砂甸事件”という。

<sup>72</sup> 文化大革命時、王洪文、張春橋、江青、姚文元が組織した派閥。

幹部と技術人物を養成して、歴史に残った不平等を取り除いて、各少数民族を漢民族の発展水準にまで追い付かせる（李資源 2000：411）。

以上から見れば、この時期の民族工作の重点は民族の経済と文化の建設である。これ以外に、民族幹部と各種専門技術を持つ養成も民族工作の重点になった（李資源 2000：411）。

李資源によれば、少数民族幹部の養成は理論と実践のどちらにも大きな発展があった。具体的には、

- ① 少数民族幹部の状況を民族の発展のレベルを判断する重要な指標とした。
- ② 少数民族幹部の人数と素質の養成の両方面を向上させた。
- ③ 中心となる少数民族幹部の養成だけではなく、世紀を越えることのできる中・青年の幹部も養成する。一般の幹部を養成するだけではなく、中・高級幹部も養成した。
- ④ 少数民族幹部の養成工作の正規化と制度化を実現した。少数民族幹部養成のルートをさらに広げ多様化させ、その効果をいっそう顕著に表した。

と論じている（李資源 2000：427-428）。このことから見れば、当時、中央政府は民族幹部養成を民族工作の重要な任務と見て、中・青年から各レベルの民族幹部を大量に養成した、ということになる。

### （3）「中華人民共和国民族区域自治法」の制定と民族地域自治制度の回復

1984年5月31日、第六期全国人民代表大会第二次会議で「中華人民共和国民族区域自治法」が制定、公布された。

この法律は序論を加えた八章で構成され、全74条からなる。序論の部分で注目すべき条として、

第2条 自治地方を自治区、自治州、自治県で分けること

第3条 自治地域で成立した自治機関は国家の一級地方政治の権利を有する機関であること

第6条 自治地方では社会主義現代化を行うこと

第10条 民族言語と文字使用の自由、民族文化を発展させること

第11条 宗教信仰の自由などについて

第15条 自治地方の自治機関は自治区、自治州、自治県の人民代表大会であること

第17条 自治区の主席、自治州の州長、自治県の県長は民族の公民が担当すること

第19条 各民族地方の人民代表大会は「自治条例」を制定すること

第22条 民族幹部を大量に養成すること

第36条 民族学校を設立すること

第38条 民族文化を発展させること

第41条 民族伝統の体育を発展させること

以上の各条を挙げることができる。法律の規定では、民族自治地方の自治機関は自主的に当該地域の教育・科学・文化・衛生・体育を管理し、民族文化遺産を保護・整理して、民族

伝統文化を発展させ繁栄させることとされている。この法律では、<sup>m i n z u</sup>民族自治地方の<sup>m i n z u</sup>民族文化が重要な位置に置かれていることを示している（李資源 2000 : 441-442）。

また、「中華人民共和国民族区域自治法」公布後、<sup>m i n z u</sup>民族地域自治制度も以下の三つの点で全面的に発展したとされている。

- ① <sup>m i n z u</sup>民族地旗自治制度は法律上の根拠を持った。
- ② 1982年「憲法」と「中華人民共和国民族区域自治法」に自治権に関する実際の内容が記載された。
- ③ 1984年の「中華人民共和国民族区域自治法」の公布から1990年までに51の<sup>m i n z u</sup>民族自治地方が成立した。

従来の<sup>m i n z u</sup>民族工作上の誤りを正した新時代の<sup>m i n z u</sup>民族工作は、総体的には以上のような内容であったと李資源は評価している。では、実際の<sup>m i n z u</sup>民族のレベルにおいては、以上のように総体的に述べられる新時代の<sup>m i n z u</sup>民族工作はどのように展開していたのだろうか。以下にその様子を考察する。

## 2) 達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族の政治的創造の発展について

以上の<sup>m i n z u</sup>民族工作復旧を背景として、中国の一つの<sup>m i n z u</sup>民族になった達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族にも新しい変化があった。その変化は、達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族にとっては、<sup>m i n z u</sup>民族としての発展であると筆者は考えている。以下の部分では、新時期の<sup>m i n z u</sup>民族工作に基づく達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族の政治的創造の発展の様子を見よう。

### (1) 達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族地域における「自治条例」の制定

1958年以降、<sup>m i n z u</sup>民族自治地方の人民代表大会で地元の自治条例が次々に制定された（王豊 1992 : [1]）。しかし、モリダワー達斡爾族自治旗の場合は遅く、1997年5月16日に開かれたモリダワー達斡爾族自治旗の第八期人民代表大会第四次会議で「自治条例」が通過し、同年同月31日の内モンゴル自治区第八期人民代表大会常務委員会第二十六次会議で批准された（鉄林嘎 1998 : 1109）。

「モリダワー達斡爾族自治旗自治条例」は全八章六十八条で構成されている。自治機関、人民裁判所、人民検察院、経済建設、財政金融、社会事業、民族関係の内容を含んでいる。

この中で、達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族の創造に大きな影響を与えているのは、

第十二条 自治旗の旗長は達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族の公民が担当する。

第十六条 達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族幹部を養成する。

第五十二条 少数民族居住地に中、小学校を設立する。

第五十六条 民族の特徴を持つ文化事業を発展させる。

の各条であると思われる。なぜならばこれらによって、達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族が以下のように政治的に創造されているといえるからである。

## (2) 幹部の養成

上述したように、少数民族幹部の養成は、1970年代の少数民族工作の重点移行の時に重要課題として提示されていたが、1990年代においてもその重要性に変わりはなく、江沢民が全国民族事務委员会主任会議の報告を聴取した際に「少数民族は民族工作の展開にとって重要であり、民族問題の処理に非常に重要である」（李資源 2000：488）と発言して、少数民族幹部の重要性を示し、その養成を提唱した。1983年7月、国家民族事務委員会、教育部、財政部が各民族大学における少数民族幹部養成の通知を公布し、1984年5月の第六期全国人民代表大会第二次会議では、少数民族地域の民族機関は社会主義建設の要求によって大量の少数民族幹部を養成すべきであることが「中華人民共和国民族区域自治法」第二十二条で定められた（羅・徐 2005：200）。

このような少数民族幹部養成の規定が、モリダワー達斡爾族自治旗とチチハル市ムルス達斡爾族区で具体的にどのように反映され、少数民族幹部が養成されたかを見てみよう。

達斡爾民族の場合、1979年当時のモリダワー達斡爾族自治旗の幹部は2869名、うち達斡爾民族幹部は904名であった。1985年の幹部の総人数は3077名、うち達斡爾民族幹部は684名であった。1992年の幹部は3216名、うち達斡爾民族幹部は994名であった（鉄林嘎 1998：697-698）。また、2008年版『莫力達瓦達斡爾族自治旗志』では、2003年に出された「2003年～2005年莫力達瓦達斡爾族自治旗培養選抜少数民族年輕幹部計画」によって、達斡爾民族幹部を含む13名を旗内の工業会社でその会社の社員に施す訓練を受けた。2004年には18名の達斡爾民族を含む少数民族幹部を東北財経大学で文化教育の訓練を受けさせ養成した（卓仁、孟大偉 2008：491）、と記録されているように、少数民族幹部の養成が続いている。

黒龍江省[2000]11号公文書「中国共産党黒龍江省委員会、黒龍江省人民政府〈關於強化民族工作的決定〉」には、「少数民族が20万人いる自治県と民族区がある市の幹部のグループ中には最少1名の少数民族幹部が要る。人民代表大会、政治協商委員会、民族工作の幹部のグループでは少数民族幹部を安置する」との規定があった。この規程に従って、チチハル市ムルス達斡爾族区では、中国共産党委員会、人民代表大会、政府、政治協商委員会、その他の関係部門に少数民族幹部を配置した（舒景祥 2006：1）。

少数民族幹部の養成は少数民族工作の展開に重要な意義がある。これら少数民族幹部は当該民族のエリートであり、国家の少数民族政策の実施、民族側の人々の意見を中央へ提出することなどにおいて、中央政府と民族側の重要な「架け橋」として、民族政策の宣伝と実施など少数民族工作の展開に重要な役割を果たしている。したがって、少数民族幹部の養成は、民族の政治的創造に重要な意義があるともいえるのである。達斡爾民族の場合も同じである。民族識別以前のダブル人幹部は民族識別時に重要な役割を果たしただけではなく、識別後の達斡爾民族幹部は民族の政治的創造にも重要な役割を果たしてきた。

### (3) 新しい民族地域の認定

1983年、国務院が「民族郷の回復と確立についての通知」(舒景祥 2006: 2)を公布し、以下の新しい達斡爾民族の民族地域が認定された。

- ①バヤンタラ(巴彥塔拉)達斡爾民族郷: 内モンゴル自治区フルンボイル市鄂温克自治旗(1984年10月18日)
- ②オニト(臥牛吐)達斡爾族鎮: 黒龍江省チチハル市(1984年4月)
- ③マングト(莽格吐)達斡爾民族郷: 黒龍江省チチハル市(1984年4月)
- ④ドウルメンチン(杜爾門沁)達斡爾族郷: 黒龍江省チチハル市フランエルギ区(1984年4月)
- ⑤友誼達斡爾満族柯爾克孜族民族郷: 黒龍江省富裕県(1984年12月)
- ⑥タハ(塔哈)満族達斡爾族民族郷: 黒龍江省富裕県(1984年4月)
- ⑦坤河達斡爾族満族郷: 黒龍江省黒河市(1984年9月)
- ⑧沿江満族達斡爾族郷: 黒龍江省孫呉県(1988年12月)
- ⑨阿西爾達斡爾族郷: 新疆ウイグル自治区塔城市(1984年11月)である。

以上の新しい民族地域では、自治権を行使できなくても、民族地域であるというだけで、中央政府の民族工作の展開、例えば、少数民族優遇政策を実施するというような工作の展開に有利である。また、下の第2節で詳述するように、達斡爾民族の人々の民族文化的活動の開催や各達斡爾民族地域の達斡爾民族文化の交流を促進している点でも重要な意義がある。つまり、達斡爾民族の地方を政治的に獲得したことは、達斡爾民族の政治的創造にとって有利な空間的条件を備えたことであるといえる。

### 3. 本節のまとめ

以上、達斡爾民族として識別された後の民族としての政治的創造の問題について検討を行った。この政治的創造は、中国の文化大革命を境に、1950~60年代の政治的創造と1970年代末から現在までの二つの段階に分けられている。

1950~60年代には、初めて民族の名称を与え、民族地域を成立させ、民族幹部の養成が行われた。1980年代になると民族政策の復旧に伴って、民族自治条例を制定し、民族幹部の人数を増やして、新しい民族地域も増やした。これらをたとえて言えば、国家が与えた達斡爾民族の実体的要素を納めるための「器」のようなものである。

## 第2節 達斡爾民族文化の創出について

中国の各民族は、その民族名称によって人々にその存在を認識されるが、「民族の文化」とされるものによってもその存在を人々に認められる。筆者の個人的な経験で例えると、中国で新年に放送されるテレビ番組「中国中央電視台春節聯歡晚会」では、モンゴル民族、ウイグル民族、チベット民族、朝鮮民族を主とした民族が少数民族の代表として、自分の民族の歌や舞踊とされるものを演じることがある。彼ら演じるそのような自分の民族の歌

や舞踊に対し、視聴者の一人である筆者は、その歌や舞踊が当該民族固有の歌と踊りであり、しかも当該民族固有の伝統文化として認識し、当該民族の具体的存在を認識していたことを記憶している。

このような中国の少数民族文化を「伝統文化」と結びつける論法は中国政府が公式的に採っているものでもある。中華人民共和国国務院新聞弁公室が1999年9月に発表した『《中国的少数民族政策及其实践》白皮书』の「五、保護和發展少数民族文化」の項の冒頭において、「中国の各少数民族は、長期にわたる歴史的発展の過程で、本民族が独特に持つ特長と風格がそれぞれに異なる文化を形成した。中国において少数民族の伝統文化は尊重され保護されており、各民族は自由に本民族の文化を保持し發展させてよい」と記している<sup>73</sup>。ここに謳われていることから、中国の少数民族の文化を伝統文化と位置づけている部分があることがわかる。つまり、国務院というハイレベルの行政機関が少数民族文化をその伝統文化であると見なしているといえる。

これを裏付けるかのように、筆者が調査したモリダワー達斡爾族自治旗、ハイラル市の鄂温克族自治旗、チチハル市ムルス達斡爾族区では、「クムビル<sup>74</sup>は私たち達斡爾民族の伝統食品である」（2009年2月11日、チチハル市ムルス区のLさんの話）、「ボイコー<sup>75</sup>は達斡爾民族の伝統的スポーツである」（2009年1月30日、ニルギ鎮のNさんの話）、「茅草屋<sup>76</sup>は達斡爾民族の伝統的な家屋である」（2009年2月11日、チチハル市ムルス区のLさんの話）との話が聞かれたり、満州民族の衣服と似ている女性の衣服を達斡爾民族の女性の伝統的衣装と紹介されたことがあった（2009年1月30日、ニルギ鎮のOさんの話）。これらのことは、達斡爾民族人が自分たちの民族の文化を伝統的なものであると認識し、それを通じて、自分たちは達斡爾民族人である、ということを示していると筆者に感じさせた。

エリック・ホブズボウムは、「伝統」とは長い年月を経たものと思われ、そう言われているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時に捏造されたりしたものもある（ホブズボウム 1992 : 9）と述べ、このような伝統を「創り出された伝統」という語で言い表している。この語は、「一つには、実際に創り出され、構築され、形式的に制度化された『伝統』であり、さらには、容易に辿ることはできないが、日付を特定できるほど短期間—おそらく数年間—に生まれ、急速に確立された『伝統』を指す」（ホブズボウム 1992 : 9-10）としている。さらに、「創り出された伝統」には「通常、顕在と潜在と問わず容認された規則によって統括される一連の慣習であり、反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質がある」（ホブズボウム 1992 : 10）という。そして、『創り出された伝統』の特

<sup>73</sup> <http://www.china.com.cn/ch-book/shaoshu/shaoshu4.htm> (2013年4月18日アクセス)

<sup>74</sup> ヨモギの一種。

<sup>75</sup> 達斡爾語 boikoo。ホッケーに似たスポーツ競技。

<sup>76</sup> 茅葺き屋根のある土壁作りの家屋。

殊性とは、歴史的な過去との連続性がおおかた架空のものだということでもある。つまり、そうした伝統とは、新しい状況に直面した際古い状況に言及する形をとるか、あるいは半ば義務的な反復によって過去を築き上げるかといった対応のことなのである。それは近代世界の恒常的な変化および革新と、社会生活の少なくともある部分を永久不変のものとして構造化しようとする試みとの対照性なのである」(ホブズボウム 1992: 10 - 11) と叙述している。このような伝統の創出は、ホブズボウムによれば、第一次大戦の三、四十年前、ヨーロッパの数多くの国々で種々の目的のために積極的に行われた(ホブズボウム 1992: 407)。彼は、「伝統の大量生産は公式にも非公式にも行われた。公式にとは概ね『政治的に』とも言え、本来、国家もしくは組織された社会的政治的運動の中で、あるいはそれらによって、伝統が生み出されるという意味である。この(公式と非公式の一筆者補) 区別は本質的なものというよりはむしろ便宜上のものであり、十九世紀における伝統の創出の二つの主要な形態に注意を引くために設けられたものである。そして、その両者ともその時代の深遠かつ急激な社会的変化を反映している」という(ホブズボウム 1992: 407)。このような「伝統の創出」は、「まったく新しい社会集団や環境や社会事情、あるいは昔から存在してはいたが劇的に変化したそれらは、社会的結びつきやアイデンティティを確保したり表明したりするための、そして社会的関係性を構造化するための新しい工夫を必要とした。同時に、社会の変化は、国家による伝統的支配形態や社会的政治的ヒエラルヒーをより困難に、あるいは現実不可能なものにすらした。このために、支配や忠誠心のきずなを確立する新たな方法が要求された」ためであると説明する(ホブズボウム 1992: 407 - 408)。また、「政治的」伝統の創出とは、「たいてい政治的意図をもった組織によってなされるので、必然的により意識的で作為的となる」と定義している(ホブズボウム 1992: 407 - 408)。

筆者は、この創り出された伝統論に基づいて、1950年代、中国で行われた民族識別活動によって形成された民族の「民族文化」の創出とその伝統化、つまり「民族文化」という「伝統の創出」について考察を行いたい。ホブズボウムの論を踏まえれば、かつてのダフール人が民族識別を経て達斡爾民族になるという劇的な変化を迎えた。よって、社会的結びつきやアイデンティティを確保したり表明したりするための、そして社会的関係性を構造化するための新しい工夫が必要とされることになる。また、それまでの国家による伝統的支配形態や社会的政治的ヒエラルヒーは困難な状況に陥るので、支配や忠誠心のきずなを確立する新たな方法が要求されることになる。こうして「伝統の創出」がなされるわけである。このような見地に立てば、達斡爾民族は「伝統を創出」しているのではないかと見ることができるわけである。では、このような事実は達斡爾民族にあったのだろうか。この第2節では、達斡爾民族が自らの民族文化を創出したことを、文化大革命を画期として、その前後の時期に分けて検証する。

## 1. 1950、60年代の達斡爾民族文化の創出

文化大革命以前、達斡爾民族の文化創出に貢献したのは、学者たちと民族幹部たちであ



った。以下、学者たちの働きと民族幹部の働きに分けて考察を進める。

### 1) 学者たちの研究

中央政府は、民族識別活動に引き続いて、民族と識別された人々の社会と歴史に関する調査を実施した。1956年、全国人民代表大会の常務委員会は当該民族の学者を含めた学者を派遣して、全国範囲で少数民族に関する調査を行った。達斡爾民族に関する調査は同年12月に行われ、調査組は主として達斡爾民族の歴史、経済、文化について全面的な調査を行った。この調査には、著名な学者として知られていた額爾登泰、珠榮嘎、滿都爾図らが参加し、達斡爾民族に関する档案、伝説、物語を収集した（孟志東、恩和巴図、呉団英 1987：5）。

また、1958年には、国務院民族事務委員会と中国科学院哲学社会科学部の指導下、中国科学院民族研究所、中央民族学院と少数民族地方の文化機関は、各少数民族の簡史、少数民族簡志、民族自治地方概況からなる一連の書籍を編纂するために、各少数民族地方で調査を行った（内蒙古自治区編輯組 1985：[1]）。モリダワー達斡爾族自治旗の地方志の記録によると、達斡爾民族に関する調査は、1958年10月に内モンゴル少数民族社会歴史調査組がモリダワー旗で実施した（鉄林嘎 1998：44-45）。以上の二つの調査の結果、『達斡爾民族社会歴史調査』が編纂され、1985年に出版された。

これ以外の調査の成果として、少数民族に関する著作が次々に出版された。1962年には、内モンゴル少数民族社会歴史調査組と中国社会科学院内モンゴル分院が『達斡爾、鄂温克、鄂倫春、赫哲史料摘抄』と『達斡爾族簡史簡志合編』を出版した（孟志東、恩和巴図、呉団英 1987：5）。

この二つの調査以外にも、1950年代に中国科学院が少数民族言語調査隊を組織して、少数民族の言語について調査を行った。達斡爾民族の調査は1955年に第五隊が担当した。

このように、民族識別工作ののち、各少数民族の歴史とこの歴史の過程で形成された社会や文化の変遷状況を明らかにするための調査と書籍の刊行という事実がある。このように、中国では、各少数民族固有の歴史、社会、文化を明確に定義する作業が行われていたのである。では、達斡爾民族の歴史、社会、文化として具体化、明確化されたのは何であったのだろうか。

#### (1) 民族文字の創出

単一民族と識別された後、民族の言語を表記するための文字を有することは民族の重要な「標識」あるいは「民族の特徴」になるとして、認定された民族は民族の文字を作る動きを広範に展開した。1950年代には、達斡爾民族だけではなく、「チワン族、プイ族、トン族、リー族、ワ族、リス族、ナシ族、ハニ族もラテン文字で民族文字を創作した」（曲木鉄西 2007：39）。

傅楽煥の研究によれば、ダフル人には自己の言語はあるが文字がなく、ダフル人の

記憶と文献の記録による限りでは、解放以前にモンゴル文字を使った事はなく、清朝時代には満州文字を使っていた。1951年からは内モンゴル地区の小学校ではモンゴル語で授業を受けるようになり、新疆のダフル人は満洲文字を使って自分の言語を記録したと述べている（中央民族学院研究部編 1955 : 15）。

達斡爾民族が識別される以前の近代では、一部のダフル人エリートたちがダフル文字を作る動きを示した。ユ・ヒョヂョンの研究によれば、ダフル人の文字作りを手がける動きが活発になったのは20世紀初期である。この時期、ダフル人のエリートたちになる郭道甫（メルセ）、沃文徳、于毅夫、欽同普、ラテライ（徳古来）、徳樹元などのダフル人がラテン文字やキリル文字に基づくダフル文字作りに努力した（ユ・ヒョヂョン 2009 : 259-261）。

第1章の第2節で述べたように、中央政府が訪問団、識別調査団を派遣した以外に、1955年、中国科学院は少数民族言語調査隊を組織して、少数民族の言語について全面的な調査を行った。ダフル地方で調査を行ったのは第五調査隊である。この調査に基づいて、次の年の1956年6月、巴達栄嘎（バダロンガ）、拿木四来（ナムスライ）たちが統率して、民族の言語、文法、語彙に関する資料収集と記録作業を行い、達斡爾語の言語の所属を明確にし、これを基礎に『達斡爾文字方案』（草案）を作成した。1956年5月には、フフホト市でモンゴル言語科学討論会が開催された。主に内モンゴル、黒龍江、新疆の達斡爾民族幹部と知識人が参加し、達斡爾調査隊の作った『達斡爾文字方案』（草案）について討論した。また、同年12月にはフフホト市で達斡爾語文工作会議が行なわれた。この会議には達斡爾民族の代表が百人以上参加した。この会議ではスラブ文字に基づいて、バトハン（布特哈）方言を土台にして、ノウン（納文）方言を標準語とした達斡爾文字方案を通過させた（孟志東、恩和巴図、呉団英 1987 : 5-6）。このような過程を経て、達斡爾民族の標準語と文字が確定された。会議後、郭文通、烏如喜業勒図（ウルシェールト）、蒙和（ムンヘ）、ト林（布林）を主とする17名の委員で組織された達斡爾語文工作委員会が成立した。彼らは内モンゴルと黒龍江省からも一部の人員を動員した。そして、成果として、一年間の間に『達斡爾識字課本』、『達斡爾文読本』、『達斡爾文正字法（初稿）』、『達斡爾語文通迅』を出版した。また、1957年7月、フフホトで一ヶ月程の達斡爾文字訓練班を開催した（孟志東、恩和巴図、呉団英 1987 : 5）。同時に、新しい単語を加える計画と5年間で達斡爾民族文字を普及させる方案を計画した（鉄林嘎 1998 : 245）。しかし共産党の当時の「左傾思想」の影響でこの工作は中止されてしまった。このようにして作られた達斡爾民族の文字は広範には使用されなかったが、達斡爾民族が民族としての文化を作るための重要な作業の一つであったと評価してよいだろう。以上が、達斡爾民族の文字が創出された状況である。この、民族文化の象徴ともいえる民族の言語を表現するための文字を創出するために、主として達斡爾民族の学者を主とする言語学者たちが努力を尽くしたのであった。

## (2) 民族の歴史の創出

すでに序論で明らかにしたように、中国における民族の定義は、スターリンの「民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基礎として生まれた、歴史的に形成された、人々の強固な共同体である」というものである。ここでの議論で重要なのは、「歴史的に形成された」の部分である。民族とは歴史的な形成過程を持つことが自明の前提となっているということである以上、達斡爾民族にも民族が形成された歴史がなければならない。民族識別を経て生まれた達斡爾民族が自分たちの「民族の歴史」を叙述するのは当然のことであったというべきである。

清朝、民国期には、ダフル人に関して、華靈阿『達斡爾索倫源流考』(1833年)、郭克興『黒龍江郷土録』(1926年)、阿勒坦噶塔『達斡爾蒙古考』(1931年)、孟定恭『布特哈志略』(1931年)、欽同普『達斡爾民族志稿』(1938年)、何維忠『達古爾蒙古嫩流志』(1943年)のようなダフル人による古典的研究が現れた。これらのうち、華靈阿と阿勒坦噶塔を除いたものは彼らの住地の地誌であるが、華靈阿と阿勒坦噶塔がことさらに彼らの起源出自を専門に扱っていることから、ダフル人の起源出自は当時の官僚知識人たちが着目していたダフル人の歴史上の問題であったことがわかる。もちろんこの二人の以外の地誌類でも、彼らの起源出自について何らかのことが言及されている。しかも、2011年になっても『達斡爾族源于契丹論』という研究書が刊行されている。このことから、ダフル人／達斡爾民族の起源出自の探求は、彼ら民族の歴史に関する大きな問題であり続けていたといえよう。

このダフル人の起源出自については、1912年から1917年の間に数度にわたって調査を行い1933年に研究書を刊行したロシアのシロコゴロフ(シロコゴロフ1982)、解放前の漢人の学者である方徳修(方徳修1948)、中国の解放前に中国東北地方の諸民族の人類学的研究を行った日本人の赤松智城と秋葉隆(赤松・秋葉1941)、池尻登(池尻1949)らも、おのおのの研究でダフル人の起源出自に関する問題を扱っている。

これら研究者たちがダフル人の起源出自に関してどのような見解を示したかについては、第3章第1節で詳しく述べることにしているので、ここでは、ダフル人の起源出自に関して、モンゴル人／族であるか否か、ツングース系であるか否かが決めがたい状況にあったことがそれらの研究に見て取れること、そして、この問題はダフル人知識人以外の研究者にとっても、この起源出自という歴史上の問題が研究すべき事柄であると認識されていたことである。モンゴル民族でも満民族でもない単一の民族としての歴史を持たなければならない達斡爾民族にとって、かつてあったダフル人の起源出自問題は、なおも自らの「達斡爾民族の歴史」を叙述する際の開頭に位置する大きな問題でもあった。「達斡爾民族」にとって、自らの起源出自を含む「達斡爾民族の歴史」を明らかにすることは、中国の一民族として極めて重要な事柄であった。

達斡爾民族が識別された後、達斡爾民族の歴史の研究には、明確な一つの方向性が現れた。達斡爾民族が歴史的に単一の集団であったことを強調するかのよう、達斡爾民族は

契丹の後裔であるという説を証明するための研究が盛んに展開されるようになったのである。上の「1）、学者たちの研究」で述べたように、1956年に全国人民代表大会民族委員会と國務院民族事務委員会、中央の指示を受けて調査団が組織され、少数民族の社会と歴史に関する大規模な調査が実施された（内蒙古人民出版社 1985：[1]）。この調査の結果として、国家民委民族問題五種叢書が80年代に続々と出版された。達斡爾民族の場合には、『達斡爾語簡志』（1982年）、『達斡爾族社会歴史調査』（1985年）、『莫力達瓦達斡爾族自治旗概況』（1985年）、『達斡爾族簡史』（1986年）が出版された。タイトルからも明らかなように、これらの書物は、「達斡爾民族の社会」や「達斡爾民族の歴史」を明示する意図を持ったものであった<sup>77</sup>。

とくに「民族の歴史」を明示する役割を担った『達斡爾族簡史』の第一章では族称と族源が扱われており、上に述べたような「単一の民族」としての歴史的根拠の根底をどのように説明しているかという点で注目に値する。ここでは、かつてあったダフル人の出自に関する諸説は、達斡爾民族が契丹の後裔であるか、モンゴルの分枝であるかという説の討論に移行し、結局は「契丹の後裔」という観点を支持している。そして、達斡爾民族契丹後裔説はモンゴル分枝説よりも時期的によりさかのぼっていて、論拠も比較的完全であるので、達斡爾民族が契丹の後裔という説は達斡爾民族に合う史実的説得力があるという結論を提示した（達斡爾族簡史編纂組 1986：10）。

この契丹後裔説によって、「達斡爾民族の歴史」は元や明の時代にまで遡らせることができるようになり、「元明両代の達斡爾民族」、「清代の達斡爾民族」、「中華民国の達斡爾民族」、「偽滿洲国時期の達斡爾民族」、「解放戦争時期の達斡爾民族」のような「各時代の達斡爾民族の歴史」が研究・叙述できるようになった（達斡爾族簡史編纂組 1986：1-2）。このような、長い歴史的時間にわたる通時的研究が可能となったことは、後の達斡爾民族の歴史に関する研究と叙述、言い換えれば、これまではモンゴル民族の一分枝としてモンゴル民族の歴史の中に組み込まれてしまっていたために十分に書かれることのなかった達斡爾民族の歴史を創造するための重要な土台になった。

### （3）民族伝統の創出

『達斡爾族社会歴史調査』（1985年）では、1958年に学者たちが、すでに達斡爾民族となった人々が居住する各地での調査をまとめて、達斡爾民族のものとしての物質生活（飲食、居住、服飾、交通）、社会組織（哈拉<sup>78</sup>、莫昆<sup>79</sup>）、生活習慣（婚姻、葬式、祝日、礼儀、タブー）、宗教信仰（祭神、雅徳根<sup>80</sup>）、文学芸術（神話、民間伝承、詩歌、音楽、踊り、ゲ

77 『達斡爾族社会歴史調査』には、達斡爾民族の「民族歴史沿革」（内モンゴル自治区編纂 1985：13）という言葉が使われている。

78 達斡爾語 hal。「姓」の意味（恩和巴図 1983：72）。

79 達斡爾語 mokon。「族」「氏族」の意味（恩和巴図 1983：150）。halの下位にある社会組織名。

80 達斡爾語 yadgan。「シャーマン」の意味（恩和巴図 1983：239）。

ーム)、民間スポーツ(曲棍球<sup>81</sup>、アーチェリー、競馬、レスリング、板棍<sup>82</sup>、頸力<sup>83</sup>、獵碁<sup>84</sup>、囲碁)を明示した(内蒙古自治区編輯組 1985 : 178-291)。

いうまでもなく、これらが民族識別後に突如としてできあがったわけではなく、識別以前からダフル人の中にあつたものである。これらの過去からあつたものを「達斡爾民族」のものと位置づけたことで、「達斡爾民族の伝統的な」ものとなったのである。

## 2) 達斡爾地方の民族文化幹部による民族文化活動

達斡爾民族が居住する地方の政府の民族文化幹部は民族文化を宣伝する活動の傍らで、当時の達斡爾民族の間にすでに存在した文化とその担い手である民衆の発掘収集、そして彼ら民衆による民族文化の上演(表出)を組織し実施した。学者たちの研究調査活動の成果は書籍や論文などの形で現れたのに対し、政府が行った民族文化活動は具体的な踊りや歌謡、儀式の創出に貢献した。

新中国成立後から自治旗が成立するまでの間、モリダワー旗も各地と同じように文化工作が実施された。最初、文化工作は旗の人民代表大会委員会宣伝部の指導で人民教育科と教育科が共同して管理した。文化工作の具体的な内容は、党と人民政府の方針、政策、各種政治運動と祝日、記念日に協力するために各種の文化芸術活動を行い、これを通じて民衆の文化生活を活発にすることである。1952年、モリダワー旗の教育科は文化教育科と改称され、文化工作は正式に政府の部門に含まれた(鉄林嘎 1998 : 941)。達斡爾民族が識別された後、図書館や文化館などのモリダワー旗の文化諸機関は専門の民族文化幹部を養成して民族文化活動を展開した。

1995年、10人の達斡爾民族人は内モンゴル自治区で開催された第一回民族民間音楽、舞踊、劇の観摩大会で達斡爾民族の舞踊「布谷鳥」と木庫蓮<sup>85</sup>を演じた(鉄林嘎 1998 : 948)。1957年5月、フフホトで開催された自治区成立十周年大会において、公的機関に勤める達斡爾民族の職員と幹部たちが組織した「‘貝闊’隊」が boikoo<sup>86</sup>を上演した。また、1963年12月に公的機関に勤める達斡爾民族の職員はアマチュア台詞劇「巴騰保」を制作して、達斡爾語で演じた。1965年2月、旗の烏蘭牧騎<sup>87</sup>の隊員である烏嫩齊、孟義花、王玉英、烏雲、塔娜、馮金英たちが達斡爾民族の身分で全国巡回公演に参加し、同年12月には北京で毛沢東、朱徳、周恩来と面会した(鉄林嘎 1998 : 43-48)。さらに1963年8月には、自

<sup>81</sup> 上の注 73 参照。ホッケーに似た球技。

<sup>82</sup> 達斡爾語 mood tatbei。対面して座った二人が一本の木を握って引き合う競技(満都爾図 2007 : 470)。

<sup>83</sup> 達斡爾語 huju meljibei。対面して座った二人の首に輪状にした帯をかけ引き合う競技(満都爾図 2007 : 470)。

<sup>84</sup> 達斡爾語 bowo talibei。達斡爾将棋(満都爾図 2007 : 471-472)。

<sup>85</sup> 達斡爾語 mukulien。「口琴」の意味(恩和巴図 1983 : 154)。

<sup>86</sup> 上の注 73 参照。ホッケーに似た球技。

<sup>87</sup> モンゴル語 ulaan möchir「赤い若芽」。赤色文化工作隊の意味。内モンゴル各地で文化公演活動を行っている団体。

治旗成立五周年記念行事の一環として、モリダワー旗で民族芸術の展覧を行い、達斡爾民族文化である哈尼卡<sup>88</sup>と刺繍の作品を展覧した（鉄林嘎 1998 : 949）。以上のような民族文化宣伝活動が開催された。

これらの活動が展開されていた当時の状況について、筆者は調査地で当時達斡爾民族文化幹部を務めていた人々にインタビューを行った。

OM さん（達斡爾民族、女性、76 歳、インタビュー当時はモリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会員。2011 年 6 月 6 日達斡爾族自治旗達斡爾学会事務室にて）は以下のように語った。

筆者：先生、自治旗が成立する時に祝賀活動を行いましたか？

OM：行いました。5 周年ごとの祝賀があり、15 周年の祝賀、25 周年の祝賀。10 周年ごとにも祝賀があります。10 周年ごとのは大規模な祝賀、5 周年ごとのは中規模の祝賀です。そろそろ 55 周年になるので、今から準備しています。

筆者：自治旗が成立する時にはどのような活動がありましたか？

OM：その時には、祝賀大会を行いました。内モンゴルから一つの代表団が来ました。中央からも代表団が来ました。その時劉少奇の娘さんも来ました。彼女はその時モリダワー旗のお嫁さんになりました。また、夫と離婚していません。彼女の夫は 5 周年の時に来たらしいです。

筆者：彼女の夫は達斡爾人ですか？

OM：達斡爾人です。

筆者：先生、その時に、魯日格樂<sup>89</sup>の上演とホッケーの上演はありましたか？

OM：ありませんでした。あの時は解放されたばかりでしたから、革命の歌を歌いました。（1958 年の一筆者補）土地改革の時には、いろいろな革命の歌を習いました。

私たち民族は自分の（民族の一筆者補）ことを敢えてしませんでした。

筆者：その時、どのような文化活動をやりましたか？

OM：他の国の文化を上演しました。新聞で見たこと、その時にはテレビがなかったのでテープレコーダーで歌を聴くことができたのです。新聞では踊りの動作の絵がありました。これによって、自分で踊りを作りました。子どもたちは児童節<sup>90</sup>の時に踊りました。他には何もありません、全部自分で勝手に作ったものです。

筆者：民族舞踊（魯日格樂一筆者注）はいつ始まりましたか？

OM：民族舞踊として成立した時、（魯日格樂は一筆者補）すでに民間にありました。

筆者：上演したことはありませんでしたか。

OM：当時は民族舞踊の専門団体はありませんでした。民間では、ただ何人かのお婆ち

<sup>88</sup> 達斡爾語 haniaakaa。「樺の樹皮で作った人形」の意味（恩和巴図 1983 : 73）。

<sup>89</sup> 達斡爾語 lurgiel。達斡爾民族の民間舞踊のひとつ（恩和巴図 1983 : 142）。

<sup>90</sup> 子供たちの祝日、毎年の六月の一日で行う。

ゃんが踊っていたことがあります。

筆者：いつのことですか？

OM：1958年のことです。1963年、自治旗成立5周年記念に（民族舞踊の上演が一筆者補）行われました。そのときは、達斡爾民族の作曲家である通福さんを誘って歌を歌いました。自分たち（達斡爾民族一筆者注）の歌を改作したものです。これは私たちが次第に発展させたものです。次に、彼（通福一筆者注）の創った歌が流行しました。そのとき、私は既に文化局（当時は文教科のはず一筆者注）で働いていました。普段から彼の面倒を見ていました。題材や資料は、私たちが彼に探してあげました。

筆者：先生の言った民間（のもの一筆者補）というのは作ったものですか？民間で収集したものですか？

OM：民間で作ったものは、田舎から人を探しました。中年と老年の人を探しました。数人程度です。四人にすぎませんでした。（人数が一筆者補）多くなると招待できませんでした。四人から六人が一つの演目を演じました。（田舎から人を呼ぶ以外の一筆者補）他のことはやったことはありません。当時は、踊りを上手に踊れるさほど多くの一筆者補）人が見つかりませんでした。

筆者：踊れるが少なかったのですか？

OM：踊れる人は多くいました。民間には多くいました。しかし、見つかりませんでした。後になって、次第に（民族一筆者注）工作が展開するようになってから発見されるようになりました。また、上も（中央、フフホトあるいはフルンボイルの政府一筆者注）文化芸術の公演を行いました。この状況になって、（民族踊りを踊れる人一筆者補）比較的によく発見できるようになりました。

筆者：それらの仕事は全部当時の文化局が行ったのですか？

OM：はい。

筆者：当時、（文化局は一筆者補）どのような仕事をしていましたか？

OM：その当時は、文化に関する宣伝教育、民衆に対する文化活動は行っていませんでした。私が（文教科に一筆者補）来た後に（ようやく始まりました一筆者補）。それ以前は、全部漢民族の芝居でした。（中略）まったくでたらめなもので、牛鬼蛇神<sup>91</sup>さもなければ下品なものを演じていました。それで、（下品な芝居を見せる漢民族は）農村で活動します。その時はそれら活動を（なくすことは）大変難しかったです。こちらで断られたらあちらでやる。民衆には他には何の活動もありませんでしたから、彼らは（漢民族の下品な芝居を）見聞きするのが好きでした。（後略）

筆者：では、民族（文化一筆者補）に関する活動はいつから始まりましたか？

OM：民族（文化一筆者補）に関する活動は1955年から始まりました。

筆者：先生が（文教科に一筆者補）行った後ですか？

91 「牛鬼蛇神」とは妖怪変化の意味。

OM：私が来た後に展開しました。その時（OMさんが文教科に来た時―筆者注）には専任の人はいませんでした。なぜその時（OMさんが文教科に来た時―筆者注）に（民族文化の活動を―筆者補）行ったかと言えば、内モンゴル（のフフホト―筆者補）で一つの民衆文化公演をやったからです。全区（内モンゴル自治区―筆者補）の第一回目の民衆文化公演でした。今では、内モンゴルではこのような公演はできません。その時（内モンゴル自治区全区で民衆文化公演を行った時―筆者注）、どのようにして行ったかわかりません。一ヶ月やりました。（内モンゴル自治区の政府は―筆者補）あの人たち（民衆文化公演に参加する人―筆者補？）の料金を払いました。（自分の演目を―筆者補）上演した後、（すぐに故郷には―筆者補）帰りませんでした。今は、（自分の演目の―筆者補？）上演が終わったらすぐに帰りますよね。皆さん（民衆文化公演に参加した人々―筆者注）はずっと上演を見ました。彼らは（全部の演目の―筆者補）上演が終わるまで毎日見に行きました。

筆者：これはいつのことですか？

OM：1955年の10月1日から31日まででした。私たちは11月の時に（モリダワー旗に―筆者補）帰りました。帰る時はもう11月の初めになっていました。私たちを迎えた（モリダワー旗の―筆者補）人はみな短く毛皮の服を持っていました。（後略）

筆者：どのような演目を演じましたか？

OM：魯日格樂、烏春<sup>92</sup>、民間に伝わる歌、木庫蓮を演じました。

筆者：先生も参加しましたか？

OM：いいえ、私は上演隊を率いました。

筆者：（公演に参加した人は―筆者補）何人ぐらい行きましたか。

OM：10人ぐらいでした。全員民衆でした。田舎に選びに行って、努図科<sup>93</sup>に推薦された人でした。踊り（魯日格樂―筆者注）は6人、烏春は2人、（木庫蓮の―筆者補）演奏は1人、私を加えて10人でした。当時は「草原列」という<sup>94</sup>汽車がまだ通っていませんでした。（中略）フフホトに行くときには、北京では下車しませんでした。（モリダワー旗に―筆者補）戻る時には北京で三日間泊まりました。頤和園、故宮に行きました。（公演に参加した―筆者補）民衆たちはすごく喜びました。（中略）私たちの（隊の―筆者補）烏春を演じたお爺さんは、あの物（故宮にある扁額に書かれている満州文字―筆者補）が分かりました。彼は満州文字が読めますから、満州文字を見たらわかります。彼はすごく喜びました。（中略）彼は（モリダワー旗に―筆者補）戻った後、旗（の政府―筆者補？）も彼を重視して、また活動があった時に、烏春と口胡<sup>95</sup>を演じました。今、彼のように（口胡を演じる技術―筆者補）

<sup>92</sup> 達斡爾語 uqun, uqin。「詩歌」という意味である（恩和巴図 1983 : 221）。

<sup>93</sup> 達斡爾語 nutog。人民公社成立前にあった行政単位。

<sup>94</sup> フフホトへの直行汽車のこと。

<sup>95</sup> 形状と吹奏の方法が口琴に似ており、調べが二胡に似ている楽器のこと。



を持っている人はいません。彼は 15 の調子を奏でることができます。今、(口胡を演奏) できる人はただ一つか二つ (の調子—筆者補) しか奏でることができません。彼は幾つかの鳥の鳴き声もできます。魯日格楽の踊り手が出す叫び声もできます。

OM さんによると、新中国成立後、1950 年代当時のモリダワー旗では民衆の文化活動が展開されてはいたが、それは主に漢人が演じる芝居が演じられており、達斡爾民族に関する文化活動は OM さんが文教科に来たあとに展開されるようになったという。つまり、達斡爾民族文化の創出は、達斡爾民族の識別活動が終わる 1956 年以前にすでに行われていた、言い換えれば、OM さんが 1955 年に所属したモリダワー旗文教科のダフル人関係者の側が、達斡爾民族として識別されることを見越して民族文化の創出に着手していたと考えることができる。したがって、達斡爾民族の文化創出作業は、国家による民族識別と並行してダフル人幹部の中で始まっていたということになる。しかし実情は、OM さんが文教科に赴任したのちもしばらくは民族文化活動は少なく、1958 年の民族自治旗成立祝賀活動でも革命歌曲のような演目が主として上演されたような状況であった。このことから、民族文化なるものが広範に定着するには、ある程度の時間が必要だったことも理解できる。

達斡爾民族幹部が創出した民族文化は、それまでのダフル人の民間文化をもとにして作られたが、1963 年に自治旗成立 5 周年を迎える時には、達斡爾民族出身の作曲家である通福に依頼して達斡爾民族の曲を作ったという。このことから見れば、民族文化の創出は OM さんのような民族文化幹部の働きかけという形の民族文化工作の展開によって次第に発展したといえる。OM さんの言葉を借りれば、達斡爾民族の文化は「次第に (民族文化—筆者補) 工作が展開するようになってから発見されるようになった」のである。

このような、民族文化幹部による民族文化工作の甲斐あって、彼らが田舎から発掘してきた達斡爾民族の民衆 9 名が民族文化活動に積極的に参加した事例からも明らかのように、彼ら民衆は、民族文化の表出という行為を実際に担った点で達斡爾民族文化の創出に大きな役割を果たしたと言えるのである。

以上から見れば、達斡爾民族の民族文化幹部と民衆相まって、文字通り「創・出」したことが明らかであり、これが達斡爾民族文化の創出に大きな役割を果たし、本章第 3 節で詳しく取り上げるその伝統化に道を開いたといえるのである。

## 2. 1970 年代から 80 年代から現在までの達斡爾民族文化の発展

上の第 2 章の第 1 節で述べたように、文化大革命によって民族工作は一時停止したが、1970 年代から 80 年代になると、民族工作の任務と重点が少数民族の文化と経済を發展させることへと移動したことに伴って、達斡爾民族文化は新しい發展期に入った。發展期というのは、1980 年代から現在までの時間を指す。1980 年、国家民族事務委員会が「目下の民族文化工作に対する意見」を提出して、民族文化芸術の遺産の収集と整理ならびに民族文化芸術の理論研究工作を行う、ベテランの民族歌手やベテランの民族芸能者を保護して文

献記載と口頭文化を守る（羅・徐 2005：280）ことが提唱された。これをうけて、1980年代には、達斡爾民族が民族文化イベントを盛んに行ったことから達斡爾民族文化も徐々に人々に認識され始めた。2008年の自治旗成立50周年に合わせて達斡爾民族の各種の文化体育活動が創出された。これら活動が活発に行われることに伴って、一部の新しい民族の伝統や儀式が作り出された。以下に詳述するように、文化大革命以降には、中央・地方政府による民族文化発展政策の実施を背景に、民族文化工作の積極化と民族文化活動の数が増加し、新しい民族文化が創出され、その普及が図られ、達斡爾民族の文化は大いに発展したのである。

上述した学者たちの研究と民族文化幹部ならびに民衆が果たす役割は依然として続いていたが、1970年代から80年代には、これらに加えて、達斡爾民族の各居住地で、民間団体として、「達斡爾歴史言語文学学会」（以下、達斡爾学会、と略す）が成立し、達斡爾民族文化に関する研究活動を推進し、現在では文化創出の重大な任務を担当している。以下では、学者たちの研究、民族文化幹部ならびに民衆、達斡爾学会による民族文化の創出過程を考察する。

### 1) 学者たちの研究と文化工作者の宣伝

1970年代から80年代の中国では、民族政策の回復に伴って、少数民族文化に関する研究が盛んに行われた。達斡爾民族の場合は、歴史に関する研究が盛んに行われた。1970年代は、中ソ論争に起因する中ソ間の対立が激化した時代だった。それを背景に、達斡爾民族の歴史は、民族識別を経て達斡爾民族となったダフル人が、17世紀にロシア帝国の圧迫を受けて南遷し清朝治下に入った歴史的事実を、ロシア帝国から中国の辺境を守った歴史として位置づける研究書として、たとえば『十七世紀達斡爾族人民抗俄闘争』（楊旺 1977）、『達斡爾族的卓越愛国者—巴爾達奇』（穆毅 1979）、『十五至十七世紀達斡爾族歴史概述』（孟志東 1980）が刊行された。この作業は、達斡爾民族の前身であるダフル人が、かつてのロシア帝国（当時のソ連）に屈服することなく、清朝治下の中国に積極的に加わり、その一部となった歴史を描くことで、達斡爾民族が中国の一少数民族であるだけにとどまらず、反ロシア闘争を戦った英雄的な中国の少数民族であることを明らかにしようとしたものである。また、1950年代の調査に基づいて1986年に出版された『達斡爾族簡史』（達斡爾族簡史編纂組 1986）に見るように民族の通史を出版することも行われた。このような達斡爾民族史の確定作業は2000年に入って以降も続いており、『中国達斡爾族史話』（巴図宝音、鄂景海 2005）が刊行されている。達斡爾民族が中国の一少数民族であることを強く印象づけるような書名がつけられている。このように、中国の一少数民族であることを歴史的に証明するための歴史叙述とそのための研究が重要であったことを見て取ることができる。

歴史の研究以外には、達斡爾民族の言語と文学の研究も盛んになった。言語関係では、内モンゴル大学の恩和巴図が1980年代に、『達漢小詞典』（恩和巴図 1983）、『達斡爾語詞彙』（恩和巴図 1984）、『達斡爾語話語材料』（恩和巴図 1985）、『達斡爾語和蒙古語』（恩和

巴図 1988)を出版している。これによって達斡爾民族の言語とはどのようなものであるか、とくにモンゴル語との比較においてどのように捉えられる言語であるのかを明らかにしたのである。

文学方面では、49篇の民間の物語を収めた『達斡爾族民間故事選』(孟志東 1979)、29篇の詩を収めた『達斡爾族伝統詩歌選訳』(奥登掛、呼恩樂 1991)、『達斡爾族民間故事選』(孟志東 2007)、『中国達斡爾語韻文体文学作品選集(上・下)』(孟志東 2007)、『中国達斡爾族古籍彙要』(孟志東 2007)のような選集が1979年から最近に至るまで出版され続けている。これら書籍にまとめられている文学作品のほとんどは、達斡爾民族の人々が語り継いできたとされる“昔話”である。つまり、彼らの代表的な“伝統的昔語り”とされる作品を選び出して、達斡爾民族の伝統的な文学作品としての価値を与えた作業であった。

また、達斡爾民族の文字を創造する作業は1956年に一度取り組まれたが、1979年にも再び取り組まれた。この年、昆明で開かれた民族科学討論会で、達斡爾、エヴェンキ、オロンチョンのような固有の文字を持たない少数民族のために文字を作る構想が浮上した。北京で開催された少数民族科学討論会で、内モンゴル大学の恩和巴図が達斡爾民族の文字を作る意見を提出した(孟志東、恩和巴図、呉団英 1987: 7)。しかし、この回の努力も実現には至らなかった。確かにこの民族文字は試用の段階にまでは至った。しかし普及しなかったのであった。その原因についてユ・ヒョジョンは、「達斡爾族は人口が少ない、分散して居住し、相互の距離も大変遠く、また漢族など兄弟民族(オロチョン、エヴェンキ―筆者注)と入り組んで雑居しており、作られた文字も使用に便利なものではない」(ユ・ヒョジョン 2009: 263)と述べており、筆者も同様に考えている。

以上の言語、文学作品、文字以外に、ダフル人が清朝の辺境をロシア帝国から守った状況を宣伝した1979年の映画『傲蕾・一蘭』(監督は湯曉丹、主演は張玉紅、上海映画製作工場)が上演された。この映画によって、1980年代の中国では「達斡爾熱」が起こった(樂志徳 2010)。この「達斡爾熱」について当時のモリダワー達斡爾族自治旗の文化教育科で働いていたLさん(達斡爾民族、男性、75歳、インタビュー当時はモリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会員。2010年7月13日達斡爾族自治旗達斡爾学会事務室にて)は次のように回想している。

どうしてこの(「達斡爾熱」という一筆者補)名称ができたのかといいますと、1960年代から1980年代まで、中国とソ連の間には辺境をめぐるひとつの矛盾がありました。ソ連の専門家が、万里の長城より北の地方は中国の領土ではないと騒ぎたてたのです。これは当時の(中国の一筆者補)社会科学分野の人々の激しい反対を受けました。私たち中国の文化芸術界は、達斡爾民族の17世紀の時の資料と書籍に基づき、社会科学界の反応を示した『傲蕾・一蘭』を製作しました。上海映画製作工場が作ったものです。脚本家は叶南、主演は唐曉丹です。当時私は文化教育科で文化工作を担当していました。上海映画製作工場の人がここ(モリダワー達斡爾族自治

旗一筆者注) に来て達斡爾民族の過去と現在の歴史と民族の習慣について考察を行いました。私は彼らを招待したことがあります。これ以降、(文化芸術関連の一筆者補) 中央団体と各省市の団体が前後 19 組来ました。このような「考察風」が盛り上がりました。このような考察が行われた理由は、史料から見ると、黒龍江省の北部でロシアに激しい反撃を行ったのは達斡爾民族だからです。黒龍江の北の地方を彼ら(社会科学分野の人々一筆者注) は達斡爾民族地方と呼びます。彼ら(社会科学分野の人々一筆者注) は達斡爾民族に注意を払っていました。(ロシアに反撃した達斡爾民族の一筆者補) 英雄の姿を傲蕾・一蘭という姿で演じさせました。傲蕾・一蘭は女性の姿です。この映画の製作がまだ終わっていない時に、中国人民解放軍総政治部歌舞団は「傲蕾・一蘭」を歌劇に仕立てました。中国成立三十周年の時に北京の天橋劇場で「傲蕾・一蘭」という歌劇を一か月演じました。団長の田川は今でも私たちと連絡があります。天橋是北京でも有名な所ですから、この影響は大きかったです。この二つの「傲蕾・一蘭」、一つは歌劇、一つは映画ですが、これらは全国の愛国主義をいっそう高揚させました。これを田川が「達斡爾熱」と呼んだのです。

以上のインタビューの内容から見れば、1970 年代から 80 年代は、学者以外に、文化芸術の工作者も達斡爾民族の文化の宣伝に役割を果たした。このインタビューでは、当時、各省市の団体、前後 19 組がモリダワー達斡爾族自治旗に行って考察を行ったことを述べているが、これら文化芸術学者たちによる映画や歌劇製作のような工作は、広く中国一般大衆の目に触れやすい形で達斡爾民族の文化の伝播を促進したことは想像に難くない。

このような、学者たちの研究と文化芸術工作者の映画、歌劇製作という宣伝活動によって、達斡爾民族の文化がますます研究され伝播された。この研究と伝播の作業は達斡爾民族文化自体の発展を示しているものと考えられる。なぜならば、これら作業の展開に伴って、達斡爾民族の民族文化とされるものが発見・認定され、あるいは傲蕾・一蘭のような架空の女傑を作り出して、ほかの民族の人々に認識されたからである。

## 2) 達斡爾地方の政府側による民族文化の発展

### (1) 文化行政機関の改革

行政による民族文化の活動は、達斡爾民族の唯一の自治権があるモリダワー達斡爾族自治旗に集中している。1973 年、モリダワー達斡爾族自治旗の文教科が復活された。1981 年に文化局が成立した後は、ここが旗の文化に関することを管理した。1986 年 12 月 16 日には、北京の民族文化宮において、当時のフルンボイル盟宗教事務所、フルンボイル盟文化処、フルンボイル盟展覧館、モリダワー達斡爾族自治旗の政府は「中国達斡爾文化展覧」を開催した(鉄林嘎 1998 : 67)。

1992 年には文化局の下に、文化館、図書館、新華書店、映画館、映画発行放送会社、烏

蘭牧騎、文物管理所が置かれた（鉄林嘎 1998：941）。1994年、文化局・ラジオテレビ局・体育運動委員会が合併して「文化体育ラジオテレビ局」が成立した。その下に文化館、図書館、映画会社、烏蘭牧騎、文化市場管理署、テレビ局、放送局、体育センター、ホッケー一隊が置かれた（卓仁、孟大偉 2008：663）。今はここが達斡爾民族の文化活動の開催を管理しており、この中では文化館と文化站が主に民族文化活動を行っている。文化站とは、郷のレベルの文化機関で、主に郷の文化活動を管理する。モリダワー達斡爾民族自治旗の地方志の記録によれば、モリダワー達斡爾民族自治旗政府の主催で、2001年の7月16日から8月15日までの一ヶ月間、「第一回民族文化芸術節」という活動がモリダワー達斡爾民族自治旗で開催された。烏春の上演、達斡爾語での演説コンテスト、達斡爾民族衣装とアクセサリーのコンテスト、民間手工芸品の展覧などの多様な民族文化活動が開催された。（卓仁、孟大偉 2008：666）。

地方志の記録によれば、モリダワー達斡爾民族自治旗の烏蘭牧騎は、1980年代に入っても文化活動を継続していたが、1990年代には達斡爾民族の民族文化活動をあまり行わなかったようである（鉄林嘎 1998：52-90；卓仁、孟大偉 2008：13-50）。しかし、2008年の自治旗成立50周年を祝うための民族文化活動が開催されることに伴って、その活動が再び活発になった。2010年6月18日には中国の少数民族として「穿超千年—神奇達斡爾」という歌舞番組が台湾の台北国父記念館で演じられた<sup>96</sup>。これら活動が開催されたことは、「達斡爾民族歌謡」や「達斡爾民族舞踊」という達斡爾民族の文化を、達斡爾民族の人々はもちろん、その他の人々にも認識させることとなったのである。

筆者がちょうどモリダワー達斡爾民族自治旗で現地調査をしていた時期には、旗政府が主催して「第一届中国モリダワーホッケーの祝日」（2010年8月6日）という達斡爾民族の体育活動にちなんだ祝日があった。また、達斡爾民族衣装を宣伝するための「達斡爾民族衣装とアクセサリーのデザインコンテスト」（第一屆 2010年7月13日、第二屆 2011年6月27日）のような活動も行われた。これら祝日やコンテストは、まったく新規に組織されたものではあるが、ホッケーに似た *boikoo* という競技は達斡爾民族が自らの伝統的スポーツであると自認する競技であり、2010年と2011年のコンテストではともに達斡爾民族の伝統的とされる衣装と現代的衣装が出品され、参加者たちに示された。

これ以外にも、モリダワー達斡爾民族自治旗内の達斡爾民族の人々が集中している鎮や郷が毎年持ち回りで「達斡爾族民間文化体育芸術の祝日」を行っている。筆者は2010年7月21日に哈達陽鎮で開催されたこの活動を見学した。魯日格樂、競馬、レスリング、扳棍、頸力のような民族の文化活動が開催されている。この活動は、夏ごろ達斡爾民族が集中している郷で行っている。また、筆者がモリダワー達斡爾民族自治旗のニルギ鎮で調査を行った時、モリダワー達斡爾民族自治旗政府主催の「モリダワー達斡爾民族自治旗の達斡爾語スピーチ及び歌謡コンテスト」（2010年9月26日）という活動を行っていた。このような民族

<sup>96</sup> [http://www.mldw.gov.cn/content/news\\_view.php?id=2741#](http://www.mldw.gov.cn/content/news_view.php?id=2741#)。2012年11月29日アクセス。

文化関連の活動が毎年達斡爾民族人の居住地で行われている。

以上のような民族文化に関わる活動が1970、80年代から現在まで、各行政単位の政府が主催する形で行われている。これら活動を通じて、達斡爾民族文化は展示・上演のための機会を多く得たのであり、そのような展示・上演のために具体的な形をとったものとして作り上げられてきた。つまり、これら行政によって開催された民族文化活動は達斡爾民族文化の発展を促進したといえるのである。

## (2) 民族教育<sup>97</sup>

達斡爾民族文化の発展において、民族教育も大きな役割を果たしている。たとえばモリダワー達斡爾族自治旗には、民族小学校33か所、民族中学校7か所があり、民族幼稚園は1か所ある（卓仁、孟大偉 2008：641）。これら民族学校における民族文化活動を通じ、学生たちは多少とも民族文化と接触することになっている。学生たちは自分自身が民族文化活動に参加することによって、彼らの民族文化に対する認識を醸成している。

モリダワー達斡爾族自治旗の民族中学校である達斡爾中学は、中国国内に存在する達斡爾民族を教育する学校の中では重要な学校である。なぜならば、この学校には達斡爾民族の学生たちが集中しており、しかも民族文化活動が盛んに行われている。1981年7月14日創立の達斡爾中学は、達斡爾民族の中学校という名称を得て成立した学校である。2005年の統計によれば全2,493名中、漢民族は544名（21.82%）のみで、残りの1,949名は少数民族、うち達斡爾民族は1,479名で少数民族の75.88%、全学生の59.32%を占めている（卓仁、孟大偉 2008：641）。漢民族住民が多数を占めるモリダワー達斡爾族自治旗にあって、達斡爾民族の学生がほぼ半数を占めている学校である。

達斡爾中学の授業はすべて漢語で行われている。達斡爾語でさえも漢語で行われる授業を通じて学んでいる。しかし、この学校の達斡爾民族学生は、モリダワー達斡爾族自治旗政府が開催している民族文化活動において、達斡爾民族の若者の代表として達斡爾民族の舞踊の上演に参加している。例えば、筆者が調査した「中国モリダワーホッケーの祝日」

（2010年8月6日）では、達斡爾中学の学生たちが、達斡爾民族の伝統的スポーツと言われているホッケー競技に題材を得て創作された「ホッケー踊り」を踊ったのを目撃した。また、毎年行われる斡包節<sup>98</sup>（2011年6月28日）で民族舞踊である「魯日格樂」をアレン

<sup>97</sup> 『世界民族問題事典』によれば、民族教育とは、ある特定の民族の教師がその教師がその民族出身の生徒に民族の言語・文化・生活様式などを教えて民族的アイデンティティを形成する教育をいうが、すべての民族が民族教育を実現しているわけではない（松原 2002：1119）。しかし筆者には、中国の少数民族教育現場で教育を受けた経験があり、そこでは当該の民族出身ではない教員が当該民族の文化・生活様式を教えていた実例を実際に知っている。したがって、ここでは、中国の『教育大辞典・民族巻』において、民族教育とは中国少数民族教育の略称であり、特に漢族以外の55少数民族に実施する教育を指す（曲木鉄西 2007：5）、とする定義に準じておく。

<sup>98</sup> 斡包は達斡爾語 oboo の漢字音写（恩和巴図 1983：165）。oboo とは天地、神霊を祭るための石塚。斡包節とは、元来の斡包の祭祀（oboo での天地・神霊の祭祀）のかたわらで付

ジした「魯日格樂踊り」を踊ったのも目撃した。彼らは、こうした民族的創作舞踊をすべて学校で習うのであり、筆者はその様子も目撃した<sup>99</sup>。この学校では、こうした機会以外に達斡爾民族の歴史や文化を学ぶ授業はない。民族中学の達斡爾民族学生は、この様な民族文化活動に参加することによって、自分たち民族やその文化に関する認識を深めている。たとえば、筆者のインタビューを受けた DU さん（達斡爾民族、女性、29 歳、販売業、最終学歴高校卒、勤務先服装店にて、2010 年 9 月 2 日）は、

筆者：あなたの学歴は？

DU：高校卒業です。

筆者：達斡爾学校に通いましたか。

DU：はい。

筆者：故郷はどこですか。

DU：哈達陽です。

筆者：もう結婚しましたか。

DU：はい。結婚しました。結婚したのでここ（ニルギ鎮—筆者補）で働いています。

筆者：そうですか。あなたは達斡爾民族の文化の中で最も重要と思っている文化は何ですか。

DU：ホッケーです。

筆者：自分でやったことがありますか。

DU：ありません、これ（ホッケー—筆者注）は全部男性たちがやりますよ。私は故郷にいたときには（ホッケーをやることを—筆者補）あまり見ませんでした。後、旗（ニルギ鎮の達斡爾中学—筆者注）の学校に入って、（モリダワー達斡爾族自治—筆者補）旗の文化活動に参加した後に民族の伝統のことがわかりました。前はわかりませんでした。（モリダワー達斡爾族自治—筆者補）旗の民族文化活動はたくさんあります。故郷にいたときには（民族の伝統について—筆者補）知りませんでした。

筆者：魯日格樂を踊りますか。

DU：学校（ニルギ鎮の達斡爾中学—筆者注）にいたとき踊りました。今、毎晩、広場でも魯日格樂を踊る人がいます。あなたはそこに行ってみればわかります。

筆者：はい。ありがとうございます。

---

随して行われる各種娯楽活動を合わせた総称でモリダワー達斡爾族自治旗で毎年の 6 月 28 日に行っている。詳しくは第 3 節の 3. の 1) を参照。

<sup>99</sup> 丁石慶によると、この学校では、達斡爾語でのスピーチコンテスト、達斡爾民族の歌曲コンテストなどの活動を通じて、民族文化を向上させ、発掘させていると述べている（丁石慶 2009 : 155）。

DUさんは、故郷の哈達陽鎮にいるときには民族文化とはあまり接触したことがなかった。モリダワー達斡爾族自治旗の達斡爾中学に入学し、そこを通じて旗政府の主催した民族文化活動に参加して初めて「民族の伝統」のことがわかったと述べている。つまり、民族中学の達斡爾民族学生は、各種民族文化活動への参加を通じて民族やその文化、伝統に関する認識を得て、広場での魯日格樂踊りを筆者に紹介するほどに認識を深めていることが明らかである。

### (3) 民族歴史文化施設とコメモレイション

以上のような各級の政府によって行われた民族文化活動と民族教育以外、達斡爾民族が居住する各地に博物館、公園、記念碑を建設する行為やこれら施設によって、ある歴史の出来事を記念・顕彰する行為であるコメモレイションを通じて、民族文化の発展が促進されたと筆者は考えている。

1990年代から達斡爾民族が居住する地方で博物館、公園、記念碑が建てられ始めた。モリダワー達斡爾族自治旗の達斡爾民族博物館（1998年8月8日）、チチハル市の達斡爾文化展覧館（2000年6月）、エヴェンキ自治旗南屯の巴彥塔拉達斡爾民族博物館（2004年8月）、モリダワー達斡爾族自治旗のシャマン博物館（2006年10月）、モリダワー達斡爾族自治旗の中国達斡爾民族園（2003年8月15日）がある。また、モリダワー達斡爾族自治旗には、「達斡爾抗沙俄戦争無名記念碑」（1996年8月15日）、「達斡爾族莫日登哈拉統修族譜記念碑」（1998年6月2日）がある。

これら民族の歴史や文化を展示する施設やその建設行為は、達斡爾の民族文化の発展に役割を果たす。なぜならば、これら施設やその建設は達斡爾民族文化を展示し人々に達斡爾民族文化のイメージを与えるほか、民族の輝かしい歴史を記念・顕彰している。このような中国の少数民族文化のイメージ形成やコメモレイションは、達斡爾民族の起源や根源的民族文化を規定・展示することを通じて、達斡爾民族の歴史と文化の伝播に一定の役割を果たし、中国内の少数民族である達斡爾民族としての統合を促す装置となっているのである。

## 3) 達斡爾学会の作業

### (1) 各地の達斡爾学会について

達斡爾学会の成立は、内モンゴル自治区の文化研究機関に勤務していた達斡爾民族の蒙和、巴達栄嘎、奥登掛、斯爾古楞、呼思樂、巴図宝音、孟志東、恩和巴図など八名が、民族文化を発展させる基礎とし、達斡爾民族の学者たちの研究仕事を発展させようと、「達斡爾歴史、言語、文学研究学会」の創設を、内モンゴル自治区共産党委員会に提案し、同委員会の批准を受けて、1980年4月にフフホトで「内モンゴル自治区達斡爾歴史言語文学学会」が成立した（孟志東、恩和巴図、吳団英 1987: 7）。達斡爾歴史言語文学学会は「達斡爾学会」という略称もよく用いられる。



2007年現在、中国各地には11の達斡爾学会がある（満都爾図 2007：502-505）。具体的には、内モンゴル自治区達斡爾学会（1980年4月）、黒龍江省達斡爾学会（1984年8月）<sup>100</sup>、チチハル市達斡爾学会（1982年8月）、フルンボイル盟達斡爾学会（1988年9月）、大興安嶺林区達斡爾学会（1990年10月）、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会（1989年）、ムルス区達斡爾学会（1997年2月）、フランエルギ区達斡爾学会（1968年4月）、富裕県達斡爾学会（1987年3月）、エヴェンキ族自治旗達斡爾学会（1990年10月18日）、満州里市達斡爾学会（2006年5月20日）である。

全国各地の達斡爾学会は、毎年輪番で年次総会を担当して開催し、展開すべき民族文化工作について議論、決定する。1980年の「内モンゴル自治区達斡爾歴史言語文学学会」の成立から筆者の調査した2010年までに計10回の年次総会を開催した。

一つの事例として、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会の創立に関わったLさん（達斡爾民族、男性、75歳、インタビュー当時はモリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会会員。2011年7月15日、学会事務室にて）は次のように語っている。

モリダワー達斡爾（族自治旗一筆者補）学会は1989年9月7日に成立するはずでしたが、ある原因があったため12月まで延期されました。モリダワー（達斡爾族自治旗一筆者補）達斡爾学会を成立させた理由の一つは、内モンゴル（自治区一筆者補）達斡爾学会には、モリダワー達斡爾族自治旗の会員が36人もいたからなのです。この状況に基づいて、旗委（モリダワー達斡爾族自治旗共産党委員会一筆者補）が四つの（政府の行政単位の一筆者補）リーダーのグループ（モリダワー達斡爾族自治旗の共産党委員会、政府、人民代表大会、政治協商委員会一筆者補）の大会を開かせ、モリダワー（達斡爾族自治旗達斡爾一筆者補）学会成立に関する討論会を行いました。私は当時民族事務委員会で働いていました。また、内モンゴル達斡爾学会の会員でした。私はこの会議に参加して、モリダワー達斡爾族自治旗における達斡爾民族の基本的な状況を説明しました。この状況によって、モリダワー（達斡爾族自治旗達斡爾一筆者補）学会が成立しました。討論した結果、モリダワー達斡爾（達斡爾族自治旗達斡爾一筆者補）学会は内モンゴル（自治旗一筆者補）達斡爾学会に従属しないということになりました。（モリダワー一筆者補）達斡爾（族自治旗達斡爾一筆者補）学会が成立した後、民族の文化や歴史を宣伝し、民族の祖先の文化の研究に大きな役割を果たしました。それは主に、伝説に現れる土地を発見したことがあります。この土地は私たちのモリダワー（達斡爾族自治旗一筆者補）にあります。（中略）現在、毎年行う「斡包節」の初めに祖先を祭る儀式があります。（中略）もう一つは、毎年行っている「斡包節」があります。（中略）もう一つは『達斡爾族資料集』の編纂があります。（後略）

<sup>100</sup> 1997年、黒龍江省民族事務委員会は「黒龍江省民族研究学会」を成立させ、省内の各少数民族学会は全部これに統合された。黒龍江省の達斡爾学会の対外的名称は「黒龍江省民族研究学会達斡爾族研究会」である（満都爾図 2007：502-503）。

Lさんへのインタビューからは、筆者の注目しているモリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会が成立したプロセスが理解できる。この学会そのものは民間団体と言われてはいるが、その成立は、Lさんのようなモリダワー達斡爾族自治旗の行政機関で働いていた達斡爾民族の幹部たちが提起したのだった。彼らは、政府の行政機関の幹部と達斡爾学会の会員という二つの「身分」を持っていた。当時、彼ら学会員の行っていた民族文化活動は当地の政府の支持を受け、今もモリダワー達斡爾族自治旗の政府に支えられている。現在、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会で働いている職員はほぼ当時の政府の行政機関で働いていた達斡爾民族の幹部たちである。

また、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会は、達斡爾民族の民族文化活動を行っていることがわかる。それは、Lさんによると、伝説に現れる土地の発見、「斡包節」の初めの祖先崇拜儀式、「斡包節」、資料集の編纂である。このような経緯があるため、現在、モリダワー達斡爾族自治旗で行われる達斡爾民族の文化活動を実際に担っているのは、この達斡爾学会とその会員たちであり、活動の内容やプログラムの策定などを担当している。このような状況から、達斡爾学会とその会員たちは、達斡爾民族文化の「創・出」を担っている側面があるといえる。

## (2) 達斡爾学会の構造

上述したように、達斡爾学会とは、最初は、大学や研究機関が集中する内モンゴルの首府フフホトにおいて、達斡爾民族文化の発展と研究を目的として、フフホト在住の達斡爾民族の学者たちが成立した民間団体であった。一方、達斡爾民族の地域の達斡爾学会は、おおむねその地域の達斡爾民族の現職・退職民族幹部により組織され、理事長、副理事長、秘書長、会員から構成されている。つまり、達斡爾民族地域における現役の民族幹部とかつての民族幹部たちが達斡爾学会を支えているのである。

モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会の第六回理事会構成人名リストを見れば、理事は112人、常務理事は47人である（楽志徳 2010 : 97）。常務理事のほとんどは、もともと政府で働いていた民族幹部である。理事の多数も行政機関で働いている現職の達斡爾民族幹部である。例えば、2011年調査当時に達斡爾学会の理事長であった敖景峰氏は、もともとモリダワー達斡爾族自治旗の副旗長であった。また、上述した部分にインタビュー内容を紹介したOMさんとLさんも、もとは政府機関で働いていた民族幹部であった。現在、理事を務めている孟大偉氏はモリダワー達斡爾族自治旗档案歴史地方志局の副局長である。このような構造は、民族文化に関わる学者や民族幹部によって学会の必要性が提起され、それをうけて実際に学会が設立される際には、達斡爾民族地域の民族幹部が尽力したという成立の経緯をそのまま構造としているのである。また、底辺の会員の多くは退職した民族幹部であるところから、各達斡爾民族地域の達斡爾学会は、政治が民族の伝統文化に関与するという政治優位の性格を強く持っているといえよう。

### (3) 各地の達斡爾学会の活動の展開

各地域の達斡爾学会の中では、モリダワー達斡爾族自治旗の学会が最も活発に活動している。上でも述べたが、ここの達斡爾学会は民間団体であることに間違いはない。しかし、モリダワー達斡爾族自治旗の政府の大変な重視を受けている。モリダワー達斡爾族自治旗は、達斡爾学会に広い研究活動スペースを提供し、歴史、教育、文化、民俗、体育、経済などの 12 個の下位部門と基金会を設置し、専門的に民族文化活動、『達斡爾資料集』、『達斡爾論壇』の編纂と魯日格樂舞踊隊の組織などのような民族文化活動を行っている。

すでに、各地域の達斡爾学会は達斡爾<sup>mi n z u</sup>の文化活動を主宰している重要な「単位」となり、毎年多くの活動を組織、主催している。具体的には以下の通りである。

#### ① 達斡爾民族に関する学術会議

学術会議の開催で力を発揮しているのは、自治区や省、盟（市）など大きな行政単位の達斡爾学会である。これは、当該の達斡爾学会に研究能力の高い会員が所属していることや、各地の達斡爾学会が重点に位置づける活動内容に違いがあることが関係している。

内モンゴル達斡爾学会は「郭道甫<sup>101</sup>誕生 100 周年学術研討会」（1994 年）、「凌昇事件<sup>102</sup>六十周年学術研討会」（1996 年）を開催した（満都爾図 2007 : 502）。

黒龍江省達斡爾学会は、「達斡爾族経済と社会発展」、「達斡爾族言語文字」、「解放戦争時期の達斡爾族」、「二十一世紀の達斡爾族の発展」、「達斡爾の初めての人民政権を祝う」のような 10 回の討論会を開催したことがある（満都爾図 2007 : 503）。

フルンボイル盟達斡爾学会（2002 年よりフルンボイル市達斡爾学会）は、「敖拉・昌興<sup>103</sup>の一生の業績に関する研討会」、「烏如喜業勒<sup>104</sup>の一生の業績に関する研討会」、「凌昇の一生の業績に関する検討会」、「通福<sup>105</sup>音楽作品研討会」のような学術会議を開催した。

---

<sup>101</sup> 1894～？。ダフル人。本名はメルセントアイ（またはメルセ）。現在の内モンゴル自治区ハイラル市エヴェンキ族自治旗の人。内モンゴル人民革命党の中央執行委員、秘書長、瀋陽東北蒙旗師範学校の学長を担った。1931 年学長職を辞した。日本が中国東北地方を侵略した“九一八事件（満州事変）”の時には、日本の侵略に抵抗したが、1931 年にソ連の大使館での手続中にソ連側に拘束され、ソ連で死刑判決を受けて以降、消息不明となった。1937 年 12 月 11 日に死亡したとする説もある（ト林：393-395）。

<sup>102</sup> 1886～1936。ダフル人。現在の内モンゴル自治旗フルンボイル盟ハイラル市エヴェンキ族自治旗の人である。清朝末民国初に筆帖式や佐領を務めた。満洲国時代には、興安北省の省長を務めたが、その行動が反日的であるとして、1936 年に日本の関東軍に逮捕され、1936 年 4 月 20 日満洲国高等軍事法廷は凌昇を「反満通蘇事件」を起こしたとして死刑判決を下し、24 日死刑が執行された。これを凌昇事件と言う。（満都爾図 2007 : 659-660）。

<sup>103</sup> 1809～1885。ダフル人。今のエヴェンキ族自治旗の巴彦托海鎮の人である。満州時代には佐領を務めたことがある。作家。『巡查額爾古納、格爾畢奇河』という詩歌がある。（満都爾図 2007 : 669-670）

<sup>104</sup> 1923～1970。今のモリダワー達斡爾族自治旗の人。20 世紀の 40 年代に日本の大学に留学した。1945 年 1948 年から 1950 年の間に納文慕仁盟の盟長と呼納盟の副盟長を務めた。（満都爾図 2007 : 510）

<sup>105</sup> 1912～1988。達斡爾<sup>mi n z u</sup>民族人。今のエヴェンキ族自治旗の莫和爾<sup>mi n z u</sup>屯の人。国家の一級

このような各地の達斡爾学会による学会活動は、ある歴史的人物が達斡爾民族の人物であること、中国東北地方の経済・社会総体の中から「達斡爾民族の経済」と「達斡爾民族の社会」を切り出してその輪郭を明確にすること、達斡爾民族の言語と文字、現代中国成立史上の重要時期における達斡爾民族独自の働きなどを議論している。よって、このような活動は、達斡爾民族とその歴史ならびに歴史的役割、達斡爾民族の文化の内容を明確化する働きを果たしたはずであり、達斡爾民族文化の創出に大きな意義を持ったと評価できるのである。

## ② 刊行物の発行

以上のような学術会議以外に、各地の達斡爾学会はそれぞれ雑誌や書籍を刊行している。内モンゴル達斡爾学会は『達斡爾族研究』（2000年までに第七輯）、黒龍江省達斡爾学会は『二十一世紀達斡爾族発展研究』（黒龍江省達斡爾族学会、齊齊哈爾市達斡爾族学会 2000）『嫩水達斡爾文集』（黒龍江省達斡爾族研究会、齊齊哈爾市達斡爾族学会 2004）、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会は『達斡爾資料集』（2011年までに第十輯）や『達斡爾論壇』などの逐次刊行物を出版してきた。

これら逐次刊行物の主な内容は、ダフル人に関する文献史料から現代の達斡爾民族に関する研究まで広範囲に及んでいるが、民族識別前のダフル人も達斡爾民族として扱っている。これによって1956年に識別された民族の歴史的時間を広げ、研究や記述の対象を大いに広げ、内容を豊かにすることに成功している。また、一少数民族でありながら、各地の達斡爾学会によって複数の学術的逐次刊行物を出版するほど、積極的な出版活動を展開している。いうまでもなくこれら学術的逐次刊行物は、達斡爾民族の歴史と文化を明らかにし、それを文字の形で示し伝えているという点で、これも達斡爾民族の「創出」に重要な役割を果たしている。

## ③ 民族としての祭りの創出

筆者が調査したモリダワー達斡爾族自治旗とチチハル市では、それぞれの達斡爾学会が主催する「斡包節」・「敖宝会」<sup>106</sup>が開催されている。モリダワー達斡爾族自治旗では「斡包節」を2001年から毎年6月28日に開催している。チチハル市では「敖宝会」を二年に一度8月18日に開催している（何文均、敖海林 2007：202）。

また、チチハル市ムルス達斡爾族区、モリダワー達斡爾族自治旗、エヴェンキ族自治旗南屯では、達斡爾民族の伝統的な食用植物とされるクムビル（場所によってはクムル kumul と発音する）を摘みとる祭が行われている。この実施を請け負っているのはやはり各地の達斡爾学会である。チチハル市ムルス達斡爾族区では1997年に「苦木楽節」が始まった。

---

の作曲家。1946 内モンゴル東部区の文化工作団で働いた。1949 年以降には、内モンゴルの歌舞団で働いた。（満都爾図 2007：611）

<sup>106</sup> 「敖宝会」の「敖宝」は「斡包節」の「斡包」と同じ意味。注 105 参照。

毎年の「小満」(中国の旧暦で毎年の3、4月の時、新暦の5月の時)の時に行われている(何文均、敖海林 2007:202)。参加者は摘みたてのクムビルの料理を野外で食する他、民族の文化芸術・体育活動が行われる。これにならうかのように、エヴェンキ族自治旗南屯でも近年「昆米勒節」という名称で始められた(満都爾図 2007:264)。モリダワー達斡爾族自治旗では初めて2011年に騰克鎮でクムビルの祭りが開催された。

このような「民族としての祭り」の創出は、政治的色彩の強い各地の達斡爾学会が実施し、達斡爾民族の民間信仰的習俗や食文化を民族の祝祭として構築したことを示すものである。

#### ④ その他の活動

また各地の達斡爾学会は、民族の文化や歴史を記念する碑や公園の建築を提案して、地方政府に建設を働きかけたり、自ら資金を調達して建設することを申請している。

たとえばモリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会は、自らの活動成果の中に、副理事長兼秘書長の楽志徳氏が、1992年以来、達斡爾民族の歴史や文化を記念する施設の建設をモリダワー達斡爾族自治旗共産党委員会や同旗政府に提案してきた功績を掲げている。その中には各種の記念碑、歴史的人物の塑像、雅克薩城の復元、中国達斡爾民族園に設置すべき文化施設などが数え上げられている(娜日斯 2008:33「文化復興、彰顯民族品格—対莫力達瓦達斡爾学会成果思索」、楽志徳、娜日斯『達斡爾論壇』(中) 内蒙古文化出版社)。そして、1996年8月15日に建設された「達斡爾抗沙俄戦争無名記念碑」はモリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会がその建設を請け負った(『達斡爾論文集』編輯委員会、全国少数民族古籍整理研究会 2002:1171)。

黒龍江省達斡爾族研究会理事長であった楊優臣は、2003年12月に「少数民族の歴史・文化の宣伝を強化する」として、歴史・文化を反映した一連の像や記念碑、たとえばチチハルの建城記念碑、チチハル総管記念碑、瑪布岱<sup>107</sup>碑の建立を提起している(楊優臣 2004:152-153「關於齊齊哈爾市少数民族文化及民族文化工作的調查報告」『嫩水達斡爾文集』黒龍江省達斡爾族研究会、齊齊哈爾市達斡爾族学会)。ここで提起されたもののうち、瑪布岱を記念する設備として2011年8月11日に落成した「瑪布岱陵」に「瑪布岱陵碑」が存在する。碑にはムルス達斡爾族区人民政府が建立したと刻されている。また、黒龍江省達斡爾族研究会とチチハル市達斡爾学会は連名で、この落成儀式と祭祀への参加を求める招待状を達斡爾族の名士に送達するという仕事も行った<sup>108</sup>。

これらの例から、各地の達斡爾学会は、達斡爾民族の歴史文化を記念する施設の建設を地方政府に働きかける活動、建設事業そのものの実施、落成儀式と祭祀活動の実行などに

<sup>107</sup> 清朝期のダフール人将軍。

<sup>108</sup> 黒龍江省達斡爾族研究会・チチハル市達斡爾学会よりモリダワー達斡爾学会員の楽志徳氏に宛てたチチハル建城史研究会招待状による。この会のプログラムの中に、「瑪布岱陵」の落成儀式と祭祀が組み込まれていた。

見られる建設後の施設の運用に関わり、民族の歴史と文化を広く知らしめる活動を行っていることがわかる。

#### 4) 民衆の参与

上述した学者、政府、達斡爾学会による活動以外に、達斡爾民族の民衆も達斡爾民族文化の告知、宣伝に加わり、民族文化の発展を一面で促進している。その好例が、インターネット掲示板「達斡爾族論壇」(<http://www.dawoer.com/bbs/>)である。この掲示板は2005年に北京在住の達斡爾民族女性であり北京達斡爾族聯誼会秘書長を務める夢迪氏が開設した。夢迪氏がこのような掲示板を開設したのは、「より多くの人にわたしたちのことを理解してもらい、達斡爾のことを知ってもらうため」であるという。この掲示板に集っているのは、全国各地の達斡爾民族青年であり、その大部分が大学卒業生や大学在学中の者である。彼らは、達斡爾民族のニュース、経済、概況、風俗文化、民族芸術、民族研究などを話題にコミュニケーションし文化交流を行っている。2013年5月24日午後の時点では12項目の書き込みがあり、掲示板開設以来最多の書き込み数は361項目、最高参加者数は108人に上っている。

一方、筆者の現地調査による限りでは、現在、達斡爾民族の伝統的とされる文化活動に参加するのは、主に達斡爾民族の中老年（50代から70代まで）のすでに退職した民衆である。筆者がモリダワー達斡爾族自治旗での現地調査で実見した、民族の伝統舞踊である魯日格樂を踊っていた12人のうち11人は退職女性であった。この魯日格樂隊<sup>109</sup>に参加しているAFさん（63歳・女・達斡爾民族・モリダワー達斡爾族自治旗審計局を退職 AFさんの自宅 2011年8月6日）へのインタビュー内容を紹介しよう。

筆者：いつからこのような（魯日格樂踊りの一筆者補）活動に参加していますか？

AF：若い時から参加しています。（文化芸術は一筆者補？）大好きですから。

筆者：当時（AFさんの若い当時一筆者注）は達斡爾民族文化の活動は多かったですか？

AF：それほど多くはなかったです。八十年代から少し多くなりましたが、最近になってからこのような活動が多くなっています。

筆者：あなたは達斡爾民族の伝統について何をしていますか？

AF：達斡爾人（達斡爾民族の人という意味一筆者注）は踊りを踊ります。お正月の時には、老人たちは自分の部屋で踊ります。今私たちが踊っている踊りはそれほど純粋な達斡爾踊りではありません。昔の踊りを真似ているのです。だから、今の達斡爾人（達斡爾民族の人という意味一筆者注）は新しい達斡爾人（達斡爾民族の人という意味一筆者注）で、昔の人は古い達斡爾人（達斡爾民族の人という意味一筆者注）で、私たちはその中間の達斡爾人（達斡爾民族の人という意味一筆者注）で、

<sup>109</sup> この魯日格樂隊は、2011年8月11日にチチハルで開催された齊齊哈爾建城史研討会のプログラム“達斡爾族伝統民間歌舞演出”にも参加した。

注) です。

AFさんは、新中国が成立した1949年生まれであるが、達斡爾民族が単一民族と識別され、自治旗が成立した当時は9歳であった。文化大革命が終わるころには20代に入っていたので、達斡爾民族の形成と一緒に成長した人であるといえる。彼女の話には以下のような興味深い点がある。一つは、AFさんは若い時から魯日格樂踊りに参加していたこと、八十年代から民族文化活動が少し多くなった、と述べている点である。AFさんの若い時期、そして八十年代は、達斡爾民族文化のひとつの発展期であると筆者は上で指摘したが、AFさんは民族文化の文化芸術に興味があって積極的に民族文化活動に参加したという。つまり、達斡爾民族文化の発展期はAFさんの民族文化の文化芸術に対する興味を確固たるものにし、民族文化に対する人々の興味の裾野が広がっていた様子がうかがえる。もう一つは、「今私たちが踊っている踊りはそれほど純粋な達斡爾踊りではありません。昔の踊りを真似ている」という話である。これは、今では、伝統舞踊といわれている魯日格樂は、今の達斡爾民族の人による創出を経たものであることを証している。また、達斡爾民族文化として創出されたものもAFさんのような民族文化活動に積極的に参加した民衆と密接な関係にあるということも証している。

以上から見れば、1980年代には、学者たちの研究と行政による政策としての民族文化活動の展開、各地の達斡爾学会の活動、民族教育、民衆の参与によって達斡爾民族文化は発展期に入ったといえるだろう。特に、各地の達斡爾学会の成立は達斡爾民族文化の発展に重要な意義を持っている。なぜならば、学会は達斡爾民族文化の研究を促進したと同時に、各地の達斡爾民族文化の創出を促進したばかりでなく、学術集会開催を通じて各地の達斡爾民族文化の交流をも促進したからである。

### 第3節 達斡爾民族文化の伝統化

前二節では、達斡爾民族の創造、達斡爾民族文化の創出と発展の状況を明らかにした。つまり、1956年、ダフル人は単一民族と識別され、達斡爾という名称を獲得して民族として創造され、自民族の自治機関であるモリダワー達斡爾族自治旗が成立し、民族の身分で様々な民族的文化活動を行うようになったのであった。そして、これらの状況が、後の民族文化の創出と発展に大きな役割を果たしたのであった。1950年代から現在に至るまでの60年間に学者や知識人たちが行った研究と政府機関の民族文化工作と民族文化活動の展開によって、達斡爾民族文化が創出された。これは、学者や知識人、民族幹部、民衆の参与に加え、中央と地方の政府の支持という、内的・外的アクターの共同によって創出されたものであった。

現在は、達斡爾民族の歴史、達斡爾民族の文学、達斡爾民族の祭典、達斡爾民族の体育、達斡爾民族の食品、達斡爾民族の服装などの言葉が次々に登場している。また、「ホッケー」

や「契丹の後裔」という言葉が達斡爾民族と緊密に関連づけられ、これらは今では達斡爾民族の文化・歴史のシンボルとなっているだけでなく、達斡爾民族のイメージを示すものになっている。言い換えれば、達斡爾民族の民族らしさを人々に認識させることのできる文化的要素となっているということである。

上の部分でも提示したが、エリック・ホブズボウムは『伝統』とは長い年月を経たものと思われ、そう言われているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたものもある、「伝統とは新しい状況に直面した際古い状況に言及する形をとるか、あるいは半ば義務的な反復によって過去を築き上げるかといった対応のことなのである。それは近代世界の恒常的な変化および革新と、社会生活のすくなくともある部分を永久不変のものとして構造化しようとする試みとの対照性なのであり、そのことが『伝統の創造』というものを、過去二世紀を扱う歴史家にとって興味深いものとしていいる」（エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー1992：1-3）と論じている。

すでに見たように、達斡爾民族の場合は1950年代から文化、とくに前代から伝わり残る文化について研究を行っていたが、文化ならびに関連の活動が盛んになって発展を見せるようになったのは1980年代のことである。近年、達斡爾民族は民族の文化的要素を伝統として位置づけて「伝統文化」を次々に創出している。

本節では、前節で明らかにしたような過程を経て創出した民族文化を、達斡爾民族の伝統的文化として位置づける行為、すなわち、創出した民族文化の伝統化について考察する。具体的には、現在、達斡爾民族の文学、達斡爾民族の祭典、達斡爾民族の体育、達斡爾民族の食品、達斡爾民族の服装など、現在の達斡爾民族文化を構築している民族文化の諸要素の事例を示す。そして、それらに対して、達斡爾民族人が自らの民族の伝統であると表明している記述や証言を提示し、彼らが確かにそれを達斡爾民族の伝統であると見なしていることを明らかにする。

## 1. 伝統化の基礎—民族の歴史の構築

上述したように、達斡爾民族の歴史に関する研究は50年代から始まったが、1995年に行われた達斡爾民族のDNAの分析によって、達斡爾民族は契丹の後裔であるとの説が広がっている。1995年、中国社会科学院と中国医学科学院は「分子考古学」という研究プロジェクトを実施した。これは、DNA解析の技術によって、達斡爾民族は契丹の後裔であるか否かという問題を研究することを目的としたものであった。遼代の墓と契丹人種の後裔になる耶律羽・耶律祺の家族の墓で発見された歯と頭蓋骨から遺伝子を取り出し、モリダワ一達斡爾族自治旗の達斡爾学校に通う60名の男子学生の血から遺伝子を取り出して比較研究を行った。この結果、達斡爾民族は契丹の後裔であるとの結論が出されたのであった（巴図宝音、孟志東、杜興華2011：1-2）。

これによって、達斡爾民族が契丹の後裔であるとする説に新しい根拠が加わった。しかし、この族源確定問題、つまり達斡爾民族の出自を確定することは、達斡爾民族の歴史の



中でもっとも重要ではあるが今もなお明確な結論が出ていない問題である。近年でも、達斡爾民族<sup>mǎn gǔ ěr</sup>の出自に関する研究を行っている学者が、達斡爾は契丹の後裔である（呉維榮 2011：87）、あるいは契丹と関係がある（陳志貴 2004：125）という主張を繰り返しているが、「大夏」<sup>だい しゃ</sup> 110の後裔である（恩和巴圖 2006：71）という新しい観点も出ているほどである。モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会では「契丹」の後裔であると断定する傾向がある。つまり、自分たちは単一民族<sup>たん い じつ ぶく</sup>であってモンゴル民族<sup>mǒng gǔ lǚ zú</sup>とは出自上の関係がないという研究上の努力をしている。こうした彼らの努力の甲斐あって、筆者が調査時に接触したモリダワー達斡爾族自治旗の若者の中には、明らかに自分を「契丹族の後裔」であると述べる10代のDHさん（達斡爾民族人<sup>mǎn gǔ ěr ぶく じん</sup>・女性・18歳・高校生）、20代のAHさん（達斡爾民族人<sup>mǎn gǔ ěr ぶく じん</sup>・女性・29歳・無職）、30代のADさん（達斡爾民族人<sup>mǎn gǔ ěr ぶく じん</sup>・女性・31歳・販売）のような人々と出会った。筆者は、達斡爾民族<sup>mǎn gǔ ěr ぶく じん</sup>の若者の中には契丹の後裔であると考え方がすでに形成され根付いていると判断している。

このような、達斡爾民族人<sup>mǎn gǔ ěr ぶく じん</sup>が自分を契丹の後裔であると強調する現象について、達斡爾民族<sup>mǎn gǔ ěr ぶく じん</sup>の居住地に住んでいる漢民族<sup>かん ぶく じん</sup>のXさん（男性・チチハル市人民代表大会政治協商會議の運転手・47歳 移動途中 2009年2月17日）から以下のような興味深い話を聞くことができた。

X：私は1974年から1979年まで達斡爾民族<sup>mǎn gǔ ěr ぶく じん</sup>が居住する地の農村で働きましたが、彼らはすごく怠け者です。（中略）私は政府のリーダーと一緒に常に各民族<sup>mǎn ぶく じん</sup>の地方によく行きます。ハイラルの所にはよく行きます。彼ら（ハイラル地方の少数民族<sup>mǎn ぶく じん</sup>—筆者補）の性格はすごく豪快で、お酒を飲んだり、お肉を食べたり（後略）

筆者：達斡爾民族<sup>mǎn gǔ ěr ぶく じん</sup>はモンゴル民族<sup>mǒng gǔ lǚ zú</sup>の分枝であると聞いたことはありますか。

X：彼らはモンゴル民族<sup>mǒng gǔ lǚ zú</sup>の分枝ではありません。私があそこ（ハイラル地方—筆者注）に行った経験では、実はモンゴル民族<sup>mǒng gǔ lǚ zú</sup>、オロチョン民族<sup>おろ ちよん ぶく じん</sup>と彼ら（達斡爾民族<sup>mǎn gǔ ěr ぶく じん</sup>—筆者注）はすべて鮮卑<sup>せん び</sup> 111族から分かれたのです。彼ら（達斡爾民族<sup>mǎn gǔ ěr ぶく じん</sup>—筆者注）は最初は鮮卑<sup>せん び</sup>のはずです。後に、定住した後にそれぞれの部落になりました。このような状況です。彼らは血のつながりの近い親族です。しかし、（今は—筆者補）彼らはお互いにこのことを承認しません。（中略）遊牧民族<sup>ゆう ぼく ぶく じん</sup>の起源を探すということは非常に難しいことです。彼ら（遊牧民族<sup>ゆう ぼく ぶく じん</sup>—筆者注）は河の流れによって移動しました。彼ら（遊牧民族<sup>ゆう ぼく ぶく じん</sup>—筆者注）は最近数世代前のこともよくわかっていないのです。しかし、ある老人たち（現在ハイラル地方に居住する遊牧民のある老人たち—筆者注）は何世代も前には私たち（現在ハイラル地方に居住する遊牧民—筆者注）

110 紀元前 21 世紀から紀元前 16 世紀頃の中国最古と伝承される王朝。『史記』など中国の史書には初代の禹から末代の桀まで 14 世 17 代、471 年間続いたと記録され。商（殷）に滅ぼされたとされる。

111 中国古代の遊牧民族の一つ。二世紀前後に匈奴に代わってモンゴルを支配した。

者注) は一緒に生活していた、とも話します。

以上の話の中に出てくる「鮮卑族起源説」は X さんの私論であり、学界の定説ではない。しかし、彼の述べたこの状況は、「達斡爾を含む遊牧民族の人々」は、長く一緒に生活していた関係にあることを知っていながら、最近はそのことを認めない一方で、自らの起源をはっきりとは知っていなかった、というのである。また EB さん(男性・達斡爾民族人・大学教員・72 歳 神戸市で、2008 年 12 月 10 日)も同じような状況を次のように語っている。

1953 年のころ、(中央一筆者補) 民族学院の調査団が(今の一筆者補) モリダワー(達斡爾族自治一筆者補) 旗に調査に行った時、彼ら(調査団の人々一筆者注) は(当地のダフル人に一筆者補) 「何民族か」と質問しましたが、誰も何民族であるかを言うことができず、年寄りたちは、「わたしたちはわかりません。本当にわかりません。モンゴル民族なのかそれとも満民族なのかもわかりません」と言いました。(年寄りたちは一筆者補) 農村に戻ってから、「調査隊の人がこんなふうにならわたりに質問したので、わたしたちは知りませんと言った」と話しました。それで結局、人々は、「どこに自分の祖先を知らない人がいるのか。モンゴル族だ、と言っておけばそれで祖先がいることになるじゃないか」、彼らはそのように言って笑っていました。祖先がいらないと言うのはとても笑える話です。これは当時の(ダフル人一筆者補) 一種の心理の状態であるので、きみはこのことを例にしたらいいでしょう。

EB さんの話から、1950 年代に民族識別活動が行われた時、ダフル人は、自らが何民族であるかや、自分たちの祖先をはっきり知らなかったことがわかる。しかし今の達斡爾民族の若者たちは自らを「契丹の後裔」と言えるようになっている。また、上の第二節でも言及したが、達斡爾民族の歴史を元や明の時代にまで遡らせる達斡爾民族の歴史を述べた出版物も出版されている。

民族の族源問題はまだ結論が出ていない。しかし、今では一部の達斡爾民族の学者や達斡爾民族地方の幹部、及び一部民衆の中には、「契丹の後裔」であるとの認識が、とくに若者たちの中に形成されている。こうして、達斡爾民族は「民族の歴史」を獲得し、以下に述べるような各種要素の伝統化の基盤を得たのである。

## 2. 伝統化された民族文化要素

### 1) 民族の文学

ダフル人は固有の文字を持たない。現在までに整理された達斡爾民族文学とは、1950 年代に行われた達斡爾民族の学者を主とする学者たちが民間から収集した結果である。最初は、中央と内モンゴル自治区の政府が組織して派遣した学者たちが研究を行った。その成果になる書籍は 1970 年代から出版されはじめ、1978 年の中国共産党第十一期中央委員

会第三回全体会議以降、民間からの収集活動はいつそう活発となり、近年もなお出版が続いている（賽音塔娜、托娅 1997：9-10）。

例えば、『達斡爾族民間故事選』（孟志東 1979）、『達斡爾族伝統詩歌選訳』（奥登掛、呼恩楽 1991）、『中国達斡爾語韻文体文学作品選集（上・下）』（孟志東 2007）、『中国達斡爾族古籍彙要』（孟志東 2007）である。とくに、奥登掛と呼恩楽の『達斡爾族伝統詩歌選訳』という書名やその序文には、彼らがまとめた「ウチュン（烏春）」と呼ばれる詩歌が達斡爾民族の「伝統」であるとする認識が明確に見えている（奥登掛、呼恩楽 1991：1-3）。

このウチュンとは、達斡爾民族を代表する文学形態である<sup>112</sup>。ウチュンは、会話調と歌謡調を混ぜた形で歌う民間叙事詩である。序、正文、結と三つの部分で構成される。満州語で書かれた本を達斡爾語で訳して歌う形式と即興で歌う形式の二つがある（楽志徳、娜日斯 2008：156）。達斡爾民族の文学史において叙事詩は一種の伝統的形態であり（満都爾図 2007：432）、このウチュンを演じ唱う行為は達斡爾民族の伝統的文化活動であるとされ（卓仁・孟大偉 2008：665）、近頃は達斡爾民族の民間文学の中で重要な地位を占める（于壮、楊宝才「達斡爾情愔—布特哈映像」、楽志徳、娜日斯 2008：158）、と説明されている。ウチュンが達斡爾民族の伝統的な文化要素として近年重視されてきたことを、これらの説明が示唆している。

## 2) 民族の祭典

現在、達斡爾民族の一番大きな祭りは「斡包節」（斡包祭り）である。「斡包節」の「斡包」とはモンゴル語では「オボ」（漢字では敖包）という。元々、オボを祭る行為は、雨乞いするために行う儀式であり、北方民族の中には普遍的に存在した祭りである。

かつてダフル人<sup>オボ</sup>が敖包を祭っていたことは、1938年に欽同普が著した『達斡爾民族志稿』に、

敖包を祭ること。敖包は、土や石を積んで円式にしたものである。達斡爾の敖包祭りは、毎年五月である。屯の人がみな敖包の前に集まり、牛か豚を用いる。牛は縄でつなぎ、豚は縛っておく。巴哈奇（祈祷者）（bagchi—筆者補）が祈祷のことばをもって祈り、風雨が順調であること、牛馬に災いの無いことなど祈念することばがある。祈りが終わると生け贄の動物を屠る。頭、心臓、肝臓、そして首は節で分けて煮て、その他は生のままで供える。巴哈奇がもう一度祈る時に、みな香を焚いて叩頭礼拝する。祭りが終わると、供えた生肉や煮た肉は戸ごとに按分する。これは民間の敖包の礼儀である。また、公の祭りの制度もある。以前、総管、副総管が均しく祭った。総管が祭るのは衙門敖包という。副総管が祭るのは旗敖包という。その制度は、牛や豚などの生け贄の家畜を用いる。祭る時には総管が臨み、焼香し、言祝ぎの文を読む。

<sup>112</sup> この言葉は元々満州語の「話す」という意味である。モリダワー達斡爾族自治旗では「烏春」（uchun）と言うが、ハイラルとチチハル地方ではより満州語に近く発音して「烏欽」（uqin）と言う。

内容は、天地、山川神祇を指して主とし、祈祷のことは民衆のものと同じである。

巴哈奇は参加しない。祭った肉は署内で分配する。旗敖包<sup>オゴ</sup>のきまりは衙門敖包<sup>オゴ</sup>と同じである。邪教は祭らない。(『達斡爾資料集』(二) 1998 : 209-210)

とある。中国建国前のダフル人(上の資料には「達斡爾」とある)がこのような敖包<sup>オゴ</sup>祭りを営んでいたことはこの記述から明らかである。また、現在の達斡爾<sup>ミンズ</sup>民族が斡包<sup>オゴ</sup>113を祭ることについては、モリダワー達斡爾<sup>ミンズ</sup>族自治旗達斡爾<sup>ミンズ</sup>学会理事長の敖景峰氏が2001年の「斡包会」の開幕挨拶にあたり、「達斡爾<sup>ミンズ</sup>族伝統の斡包会」(「開幕詞」『達斡爾資料集』(三) : 1158)と述べているように、伝統的な行事として位置づけられている。戦前の日本人で1932年から1939年まで当時のモリダワー旗に勤務していた池尻登は「游牧地帯では中央に柳條を束ねて立てたものが多く、定住地帯では老樹の根元に積石したものが多い。」(池尻1943 : 147-148)と述べている。さらに『達斡爾<sup>ミンズ</sup>族社会歴史調査』では、1950年代中期の調査結果を踏まえ、「住んでいる近くの土の丘や小山を選び、石を積んで尖塔の形に作り、中心に一本の木を植えて、祭壇とする。」(『達斡爾<sup>ミンズ</sup>族社会歴史調査』 : 256)とある。上に引いた三つの資料には共通して、中央部に木や枝があるという特徴が書かれている。このような特徴は、古い写真でも確認できる。

#### 写真1



満洲国時のフロンボイルの官吏たちのオゴ祭りの様子を表した図(楽志徳『達斡爾論壇』中) 2008 : 13)

今の達斡爾<sup>ミンズ</sup>民族の「斡包節」は、2004年のモリダワー達斡爾<sup>ミンズ</sup>族自治旗第十回人民代表大会第一回会議で開催が認められた祭りであり、毎年6月28日にモリダワー達斡爾<sup>ミンズ</sup>族自治旗の「中国達斡爾<sup>ミンズ</sup>民族園」で行われることになっている。この祭りは政府が主催しているの

---

113 達斡爾<sup>ミンズ</sup>民族は漢字で「斡包節」(オゴ祭り)と表記し、意図的にモンゴル<sup>ミンズ</sup>民族の「敖包<sup>オゴ</sup>祭り」と区別している。L氏(2009年1月31日)、OM氏(2009年1月31日)の証言による。

で、純粹な意味での民間活動ではない。筆者が調査した 2011 年の「斡包節」は、各達斡爾民族地方の達斡爾民族人を集める祭りになっており、神仏や祖先を祭り、民俗活動（魚を捕まえる活動、水神を祭る活動）、民族スポーツ競技（達斡爾相撲、アーチェリー、頸力、扳靱、押加<sup>114</sup>）、民間の民族歌舞の公演などの他、鹿将棋・サク<sup>115</sup>・ハニカ<sup>116</sup>のコンテスト、民族料理コンテスト、伝統漁法コンテスト、民族衣装ファッションショーや観光（シャーマニズム博物館、布特哈総管衙門、ホッケー訓練所）などのような新しい内容を含んだ祭りとなっている（岳曉嶺 2011：1；「2011 年莫力達瓦達斡爾族自治旗斡包節活動日程」）。つまり、達斡爾民族の新しい伝統になったと言っても過言ではない。

また、「斡包節」の中心である「中国達斡爾民族園」に作られている斡包の形も、上に引いた三つの資料や古い時期の写真に見えているような形とは異なり、中央部に木や枝葉が無い。しかし、達斡爾民族が居住する地方にある民間の敖包<sup>オボ</sup>は、中央部に木や枝のある形をしている。これについて、L 氏は、「中国達斡爾民族園」の斡包はモンゴル民族の「敖包」の形とは異なるということを説明してくれた（2009 年 1 月 31 日）。また、筆者が 2011 年 6 月に参加した「中国達斡爾民族園」での「斡包節」でのことである。達斡爾民族の女性が、漢語で「哈達」という信仰の対象に掛ける清浄な絹布を斡包に捧げようとしたところ、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会員や文化関連機関職員たちが「哈達を用いるのはモンゴル民族である」という理由でこれを制止した。このような現象は、モンゴル民族の敖包との区別を明確にすることで、達斡爾民族の斡包を民族独自のものとする試みであると考えられる。

## 写真 2



「中国達斡爾民族園」の斡包 2011 年 6 月 28 日筆者撮。

114 反対を向き四つん這いになった二人の首に、輪状にした一本の布を掛け合って引き合う競技。

115 サク sak とは、ノロジカのくるぶしの骨で作った遊具。

116 ハニカ haniakaa とは、樺の樹皮で作った人形のこと。

### 写真 3



民間でのオボ、2010年9月18日筆者撮。

筆者は2011年8月に「中国達斡爾民族園」の斡包を参観した。その時に興味深い現象を目撃した。「斡包」を祭る達斡爾民族人GLさん（40才代・男性・モリダワー達斡爾族自治旗文化広報関係機関職員）の所作作法である。GLさんは、達斡爾民族が斡包を祭る時の所作を見せてくれるといい、白酒を瓶から一口飲み下したあと、その瓶から斡包に向けて酒を注ぐことを繰り返しつつ斡包を三回巡った。筆者がその他の参拝者の所作を観察してみたところ、一口飲み下して酒を注いだ人は見られなかった。このような儀礼所作は、筆者の観察では、達斡爾民族の一個人としてのGL氏が一つの民族祭典儀式的儀礼や所作を自らの想像によって実行した、言い換えれば想像による創造であると考えられる。

「中国達斡爾民族園」には、伝説上の達斡爾民族の先祖とされてきたシャージガルディ・ハンの立像がある。「斡包節」ではシャージガルディ・ハンも祭られる。このシャージガルディ・ハンに関して、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会の中心人物である楽志徳氏が行い組んできた事業も大変興味深い。氏は、伝説上の達斡爾民族の先祖とされてきたシャージガルディ・ハンの実在性を強調し、その実際の足跡を跡づける学術的運動を2005年から本格的に開始し、2009年からはシャージガルディ・ハンを「達斡爾人の唯一尊崇する先祖額斤汗<sup>117</sup>」であると主張し、2009年6月28日にモリダワー達斡爾族自治旗の「中国達斡爾民族園」で開かれた「斡包節」でシャージガルディ・ハンに供物を供える祭祀儀礼が行われたこととの関係である。楽志徳氏は、それまで伝説の域にとどまり、その実在や素性が必ずしも明確になっていなかったシャージガルディ・ハンの実際の足跡を明確にする事業に多大な精力を投入した。2004年8月に、「關於“中国達斡爾民族園”宏観扩建建議意見」をモリダワー達斡爾族自治旗共産党委員会、同旗人民代表大会、同旗政府に対して提出し、その中でシャージガルディ・ハンの祀堂を建設して観光地にすることを提案して

<sup>117</sup> 額斤汗は達斡爾語 ejin haan の漢字表記。ejin は「主人」、「皇帝」の意味。haan は北方民族の首長の称号「ハーン」「ハン」の意味。ejin haan 両語では「皇帝」を意味する。

いる。そして、2005年3月29日には「關於要求在沿江北建“薩吉哈爾迪汗神渡紀念碑”的申請書」を訥河市政府に提出した。この申請に先立ち、樂志徳氏ら一部のモリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会員が行った史料や伝説の収集と分析、現地調査などから得られた成果を踏まえたものと思われる。このことは、各地の達斡爾学会の活動成果をまとめた『達斡爾論壇』に、シャージガルディ・ハンの実在性を議論する文章数編が2005年から顕著に見えるようになることから推測できる<sup>118</sup>。この結果として、樂志徳氏らモリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会員有志が出資して「達斡爾神渡碑」が2005年6月27日に建立した。この碑は、シャージガルディ・ハンが今の達斡爾民族人の祖先を率いて納文江を渡って今の達斡爾民族が居住する地に來たその渡河点に建てられたものである。このような努力を経て、シャージガルディ・ハンは実在の人物となった。このシャージガルディ・ハンの実在化を踏まえ、2009年からシャージガルディ・ハンを「達斡爾人の唯一尊崇する先祖額斤汗<sup>119</sup>」であるとする主張を展開し、彼を祭る祭祀が同じ年の6月28日に舉行されたのである。樂志徳氏の一連の取り組みは、伝説上の人物と見なされてきたシャージガルディ・ハンが実在の人物であることを証明して実際の歴史上の現象として位置づけたばかりでなく、達斡爾民族<sup>minzu</sup>の出自・歴史を創造し、新たな祭典を成立させたことを意味している。

祭りに参加する人は達斡爾民族の政府のエリート、一般労働者、学生、農民などである。達斡爾民族の「斡包節」は伝統的な祭りというよりは達斡爾民族の会合となっているのであって、達斡爾民族にとっては新しく作られた伝統的な斡包節の意味を拡大させた民族の行事となっているのである。

### 3) 民族の体育活動

昔からダフル人が行ってきた boikoo (博依闊) という体育活動がある。実は、これがホッケーと酷似している。したがって、現在、達斡爾民族は boikoo を漢語で「曲棍球」(ホッケーの意味) と呼び、「曲棍球」が達斡爾民族を代表する体育活動であるとして大いに宣伝している。

boikoo という体育活動は、柞の木で作ったボール(達斡爾語「頗列」‘polie’) と棒(達斡爾語「博依闊」‘boikoo’) を使う。1957年の「内モンゴル自治区成立10周年慶祝大会」で初めて実演されたことで広く知られるようになった。これ以降、達斡爾民族の伝統的体育活動として知られるようになった<sup>120</sup>。boikoo とホッケーの競技方法が同じであるため、今では、達斡爾民族の boikoo のことを「古いホッケー」と呼ぶ場合もある。boikoo はダフ

<sup>118</sup> 樂志徳「達斡爾族歴史研究中正視 DNA 驗證的科學成果同時把握薩吉哈爾迪汗伝説才是里程碑」(『達斡爾論壇』(上) 43-49)、敖拉・樂志徳「薩吉哈爾迪汗与達斡爾历史文化」(『達斡爾論壇』(上) 50-51)、郭博勒・海龍「薩吉哈爾迪汗与烏爾闊辺堡」(『達斡爾論壇』(上) 52-57) などがある。

<sup>119</sup> 額斤汗は達斡爾語 ejin haan の漢字表記。ejin は「主人」、「皇帝」の意味。haan は北方民族の首長の称号「ハーン」「ハン」の意味。ejin haan 両語では「皇帝」を意味する。

<sup>120</sup> 会員ナサンダライ氏提供「曲棍球是達斡爾民族古老傳統運動項目」。

ール以前の遼代あるいはそれ以前からバトハン（布特哈）地方にあった達斡爾民族の体育運動であるとモリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会の会員たちは主張している<sup>121</sup>。今では完全に達斡爾民族の「伝統的体育活動」になっており<sup>122</sup>、モリダワー達斡爾族自治旗は1989年3月に「ホッケーの郷（曲棍球之郷）」と命名された（鉄林嘎1998：70）。現在、boikooを実演競技しているのは老年の達斡爾民族男性ばかりであり、青壮年男子はいわゆるホッケーに積極的に取り組んでいる。

#### 4) 民族の踊り

もう一つの伝統化された習慣の事例としては、現在、達斡爾の民族舞踊として魯日格勒、哈庫麦、阿罕伯と呼ばれる伝統的舞踊がある。この踊りは建国初期には、春節の時に“箄籬姑姑”という踊りの神を招くために踊る民衆の踊りであった（欒延琴2009：255-256「達斡爾族民間舞踏“魯日格勒”」楽志徳、娜日斯『達斡爾論壇』(下)内蒙古文化出版社：255-276)<sup>123</sup>。本章の第二節の一の部分で述べたように、1950年代、民族文化工作を実施した幹部が民間で収集した踊りがこれである。1980年代に入ってフフホトとモリダワー達斡爾族自治旗の政府によって開催された公演などの民族文化活動を通じて達斡爾民族の舞踊として形成された。アルラ鎮のMGさん（女性・達斡爾民族人・52歳・アルラ鎮政府の退職幹部）によれば、達斡爾民族の舞踊と認められるときには、固有の名称がなく、1980年代には単に「民間舞」と呼ばれていたが、近年、モリダワー達斡爾族自治旗ではlurgiel（魯日格勒）と言う特別の名称を有するようになったのだという。筆者の調査によれば、この踊りのそれぞれの呼称がいつ形成されたかは確認できないが、伝統的な民間の踊りが伝統的な民族の舞踊として名付けられて、達斡爾民族の舞踊とされたことを証している。

#### 5) 民族の食品

一部分の日常生活も伝統化された。どこでも見られる普通の生活であるが、達斡爾民族の伝統として再定義され、伝統的な祭典のテーマや伝統的食品として創出されている。

たとえば、現在、達斡爾の民族料理を代表する素材であり、第二節の冒頭で紹介したカムビルという植物が挙げられる。ECさん（達斡爾民族人・70歳・女性・チチハル出身・主婦）によると、

---

<sup>121</sup> 会員ナサンダライ氏提供「曲棍球是達斡爾民族古老傳統運動項目」：1、3。ナサンダライ氏の主張の根拠は、契丹人が建てた王朝の歴史を書いた『遼史』の中に、皇帝と大臣が球を打つことに関する記述が見られるということにある。

<sup>122</sup> 索曙輝2008：25。（「積極探索發展曲棍球事業打造達斡爾民族文化品牌」『達斡爾論壇』(中)：22-25)

<sup>123</sup> 満都爾図2007によると、魯日格勒はモリダワー達斡爾族自治旗ではlurgielと、チチハル地方ではhakumiel（哈庫麦勒）とハイラル地方ではahenbiel（阿罕伯勒）と呼ぶと説明されている（満都爾図2007：457）



クムビルはわたしたち少数民族<sup>mǎn zú</sup>の救命菜です。旧社会（中国建国以前一筆者補）のころには、食べるための穀物はありませんでした。野原でクムビルを摘んで、クムビルを食べて、困難を乗り越えました。

とクムビルのことを語ってくれた。つまり、クムビルを食べる習慣は中国建国以前の昔からダフル人の食生活の中に存在していたことがわかる。

ECさんによれば旧時代の救命的な食生活であったクムビル食は、現在の達斡爾民族<sup>dǎ duō'ěr</sup>にとってはごく通常の食生活になっているばかりではなく、今では祭典のテーマになっている。この祭りは1986年にチチハル市ムルス達斡爾族区<sup>mù sū dǎ duō'ěr zú qū</sup>の達斡爾民族人<sup>dǎ duō'ěr zú rén</sup>が始めたことであった（何銀忠、文沢 2000：197「浅談“庫木勒”節的吸取与發展」何文鈞、楊優臣『二十一世紀達斡爾族發展研究』197-201、黒龍江省達斡爾族学会、齊齊哈爾達斡爾族学会）<sup>124</sup>。今では各地の達斡爾民族人<sup>dǎ duō'ěr zú rén</sup>が異なった時期にクムビル祭りを開催し、チチハル地方では「庫木勒節」、エヴェンキ族自治旗とモリダワー達斡爾族自治旗では「昆米勒節」と呼ばれている（満都爾図 2007：264）。このムルス達斡爾族区での“クムビル祭り”の始まりについて、ECさんは次のようなことを語ってくれた。

クムビル祭りは解放以前にはありませんでした。クムビル祭りは八十何年かになってできたものです。そのころ、わたしは平屋建ての家に住んでいました。主人は（ムルス達斡爾族一筆者補）区に働きに行っていました。あの数名の老人たち（ご主人と一緒に働いていた達斡爾民族人<sup>dǎ duō'ěr zú rén</sup>の老人たち一筆者注）が相談して、この“クムビル祭り”をつくったのです。（“クムビル祭り”は一筆者補）以前にはありませんでした。八十何年かになってやっとこの定まった祝日になったのです。“クムビル祭り”は最初はイルサイという所で開かれました。“クムビル祭り”はわたしの家でできあがったのです。

この証言から、解放以前の昔からあったクムビル食が民族<sup>mín zú</sup>の祭典となったのは1980年代のことであり、それはムルス達斡爾族区<sup>mù sū dǎ duō'ěr zú qū</sup>の数名の民族幹部<sup>mín zú gān bù</sup>の発案になったことがわかる。

このクムビルは伝統的行為としてのみでなく、伝統を背景にした文化産品として商品化されるに至っている。たとえば、モリダワー達斡爾族自治旗のある食品加工業者は、クムビルを次のようなキャッチフレーズで商品化している。

柳蒿芽（クムビルのこと一筆者注）は、達斡爾語で“昆米勒”といい、原産地は大興安嶺の東南の麓、嫩江の兩岸であり、何世代にもわたって達斡爾民族<sup>dǎ duō'ěr zú</sup>が愛してきた天然の優れたエコ産品である。この産品は伝統工芸と現代技術を組み合わせて加工したものである。（後略）（下線筆者）（「山野菜産品紹介」：197。樂志徳、娜日斯『達斡爾論壇』（下）内蒙古文化出版社）

<sup>124</sup> 1987年に始まったとする意見もある（満都爾図 2007：264）。

ここに見えているように、クムビルは商品化されるにあたり、「何世代にもわたって達斡爾民族が愛してきた」ものとされ、その加工にあたっては「伝統工芸」の技法を用いていると宣伝されている。

このクムビルの例から、現在言われる達斡爾民族の伝統の中には、一部の日常生活が民族の伝統として位置づけされたものがあることは明らかである。

クムビル以外の他の食べ物も民族食品に位置付けられている。たとえば、筆者はモリダワー達斡爾族自治旗やレストランやチチハル市フランエルギ区の達斡爾民族人のお宅で、シソ餅、ミルク麺、ノロの肉などを達斡爾民族の食品あるいは料理として紹介されたことがある。これらは、達斡爾民族の人々にとって彼らの民族食品に他ならないと認められているが、実はミルク麺はモンゴル民族人もよく食べる食品である。ノロ肉はオロチョン民族、エヴェンキ民族の人も食べる日常的な食品であって、必ずしも達斡爾民族の民族的食品や民族料理とは限らない。しかしながら、以上のいくつかの事例から、大興安嶺地区に広く存在する食品が、達斡爾民族の人々によって達斡爾民族の食品や民族料理とされたことがわかる。

## 6) 民族衣装

筆者が観察するところでは、現在、達斡爾民族の女性の民族衣装とされているものは、満民族の女性の服と似ており、男性の民族衣装はモンゴル民族の男性の服と似ている。

敖拉・楽日徳氏によると、「服装について言えば、満族の服装の特徴はすでに漢族、達斡爾及び各族全てが受容し、“旗袍”と通称されている。そして旗袍の原型と流行した“旗袍”は時代を経るに従って発展し、皆が好む服装を形作った。」(敖拉・楽日徳 2009: 16「達斡爾歴史文化遺産抢救拾零三事」『達斡爾論壇』(下) 16-17) という。これが正しいとするならば、かつてのダフル人は満民族の旗袍を着用していたということになる。

しかし、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会の楽志徳氏は、2010年7月1日に、全国達斡爾学会の年次総会で配付した「関于達斡爾左襟服装及資料」という資料を配付した。その中で、「春秋戦国から今に至るまでの北方民族の中で唯一達斡爾人だけが左襟の服装を伝承し保存している」として、中国の史書『魏書』や現在の内モンゴル自治区バーリン左旗にある遼上京遺跡から出土した契丹人の左襟の服の写真、遼代墓壁画に描かれた女性の服、17世紀にダウル人の現住地であるダウリヤ地方を通過したロシア帝国の使節が書いた旅行記に載せられた絵画など、数点の証拠を示して、「達斡爾の服装文化は古来の民族服の特色を伝承し発揚すべきである。独特の左襟服を提唱する。お考えありたい。」と結んでいる<sup>125</sup>。筆者は2011年6月27日にモリダワー達斡爾族自治旗で開催された第二屆達斡爾民族服飾デザインコンテストに参加し、左襟の服を目撃している。さらに、2013年にはモリダワー達斡爾族自治旗人民政府の決定により「“左襟達斡爾”及び第三屆中国達斡爾族

125 楽志徳氏提供「関于達斡爾左襟服装及資料」2010年7月1日。

民族服飾デザインコンテスト」の開催が予定されている<sup>126</sup>。このコンテストの目的は、「達斡爾民族を大いに発揚し、達斡爾族の服飾を発掘・保護・伝承し、文化大旗を建設するプロセスを加速するため」であるという。

これによって、モンゴル民族や満民族の服に似たそれまでの民族衣装との差別化が成し遂げられた。

### 3. 達斡爾民族の伝統文化

ここまで、達斡爾民族の「伝統」に位置づけられている事柄として、文学、祭典、体育活動、踊り、食品、服装を取り上げ、これらの文化要素が達斡爾民族によって、彼らの伝統として考えられるに至っている状況を明らかにした。

ここからは、ホブズボウムの「伝統の創造」に関する議論の要点に沿って、考察を展開していこう。筆者が、ここで取り上げるべきと考える「伝統の創造」の要点は、

- 歴史性と現代創作性（“捏造”も含む）…「伝統」とは長い年月を経たものと思われ、そう言われているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたものもある。
- 過去遡及性と反復性…「伝統」とは新しい状況に直面した際古い状況に言及する形をとるか、あるいは半ば義務的な反復によって過去を築き上げるかといった対応のことである。
- 永久不変化…伝統の近代世界の恒常的な変化および革新と、社会生活のすくなくともある部分を永久不変のものとして構造化しようとする試みとの対照性である。

これら三点である。

#### 1) 達斡爾民族の文学

達斡爾民族の文学はウチュンを例に考察した。ウチュンをまとめた『達斡爾族伝統詩歌選訳』によれば、達斡爾民族の民間に珍藏されてきたウチュンとは、かつてのダフル人が清代の康熙年間から学んでいた満洲語を記録する満洲文字を用いて記録されたものであるというが、『達斡爾族伝統詩歌選訳』に採られたもっとも古い作品は清代乾隆年間のものである。また、編者らは民間で老人や民間芸人が口述する作品を収集して『達斡爾族伝統詩歌選訳』に収録している（奥登挂、呼思樂 1991：3）。その一方、現在も歌い続けられるウチュンの中には自作自演になるものもある（卓仁・孟大偉 2008：669）。よってウチュンは「歴史性のある伝統」であることは間違いないが、現在もなお創作上演され続けているものもある点で現代創作性も有している。しかし、これが民族の伝統として“捏造”されていると言うことはできないだろう。ウチュンは1999年以降、モリダワー達斡爾族自治旗文化館によって幾度にもわたって繰り返し演劇が開催されており（卓仁・孟大偉 2008：

<sup>126</sup> <http://www.nmr.com.cn/2013/0516/167543.shtml> [2013年5月27日アクセス]

669)、この点で反復性がある。ウチュンがもつ歴史性と現代創造性、そして反復性によって、この達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の文学とそこに描かれている彼らの社会生活は永久不変化がなされていると見ることができる。

## 2) 達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の祭典

達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の祭典については、本節の二の部分で達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の斡包節を事例とし考察した。ダフル人たちがこのような祭りを中国建国前から行っていたことは資料に明確に見えていることである。そして、モリダワー達斡爾学会員はこれを民族の伝統であると明確に認識している。しかし、現在の斡包節で行われている各種行事の中には、彼らが伝統であると認めている事柄をコンテストの形にして存在させているものや、近年の研究成果によって伝説上の人物とされてきたシャージガルディ・ハンを實在の祖先としてそれを祭っていることなど、現代になって創作した部分がある。達斡爾民族の斡包節は、2004年から旗政府主催で毎年開催されているので、半ば義務的に反復しているものである。斡包節には各種コンテストに見られるような新要素が加わっているが、斡包を祭るという行為自体は何一つ変わることなく行われており、これによって伝説上の人物とされてきたシャージガルディ・ハンを彼らの祖先として永久不変のものとして行うことができる。

## 3) 達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の体育活動

達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の体育活動については、boikoo とホッケーを例に考察した。達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>が出自したとされる契丹人が建てた遼代から契丹人たちには棒で球を転がして打つ遊戯慣習があったことを史料によって明らかにし、さらに、これが、現在も達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>が楽しんでいるboikoo、そしてオリンピック競技にもなっているホッケーと基本的に同じ競技方法であると主張するにとどまらず、boikoo は“古いホッケー”であるとまで述べる。このことから、boikoo には遼代球技に遡るといふ歴史性がある。そして、boikoo は毎年の達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の斡包節でも実演競技されているので、半ば義務的に反復しているものである。boikoo は歴史的には契丹伝来の球技とされ、現代的には世界で広く行われているいわゆるホッケーと関連づけられている。この点でboikoo は永久不変の構造を有するものとなっているばかりでなく、これを通じて、達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>が契丹の後裔であるということも永久不変の構造を有するようになっているのである。

## 4) 達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の踊り

達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の踊りについては、今では、達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の踊りと言われている魯日格勒を事例として考察した。本章の第二節で言及したように、もとは1950年代に民族識別を行う前からダフル人の民間で踊られていたものであるが、1950年代に民族文化活動を行った時には、民族文化幹部 OM さんが田舎で収集した踊りであった。これが、1980年代以降は集

団舞踊化され、達斡爾民族の民族伝統踊りとして見なされ<sup>127</sup>、各種の民族文化活動として演じられている。現在、モリダワー達斡爾族自治旗の達斡爾学会には2008年に「魯日格勒」老年舞踊隊が組織され、達斡爾民族の民間の伝統的踊りを伝承する任務を担っている。「魯日格勒」老年舞踊隊は2008年5月に「民歌中国」という番組に参加した。また、モリダワー達斡爾族自治旗テレビ局が主催した「達斡爾族民歌演唱會」、アルラ鎮で開催されたモリダワー達斡爾族自治旗成立50周年祝賀活動にも参加した。さらに、民族文化を伝承する任務を担って、小学生たちに「魯日格勒」を教える活動も展開している。以上に述べたように、魯日格勒は達斡爾民族の伝統舞踊として、さまざまな活動で演じられ、伝承されている。この舞踊は千百年前からあったとされ、その歴史性が強調される（「学原生态“魯日格勒”舞」『達斡爾論壇』（上）内蒙古文化出版社2010年373-374）。しかし「魯日格勒」は今でも、集団舞踏の形で創作され、達斡爾民族の中で演じられているのであり、この点で歴史性と現代創作性が認められる。また、筆者の調査によれば、夏の時には、モリダワー達斡爾族自治旗ニルギ鎮にあるイラン広場でこの踊りが毎晩民衆、とくに老人たちによって踊られている。このことから考えると、「魯日格勒」は日常的に反復されていることは明らかである。このような老人たちの「魯日格勒」は、上演会や政治的式典のような機会に合わせて演じられるものとは異なり、“原生态（自然の生態そのままの）”の「魯日格勒」であり、これを学習しようという運動が起こっていることから（「学原生态“魯日格勒”舞」『達斡爾論壇』（上）内蒙古文化出版社2010年373-374）、さまざまな場面で踊られるようになった伝統舞踊「魯日格勒」の変化に対置すべき永久不変化が試みられていると考えることができる。

##### 5) 達斡爾民族の食品

達斡爾民族の民族食品としてはクムビルを例に考察した。クムビルという植物を食べる習慣は新中国成立以前から存在した。池尻登も、クムビルがダフル人のよく食べる植物として、「以上の外に野生の植物を食用に供して居るものは少くはない。興安嶺附近は長い凍結季から夏になるのが實に早く、春が非常に短い為、草の萌え出る時は一勢であつて生育が早い。従つて一般に其の頃は葉が柔らかなので大程のものは食用に供することが出来る、蒲公英、オホバコ、柳蒿菜（クムビル—筆者注）、珍麻菜、ノビル、キスゲ、百合の花弁等は野草の中で最も多く利用されて居るものである」と記録している（池尻1943:122）。以上から見れば、ダフル人の中にはクムビルを食べる習慣は古くからあったことは間違いないので、確かに歴史性は存在する。しかし、上の池尻の記録に見えるように、これ以外にもよく食べる植物があったので、それほど特別な植物ではないのだが、上掲のとおり、今では、達斡爾民族人はクムビルだけを「何世代にもわたって達斡爾民族が愛してきた」

<sup>127</sup> 魯日格勒の代表的研究者である欒延琴は、魯日格勒を「民族の特色が豊かな伝統的民間舞踏」とであると明言している。（欒延琴2009:255「達斡爾族民間舞踏“魯日格勒”」楽志徳、娜日斯『達斡爾論壇』（下）内蒙古文化出版社:255-276）

というようになっている。ここに現代における創作性を看取できる。さらに言えば、1987年からクムビルの祭りを作って、達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の地方で実施しているが、この行事にも現代における創作性を看取できる。また、「何世代にもわたって達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>が愛してきた」という言及の中には、「何世代にもわたって」という言明が見えており、ここに過去への遡及が認められる。また、毎年開かれるクムビル祭りには明らかな反復性が存在する。かつてはいろいろな植物を食していたが、それが今ではクムビルに限定され、それが「天然の優れたエコ産品」（「山野菜産品紹介」：197。楽志徳、娜日斯『達斡爾論壇』（下）内蒙古文化出版社）という現代的な価値を付与されていることから、クムビルを中心とする達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の食習慣が変化していることは間違いない。ここで着目したいのは「天然」「エコ産品」という今後も揺らぎの生じる可能性の少ない価値付けがなされていることである。このような価値付けに、クムビル食を永久不変のものとして構造化する試みを読み取ることができると考えられる。

## 6) 達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の衣装

民族衣装<sup>mǐn zú</sup>については、筆者の観察では、現在、達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の女性の民族衣装<sup>mǐn zú</sup>とされているものは、満民族<sup>mǎn zú</sup>の女性の服と似ており、男性の民族衣装<sup>mǐn zú</sup>はモンゴル民族<sup>mǒng gǎl zú</sup>の男性の服と似ている。今の内モンゴル東北地方では、モンゴル人も含めた人々は、清朝の時には満州人の衣服の影響を受けていることは事実である。筆者の出身地であるナイマン旗も今の内モンゴルの東北地方にあるが、実祖母も満州人の様式の衣服を着用し、満州人の女性がする髪型であった。また、清朝の時には、朝廷で官吏を担ったダフル人が多かったので、満洲の服装を含む満洲文化を受容することも理解が難くない。しかし、ダフル人が達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>と識別された後、積極的に自己の民族文化<sup>mǐn zú</sup>を発展させるために、多くの事物の前に「民族<sup>mǐn zú</sup>」という言葉<sup>mǐn zú</sup>を付して使っており、民族衣装<sup>mǐn zú</sup>もこのような例の一つである。こうして民族識別以降、彼らは満洲様式（女性用）とモンゴル様式（男性用）の衣装を達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の民族衣装<sup>mǐn zú</sup>と呼んできた。今では、民族文化活動<sup>mǐn zú</sup>では達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>は民族文化活動<sup>mǐn zú</sup>の折には達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の衣装と呼ばれてきた満洲様式（女性用）とモンゴル様式（男性用）の服を着用している。しかしが、達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>衣装と呼ばれてきた服は、達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の居住地ごとに微妙な違いがあって、民族多様であり、各居住地ではそれぞれの地の特徴を有する民族衣装<sup>mǐn zú</sup>を専門に作る場所がある。モリダワー達斡爾族自治旗<sup>mǐn zú</sup>では民族文化<sup>mǐn zú</sup>を宣伝するために2010年から二度にわたる「達斡爾民族服飾デザインコンテスト」を行っており、2013年にはまで第三回目のコンテストが予定されている。上述したように、三回の「達斡爾民族服飾デザインコンテスト」を行っている。第一回と第二回のコンテストでは伝統の達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の伝統的服飾<sup>mǐn zú</sup>と現代的な達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>の服飾<sup>mǐn zú</sup>が出品されたが、第一回の作品設計理念は「“魅力的な達斡爾”をテーマとし、達斡爾族の伝統服飾の要素を体現するか、またはその原始的で素朴な風格を遡るか、あるいはそれに刷新、発展の理念を与えたものでなければならず、斬新さ、独特さ、美しさを設計するという目的に達する。」とあり（「關於舉辦首屆達

鞏爾族服飾設計大賽的通知」阿如娜「達鞏爾族服飾文化現狀的人類学闡釈」内蒙古大学民族学与社会学学院碩士論文 66-68. 2012年5月12日)、第二回は「“多彩な達鞏爾服”をテーマとし、達鞏爾民族の服飾の“左襟”文化の特色を突出させ、達鞏爾族の伝統服飾の要素を体現するか、またはその原始的で素朴な風格を遡るか、あるいはそれを刷新、発展の理念を与えたものでなければならず、斬新さ、独特さ、美しさを設計するという目的に達する。」(「關於舉辦“多彩達鞏爾服”暨第二屆中國達鞏爾族民族服飾設計大賽的通知」<http://mldw.nmgnews.com.cn/system/2011/04/06/010575713.shtml#> [2013/6/19]) とある。下線部に見えるようにこの二回のコンテストでは、「達鞏爾族の伝統服飾の要素を体現する」ことが重要視されていることが明らかである。また、二重下線部には「達鞏爾民族の服飾の“左襟”文化の特色を突出させ」ることが明記されており、第二回からは「左襟」と伝統服飾とが結びつけられていることがわかる。この「左襟」と伝統服飾との結合は第三回目のコンテストのタイトル「“左衽達鞏爾”暨第三屆中國達鞏爾族民族服飾設計大賽」にも明確になっている。そしてその作品設計理念では、「今回の服飾コンテストは現代と伝統との有機的結合というこの一つのテーマを突出させ、達鞏爾族の伝統文化の基礎の上に、民族服飾の現代生活や仕事における応用と普及を積極的に探求する。各出品作品には達鞏爾族の服飾の要素と現代服飾文化を十分に結合させることを強く求め、斬新さ、独特さ、美しさを設計するという目的に達する。」(「關於舉辦“左衽達鞏爾”暨第三屆中國達鞏爾族民族服飾設計大賽的公告」<sup>128</sup>とあって、下線部に見えるように「現代と伝統との有機的結合」であり「達鞏爾族の伝統文化の基礎の上」とすることを目指している。資料と実見した範囲で言うならば、第一回と第二回のコンテストに出品された達鞏爾民族の民族衣装とされる衣装には満洲人とモンゴル人の衣服の要素が依然として濃厚であるが、現代の達鞏爾民族の人々による創造も含まれていると筆者は考えている。

達鞏爾民族の民族衣装の伝統化においては、第二回目のコンテストから強調されるようになった“左襟”が重要な役割を果たしている。この“左襟”とは、達鞏爾民族契丹出自説に基づく考え方であり、これをもって“左襟”の達鞏爾服は歴史性を有することができるが、この契丹出自説が強調されるようになったのは1980年代以降の現象であるので、この説と結びついた“左襟”には高いレベルの現代創作性が認められる。過去遡及性に関して言うと、やはり“左襟”が重要な役割を果たしている。“左襟”を有した達鞏爾民族衣装は、それまで達鞏爾民族衣装と呼ばれてきた服に見える満洲やモンゴルの要素を時代的にさらに遡った伝統を帯びることができたのである。このような民族服飾のコンテストが今年の第三回を含めて複数回開催されることに反復性を見いだすのは容易である。達鞏爾民族の民族衣装と言われるものは、筆者が観察するところでは、満洲的あるいはモンゴルの要素を多く含んでいるが、それは、コンテストの実施を通じて変化と革新を遂げつつある。そのような変化と革新の中にあつて登場した“左襟”の達鞏爾民族衣装は、彼らが

---

<sup>128</sup> <http://mldw.nmgnews.com.cn/system/2013/04/08/010949880.shtml#> [2013/6/19] アクセス。

契丹の後裔であるということを永久不変のものとして構造化しようとする試みに他ならないと考えられる。

写真 4



“右襟”と“左襟”がはっきり見える達斡爾民族の服装、2011年6月26日、筆者撮。

写真 5



(「ファッションブルな民族男性服」“多彩達斡爾”服飾展演暨第二届中国達斡爾民族服飾設計大賽 [http://www.dawoer.org/html/2011/jiaoliuhuodong\\_1209/135.html](http://www.dawoer.org/html/2011/jiaoliuhuodong_1209/135.html)[2013/06/18])

## 小結

本章では達斡爾民族と識別された後の達斡爾民族の民族としての創造について考察を行った。ここで筆者の言う「達斡爾民族の民族としての創造」とは、達斡爾民族の創造と達斡爾民族文化の創出を合わせ含めている。

ここで考察したことによれば、達斡爾民族は国家の政策によって創られた民族である。彼らダブル人は、1956年に国家によって単一の民族として認定された後に、民族名称を指定され、民族自治地域を与えられ、国家によって民族幹部が養成された。彼ら自身は民族文化を創出しその伝統化を行った。このような過程を経て民族としての創造が進行した。



この民族としての政治的創造の作業は、1950年代に始まり、1966年から1976年までは文化大革命の影響で一時停止したが、1970年代末から1980年代以降の中央政府の民族工作の展開に伴って作業が復旧した。そして、1980年代以降における民族創造の作業は1950年代から60年代の初期段階における創造に比べると盛んになり、発展期に入って現在に至っている。

また、達斡爾民族は政治的に創造されただけでなく、自らの民族の歴史・文学・風俗・習慣などの文化的要素を創出してこれを伝統化することで民族としての文化的内実を充実させたことから、このような創出した文化によって民族として創造されたと見ることが出来る。つまり、文化的にも民族として創造された側面があると言える。政治的な創造と同じく、文化の創出による文化的な民族創造も文化大革命の後になって発展期を迎え現在に至っている。1950、60年代と比べると、学者たちの研究、政府の文化活動の展開は一層盛んに展開しただけではなく、民衆の参与も多くなった。さらに現在もなお新しい伝統が作られている状況にあり、より新しい民族文化が達斡爾民族の人々に受け入れられている。

つまり、達斡爾民族の創造は政府だけによるものではない。達斡爾民族側の人々、主に政治エリートと知識人たちが大きな役割を担ったことは確かである。しかし、達斡爾民族の民族文化は何らかの形で政治が関与することで初めて創造されたことも確かなのである。文化も政治活動に利用されて作られると言うことである。

民族の特徴は民族の明確な名称と民族文化を通じて表現される部分が多いことは言うまでもない。よって、達斡爾民族の政治的創造と民族文化の創出は、達斡爾民族が自らの存在を他民族の人間に向けてだけでなく、自民族に向けて主張する手段を整えたという点で大きな意義があると思われる。なぜならば、このような創造された民族は、与えられた民族名称と創出された民族文化を通じて、達斡爾民族の人々が自分たちが何者であるかを認識するようになった、つまり達斡爾民族としての明確なアイデンティティの形成に大きな役割を果たしていると考えられるからである。この点は次の第3章で詳述する。

### 第3章 達斡爾民族のアイデンティティ

#### はじめに

達斡爾民族が政治的に創造され、公的な民族の名称と民族の身分を獲得したことで、達斡爾民族は中国人民が国家権力を行使する立法機関であり最高権力機関でもある全国人民代表大会に最低でも一名の代表を送り込む権利を有するようになった<sup>129</sup>。また、民族の伝統的な文化が創出されたことで、達斡爾民族が自らの存在を内外に向けて示し主張する手段あるいはきっかけを持った。つまり、民族の名称と身分、民族の伝統的な文化は、彼ら達斡爾民族の人々の「達斡爾民族としてのアイデンティティ形成」と少なからざる関係を持つであろうことは想像に難くない。

本章では、「達斡爾民族のアイデンティティ」という総称的なタイトルの下、「達斡爾民族としてのアイデンティティ形成」を問題意識として設定し、第1節では、識別前の彼らの「ダフル人のアイデンティティ」（下線筆者。以下下線は省略する）について考察し、第2節では、識別後の彼らの「達斡爾民族としてのアイデンティティ」（下線筆者。以下下線は省略する）について考察する。これを通じて「ダフル人のアイデンティティ」から「達斡爾民族としてのアイデンティティ」への変遷過程を明らかにして、国家による民族としての公定が彼らのアイデンティティ形成の根源的動因であることを明らかにする。

#### 第1節 ダフル人のアイデンティティに関する考察—とくにその多様性について

暁敏は論文「近代におけるダフル人の政治活動—そのアイデンティティに関する一考察—」において、「彼ら（ダフルの人々—筆者注）は近代において、とりわけ中国政府が民族識別を実施する前の段階では、自らを『ダフル族』と定義することはなかった。ダフル語では、自分たち、他民族あるいは人種を主に『Ku（人）』と呼ぶ一方、『Aiman（民族、族）』という言葉は満州語からの借用語で、ほぼ最近の概念であり、実際にはほとんど使われていない。言い換えれば、ダフル語にはもともと『民族』という概念がなかったものと思われる」（暁敏 2008：3）と述べている。同じ状況はモンゴル民族でも見られる。

<sup>129</sup> 2012年4月27日の第十一届全国人民代表大会常務委員会第二十六次会議を通過した「第十二届全国人民代表大会少数民族代表名額分配方案」によると、達斡爾民族は内モンゴル自治区から一名の代表を出すとして規定されている（「授權發布：第十二届全国人民代表大会少数民族代表名額分配方案」

[http://news.xinhuanet.com/politics/2012-04/27/c\\_111857213.htm](http://news.xinhuanet.com/politics/2012-04/27/c_111857213.htm) [2013/06/24]。第十二届全国人民代表大会には達斡爾民族を代表して内モンゴル代表団の中にモリダワー達斡爾族自治旗長の索曙輝が加わった（「索曙輝：情牽莫力達瓦達斡爾」

[http://www.npc.gov.cn/npc/zgrdzz/2013-03/27/content\\_1790394.htm](http://www.npc.gov.cn/npc/zgrdzz/2013-03/27/content_1790394.htm) [2013/06/24]）。

筆者の祖母も日常ではモンゴル人の集団を Monggol hun (モンゴル人—筆者注) というが、Monggol undusuten (モンゴル民族—筆者注) ということがなかった。しかし、この状況は民族識別活動の展開によって変わり、ダフル人は達斡爾民族、モンゴル人はモンゴル民族のように、国家が定めた民族としての名称を自称するようになった。

では、民族識別以前のダフル人の場合どうか。すでに第 1 章第 2 節の 1. の 1) で明らかにしたように民族識別以前に一部のダフル人幹部の中には、モンゴル族とは異なる単一の民族としての「ダフル族」という意識が存在した。また、序論では、ダフル人には「ダフル」以外に、「ダフル・ソロン」、「ダフル・モンゴル」という自称が一部のダフル人エリートの著作に見えていることに言及した。これら三つの自称は彼らのアイデンティティにどのような影響を与えたか。このような問題意識も含めて、本章では、まずダフル人のアイデンティティについて考察し、ついで、ダフル人のアイデンティティはただ一つに定義できるものではなく、実は多様であったことを明らかにしたい。

本節では、ダフル人のアイデンティティについて、以下のような問題を設定して論じたいと思う。まず、第 2 章で簡単に論じたことだが、ダフル人や達斡爾民族の研究者たちによる、自分たちの出自や族源を探求する活動は、清朝期後半から末期にかかる咸豊年間を皮切りに始まり、現在もなお盛んに議論されている。ここではこのような出自や族源の探求活動を、彼らには「われわれはもともと何者であるのか」ということを明らかにしたい欲求が早くからあったものとしての表れと捉え、彼らダフル人がどのような出自を見いだしてきたのかを明らかにする。

暁敏は、「近代におけるダフル人のアイデンティティを理解するには、当時のダフル人有力者の政治活動とその意義を理解する必要がある。その重要なポイントは、彼が自分たちを単一民族と認識して行動していたのか、あるいはモンゴル人として活動していたのかということである」（暁敏 2008 : 7）と論じている。彼によれば「近代におけるダフル人の政治活動を見ると、必ずしも『ダフル族』という単独民族として行動したのではなく、むしろ『モンゴル』を前提として、モンゴル人として政治活動を行っている。しかし、中華人民共和国成立後、共産党の民族政策の下で『脱モンゴル』という意識が高まり、民族識別によってダフル人は単一民族として認定された」と述べ（暁敏 2008 : 4）、さらに「ダフル人にはモンゴル人意識が強く、モンゴル人として行動し、自ら『ダフル・モンゴル』と呼んでいた」（暁敏 2008 : 11）と論じている。つまり暁敏は、ダフル人がモンゴル人のアイデンティティを持っていたと主張している。しかし筆者は、ダフル人のアイデンティティを再検討をする必要があると考えている。なぜならば、暁敏がその主たる研究方法として採用した、政治エリートの活動のみによって、ダフル人はモンゴル人のアイデンティティがあったと結論できるかという点に疑問がある。以下の部分で筆者は、文献資料とインタビュー資料を結びつけて、ダフル人のアイデンティティについて考察を行いたい。

## 1. 文献資料に見るダフル人エリートのアイデンティティ

清朝後半からダフル人のエリートたちは自分の出自について観察を行っている。つまり、ダフル人エリートたちは「自分たちがもともと何者であるのか」を探求し確定しなければならない何らかの必要性があったことを示している。

### ①華靈阿

序論でも触れたように、ダフル人は清朝の時には今のエヴェンキ民族<sup>ᠡᠪᠡᠩᠬᠢ</sup>とオロチョン民族<sup>ᠣᠷᠣᠴᠣᠨ</sup>と一緒に「ソロン」と呼ばれた。このことと関係のある「ダフル・ソロン」という自称があったことは、華靈阿の『達斡爾索倫源流考』（1833年）から知られる。

清朝の道光年間（1821～1851年）から咸豊年間（1851～1861年）に生きたダフル人エリート華靈阿は、管見の限り、ダフル人の出自に興味を持って学術的探求を行った最初期の人物である。尼爾基屯（今のモリダワー達斡爾族自治旗の尼爾基鎮）の人であり、道光初年に布特哈八旗<sup>130</sup>の官吏を務めた人物であった（中国達斡爾族人物録編委会：421；満都爾図：669）。その著『達斡爾索倫源流考』は満洲語で書かれたものである。この著作で彼は、「ダフル・ソロン」と自称し、「私たちダフル・ソロンの源を記録した文献は見つけられなかったが、本当に、源がないということはない」（華靈阿 1977：1）と論じて、ダフル・ソロンの出自を唐代の黒水国<sup>131</sup>であると論じた（華靈阿 1977：29）。この著作は、ダフル・ソロンの出自を明らかにしようと試みたものであるが、上引の下線部に見えるように、華靈阿が「私たちダフル・ソロン」と自称したことは明らかである。道光・咸豊年間、ダフル・ソロンと呼ばれた華靈阿には「ダフル・ソロン」というアイデンティティがあったといえる。

### ②郭克興

郭克興（1892～？）は、黒龍江省訥河県満那屯の人で、民国政府の交通部、陸軍部で役人を務めた。彼の『黒龍江郷土録』（1926年）所収「達呼爾記略」では、

ダフルとは今の黒龍江省の部族の名称である。旧名は大賀、系は華夏に出で、中国の神明の裔、五帝以降、国を最も長く伝えた。（中略）黒龍江省の民族をいうと、索倫がこれであると考え、また、それは満洲や蒙古であるとする人もいる。ダフル人は索倫の強力な軍団を通じその名は海内を震わせ、満・蒙が中原を支配したことを経て、索倫・満洲・蒙古として自ら誇ったが、自己のことを忘れた。悲しいことだ。数々の典故は祖を忘れ、左氏の譏る所である。年代が遠いほど考証が難しく、記述がない。だからダフル部族はますます聞くことがない。そこでここで墨をすり筆をふるって『達呼爾記略』を書いて、ほかの書籍を論じて正し、国の人と索倫・満洲・蒙古とし

<sup>130</sup> 1731年、バトハン（布特哈）地域のエヴェンキ、ダフルとオロチョンは「布特哈八旗」として、清朝の政治組織に組み込まれた。

<sup>131</sup> 唐の時代に黒龍江地方に存在した一つの国。

て自称しているダフル人に伝える。(『達斡爾資料集 第一集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1996 : 337)

という。この記述からは彼が、“索倫・満洲・蒙古として自称しているダフル人”がいることを認めた上で、下線部から読み取れるような強いダフル人のアイデンティティを持って「ダフル人は遼代の契丹から来た」(『達斡爾資料集 第一集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1996 : 338) と論じている。

### ③阿勒坦噶塔『達斡爾蒙古考』と徳古来

阿勒坦噶塔(1900~1948年)は、東布特哈(今のモリダワー達斡爾族自治旗)の人である。1933年にモンゴル人民共和国の中央党校で働いた(孟志東 2008 : 385)。1931年に『達斡爾蒙古考』を著した。この書物において阿勒坦噶塔は、自分がどのような集団に所属する者であるかを明確には述べていないが、わずかに、

数部の典拠では祖先を忘れて、左氏の譏る所である。従って、蒙古人の中の民族の源を深く葉を茂らそうと思うならば、水を飲んでその源を思い、民族の起源に深い認識と基礎の観念を立て、心の力を集めて、独立して阿らないという神祖の指導の旗の下で共同して奮闘し、一切の混合別裔の諸説を打倒し、分離の危機から離れる。そうすれば、私たち蒙古の六百年前の黄禍神鞭の綽名は、二十世紀で復活するのは難しくない(阿勒坦噶塔 1933 : 37-38)

という部分に見えている「私たち蒙古」という表現からは、彼は自らをモンゴル人であると考えていたのであり、モンゴル人というアイデンティティを持っていたと考えることができる。一方、阿勒坦噶塔は、モンゴル人の分枝の一つとして「ダフル」を位置づけ(阿勒坦噶塔 1933 : 1)、「ダフル・モンゴル人」が、かつてモンゴルの一部であったことが史書に明記されている「白韃靼」の後裔であることを論証している(阿勒坦噶塔 1933 : 76)。これらを総合すると、阿勒坦噶塔にはモンゴル人のアイデンティティがあったと考えてよい。

また、本書『達斡爾蒙古考』に序言を寄せているダフル人の徳古来は<sup>132</sup>、自ら「私たち蒙古」(阿勒坦噶塔 1933「徳古来序言」: 1)と記していることから、彼がモンゴル人のアイデンティティを持っていたことが明らかである。さらに彼が、ダフル人はモンゴルの一部であるとの認識を持っていたことは、

---

<sup>132</sup> 徳古来(1909~?)。黒龍江省徳都県温察爾屯徳都勒哈拉の人。ダフル語を創造することを計画し、民族の教育事業を発展させた。1931年、モリダワーの軍閥に反対する活動の計画に参加した。1932年、満洲国の興安東省の政権を組織する活動に参加し、興安東省の総務課の課長になったことがある。1935年、満洲国蒙政部総務司の監察官を務めた。1936年、徳王の誘いを受けて、蒙古軍政府で財政署の署長を務めた。1937年、張家口の蒙疆聯合自治政府で財政部長と税務管理局局長、参議、清察権運総署の署長、経済部長、興蒙委員会第一副委員長、蒙古生活計画会合作部の部長等を務めた。1948年、台湾に渡り、蒙蔵委員会の副主任、立法院の委員を務めた。(満都爾図 2007 : 665)

チンギス汗の偉業は、ヨーロッパ・アジアを統一し、少数の民族によって多くの国を征服した。鞭は長くても馬の腹までは届かないというような力が及ばない情勢を作り出し、モンゴルの部落はヨーロッパ、アジアに分居した。ある者は当地の民族に同化され、ある者は同化されはしなかったが、様々な政治上の関係で、自己の民族との間にわだかまりが起こったので、現在なっている離ればなれでそれぞれ東西に分かれ、団結に大きな打撃を受けている。嫩江流域のダフル・モンゴルを事例として言えば、元朝の初期では、(各部落は一筆者補)あるいは互いに戦い、あるいは勢力拡張のため、各地に移動した、(ダフル部落は一筆者補)満洲の境内に到った。後、清朝が中原の主となり、ついにダフル部落を征した。(ダフル部落は一筆者補)多勢に無勢で敵わず、(清朝に一筆者補)編入され(各地に一筆者補)派遣された。彼ら(清朝一筆者注)によって数百年支配されたのち、また、彼の(清朝一筆者注)分枝の族である洪庫如すなわち索倫(ソロン一筆者注)と一緒に農耕・遊牧を行ったので、歴史と地理をよく習熟していない人々に、ダフルはツングースの一部と見なされた。(阿勒坦噶塔 1933「徳古来序言」: 1-2)

というように、ダフル・モンゴルという表記が見えることから明らかである。

阿勒坦噶塔と徳古来は自らを「ダフル・モンゴル」であるとは述べていないが、「ダフル・モンゴル」や「ダフル・モンゴル人」という呼称があったことは間違いない。

#### ④ 孟定恭

孟定恭(?~1943年)は、今のモリダワー達斡爾族自治旗の人である。清末民国初は西布特哈(今のモリダワー達斡爾族自治旗にあたる)の佐領、布特哈総管衙門<sup>133</sup>の筆貼式<sup>134</sup>、満州国の時に興安東省地方課の課長であった(満都爾図: 656)。孟定恭は、その著『布特哈志略』(1931年)で以下のように述べている。「“布特哈”という名称は清朝から始まった。即ち満州語の漢語訳では『狩獵』である。原住民が狩獵することからこのような名前がつけられた。この地方の中部は嫩江流域をまたぎ、西北は興安嶺と内蒙古の諸部落とつながり、東南は呼蘭河と北満洲に接している。原住民は索倫(ソロン一筆者注)、達呼爾という二つの部落に分けられている。索倫は満州語に連なり、満洲の北の一部である。達呼爾はモンゴル語に連なり、内蒙古の東北境部の達呼爾或は達虎里である」(『達斡爾資料集 第二集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998: 39)のように、ダフル人の情況を紹介している。さらに孟定恭はダフル人を「達呼爾部人」(『達斡爾資料集 第二集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998: 40)と表記して、ダフル人の情況紹介を続けた直後に、

<sup>133</sup> 清朝政府が設置した、黒龍江中・上流域に住むオロチョン人、エヴェンキ人、ダフル人を管理する専門機関。

<sup>134</sup> 清朝の官吏の呼称。満州語・漢語の翻訳官。清朝朝廷の各部、院、盛京五部、外省の將軍、都統、副都統の官署に配置された。満州人、モンゴル人、漢人の旗人が担った。

私たちの先祖は満洲語と満洲の文芸を学習し、遊牧と漁業を行い、歌を唱い、毎回の国家の国難に当たり、軍に命を果たし、武功は卓越で顕著だったので、名を紫閣に示し、世々優れた栄誉を享受し、とくに記録に値することに属し、記載は流れ伝わっている。この時勢の変遷と世運の転変に当たり、天ははじめて吾が族に復興の機を与えたか。ならば、これからのことを行うにはかつてのこを受け継ぐべきなのに、若干の典籍がどうして志を示そうか。(『達斡爾資料集 第二集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998 : 40)

のように記し、私たちの先祖が満洲の文芸に通じ、牧畜漁労に従事し、清朝においてめざましい武功を立てたことや、清末民国初の困難な時期に吾が族が復興の機会を得ていることを記している。ダフル人の状況紹介の直後に上のような引用文が見えているという文章の流れから考えて、私たちの先祖や吾が族がダフル人のことを指していることは間違いない。このことから孟定恭にはダフル人のアイデンティティがあったと考えることができる。

ダフル人の出自について孟定恭は「達呼爾人はモンゴル語によれば、純粋に唐代の蒙兀室韋、契丹の貴族である遼代の後裔である」(『達斡爾資料集 第二集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998 : 43) と述べている。

## ⑤ 欽同普

欽同普(1880~1938年)は今のモリダワー達斡爾族自治旗の人である。西布特哈総管衙門<sup>135</sup>の筆貼式や佐領、満洲国の時には布特哈公署教育課長を務めた。彼はその著『達斡爾民族志稿』(1938年)で、

私たち達斡爾族<sup>136</sup>は、われわれの満洲国の紀元二百八十年前の時(即ち清朝の康熙以前)、黒龍江の上流に住んでいた。村に住み畑を作り、あわせて牧畜狩猟を生業とし、部族として分けられて、自然な生活を営んでいた。政治と文化については言うべきことはまだない。従って、以前の経過(歴史一筆者注)は史書に記録されなかった。後人は詳細な事情を知ることができなかった。論者は遼代の後裔と論じているが、確実な証拠がない。本族の人々の口伝によれば、達斡爾は昔では、西喇木倫と哈喇木倫地方(即ち今の内モンゴバ林右旗の所)である。薩吉哈爾的汗は達斡爾の部落長である。戦いを避けて居を黒龍江に移したと言われる。これは近古の歴史である。その前の歴史はさっぱりわからない。疑わしい処が多い。この文章は、資料が少なく、集めることは難しかった。しかし、先人の事跡を記述することは後人の責任であるが、放置したままならば、恐らく、時間が長くなるほど、ますます廃れる。どうして遺憾なこと

<sup>135</sup> 1906(光緒32)年に清朝はそれまでの布特哈副都統を改め、嫩江を境に東と西の布特哈総管衙門をおいた。今の大興安嶺地区は西布特哈総管衙門の管轄に入った。

<sup>136</sup> 当時の「族」は今の民族と区別がある。ここで使っている「族」は一つの人種のグループを指していると筆者は考えている。

でないだろうか。品位の低さを隠さず、国史の教科書を引用し、遼代と金代の起源の歴史を抜き出し述べ、達斡爾は遼代の後裔ではないということを証明した。(また、一筆者補) 箭内博士の著の翻訳である元代経略東北考、地理の関係、及び韃靼の民族の事跡等を抜き出し述べて、達斡爾は韃靼の種族であるということを示した。(『達斡爾資料集 第二集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998 : 172)

と論じている。ここで、欽同普が「私たち達斡爾族」と自称していることから、彼にはダフル人のアイデンティティがあることは明らかである。また、「達斡爾は韃靼の種族である」と記しているダフル人は韃靼、すなわちモンゴルの一民族であり、さらに「達斡爾は韃靼の遺部である」(『達斡爾資料集 第二集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998 : 185) と記しているところから、ダフル人は韃靼、すなわちモンゴルの後裔であると考えていたことも明らかである。欽同普は、ダフル人の出自はモンゴルであると論じてはいるが、彼はダフル人というアイデンティティを持っていたと言える。

## ⑥何維忠

何維忠(1909~1951年)はチチハル市善宝屯の人で、1937~1945年の間に興安東省の教育股長、殖産股長、教育課長、興安総省教育課長、民生課長、興安東省行署主任を務めた。彼の著した『達古爾蒙古嫩流志』(1943年)では、「達古爾」、「達古爾蒙古」という二つの呼称を使い、

チンギス・ハン以前は、部落が雑多であった。チンギス・ハンの統一を通じて、諸々の小部落は軍隊に編纂され(同時に各小部落は民族の伝統的制度を失った)、ただ、達古爾(ダフルー一筆者注)部は氏族として官長を分配された。(その官長は一筆者補)ダルガチ<sup>137</sup>(原文:達如花赤一筆者注)(後、ダルガ[原文:達古爾一筆者注]と変更した)と呼ばれた。故郷を守り、同時に黒龍江の上流の山林地域のツングース(索倫、鄂倫春)や他の各小部落の蒙古族を管理した。後、たびたび蒙古軍に編入され、比較的大きな部落は自分の種族の名称を保って、今まで残っている。後、(居住した一筆者補)地方によって変わった種族の名称は、すでに長く存在している。例えば、喀爾喀、科爾沁、達古爾(ダフルー一筆者注)等は、蒙古部の中では同一祖先の遺族である。このような新しい部族名称は、近時に知られるようになった。ただ達古爾(ダフルー一筆者注)部族だけは、元朝のダルガチが訛って達古爾(ダフルー一筆者注)になった。自由民という意味である。したがって今呼ばれている達古爾蒙古(ダフルー・モンゴル一筆者注)は蒙古の先祖である巴塔赤罕<sup>138</sup>の第十六代目にあたる孫海都の第三子である抄真干爾帖該の第六子の後裔である。(内モンゴル自治区社会科学院民族研究室、内

137 モンゴル帝国、元朝期の官職。チンギス・ハンが西方遠征を行った際、新たに占領した都市に代官として置き、治安維持や統治に当たさせた。

138 巴塔赤罕(バタチカン)とはモンゴルの古典『元朝秘史』に、チンギス・カンの先祖でモンゴル人の始祖であるボルテ・チノ(蒼き狼)とその妻コアイ・マラルから生まれた最初の子であるとされる。



蒙古自治区民族問題五種叢書編委會 1980 : 4-5)

と述べているところから、ダフル人が「蒙古の先祖である巴塔赤罕」から分かれた人々であるとするダフル・モンゴル同祖説を提示していることがわかる。また、何維忠の当時には「達古爾蒙古（ダフル・モンゴル—筆者注）」という呼称が現にあったことも明らかである。

何維忠は、自らが何人であるかに類する記述を残していないので、彼のアイデンティティを知ることはできない。しかし、何維忠の当時「達古爾蒙古（ダフル・モンゴル—筆者注）」という呼称があったということは明らかである。

### ⑦まとめ

以上、ダフル人のエリート知識人の著作から、彼らのアイデンティティや著作時期に存在したダフル人の呼称を拾い出した。まとめると下の表のようになる

《表5》ダフル人のエリート知識人のアイデンティティ

	アイデンティティ	呼称
華靈阿	ダフル・ソロン人	
郭克興	ダフル人	
阿勒坦噶塔	モンゴル人	「ダフル・モンゴル人」
徳古来	モンゴル人	「ダフル・モンゴル」
孟定恭	ダフル人	
欽同普	ダフル人	
何維忠	不明	「ダフル・モンゴル」

筆者作成

この表から、何維忠のアイデンティティが不明であるのを除き、ダフル・ソロン人、ダフル人、モンゴル人というアイデンティティが存在していたことが明らかとなる。また、彼らのアイデンティティに結びつけられる直接的記述はなかったものの、「ダフル・モンゴル」という呼称が存在していたことも明らかとなった。「ダフル・モンゴル」という呼称の存在が確認できる書物を書いた阿勒坦噶塔、徳古来、何維忠のうち、前二者はモンゴル人のアイデンティティを持つ者である。彼らは、自らがダフル人の中に含まれる姓（鄂嫩、徳都勒、何音）の者であることは間違いない。彼らは、そのダフルをモンゴルの一部、あるいはサブ・グループに位置づけているのである。論理的に考えれば、彼らのアイデンティティは「ダフル・モンゴル」であると言えるかも知れないが、実際に彼らが残した記述からは、そのようなアイデンティティは確認できないのである。

以上の文献資料に対する考察では、ダフル人のエリート知識人のアイデンティティを扱ったに過ぎず、より広い範囲のダフル人のアイデンティティまでも代表はできない。よって、以下の部分では、達斡爾民族<sup>manizu</sup>の高齢者の口述資料によってダフル人のアイデン

ティティについて考察を行いたい。

## 2. 口述にみるダフル人のアイデンティティについて

ダフル人のアイデンティティは実際にはどのようなものであったのか。それを知るためには、上節で述べた文献資料による研究に加え、今は達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>と識別されたの人々の考えを直接に知ることが肝要であると考え。ダフル人のアイデンティティを明らかにするために、筆者は内モンゴルのフフホト市、フルンボイル盟のハイラル市、モリダワー達斡爾族自治旗と黒龍江省チチハル市のムルス区、ホランエルギ区、日本でインタビューを行った。調査の対象は全て達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>人の老人であるが、職業はそれぞれ異なっている。インタビューでは、筆者は「ダフル・モンゴル」というサブ・グループ名称を巡って、雑談の形でダフル人のアイデンティティについて考察を行った。聞き取った内容は以下の通りである。

### 1) インタビュー内容

①BH さん（達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>人 80 歳 男 ハイラル市出身 学者 ハイラル市にてインタビュー 2009 年 1 月 13 日）

筆者：（ダフル人は一筆者補）いつからダフル・モンゴル人と言われましたか。

BH：日本人が来た後に、（ダフル人とモンゴル人の一筆者補）言語が近いので、（中略）日本人は（私たちを一筆者補）モンゴル人と呼びました。日本の時（満洲国期一筆者注）にはモンゴル（人一筆者補）と呼ばれ、解放（新中国成立一筆者注）後に達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>と識別されました。私たちハイラルのダフル（人一筆者補）は（ダフル人とモンゴル人を一筆者補）あまり区別しません。ダフル・モンゴルとモンゴルは同じです。（1950 年代一筆者補）民族と（言う概念が一筆者補）提示された後に、「ダフル・モンゴル」の「モンゴル」が無くなりました。ダフルになりました。昔、日本（満洲国一筆者注）の時に、モンゴルと言われました。今は、ハルチン・モンゴル、ホルチン・モンゴルとよく呼ばれます。ミンガド、モーミンガド（という名称一筆者補）があったでしょう。私たちはダフル・モンゴル（人一筆者補）をモンゴル（人一筆者補）と思いました。

②EB さん（達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>人 72 歳 男性 モリダワー達斡爾族自治旗出身 学者 神戸市でインタビュー 2008 年 12 月 10 日）

筆者：先生は小さい時にはモンゴル民族<sup>mǐn zú</sup>と自称しましたよね。

EB：いいえ。達斡爾（民族一筆者補）はモンゴル民族<sup>mǐn zú</sup>と別々です。違います。でも、学校と仕事の時にはモンゴル民族<sup>mǐn zú</sup>と書きました。民衆はモンゴル民族<sup>mǐn zú</sup>とは思いませんでした。達斡爾（ダフル一筆者注）人です。

筆者：モンゴル人の中のダフル人ですか。

EB：ただ達斡爾（ダフルー—筆者注）人です。でも、公には達斡爾民族はなかったですから、モンゴル民族と書いても、反対しませんでした。モンゴル民族と近いと思っていました。ダフルー・モンゴルと呼ばれました。五十年代の時に、単一民族と識別されました。これも正しいですよ。元々からモンゴル民族ではないです。

③MFさん（達斡爾民族人 男性 73歳 モリダワー達斡爾族自治旗出身 学者 フフホト市でインタビュー 2008年12月29日）

筆者：先生は、民族識別のことを知っていますか。

MF：これは1953年から始まりました。1955年に（ダフルー人は単一民族であるという一筆者補）文章を発表しました。当時は違う意見がありました。これは国家の政策と関係があります。清朝の時には（ダフルー人の一筆者補）偉い官吏と英雄がいました。中華民国の時には五族共和でしたから、他の少数民族は全部これら（五族—筆者注）の分枝でした。（ダフルー人は一筆者補）六族共和になりたかったのですが、北洋政府は同意しなかったのです。それで、個人の前途、民族の前途のために五族共和中のモンゴル族と近づいたのです。このようにしてダフルー・モンゴルになりました。（ダフルー人のエリート知識人は、一筆者補）この方面の書籍（ダフルー人はダフルー・モンゴル人であるということに関する書籍—筆者注）を著して、世論を作りました。これは一つの政治上の必要です。この状況は（19—筆者補）50年代まで続きました。モンゴル（民族）人は「あなた達はダフルー・モンゴルと呼ばれるならば、（あなたたちの一筆者補）人口は多くなるでしょう」と言いました。あの時（識別活動前一筆者注）にはダフルー人の政治家も多くいました。モンゴル族と共に努力しました。こうしてダフルー・モンゴル人（という名称—筆者補）が出ました。

筆者：では、1953年の識別の時に違う意見がありましたが、どうして単一民族と認定されましたか。

MF：国家によって認定されました。あれら文章（ダフルー人はダフルー・モンゴル人であるという書籍—筆者注）は1955年に発表されました。国務院が単一民族と認定したのです。1952年の時に、チチハルの龍江県で達斡爾（ダフルー—筆者注）自治区が成立しました。県の中の自治区です。郷のレベルです。名称は達斡爾（ダフルー—筆者注）自治区です。実は九一八（満州事変—筆者注）の偽満州国の時、日本人が中国を侵略する時、国外で働いた官吏の人あるいは学生たちはダフルー・モンゴルと言いました。公の書類の欄にはモンゴル族と書いていました。漢字では蒙系人でした。実は、これ（ダフルー人が公の書類の欄にモンゴル族と書くことは一筆者注）は矛盾していることです。政治の必要です。（故郷を離れている人が一筆者注）故郷に戻ったら、達斡爾（ダフルー—筆者注）は言いますが、達斡爾（ダフルー—筆者注）モンゴルとは言いません。

筆者：ダフル人ですか？ダフル・モンゴル人ですか。

MF：達斡爾（ダフル—筆者注）人です。

④OF さん（達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人 84 歳 女性 ハイラル出身 学者 フフホト市でインタビュー 2008 年 12 月 28 日）

筆者：ダフル人はいつからモンゴル人と言われましたか？

OF：偽満州国（満洲国—筆者注）はダフル人をモンゴル族に含めました。当時モンゴル族の中に達斡爾族（ダフル人—筆者注）が含まれました。あの時の民族関係は複雑でした。モンゴル族と言うけれど、自分は達斡爾族（ダフル人—筆者注）と知っていました。

筆者：達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族と識別される前のアイデンティティは何でしたか。

OF：あなたは、清朝の文献を見て（ください—筆者補）、官吏の方は達斡爾（ダフル—筆者注）人と呼びました。あの時、達斡爾（ダフル—筆者注）人はモンゴル語が基本的にできませんでした。私もできませんでした。読むことはできました。達斡爾（ダフル—筆者注）語で翻訳して、意味を理解しました。例えば、モンゴル語の irebai（来るという意味である—筆者注）は達呼爾語では iremvi です。あなたたちが、漢語を理解することと同じです。でも、モンゴル語と達斡爾（ダフル—筆者注）語は三十、四十%が通じています。文法がわかった後に、単語を覚えたらいいいのです。

筆者：貴方は、小さいときには、ダフル・モンゴル人と自称しましたか。

OF：あの時には民族<sup>m i n z u</sup>がはっきりしていませんでした。

筆者：モンゴル人はあなた達をダフル・モンゴル人と呼びましたか。

OF：達斡爾（ダフル—筆者注）だけです。外部に対しては達斡爾（ダフル—筆者注）モンゴル族と言いました。一般的には、モンゴル族と話せました。あの時には民族関係は大変良好でした。民族身分鑑別（識別—筆者注）の後、（それぞれの民族<sup>m i n z u</sup>を一筆者補）はっきり分けました。

⑤EC さん（達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人 70 歳 女性 チチハル出身 主婦 チチハル市ムルス区でインタビュー 2009 年 2 月 16 日）

筆者：あなたは蒙系人という言い方を聞いたことがありますか。

EC：知りません。

筆者：モンゴル人と接触したことがありますか。

EC：ありました。

筆者：いつ接触しましたか。

EC：先回（筆者が取材した 2008 年の二、三年前—筆者補）の、北京で行われた聯誼会<sup>m i n z u</sup>です。モンゴル民族人も正直な性格です。

⑥AR さん（達斡爾<sup>mǐn zú</sup>民族人 85 歳 女性 モリダワー達斡爾族自治旗の出身 農民 モリダワー達斡爾族自治旗アルラ郷でインタビュー 2011 年 8 月 29 日）

筆者：あなたは達斡爾<sup>mǐn zú</sup>民族ですか。

AR：ええ。

筆者：建国の時のことについて何を覚えていますか。

AR：建国した後は、生産隊が成立しました。各家族には一人の労働力がいました。年末には（彼らが生産隊で働いた分の一筆者補）穀物を分配しました。

筆者：1953 年の民族識別前、（ダフル人が一筆者補）モンゴル人に含まれていたことを知っていましたか。

AR：覚えていません。

筆者：モンゴル語が分かりますか。

AR：分かりません。

⑦WQ さん（達斡爾<sup>mǐn zú</sup>民族人 71 歳 男性 チチハル市のホランエルギ区の紅河村出身 退職教師 チチハル市のホランエルギ区の紅河村でインタビュー 2009 年 2 月 12 日）

筆者：おじいさんは、ハイラルに何年から暮らしましたか。何年間いましたか。

WQ：（19一筆者補）58、（19一筆者補）59、（19一筆者補）60 年、三年でした。あの時（1950 年代の末 1960 年代の初頭一筆者注）にはハイラルではビルがありませんでした。モンゴル族人（モンゴル人一筆者注）は蒙古の長衣を着て、道の辺りに小便をします。直接にしゃがみこんで、長衣で囲まれて、誰にも見えませんでした。

筆者：あの時（1950 年代の末 1960 年代の初頭一筆者注）には、ハイラルでは、達斡爾<sup>mǐn zú</sup>民族人は多かったですか。

WQ：あの時（1950 年代の末 1960 年代の初頭一筆者注）には、ハイラルには、達斡爾<sup>mǐn zú</sup>民族人は多かったです。南屯はエヴェンキ族自治旗でしたが、達斡爾<sup>mǐn zú</sup>民族人は多かったです。旗長はエヴェンキ（民族一筆者補）人、モンゴル語は上手でした。あそこの（ハイラル地方一筆者注）の達斡爾（民族一筆者補）人もモンゴル語が出来ました。あの地方ではモンゴル（民族）人が多かったです。ハイラル（地方一筆者補）の達斡爾語はあそこのモンゴル語と似ています。モンゴル語の発音があります。Ha と Ka とか。

筆者：達斡爾語はモンゴル語とそれほど似ていますか。

WQ：似ています。だから、一部分の人は達斡爾<sup>mǐn zú</sup>民族はモンゴル<sup>mǐn zú</sup>民族に来源があると考えていました。

## 2) インタビュー分析の結果

以上のインタビュー対象者の属性を表に示すと以下の通りである。

《表 6》達斡爾民族の老人によるダフル人のアイデンティティ

番号	略号	年齢	出身地	職業	アイデンティティ
①	BH	80 歳	ハイラル市	学者、定年退職	モンゴル人
②	EB	72 歳	モリダワー達斡爾族自治旗	学者、定年退職	ダフル人
③	MF	73 歳	モリダワー達斡爾族自治旗	学者、定年退職	ダフル人
④	OF	84 歳	ハイラル市	学者、定年退職	ダフル人
⑤	EC	70 歳	黒龍江省チチハル市 ムルス区	農民	ダフル人
⑥	AR	85 歳	モリダワー達斡爾族自治旗	農民	ダフル人
⑦	WQ	71 歳	黒龍江省チチハル市 ホランエルギ区	教師、定年退職	ダフル人

筆者作成

### (1) 出身地によるアイデンティティの差

以上のインタビュー内容から、まず、出身地によるアイデンティティの差を見てみよう。

七名の達斡爾民族の高齢者の中には、モリダワー達斡爾族自治旗の出身者は三名（②、③、⑥）、チチハル地方の出身者は二名（⑤、⑦）、ハイラル出身者は二名（①、④）である。

モリダワー達斡爾族自治旗出身の②の EBさんと③の MFさんは、ダフル人はダフル人であったと見ている。

チチハル市ムルス区出身の⑤の ECさんと⑦の WQさんからは、自分がダフル人であるとの語りを得ることはできなかった。しかし⑤の ECさんはダフル民族とモンゴル民族をはっきり区別している代わりに、彼女にはモンゴル人の分枝である「蒙系人」という言い方を知らなかった。⑦の WQさんは、達斡爾語はモンゴル語がよく似ていることを理由に、一部分の人は達斡爾民族はモンゴル民族に来源があると考えていたと述べているが、⑦の WQさん自身にはそのような考えはなかった。

ハイラル出身の①の BHさんは「ダフル人はモンゴル人である」と語った。彼自身はダフル人がモンゴル人であると思っけてきている。一方、①の BHさんと同じくハイラル出身の④の OFさんは、自分がダフル人であったというアイデンティティを持っている。しかし、彼女は「あの時には民族関係は大変良好でした。民族身分鑑別（識別一筆者注）の後、(それぞれの民族を一筆者補) はっきり分けました」とハイラル地方に住んでいる人々の親近性を承認しているが、民族識別後に明瞭な区別をつけたと語っている。筆者の経験

でも、ハイラル地方の達斡爾民族はモンゴル人との親近性によく言及する反面、モリダワー達斡爾族自治旗とチチハル地方の達斡爾民族人はモンゴル人とは区別があることに言及する。また、このような区別行為は、今の達斡爾民族の人々の日常の会話でもよく感じられる<sup>139</sup>。

このような状況に鑑みると、ハイラルのダフル人の中にはモンゴル人とダフル人という二つのアイデンティティがあった。一方、今のモリダワー達斡爾族自治旗のダフル人にはダフル人というアイデンティティが強くあった。チチハル地方のダフル人には「蒙系人」と言う言い方がなく、自分がモンゴル人と関係があると思ったことがない。このようにまとめることができよう。

## (2) 職業によるアイデンティティの差

次に、職業によるアイデンティティの微妙な差を見よう。ダフル人の中では、エリート知識人の持つアイデンティティ意識が普通の農民よりは強いことが、彼らの語ったところから感得される。⑤、⑥、⑦以外は全部学者である。「あなたは誰ですか」という筆者の質問に対し、学者ははっきり答えてくれたが、農民(⑤、⑥)と知識人(教員、⑦)はアイデンティティのことについてそれほど関心を持っていないような答えであった。⑤の ECさんは自分がダフル人であることを知ってはいるが、学者のように「私たちはダフル人である」というような明確な言い方はしない。⑥の ARさんは、筆者の質問に関心を持った様子はなく、新中国成立時の生産隊のことはよく覚えていたが、1953年の民族識別前にダフル人がモンゴル人に含まれていたことを知っていたかという筆者の質問に対して「覚えていません」と答えた。⑦の WQさんは、達斡爾民族をモンゴル民族とははっきり区別しており、ダフル人がモンゴル人に起源しているという話の存在は知っていたが、彼自身はそうは考えていない。

この、農民の持つアイデンティティ意識に関し、第2章の第3節の1.の部分でも取り上げたが、②の EBさん(学者)が以下のような興味深いことを話してくれた。

1953年のころ、(中央一筆者補)民族学院の調査団が(今の一筆者補)モリダワー(達斡爾族自治一筆者補)旗に調査に行った時、彼ら(調査団の人々一筆者注)は(当地のダフル人に一筆者補)「何民族か」と質問しましたが、誰も何民族であるかを言うことができず、年寄りたちは、「わたしたちはわかりません。本当にわかりません。モンゴル民族なのかそれとも満民族なのかもわかりません」と言いました。(年寄りたちは一筆者補)農村に戻ってから、「調査隊の人がこんなふうにならわしたちに質問したので、わたしたちは知りませんと言った」と話しました。それで結局、人々は、「どこに自分の祖先を知らない人がいるのか。モンゴル族だ、と言っておけばそれで祖先がいることになるじゃないか」、彼らは

---

<sup>139</sup> 第2章の民族の文化の創出でも見られるが、モリダワー達斡爾族自治旗の達斡爾学会の達斡爾民族の知識人たちは、モンゴル民族のオボ祭りとは区別のあるオボの儀式をわざわざ作っている。

そのように言って笑っていました。祖先がいらないと言うのはとても笑える話です。これは当時の（ダフル人―筆者補）一種の心理の状態であるので、きみはこのことを例にしたらいいでしょう。

また、同じ EB さんは次のようにも語ってくれた。

50 年代のころの年寄りたちはこんなふうに（上に引用した内容のように一筆者注）言ったのです。彼女は、自分がモンゴル族であると認識していたのではなく、モンゴルに近いと思っていたのです。これはわたしのひとりのおばあさんがわたしの家で話したことで、わたしは直接この耳で聞いたのです。のちこのおばあさんはフフホトで亡くなりました。息子は公安庁にいます。当時はみんなで大笑いしました。起源の無い民族と言えれば本当によくないのだから、せめてモンゴル族と言っておけばいいじゃないか、と。まさにこのような考え方でした。モンゴルに近いのです。わたしがこのことから得た啓発は、モンゴル族と認識はしないが、やむを得ない状況では、やはりモンゴルに近い。まさにこの考え方です。50 年代の人の考え方をきみは調査してもいいです。

と話してくれた。1950 年代のダフル人の農民が自分の帰属を聞かれて、上のように答えたという逸話から、彼らにはアイデンティティ意識がない、あるいは⑤の EC さんや⑥の AR さんと同じように、学者ほどの強いアイデンティティを持っていなかったことがわかる。

従って、ダフル人の学者が持っているアイデンティティは知識人や農民のそれよりも強い、職業差とも言うアイデンティティの差があったと言えるだろう。

### （3）まとめ

以上のインタビュー資料から見れば、ダフル人には、出身地と職業によって違うアイデンティティが存在し、そのアイデンティティにも強さの差が存在していた。言い換えれば、ダフル人のアイデンティティには多様性が存在したとまとめられるだろう。

## 3. ダフル人の複数のアイデンティティ

文献資料から見れば、ダフル人には「ダフル」、「ダフル・ソロン」、「ダフル・モンゴル」という様々な呼称があったことがわかるが、自称から確認できるアイデンティティは「ダフル・ソロン人」、「ダフル人」、「モンゴル人」である。また、インタビューの内容から見れば、ダフル人の中には二つのアイデンティティが存在した。一つは、彼らが清朝期以来持っていたダフル人というアイデンティティである。もう一つは、③の MF さんの話に見えていたようなダフル人をめぐる政治的必要から作られた「ダフル・モンゴル」という呼称を含むモンゴル人というアイデンティティである。以上から、識別される前のダフル人の中には複数のアイデンティティが存在していたとまとめることができる。このことは、上に引いた②の EB さん（学者）の、「わたしがこのことから得た啓発は、モンゴル族と認識はしないが、やむを得ない状況では、やはりモンゴルに近い。



まさにこの考え方です。」という見解とも一致している。

#### 4. ダフル人の複数のアイデンティティの形成要因

上では、ダフル人が持っていた複数のアイデンティティを明らかにした。ここではさらに複数のアイデンティティが形成された要因について分析したい。筆者の観点では、以下の要因でダフル人の複数のアイデンティティが形成された。

##### 1) 歴史的要因—ダフル人の政治活動

ダフル人の複数のアイデンティティの形成を考察する場合、清朝以来のダフル人、ダフル・ソロン人というアイデンティティ以外の、モンゴル人というアイデンティティの形成を明らかにすることが重要である。

筆者の「いつからダフル・モンゴル人という呼称があったか」という質問に、①BHさんは「日本人が来た後に、(ダフル人とモンゴル人の一筆者補) 言語が近いので、(中略) 日本人は(私たちを一筆者補) モンゴル人と呼びました。日本の時(満洲国期一筆者注) にはモンゴル(人一筆者補) と呼ばれ、解放(新中国成立一筆者注) 後に達斡爾民族<sup>ダフール</sup>と識別されました」と答えた。この見解を容れると、「ダフル・モンゴル」という名称は日本人が東北地方に入った1930～40年代に形成されたということになる。

ダフル人のアイデンティティに関する研究は非常に少ない。筆者は、暁敏の研究(暁敏2008)によって明らかになった、近代ダフル人のエリートが行った政治活動によって、「ダフル・モンゴル」という呼称を含む、ダフル人の「モンゴル人」というアイデンティティが形成されたと考えている。下では、暁敏の研究によって、近代ダフル人のエリートが行った政治活動のあらましを述べておこう。

20世紀以降、中国、ロシア及び日本が抗争を繰り返す舞台となったフルンボイル(呼倫貝爾)地域では、数回にわたる民族自決自治運動が起こった。その中心的な役割を果たしたのはダフル人であった。

1911年に辛亥革命が勃発するや、外モンゴルの清朝からの独立宣言をきっかけに、フルンボイル副都統のダフル人勝福(シェンフ)を中心として同地域の独立を宣言し、外モンゴルへの合流を求めた<sup>140</sup>。1917年、勝福は一時ハイラルを脱出することを余儀なくされる事態<sup>141</sup>に至ったが、貴福(グイフ、勝福の甥)らがハイラルを奪還した。勝福のハイラル脱出に衝撃を受けたダフル人の郭道甫(メルセ)は、モンゴル人青年の政治的意識を高め、さらに民族自決運動の人材を養成しようとした。1917年に起こったロシア革命の影響を受け、郭道甫とダフル人福明泰(ボヤングレル)は、同年、フルンボイルの地方政府の改良を目的としたフルンボイル青年会を結成した。この会は、後にフルンボイル青年党と改称したが、メンバーの多数をダフル人が占

140 「フルンボイル第一次独立」と呼ばれる。

141 「フルンボイル陥落事変」と呼ばれる。

めた組織であった。

この時期から、ダフル人の政治運動はモンゴルという枠組みの中で次第に活発化していった。1918年には、外バイカル地方にブリヤートモンゴル人による「大モンゴル主義」運動が起こり、1918年11月にウエルフネウディンスク（現在のウランウデ）で開かれた第5回ブリヤート人大会にこれにフルンボイルのモンゴル人が参加した。翌年2月、チタで開催された「大モンゴル国」建国会議にはフルンボイルからダフル人の凌陞が参加した。1924年1月の中国国民党第一次全国大会で各民族の自治権を承認されたことから、コミンテルンとの接近を図るためにソ連と外モンゴルを訪問していた郭道甫は帰国し、1924年に白雲梯等と内蒙古国民革命党（内蒙古人民革命党）を組織した。フルンボイル青年党のメンバーもこれに加わり、フルンボイルの自治問題もその枠組みの中に含まれるようになった。1928年6月には、ソ連および外モンゴルの援助の下、内蒙古国民革命党の郭道甫派とフルンボイル青年党による武装蜂起が起こり、再びフルンボイルの独立自治を求めた<sup>142</sup>。1927年11月24日、ソ連の支援の下、「ハイラル・ソビエト政府」が樹立され、1929年秋にはブトハ地域（現在のモリンドワ地域）では、ダフル人の英登保を中心に軍隊が組織され、「アウリモイン」（山の中の人々の意）という反軍閥自治を求める武装蜂起が起きた。1931年9月18日に満州事変が勃発し、関東軍の援助の下で各地のモンゴル人学生を糾合し、蒙古独立軍（後に内蒙古自治軍と改称）を組織し、再び自治自決を目指した。ダフル人の徳古来は蒙古独立軍の外交処長になり、モリンドワ自治軍もそれに編入された。

以上にまとめた歴史的経過は、“モンゴル”の名を帯びた近代のフルンボイルにおける民族自治自決運動に近代のダフル人のエリート知識人が積極的に関与し、彼らとモンゴル人とは連携して行った活動の様子に他ならない。このダフル人のエリート知識人とモンゴル人との連携については、日本人の池尻登も、「嫩江流域の者達は率先して蒙古自治軍を組織して皇軍に協力し、呼倫貝爾の者は聖業参加のため、鄭家屯に各旗王侯会議を開催し蒙古代表として現皇帝を俸迎するため旅順に赴く等、大いに建國後は功に依り興安省に於ける官界の榮職を殆ど獨占して所謂『ダウール政權』なる語を生じた」（池尻 1945：5-6）と述べ、満洲国期のダフル人のエリート知識人の政治活動と政治地位に言及している。これらから見れば、民国・満洲国期のダフル人のエリート知識人は“モンゴル”という名称の下でフルンボイル地方の政治運動を展開した。従って筆者は、ダフル人の中の一部の人には「ダフル・モンゴル」という呼称の下にモンゴル人のアイデンティティが形成されたと考えている。これが、ダフル人の持つ複数のアイデンティティが形成された一つの要因である。

## 2) 地理的要因—地域による生活・生業の違い

ハイラル地方のダフル人の生業はモンゴル人と同様の遊牧であり、ハイラルのダフル

<sup>142</sup> 「フルンボイル青年党事変」、「フルンボイル第二次独立」と言われる。

ル人の多くがモンゴル語に通じていた。筆者が、①の BH さんとインタビューした際にはモンゴル語を用いたほどであった。ハイラルのダフル人がモンゴル人との間に密な親近性を持っており、①の BH さんが述べたように「私たちハイラルのダフル（人―筆者補）は（ダフル人とモンゴル人を一筆者補）あまり区別しません。ダフル・モンゴルとモンゴルは同じです」というような観点も存在して来た。

しかし、今のモリダワー達斡爾族自治旗と黒龍江省に住んでいるダフル人はこれとは異なっている。まず、彼らの生業が農業である点でハイラル地方とは異なっている。また、これら地域のダフル人はモンゴル語を用いず、ダフル語と漢語を用いていた点でハイラル地方の状況とは異なる。この違いは、モリダワー達斡爾族自治旗と黒龍江省が、モンゴル人が多く居住する地域から一定の距離を隔てていることによる。

上で紹介した阿勒坦噶塔は今のモリダワー達斡爾族自治旗の出身である。彼は 1930～40 年代の時に、自分たちをモンゴル人と主張したダフル人エリート知識人であった。しかし、筆者の収集した文献資料とインタビュー資料によれば、阿勒坦噶塔のようなエリート知識人以外、今のモリダワー達斡爾族自治旗出身のダフル人の学者や農民たちにはモンゴル人というアイデンティティが存在しなかった。黒龍江のダフル人居住地域も農業地域であり、ダフル人との交流はダフル語で行った。今のモリダワー達斡爾族自治旗と同様にモンゴル人と接触する機会が少なかった。すでに筆者が分析したように、わずかに黒龍江地方のダフル人エリート知識人である徳古来がモンゴル人のアイデンティティを持っていただけで、他に知識人と農民にはモンゴル人のアイデンティティはなかった。インタビュー資料から見ても、黒龍江の二人（⑤EC、⑦WQ）がモンゴル人をはっきり見分けていたと語っている。従って、この地域の人々はモンゴル人のアイデンティティを持っていたとは思われない。

こうした、「モンゴル人の生活・生業とモンゴル人の居住地域」からの距離、すなわち地理的要因が、彼らダフル人の中に複数のアイデンティティを形成したことは明らかである。

### 3). 階層的要因―エリート知識人、学者、知識人、農民

もう一つの要因と言えば、その者が、エリート知識人、学者、知識人、農民のいずれの階層に属するかという点であり、この要因によって、ダフル人のアイデンティティの種類だけではなく、強さにも区別が現れていた。

清朝期からダフル人のエリート知識人は、その著書の中でダフル・ソロン人、ダフル人、モンゴル人と自称し、ダフル・ソロン人のアイデンティティ、ダフル人のアイデンティティ、モンゴル人のアイデンティティを示していた。

とくに民国・満洲国期にモンゴル人のアイデンティティを持っていた一部のエリート知識人は、「モンゴル」の名の下に政治活動を展開した際に「ダフル・モンゴル」という呼称を用いていた。この「ダフル・モンゴル」と言う呼称について、③の MF さんは、「中

華民国の時には五族共和でしたから、他の少数民族は全部これら（五族一筆者注）の分枝でした。（ダフル人は一筆者補）六族共和になりたかったのですが、北洋政府は同意しなかったのです。それで、個人の前途、民族の前途のために五族共和中のモンゴル族と近づいたのです。このようにしてダフル・モンゴルになりました。（ダフル人のエリート知識人は、一筆者補）この方面の書籍（ダフル人はダフル・モンゴル人であるということに関する書籍一筆者注）を著して、世論を作りました。これは一つの政治上の必要です」と述べている。筆者もこの MF さんの観点に同意して、「ダフル・モンゴル」という呼称は政治上の必要によるものであり、一部分のダフル人のエリート知識人がそのような政治的必要に応じて創った名称であると考えます。また、ハイラル出身の①の BH さんも、ダフル・モンゴルと言う名称が満洲国の時に形成されたと証言している。これらの証言に基づけば、「ダフル・モンゴル」という名称は民国・満洲国時代に現れたダフル人エリート知識人による政治作業の産物であり、この呼称を含むモンゴル人というアイデンティティが形成されたのであった。

このようなエリート知識人たちが持っていたモンゴル人のアイデンティティは、学者である①の BH さんも持っていたことが認められるが、同じく学者である②の EB さんと③の MF さん、④の OF さんにはそれが認められない。知識人（学校教員）である⑦の WQ さんにも認められない。

農民たちのアイデンティティは実は不明確であり、単に“モンゴル人ではない”ということのみが判明している。これは、民国・満洲国期のダフル人農民にはアイデンティティ意識が希薄であったことが原因となっていると考えられる。

筆者の調査が及んだ範囲では、農民のアイデンティティは明確にすることはできない。しかし、このように明確でないのは、彼らのアイデンティティあるいはアイデンティティ意識が希薄であることに原因があることに注意しなければならない。つまり、ダフル人のアイデンティティを議論する場合には、所属階層の持つアイデンティティの強弱を考慮しなければならない。筆者のインタビューに応じてくれた方の内、⑤の EC さんと⑥の AR さん以外は全て学者か知識人（教師）である。聞き取り内容から明らかなように、学者・知識人は自分のアイデンティティについてははっきり答えることができていた。しかし、農民である⑤の EC さんと⑥の AR さんは、学者のような明確で強いアイデンティティへの関心を持っていなかった。⑤の EC さんは「蒙系人」と言い方を聞いたことがなく、⑥の AR さんの記憶では当時の生産隊のことはよく覚えているけれども、識別前にはモンゴル人に含まれていたという事実を全く覚えていなかった。つまり、自分とモンゴル人との関連を全く意識していなかったのである。農民はモンゴル人のアイデンティティを持っていなかった。学者である②の EB さんも「民衆はモンゴル民族とは思いませんでした」と証言している。

以上から見れば、ダフル人のエリート知識人たちや学者たちのアイデンティティは常に政治の影響を受けて揺れていたが、農民はそもそもアイデンティティ意識が薄かったた

め、“モンゴル人ではない”という区別ができたにとどまっていた。このような“モンゴル人ではない”とは、逆説的に、彼らにダフル人というアイデンティティがあったと考えることができるのである。

#### 4) まとめ

この部分で明らかになったことをまとめておこう。識別前のダフル人のエリート知識人と学者の中には、ダフル人のアイデンティティとモンゴル人のアイデンティティの二つの種類のアイデンティティが存在した。この二つのアイデンティティはどのような様相で存在したのか。②の EB さんの「学校と仕事の時にはモンゴル民族と書きました」との証言、③の MF さんの「(故郷を離れている人が一筆者注) 故郷に戻ったら、達斡爾(ダフル一筆者注) は言いますが、達斡爾(ダフル一筆者注) モンゴルとは言いません」との証言には、基本的にはダフル、公式の場や外地ではモンゴル、との使い分けがあったことがわかる。基本的に外地に出ることはなかった農民を除く階層のダフル人たちには、基層としてのダフルのアイデンティティ、その上にあるダフル以外のアイデンティティという重層構造があったと言える。

#### 5. 民族としてのアイデンティティの萌芽

上では、清朝から民国、満洲国期のダフル人のアイデンティティについて考察を行った。そこで明らかにした重層的なアイデンティティは、新中国の民族工作の展開に伴って、民族としてのアイデンティティの形成へと変化をはじめた。

この問題は、すでに第 1 章の第 2 節の一の 1) 「単一民族への最初の動向」の部分でも提示したことがある。ユ・ヒョジョンが引用する王鐸の回想をここに再掲すると、

「当時(1948年一筆者補)、わたしは数人のダフル(ダフル一筆者注) 族幹部を知っていたが、かれらのなかのある人々は自らをモンゴル族と名乗っており、自分の幹部書類にもモンゴル族と書き込んでいた。ただし、一部分の人はわたしに対してダフル(ダフル一筆者注) はモンゴル族以外の独自の民族であると言っていた」。

とあるように、1940年代末の民族識別活動の展開に伴って、数人のダフル族幹部の一部が、自分のことをモンゴル族以外の独自の民族であると考えていたことがわかっている。さらに、同じ箇所では、

孟志東らは「1951年ウランホトに勤務していたダフル幹部が、東部区党委夏輔仁の指示で、ダフル人の民族の出自について討論する座談会を行った。そこに、単一民族になることを望む旨を記した書類を中央と内モンゴル機関の行政機関に提出した。また、モリダワ旗で老年座談会も行った。」と述べている。

と書き、やはり 1940年代末の民族識別活動の展開に伴って、単一民族になることを望む動きが「ダフル幹部」の中にあつたことを特記した。

1940年代末から 50年代の民族識別の時期に、ダフル人幹部の中に、民族としてのア

アイデンティティが芽生えていたことは明白である。

## 6. 本節のまとめ

本節では、清朝期から民族識別される直前のダフル人のアイデンティティについて考察を行った。ここまでの内容をまとめておく。

清朝中末期のダフル人エリート知識人の著書には「ダフル・ソロン」というアイデンティティがあったことが明らかになっている。民国・満洲国の時代になると、ダフル人の中には「ダフル・モンゴル」、「蒙系人」という呼称が存在するようになり、一部のエリート知識人や学者は、ダフル人はモンゴル人であるというアイデンティティを持つようになり、別の一部のエリート知識人や学者は、ダフル人のアイデンティティを持つようになった。

このような複数のアイデンティティが存在するようになった要因には、ダフル人エリート知識人が“モンゴル”の名の下に行った政治活動があったという歴史的要因、モンゴル人とモンゴル人居住地域からの距離という地理的要因、エリート知識人・学者・知識人・農民という階層的要因があった。

ダフル人エリート知識人集団内部では、常に政治の影響を受けてアイデンティティが揺れていた。

また、この複数のアイデンティティは、基層的なダフル人のアイデンティティとその上層にあるモンゴル人というアイデンティティからなる重層構造を持っていた。

そして、中国の民族識別活動の開始に伴って、民族識別直前のダフル人幹部には、単一のダフル民族というアイデンティティが芽生えはじめていた。

## 第2節 達斡爾民族のアイデンティティ

上節で明らかにした複数のアイデンティティは、基層的なダフル人のアイデンティティとその上層にあるモンゴル人というアイデンティティからなる重層構造を持っていた。

そして、中国の民族識別活動の開始に伴って、民族識別直前のダフル人幹部には、単一のダフル民族というアイデンティティが芽生えはじめていた。

上の節では、ダフル人のアイデンティティについて検討し、彼らのアイデンティティは歴史的要因、地理的要因、階層的要因によって違いがあり、一部ではそれらが重層化していたことを明らかにした。また、この状況は民族識別活動の展開に伴って民族というアイデンティティが芽生えていたことも明らかになった。では、この萌芽した民族のアイデンティティはどのように形成されるようになったのだろうか。本節では、識別された達斡爾民族のアイデンティティについて考察を行う。

## 1. 達斡爾民族という呼称によって形成した民族としてのアイデンティティについて

第1章の第1節で述べたように、中国で行われた民族識別活動とは、国家の民族平等の政策を実施するために行った政治活動である。本節では、このような政治活動によって識別された民族の人々のアイデンティティを考察する。前節でも述べたように、民族識別活動の展開に伴って、ダフル人の幹部の中には民族というアイデンティティの萌芽が始まった。それでは、現在の達斡爾民族のアイデンティティはどのような構造を持っているか。この、民族というアイデンティティは、識別された達斡爾民族の中に広く形成されたのか。形成されたのならば、それはどの程度まで達斡爾民族の中に定着しているのか。また、私たちの理解している民族識別という政治活動によって形成された民族というアイデンティティはこの民族の人々にどのように理解されているのか。以下の部分ではこれら問題について検討する。

### 1) 達斡爾民族のアイデンティティの構造

第1節の最後では、ダフル人の複数のアイデンティティは、基層的なダフル人のアイデンティティとその上層にあるモンゴル人というアイデンティティからなる重層構造を持っていたことを明らかにした。では、すでに民族と識別された現在の達斡爾民族の人々のアイデンティティはどうであるか。同じように重層化しているか。筆者はこの単純な質問に基づいて達斡爾民族人に対してインタビューを行った。インタビューは上の節で述べたインタビューと同じく、雑談の形で行った。インタビューの内容は以下の通りである。インフォーマント番号は上の第1節に続けて⑧から始める。

#### (1) インタビューの内容

⑧QFさん(達斡爾民族 男 60歳 裁判所 定年退職 チチハル市ムルス区 2009年2月16日)

筆者：あなたは達斡爾民族人ですか。

QF：はい。そうです。

筆者：梅里斯区の達斡爾民族人はどこから来ましたか。

QF：300年前、17世紀の30、40年代、大体1640何年、黒龍江の中、上流から南に移動して、嫩江流域にきました。このことについては一つの歴史の伝説があります。当時(1640年ごろ)ロシア帝国は黒龍江の中、上流を侵略しました。300年前には黒龍江は中国の疆域に属していました。ロシア帝国はこの地方を侵略しようとしていました。黒龍江地域は達斡爾の生活の地方でした。ロシア帝国のコサックの軍人が侵略した時には、特に達斡爾が初めて抵抗しました。(後略)

筆者：あなたは族源についてどう思っていますか。

QF：基本的に、契丹の後裔と定着しています。幾つかの説があります。この中の主たるものは契丹説です。北京の科学者が通遼と赤峰一帯で掘り出した古い死体の

DNA を鑑定しました。この鑑定された契丹の女性の古い死体を今のモリダワー達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族自治旗の達斡爾<sup>m i n z u</sup>（民族一筆者補）、エヴェンキ<sup>m i n z u</sup>（民族一筆者補）、漢<sup>m i n z u</sup>民族の DNA と比較する研究を行いました。（この研究の結果、一筆者補）達斡爾<sup>m i n z u</sup>（民族一筆者）の DNA が契丹（人一筆者補）の DNA と最も近かったのです。

筆者：内モンゴル大学の恩和巴図先生の「大夏説」についてどう思っていますか。

QF：関係資料を読んだことがあります。でも、（私は一筆者補）契丹説に傾いています。学術はいろんな話があるはずですが、科学的論証をより信じます。

筆者：あなたはホッケーをやったことがありますか。

QF：やったことがあります。一つは牛の毛で作ったボールです。もう一つは火のボールです。火のボールはボールの上に油を塗って夜に遊びます。きれいです。世界中でも達斡爾<sup>m i n z u</sup>（民族一筆者補）だけがそのようにやります。

⑨BN1 さん（達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人 56 歳 男 ハイラル市旅行局職員 ハイラル市エヴェンキ族自治旗出身 ハイラル市でインタビュー 2009 年 1 月 13 日）

筆者：あなたは、達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人ですか。

BN1：はい。そうです。

筆者：達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族とモンゴル<sup>m i n z u</sup>民族は違うと思いますか。

BN1：違います。

筆者：達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族の文化はモンゴル<sup>m i n z u</sup>民族の文化とは違いますか。

BN1：違います。今度、私は達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族の代表として中央テレビ局の「魅力 12」という番組に参加します。（中略）私の着ている服装は達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族の服装です。（中略）

⑩BN2 さん（達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人 54 歳 男 自由業（作家） ハイラル市エヴェンキ族自治旗出身 南屯でインタビュー 2009 年 1 月 15 日）

筆者：ダフル人はダフル・モンゴルと人々に呼称されましたが、達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族と認定された後には、達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人はモンゴル（民族一筆者補）人ともうあまり関係がないと思われませんか。

BN2：いいえ。こちらの達斡爾<sup>m i n z u</sup>（民族人一筆者注）たちは、オボ祭り、お正月の礼儀は基本的にモンゴル<sup>m i n z u</sup>（民族人一筆者注）とあまり差がありません。ただ、言語は違います。民族言語だけです。しかし、モンゴル（人一筆者）たちと一緒に生活したので、（私たちは一筆者補）大きな影響を受けました。例えば、服装。（私たちは一筆者補）モンゴル様式の服を着ます。ここ（ハイラル市エヴェンキ旗自治区南屯一筆者注）には、ブリヤート<sup>m i n z u</sup>民族<sup>143</sup>もいます。（私たちは一筆者補）ブリヤート（人一筆者注）の優れた方面も受け入れてます。例えば、モリダワー（達斡

---

143 BN2 さんの使った言葉である。現在の中国では、ブリヤートという集団をモンゴル<sup>m i n z u</sup>民族に含めている。BN2 さんは「民族」という語を「部落」という意味で使ったと考えられる。



爾族自治—筆者注) 旗の人々は、ベルトをつける時に後ろの両側で二つの結を結ぶ。こちら(ハイラル市エヴェンキ族自治区南屯—筆者注)の達斡爾(民族人—筆者注)たちはこのやり方をあまり好みません。モンゴル(人—筆者注)のやり方で巻きます。また、祭りの時には牛と羊の肉を使います。豚肉はあまり使いません。

⑪LZさん(達斡爾民族<sup>m i n z u</sup> 女性 46歳 無業 銀河出身 アロン旗在住 2009年2月8日)

筆者：あなたは達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>人ですか。

LZ：はい。

筆者：達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>語ができますか？

LZ：あまりできないです。簡単なのはできます、複雑だったらできないです。

筆者：小さい時にはほとんど話せましたか。

LZ：聞くのは大丈夫でした。複雑な言葉は私はできませんでした。

筆者：どこからここに引っ越して来ましたか？

LZ：銀河というところからです。

筆者：前は、チチハルにいましたでしょうか？

LZ：元々、お母さんたちはチチハルにいました。後に銀河に引っ越しました。

筆者：いつ銀河からここに引っ越しましたか。

LZ：私は結婚する時にここに来ました。

筆者：ここは、何年間になりましたか。

LZ：20年以上になりました。私の子供も22歳になりました。

筆者：あなたは小さい時には民族の踊りを踊りましたか。

LZ：できません。お姉さんはちょっとできました。彼女のところの達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>は(達斡爾民族らしさを持っていて—筆者補)いいです。あなたは、莫旗(モリダワー達斡爾族自治旗の略称—筆者補)よりは、ホランエルギ(区—筆者補)に行った方がいいです。私の姉さんの家に行って、彼女は貴方を連れて、あそこの老人は多いですね。彼らと話したらいいでしょう。

筆者：お姉さんは仕事をしていますか。

LZ：元々はしていましたが、今はやっていません。女性の連合委員会の主任でした。

今は高齢になったので仕事を辞めました。あそこ(ホランエルギ区—筆者注)では(お正月の—筆者補)15日になったら踊りを踊ります。

筆者：どのような踊りですか？

LZ：達斡爾民族<sup>m i n z u</sup>踊りです。本当に、あそこでインタビューしたら一番いいです。

⑫GSさん(達斡爾民族<sup>m i n z u</sup> 40歳 男性 モリダワー達斡爾族自治旗出身 博物館職員 2009年1月31日)

筆者：1953年に民族識別が展開した後に（ダフル人は達斡爾民族になったことを知っていますか、という筆者の質問をGSさんは断ち切って、それまでの自らの話を続けた）

GS：清朝の時の資料では、（ダフル人の名称には一筆者補）七、八種類の言い方がありました。（19一筆者補）53年に識別にされた後に達斡爾に規範化しました。

筆者：当時、（ダフル人は一筆者補）国家によって民族と識別されなかったらどうですか？

GS：識別されなかったら、今の（民族の数字は一筆者補）56の民族ではないです。

筆者：（ダフル人は一筆者補）識別されなかったら、モンゴル民族に含まれると思いますか。

GS：いいえ。（ダフル人は一筆者補）元々一つの民族でした。国家が承認することは遅かれ早かれなことです。元々一つの民族なのですから。

⑬EGさん（達斡爾民族人 34歳 女性 商売 モリダワー達斡爾族自治旗の哈達洋鎮出身 モリダワー達斡爾族自治旗でインタビュー 2010年8月22日）

筆者：あなたは達斡爾民族ですか。

EG：はい。

筆者：達斡爾民族について何を知っていますか。

EG：あまり知らないです。

筆者：あなたはここ（モリダワー達斡爾族自治旗の尼爾基鎮）の出身ですか。

EG：いいえ。8歳のときここに引っ越して来ました。元々は哈達洋（鎮一筆者補）にいました。

筆者：自分の民族の文化については何を知っていますか。

EG：私は言葉もできないし、あまり知らないです。自分は達斡爾民族と言っても自分の民族文化についてあまり分かりません。

筆者：旗（尼爾旗鎮一筆者注）で行っている達斡爾民族の文化活動に参加しますか。

EG：参加していません。時間があれば参加したいですが、なかなか時間がないです。

筆者：あなたの小さい時には旗（尼爾旗鎮一筆者注）では達斡爾民族の文化活動は多かったですか。

EG：いいえ、近年から多くなりました。特に2008年から多くなったようです。自治旗成立50周年以後から始まった。

⑭ALさん（達斡爾民族人 30歳 女性 ホテルの職員 モリダワー達斡爾族自治旗出身 2009年1月30日）

AL：あなたは南屯に行ったことがありますか。

筆者：はい。あります。

AL：チチハル市に行ったことがありますか。

筆者：いいえ。まだです。

AL：実は、達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人とモンゴル<sup>m i n z u</sup>民族人の区別はあまり大きくないです。

筆者：最大の区別は何ですか。

AL：あなたはどの方面を聞いていますか。

筆者：あなたは、(達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人—筆者補)とモンゴル<sup>m i n z u</sup>民族人の区別はどこの点で違うと思いますか。昔、達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人(ダフル人—筆者注)はモンゴル人の分枝と言われた話を聞いたことがありますか。

AL：達斡爾<sup>m i n z u</sup>(民族—筆者補)人は昔はモンゴル<sup>m i n z u</sup>民族でしたか？そうではありません。

筆者：このような話がありました。

AL：そうですか。

筆者：はい。あなたは聞いたことがありますか。

AL：ありません。

筆者：ダフル・モンゴルという言い方です。1953年では民族<sup>m i n z u</sup>識別を行った後に、ダフル(人—筆者補)は一つの民族<sup>m i n z u</sup>になりました。

AL：そうしたら、名字が違うということでしょう。モンゴル<sup>m i n z u</sup>民族には幾つかの名字がありますか。

筆者：モンゴル<sup>m i n z u</sup>民族(モンゴル人—筆者注)はもともと名字がなかったです。(後略)

⑮DMさん(達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人 女性 19歳 学生 モリダワー達斡爾族自治旗出身 モリダワー達斡爾族自治旗でインタビュー 2010年8月15日)

筆者：あなたは達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族ですか。

DM：はい。そうです。

筆者：達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族語ができますか。

DM：できます。私の故郷では人々は達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族語で話します。

筆者：いつから、自分を達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族と意識しましたか。

DM：達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族学校に入った後です。達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族学校に入った後から、この意識がありました。だから、私は学校の図書館で本を読みました。そして、私たちは本当に契丹の後裔と思っています。達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族語には“阿保吉(aboji—筆者注)”という言葉があります。契丹の耶律阿保機(阿保機の発音もaboji—筆者注)と一緒にだと思えます。モンゴル<sup>m i n z u</sup>民族はとてもたくさん自分の文化を持っています。達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族もモンゴル<sup>m i n z u</sup>民族のような民族文化が持つ必要があります。

## (2) インタビューの内容分析及び達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族の構造について

インタビューに応じた達斡爾<sup>m i n z u</sup>民族人の属性と彼らのアイデンティティについてまとめると以下の表のようになる。

《表7》達斡爾<sup>minzu</sup>民族人のアイデンティティ

番号	略号	年齢	出身地	現住地	職業	アイデンティティ
⑧	QF	60	チチハル市ム ルス区	チチハル市ム ルス区	政府幹部定年退 職	達斡爾 <sup>minzu</sup> 民族人
⑨	BN1	56	ハイラル市	ハイラル市	政府幹部	達斡爾 <sup>minzu</sup> 民族人
⑩	BN2	54	ハイラル市エ ヴェンキ族自 治旗	ハイラル市エ ヴェンキ族自 治旗	作家	達斡爾 <sup>minzu</sup> 民族人
⑪	LZ	46	銀河	アロン旗	無職（主婦）	達斡爾 <sup>minzu</sup> 民族人
⑫	GS	40	モリダワー達 斡爾族自治旗	モリダワー達 斡爾族自治旗	博物館職員	達斡爾 <sup>minzu</sup> 民族人
⑬	EG	34	モリダワー達 斡爾族自治旗 哈達洋鎮	モリダワー達 斡爾族自治旗	商売	達斡爾 <sup>minzu</sup> 民族人
⑭	AL	30	モリダワー達 斡爾族自治旗	モリダワー達 斡爾族自治旗	ホテルの職員	達斡爾 <sup>minzu</sup> 民族人
⑮	DM	19	モリダワー達 斡爾族自治旗	モリダワー達 斡爾族自治旗	学生	達斡爾 <sup>minzu</sup> 民族人

筆者作成

以上の表から見れば、筆者が調査したハイラル地方、チチハル地方、モリダワー達斡爾<sup>minzu</sup>族自治旗、アロン旗での達斡爾<sup>minzu</sup>民族人は、60代から10代まで全員「達斡爾<sup>minzu</sup>民族人」というアイデンティティを持っている。しかし、本章第一節で明らかにしたように、インタビューした達斡爾<sup>minzu</sup>民族の老人の一人は、モンゴル人というアイデンティティも持っていた。従って、達斡爾<sup>minzu</sup>民族人のアイデンティティにはすでに変化が起こり、今の達斡爾<sup>minzu</sup>民族人の中には重層化したアイデンティティを持つ高齢者が存在してはいるが、この重層化は広範かつ一般的な現象ではなくなっている。また、インタビュー回答者のうち民族幹部（例えば、⑨民族幹部 BN1 さん）と、わずかに一名の回答者しか得られなかったが、民族学校の学生（⑮DM さん）の回答が、民族としてのアイデンティティを強く持っていることを伺わせる。

## 2) 達斡爾<sup>minzu</sup>民族のアイデンティティの変化および特徴の要因

上述したような変化や特徴はなぜ現れたのであろうか。この部分ではその要因を明らかにする。

### (1) 年齢要因

現在の達斡爾民族人の中に存在するアイデンティティは年齢によって異なっている。達斡爾民族が識別された 1956 年を境に、現在 70～80 代の高齢者の中には、今でも「ダフール人」、「モンゴル人」のアイデンティティを持っている人がおり、60 代から 10 代までの中には「達斡爾民族人」のアイデンティティがある。

本章の第一節で紹介した、ハイラル市出身の学者①BH さん（80 歳）、チチハル梅里斯区出身の主婦⑤EC さん（70 歳）、モリダワー達斡爾族自治旗出身の農民⑥AR さん（85 歳）は全て今は達斡爾民族になっている。①BH さんは「ダフール・モンゴル、モンゴルとは同じです」と話している。⑤EC さんと⑥AR さんは、ダフール人のモンゴル人との関係を知らず、自分はダフール人であるということから、彼ら 70 歳以上の高齢者が持っているアイデンティティはダフール人のアイデンティティであると言える。①BH さん、⑤EC さん、⑥AR さんのダフール人というアイデンティティは、達斡爾民族としてのアイデンティティは重なり合った状況にある。しかし、⑧の 60 代の QF さんから⑮の 10 代の DM さんまでの中・若年者は全部「達斡爾民族人」のアイデンティティを持っている。従って、一部分の達斡爾民族の高齢層の中には「ダフール人」、「モンゴル人」というアイデンティティが存在しているが、中・若年層には「達斡爾民族人」のアイデンティティがある。

## （2）職業要因

達斡爾民族の人々は職業の違いによって、達斡爾民族としてアイデンティティに対する強さに差異が見られる。民族に関する仕事に従事している達斡爾民族人と達斡爾民族人学生は、その他の仕事をしている達斡爾民族人に比べ、「達斡爾民族」としての強いアイデンティティを持っている。行政・文化機関と民族学校は民族としてのアイデンティティ形成を促進する重要な役割を果たしていると言えそうである。ハイラル地方での BN1 と BN2 兄弟の間には、それぞれの職業に起因するとみられるアイデンティティの違いがある。

兄の BN1 さんはハイラル市旅行局の職員である。職業柄、彼が民族文化を宣伝するのは当たり前のことである。筆者が調査した 2008 年末、BN1 さんはちょうど達斡爾民族の代表として民族文化を宣伝する中央テレビ局の「魅力 12」に参加することになった。彼には、強く達斡爾民族としてのアイデンティティを持って、以上のインタビュー資料で述べたように、筆者の「達斡爾民族とモンゴル民族は違うと思いますか」と質問にはっきりと「違います」と答えた。

弟の BN2 さんは自由業（作家）である。筆者の「ダフール人はダフール・モンゴルと人々に呼称されましたが、達斡爾民族と認定された後には、達斡爾民族人はモンゴル（民族—筆者補）人ともうあまり関係がないと思われませんか。」という質問に対し、彼は、「いいえ。こちらの達斡爾（民族人—筆者注）たちは、オボ祭り、お正月の礼儀は基本的にモンゴル（民族人—筆者注）とあまり差がありません。ただ、言語は違います。民族言語だけです」などと答えており、今の達斡爾民族とモンゴル民族とは全然関係がないとは見ておらず、日常生活には同じところがあると考えている。BN2 さんは著作に従事する知識人であり、自分でも

南屯の歴史を研究している人であるが、兄の BN1 さんと比べると、達斡爾民族とモンゴル民族の「ダフル・モンゴル」という呼称について知っている。隣接し混住してきている現在の達斡爾民族とモンゴル民族が歴史的に近縁関係にあることを承認している点に違いがある。アイデンティティの面では BN1 さんのように「達斡爾民族はモンゴル民族と違いますが」と明確に答えるほど、達斡爾民族の強いアイデンティティが見えていない。

学生である⑬DMさんは、筆者の「いつから、自分を達斡爾民族と意識しましたか」という質問に対し、「達斡爾民族学校に入った後です。達斡爾民族学校に入った後から、この意識がありました」と答え、彼女は「だから、私は学校の図書館で本を読みました。そして、私たちは本当に契丹の後裔と思っています。達斡爾民族語には“阿保吉 (aboji—筆者注)”という言葉があります。契丹の耶律阿保機 (阿保機の発音も aboji—筆者注) と一緒だと思います。モンゴル民族はとてもたくさん自分の文化を持っています。達斡爾民族もモンゴル民族のような民族文化を持つ必要があります」と話している。この回答から、彼女が達斡爾民族としてのアイデンティティを強く持っていて、自分の民族の歴史を知ろうという気持ちがあることが明確になっている。さらに、自らは書籍に書かれている契丹後裔説を信じている。書籍を読んで得たと思われる知識によって、「達斡爾民族語には“阿保吉 (aboji—筆者注)”という言葉があります。契丹の耶律阿保機 (阿保機の発音も aboji—筆者注) と一緒だと思います」のように族源を探求している。このような彼女の言動に、彼女の民族としてのアイデンティティが強さを見て取ることができる。

一方、商売を営んでいる⑬EGさんは、筆者に対して「達斡爾民族です」と答えているので、民族としてのアイデンティティは持っているが、他の回答者のように筆者に「自己民族のこと」を懸命に話してはくれなかった。「自分の民族の文化については何を知っていますか」という質問には、「私は言葉もできないし、あまり知らないです。自分は達斡爾民族と言っても自分の民族文化についてあまり分らないです」と答えた。さらに、筆者の「旗 (尼爾旗鎮—筆者注) で行っている達斡爾民族の文化活動に参加しますか」という質問について「参加していません。時間があれば、参加したいですが、なかなか時間がないです」とも答えている。⑨の旅行局職員 BN1 さん、⑩の作家 BN2 さん、⑮の学生 DM さんに比べると、自分の民族の歴史や文化について関心を持っていない。自分の達斡爾民族としてのアイデンティティも三人より弱い。

以上から見ると、達斡爾民族の人々のアイデンティティの強さには職業による差が存在している。

### (3) 地理要因

本章の第 1 節の 2 のでも提示したが、この要因はダフル人のアイデンティティの重層化に影響を与えている要因である。この要因は今もなお、達斡爾民族のアイデンティティに影響を与えている。

ハイラル地方には、BN2 さんのように、今のモンゴル民族との歴史や日常生活の近縁性

を提示する人がいる。しかし、ハイラル地方の 50 代の人々はすでに、自分をモンゴル人と思わない。彼らには重層的なアイデンティティが存在しない。一方、黒龍江省とモリダワ一達斡爾族自治旗では、達斡爾民族の人々は「私は達斡爾民族人である」というアイデンティティだけ持っている。

以上は達斡爾民族のアイデンティティの変化と特徴である。筆者は以上の変化と特徴に基づいて、以下の部分では達斡爾民族のアイデンティティの変遷を考察できると考えている。

### 3) 達斡爾民族のアイデンティティの変遷

本章の第 1 節で、民族というアイデンティティが、一部分のダフル人幹部の中に萌芽し始めたことを述べた。しかし、筆者の調査した所では、ダフル人のアイデンティティはほとんどすでに達斡爾民族のアイデンティティになっている。今では達斡爾民族人は、強く達斡爾民族としてのアイデンティティを持っている。以下ではダフル人が達斡爾民族となった前後のアイデンティティの変遷について考察を行う。筆者の観察によれば以下のようないくつかの変遷がある。

#### (1) ダフル人のアイデンティティから達斡爾民族としてのアイデンティティへ

ここでは、最初に序論の部分で言及した民族という概念を再び検討しておきたい。岡本雅享によれば、「1920 年代以前は漢族以外の民族集団を一まとめにした少数民族というカテゴリーは存在しなかった」(岡本 1990 : 34)。毛里和子も、「そもそも『少数民族』というのは、圧倒的多数を占める漢族以外の民族、エスニック・グループを一括した呼称だが、これが最初に使われた文献は一九二四年一月の国民党第一回大会での『宣言』である。中国共産党の文書で最初に現れるのは二六年一月の馮玉章の西北軍工作についての指示で、その後も中共は『少数民族』『弱小民族』という言い方を併用し、『少数民族』が定着するのは戦後のことである」(毛里和子 1998 : 55) と論じている。

現在の達斡爾民族は、識別以前にはダフル人と呼ばれた。つまり、国家に識別された民族は識別後から民族と識別された。中国の民族識別によって、少数民族が識別され、今の 56 の民族、55 の少数民族が誕生した。現在の中国には、民族という「身分」があり、人々の間でも「私は〇〇民族」のように、民族名称を使って自称しており、民族身分は中華人民共和国のアイデンティティに大きな影響を与えている。中国国内の少数民族同様、識別された達斡爾民族人は、「達斡爾民族」あるいは「少数民族」と自称している。ほかの人にも「達斡爾民族」と呼ばれている。では、この民族識別後に得た新しい「達斡爾民族」という呼称の下で、それまでのダフル人のアイデンティティには変化があったのだろうか。上の第一節では、ダフル人の中には「ダフル・ソロン人」、「ダフル人」、「モンゴル人」という複数のアイデンティティがあったことをすでに明らかにした。新中国成立後の民族政策の展開に当たり、ダフル人の幹部の中には民族というアイデンティティが形

成し始めたことも明らかにした。現在では、この民族というアイデンティティは、すでに達斡爾民族として、幹部だけではなく、学者（②の EB さん）、知識人（⑩の BN2 さん）、農民（⑤の EC さん）、学生（⑮の DM さん）の中にも形成された。

## （2）モンゴル人のアイデンティティから達斡爾民族としてのアイデンティティへ

ダフル人の中には、その出自に関する説が複数あった。中でも、唐代の黒水国説、モンゴルの一分枝説、唐代の蒙兀室韋、契丹の貴族である遼代の後裔説、韃靼の遺部説、モンゴル人との同源説などである。これらの出自に関する探究は、どれも他の大きな集団に出自を求める説であった。この大きな集団に出自を探求していた事実に基づいて、ダフル人の中には、モンゴル人のアイデンティティがあったことを本章の第一節ですでに明らかにした。このようなモンゴル人としてのアイデンティティは、民族識別を通じて達斡爾民族が誕生したことによって弱まり、あるいは消滅する傾向にある。

一方、1950年に行われた呼倫貝爾納文慕仁盟調査で、ダフルと同じように「蒙古語族」に含まれた「陳巴爾虎族<sup>144</sup>」、「新巴爾虎族」、「布里雅特族」、「額魯特族」（燕京、清華、北大 1950年暑期內蒙古呼納盟民族調査団編 1997:1）は、現在ではモンゴル民族の中に含まれてモンゴル民族人になった。今は、「巴爾虎・モンゴル」「布里雅特・モンゴル」、「額魯特・モンゴル」と言われており、「ダフル族」だけが民族識別の結果、達斡爾民族と認められた。「ダフル・モンゴル人」という呼称も人々の意識から遠ざかった。人々がダフル人のことをモンゴル人の一部と言うことは少なくなり、中国の55の少数民族のひとつである達斡爾民族と言うことが多くなった。こうした周辺環境の変化にともない、ダフル人の持っていたモンゴル人というアイデンティティも今の達斡爾民族の老人の中には残ってしかない。民族識別という政府が行った政策により、ダフル人の中にあつたモンゴル人のアイデンティティはますます達斡爾民族のアイデンティティへと変遷した。

## （3）少数民族のアイデンティティから小少数民族のアイデンティティへの動き

上述したように、一連の民族識別作業を通じ、中国には55の少数民族が誕生した。そして、そのそれぞれの少数民族は次第に少数民族のアイデンティティを形成していった。そしてさらに達斡爾民族人は少数民族の中でも相対的に人口の少ない「小少数民族」のアイデンティティを形成したと考えられる状況がある。

筆者が調査した地方であるモリダワー達斡爾族自治旗、チチハル地方、ハイラル地方では、自らを「小民族」や「三少数民族<sup>145</sup>の一つ」と自称する人がいる。例えば、上でも事例とした取り上げたモリダワー達斡爾族自治旗の OM さんは「私たち達斡爾は三少数民族のひとつ、私たちは三少数民族は小民族です」ということを筆者に繰り返し話した。また、博物

144 この当時使われた「族」は今の民族とは異なる概念である。

145 達斡爾族、エヴェンキ族、オロンチョン族を指す。内モンゴル自治区における人口の少ない「少数民族」の意味がある。



館職員である GS さんは「達斡爾民族は小民族であるので、民族文化を保護しなければ、すぐに無くなります」というようなことを筆者に話したことがある。

そして現在、達斡爾民族は三少民族としての活動も行っている。筆者が目撃した例を挙げると、2010年9月5日にモリダワー達斡爾族自治旗のモリダワーホテルで、「内蒙古第十四届達斡爾、鄂温克、鄂倫春“金秋莫力達瓦”文学創作筆会」が举行された。この会合は、達斡爾、エヴェンキ、オロンチョンからなる三少民族という枠組を明らかにして開催されたものである。また、1996年には、「全区首届“達斡爾、鄂温克、鄂倫春最少民族文術調演”を行った<sup>146</sup>。2009年6月22日の夜、「内蒙古首届鄂倫春、鄂温克、達斡爾三少民族歌曲電視大獎賽」がフロンボイル市政府の講堂で行われた<sup>147</sup>。以上のように達斡爾、エヴェンキ、オロンチョン民族は「三少民族」という呼称で、民族文化活動を展開している。

序論に述べたように、現在中国国内では「小民族」という言い方が提示されている。何群の提示した「小民族」とは、人口が10万人に足りない民族を指し、国家が定めた正式な呼称をもつ民族である。これに対して筆者の提示している「小少数民族」とは、人口は10万以上ではあるが、当該の民族身分を有する人は、自意識では自分を「小さい民族」あるいは「弱い民族」と思う民族であると定義する。

2000年、モリダワー達斡爾族自治旗は、「関与将達斡爾族列入10万人口以下少数民族整体脱貧計画的請示」<sup>148</sup>では、

盟委、盟行署：

莫力達瓦達斡爾族自治旗は全国唯一の達斡爾族自治旗である。我が国の達斡爾族のうちの4万人近くはわが旗に入っている。その中、貧困者は2万人である。ほかの達斡爾族人は全国の各地に分散している。基本的には貧困者がいない。従って、我が旗の達斡爾族の貧困人口がその貧困から脱し、裕福になる問題を解決すれば、「一族一策」或は「一族多策」の成功を証明できる。そのうえわが旗は4年間の災害を受けて、経済の発展は滞っている。強力な支持がほしい。従って、盟行政署が依頼して、わが旗が10万人口以下少数民族整体脱貧計画に列入することを助けて、各民族の共同の繁栄と進歩を実現する。

指示を仰ぐ

中共莫旗委

---

<sup>146</sup> <http://www.baike.com/wiki/%E4%B8%89%E5%B0%91%E6%B0%91%E6%97%8F>  
(2013年7月11日アクセス)。

<sup>147</sup> <http://www.baike.com/wiki/%E4%B8%89%E5%B0%91%E6%B0%91%E6%97%8F>  
(2013年7月11日アクセス)。

<sup>148</sup> 「中共莫力達瓦達斡爾族自治旗委員会文件」莫党発(2000)49号 モリダワー達斡爾族自治旗档案館

莫旗人民政府  
二〇〇〇年十月一五日

写しを送る：盟民族宗教事務局、盟扶貧辦

以上のようにモリダワー達斡爾族自治區の達斡爾民族は10万人以上なのに「関与将達斡爾族列入10万人口以下少数民族整体脱貧計画的請示」の申請書を提出したことがある。これは、達斡爾民族の行政サイドには、自らを弱小と見る考え方があるということを証明している。

また、筆者がモンゴル民族の者であることを知った達斡爾民族の人々は、常に筆者に向かって「私たちは小さい民族で、モンゴルは大きな民族である」と話す。達斡爾民族人には「私たちは少数民族である」と意識する傾向がはっきり見える。

#### (4) エリート的アイデンティティから大衆的アイデンティティへ

本章の第1節で述べたように、ダフル人の呼称は常に少数エリートの手握られていた。清朝の官吏を務めて周囲から満洲人に見られた。近代モンゴル人の政治活動を指導してモンゴル人と自称したのも、1950年代の民族識別作業の時に単一の少数民族となることを中国政府に申請したのも、一部のダフル人の幹部が主導したことであった。

このように一部幹部がもっていたダフル民族としてのアイデンティティは、現在では達斡爾民族の名のもとで広範な達斡爾民族大衆の達斡爾民族としてのアイデンティティとなっている。このことは、上に示したインタビューの内容にも見えている。60代の人から10代の人まで全員が「達斡爾民族である」というアイデンティティを持っている。筆者のインタビュー調査では、特に、民族幹部と若い達斡爾民族の学生たちが強く達斡爾民族としてのアイデンティティを持っていることが判明している。

ただ、自分たちは達斡爾民族の人間であると固く信じるだけで、昔の歴史について知る所は多くなく、民族に関する知識の大部分は書籍から獲得している。一部分の老人のような複数のアイデンティティも無い。達斡爾民族のアイデンティティは、若年になるにしたがって強化され単一化されている。若い彼らの中には、民族の族源に関する研究の進展に伴い、自らを契丹の後裔であることを主張する者がおり、現在では「中国国内ではダフル人は契丹の末裔であることが強調され、契丹源流説が定着し、『独自の民族』であるという認識が強い」と言われている(曉敏 2008: 4)。

#### 4) まとめ

われわれは、民族である以上は「民族としての単一のアイデンティティ」を持っていると考えがちであるが、必ずしもそうではない。識別された民族である達斡爾民族は、中国政府に識別されて民族になることを許されたのちに獲得した名称である達斡爾民族の上に、民族として新しいアイデンティティを形成している最中である。しかもその達斡爾民族の

アイデンティティも、年齢、職業、地域によって差異があり、民族識別以前からの生存者である一部の高齢者には、「モンゴル人」のアイデンティティと「達斡爾民族」のアイデンティティとが重層的に存在する相を示している。達斡爾民族のアイデンティティの内実は複雑で、単純な一つのアイデンティティではない。

しかし、このような状況は時が経つにつれ、つまり若年になればなるほど達斡爾民族としてアイデンティティへと単一化している傾向にある。

以上を表で示すと、下のようになる。

《表8》ダフル/達斡爾民族人のアイデンティティ

	集団の名称	年 齢	モリダワー達斡爾族自治族		黒龍江省		ハイラル市	
			職業	アイデンティティ	職業	アイデンティティ	職業	アイデンティティ
清朝	ダフル ダフル・ソロン		エリート・ 知識人	ダフル・ソロン				
民国 ～ 1955	ダフル ダフル・モンゴル		エリート・ 知識人	ダフル人 モンゴル人 達呼爾民族	エリート・ 知識人	ダフル人 モンゴル人	エリート・ 知識人	ダフル人 モンゴル人
			民衆	ダフル人	民衆	ダフル人	民衆或は学 者	ダフル人 モンゴル人
1956 ～ 現 在(識 別後)	達斡爾民族	70 ～	エリート	達斡爾民族	エリート	達斡爾民族	エリート学 者	達斡爾民族 モンゴル人
		80	民衆	達斡爾民族	民衆	達斡爾民族	民衆	達斡爾民族
		60 ～ 40	エリート	達斡爾民族	エリート	達斡爾民族	エリート	達斡爾民族
			民衆	達斡爾民族	民衆	達斡爾民族	民衆	達斡爾民族
		30 ～ 10	エリート	達斡爾民族	エリート	達斡爾民族	エリート	達斡爾民族
			民衆	達斡爾民族	民衆	達斡爾民族	民衆	達斡爾民族

筆者作成

## 2. 達斡爾民族の民族文化的アイデンティティについて

原住民に注目した綾部恒雄は「失われる文化・失われるアイデンティティ」というタイトルで「IT 革命、グローバル化が加速的に進む現在、貴重な文化を育てて来たこれらの人々の苦難を救っていくことこそ人類の最も緊急な責務ではなかろうか。」(綾部恒雄 2007: 10) という観点を提出している。一方、中国では、民族として識別された達斡爾民族の場合、民族文化の創出と民族文化によるアイデンティティの形成によって、「作られる文化・作られるアイデンティティ」とも言える状況が現出している。

現在の達斡爾民族の中には、上の部分で述べたように、国家に与えられた「達斡爾民族」という民族名称によって支えられた民族としてのアイデンティティとはやや異質の、創出された民族文化によって支えられた「民族文化的アイデンティティ」とも呼びうるアイデンティティが形成されたと思われる状況がある。

では、どのようなアイデンティティを民族文化的アイデンティティと言うかと言えば、梶谷真司は、『文化的アイデンティティ』という語は近年しばしば使われるが、そのわりには意味が曖昧である。それはおおむね“国や地域、宗教や民族などと結びついた伝統や習慣によって支えられた、集団的なまとまりを持つ心性、およびそこへの帰属感”といったようなものを指していると考えられる」（梶谷真司 2004 : 124）と論じている。この概念に基づけば、本論文における民族文化的アイデンティティとは、中国の国家によって民族と認定された人々自身の民族文化に支えられた集団的なまとまりを持つ帰属感、ということになる。以下、この民族文化的アイデンティティについて考察を行う。

## 1) 達斡爾民族の民族文化的アイデンティティの形成について

下の(1)で明らかにするように、達斡爾民族の民族文化的アイデンティティは達斡爾民族の知識人の中で形成が始まり、その後、民族活動の展開に伴って民族文化幹部たちのなかにも形成された。さらに、主に1980年代以降、各達斡爾民族地方で達斡爾民族文化活動が開催され、それに民衆が参与するに連れて、民衆の中にも民族文化的アイデンティティが形成されるようになった。今までは民族内部では既に民族文化的アイデンティティが形成された。以下、その過程を具体的に考察していこう。

### (1) 達斡爾民族知識人・民族文化幹部の民族文化的アイデンティティの形成

現在の中国では、「民族文化」という言葉をあちらこちらで目にする。例えば、『社会変遷と文化認同』という書籍では、「涼山彝族文化研究」（巫達 2008 : 49）というような言葉が出ている。このように「民族文化」なるものが形成されたのは、民族識別の時に基準とされたスターリンの民族の四要素の中に文化要素があることが原因していると筆者は考えている。

民族識別によって達斡爾民族が創造されるに伴い、識別される達斡爾民族の側では、民族文化の創出に伴って、まず達斡爾民族の知識人、そして各達斡爾民族集中地域の民族文化幹部の中に民族文化的アイデンティティが形成され始めた。

ダフル人の知識人が達斡爾民族の識別に参加した初期には、1950年代の民族識別時には、ダフル人の民俗に関する調査報告書である「達呼爾族氏族、親属和風俗習慣的調査報告」（林華耀、王輔仁、阿勇綽克圖著）の編纂にダフル人の学者たちが参加した。阿勇綽克圖はモリダワー旗地域の材料を提供して、莫日根、烏珠爾も意見を出した（中央民族学院研究部 1955 : 62）。達斡爾民族が識別された後には、達斡爾民族の知識人も民族文化の創出に積極的に参加した。各達斡爾民族人の集中地域の達斡爾民族の文化幹部も民族文化

化の創出に大きな役割を果たした。このことは既に第二章の第二節の部分で明らかにした。

本節では、すでに明らかにした達斡爾民族<sup>mīn zǔ</sup>の民族文化の創出に伴って、達斡爾民族<sup>mīn zǔ</sup>人の知識人と民族文化幹部の中に民族文化的アイデンティティが形成されたことを明らかにしたい。

梶谷真司は「文化的アイデンティティとグローバリゼーション—社会現象学的考察—」で、以下のような微妙な描写をしている。「社会ごとの自律性、安定性、一体性が動揺し、国家や地域、民族といった単位のとまりが以前ほど意味をなさなくなる。その結果、それぞれの社会の制度、習慣、生活様式、言語、つまりその社会の文化も、多かれ少なかれ変化せざるをえない。本論でも論じるように、この変化は主に二つの対照的な方向で起きる。一つは統合へ向かう動き、もう一つはその反対の分散へ向かう動きである」（梶谷真司 2004 : 121-122）と論じ、続いて、統合へ向かう動きについて論じて、「他方で、そうした統一への恐れ、反感、あるいは憧れや興奮といったものが存在するのも確かである。これはどのように考えればいいのか。勘違いから来る過剰反応にすぎないのか。正しい知識を広めることで是正すべき愚かさの現れなのだろうか。仮にそういう面があったとしても、これは間違いとか悪いといった批判で簡単に片付けられないように思われる。そこで問題になっているのは、学問的な見解ではなく、その社会に特有の心性、何らかの『アイデンティティ』と呼ばれるようなものだからである。それは国なり地域なり、民族なり宗教なり、何らかの社会単位の文化的な一体性、連続性の根底にあると考えられる。上述したようなグローバル化の統合と分散の力学の中で、それぞれの社会、文化の方向性、その時々への状況への態度を根本で規定するのは、おそらくこのアイデンティティだろう。それは今日、伝統の保護や復興が叫ばれたり、ナショナリズムや民族主義が掲げられたりする時にも、大きな力を発揮している。このようなコンテクストで問われるアイデンティティを『文化的アイデンティティ』と呼んでおこう。」（梶谷真司 2004 : 122-123）。

梶谷真司は文化的アイデンティティについてこのように述べているが、達斡爾民族<sup>mīn zǔ</sup>の場合は、達斡爾民族<sup>mīn zǔ</sup>が識別されて、初めに達斡爾民族<sup>mīn zǔ</sup>の文化の創出に参加した達斡爾民族<sup>mīn zǔ</sup>の知識人と民族文化幹部の中にこのような民族文化的アイデンティティが存在したのであるうか。二人のインタビューを検討しよう。一人は1950年代に民族<sup>mīn zǔ</sup>の文化を収集した知識人の④OFさん、もう一人はモリダワー達斡爾族自治旗の民族文化幹部のOMさんである。

④OFさん（達斡爾民族<sup>mīn zǔ</sup>人 84歳 女性 ハイラル出身 学者 2008年12月28日）

筆者：先生はいつから達斡爾民族<sup>mīn zǔ</sup>の民俗に興味を持って、研究を行いましたか。

OF：これは、（達斡爾民族<sup>mīn zǔ</sup>の民俗に—筆者補）興味を持っていたと言うことではありません。私は、仕事に配置された時からこの仕事をやりました。

筆者：民俗を研究する時に、あなたはどのような方面から手をつけましたか。

OF：私が、達斡爾民俗を研究することになったのは達斡爾文学からです。母語で記録しました。その時にはソ連の学者たちはスラブ文字を普及させました。モンゴル

語族の土族、東郷族、達斡爾族はみな使いました。モンゴル国では1945年以降には、(スラブ文字による一筆者補) ハルハ新モンゴル文字を使いました。1955年後に、内モンゴル地方でも新モンゴル文字(ハルハ新モンゴル文字一筆者注)を使いました。私たちはその時にスラブ文字を手に入れました。そして、民間の芸術の人は語り物を話すときには、私たちはスラブ文字で記録しました。その時には録音機がありませんでした。あっても、田舎では電気が通じていませんでした。頭だけで記憶しました。

筆者：あなたはいつから達斡爾民俗の仕事をやりましたか？

OF：1957年から始めました。その時には、達斡爾民族文字を作るために達斡爾(民族一筆者補) 語文工作委員会が作られました。(この委員会には一筆者補) 全国的には、内モンゴル、黒龍江、新疆の三つのところが含まれていました。その後、(達斡爾民族の一筆者補) 文字は作られなかったので、この委員会も解散しました。あの時(1957年一筆者注) から民間のこと(民間文学一筆者注) をやりました。委員会という言葉の前には“中国”とは書いてはありませんが、これ(この委員会一筆者注) は中国(の達斡爾民族語文工作委員会一筆者補) を表していました。達斡爾民族が過去に残した文献は少なかったです。詩だけが残りました。モリダワー(達斡爾族自治旗一筆者補) では「ウチュン(uqun一筆者補)」、ハイラル(地方一筆者補) とチチハル(地方一筆者補) では「ウチン(uqin一筆者補)」と言います。最初は母語で記憶しました。1955、56年から初めてソ連の専門家が言語調査隊を連れて、田舎で言語の調査を行いました。彼らには自分の表記の記号がありました。(自分の表記の記号を一筆者補) ラテン文字とスラブ文字を結び合わせたものでした。ソ連の専門家は全部ソ連の科学院の院士でした。民間の文学からはじめて、宗教、歴史、言語、文学も含まれていました。彼ら(ソ連の専門家一筆者注) は非常に専門的でした。私たちは彼らの方法に従って記録を行いました。しかし、私たちには専門的な表記の記号がありませんでした。こうして(私は一筆者補) 民俗の研究を始めました。

筆者：その時の資料は多く残っていましたか。

OF：文化大革命の時に無くなりました。残ったのは非常に少ないです。今では、ある人々は、私の当時(1950年代一筆者注) の収集した資料を使っています。実は、私の時代の人には不利な目に逢いました。でも、今もあのこと(不利な目に逢いました一筆者注) を考えません。だから、私は今自分の好きな仕事をします。あんまり頭が使えません。

筆者：1950年代に資料収集した時、達斡爾民族の人々は熱情的でしたか。

OF：熱情的でした。それ以前には調査を行った人がいないからです。あの時には生産隊から調査の人が来ましたと伝えましたが、民衆は大変に協力してくれました。

筆者：あなたは、達斡爾学会を作る時には、苦労しましたか。

OF：私は達斡爾学会を作りました。知識人たちは自ら望んで発起しました。私は大変な精力をつぎ込みました。私は一人の達斡爾民族の民間の芸術家です。私の年齢の者の仕事も多いです。

OFさんは、1950年代に達斡爾民族の文化収集に参加した達斡爾民族の知識人である。このインタビュー内容を、上に引いた梶谷真司の述べた文化的アイデンティティ（国や地域、宗教や民族などと結びついた伝統や習慣によって支えられた、集団的なまとまりを持つ心性、およびそこへの帰属感）と、同じく梶谷の「グローバル化の統合と分散の力学の中で、それぞれの社会、文化の方向性、その時々々の状況への態度を根本で規定するのは、おそらくこのアイデンティティだろう。それは今日、伝統の保護や復興が叫ばれたり、ナショナリズムや民族主義が掲げられたりする時にも、大きな力を発揮している。このようなコンテキストで問われるアイデンティティを『文化的アイデンティティ』と呼んでおこう」という叙述と合わせて、達斡爾民族の知識人の民族文化的アイデンティティについて考察に入ろう。

1950年代の現状から見れば、達斡爾民族と識別されたOFさんは、ダフル人が達斡爾民族になったということに直面した人である。達斡爾民族の知識人であるOFさんは、最初は、達斡爾民族文化の収集を仕事として行ったけれども、後には達斡爾学会を自発的に結成したこと、そして達斡爾民族の文化を研究したことは、達斡爾民族の知識人として達斡爾民族文化的アイデンティティが彼女において萌芽したことの表れであると考えられる。彼女の話には、達斡爾民族が識別されたことに対する不快感は感じられず、逆に自分の民族の文化を探求し（資料収集）、発展させる（達斡爾学会設立）という気持ちに満ちているように感じられる。従って、梶谷真司の言及した「学問的な見解ではなく、その社会に特有の心性、何らかの『アイデンティティ』と呼ばれるようなものだからである。それは国なり地域なり、民族なり宗教なり、何らかの社会単位の文化的な一体性、連続性の根底にあると考えられる」という叙述と照らし合わせると、OFさんは、民族文化の収集と達斡爾学会の設立に支えられ、達斡爾民族文化的アイデンティティが形成されたと考えられる。

もう一人の事例は、第二章第二節でも取り上げたOMさんである。OMさんは、1950年代にモリダワー達斡爾族自治旗で民族文化の幹部を務めた。このインタビュー内容をもう一回繰り返して見てみよう。

OMさん（達斡爾民族、女性、76歳、インタビュー当時はモリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会員。2011年6月6日達斡爾族自治旗達斡爾学会事務室にて）

筆者：先生、自治旗が成立する時に祝賀活動を行いましたか？

OMさん：行いました。5周年ごとの祝賀があり、15周年の祝賀、25周年の祝賀。10周年ごとにも祝賀があります。10周年ごとのは大規模な祝賀、5周年ごとのは中規模の祝賀です。そろそろ55周年になるので、今から準備しています。

筆者：自治旗が成立する時にはどのような活動がありましたか？

OM さん：その時には、祝賀大会を行いました。内モンゴルから一つの代表団が来ました。中央からも代表団が来ました。その時劉少奇の娘さんも来ました。彼女はその時モリダワ旗のお嫁さんになりました。また、夫と離婚していません。彼女の夫は5周年の時に来たらしいです。

筆者：彼女の夫は達斡爾人ですか？

OM さん：達斡爾人です。

筆者：先生、その時に、魯日格樂<sup>149</sup>の上演とホッケーの上演はありましたか？

OM さん：ありませんでした。あの時は解放されたばかりでしたから、革命の歌を歌いました。（1958年の一筆者補）土地改革の時には、いろいろな革命の歌を習いました。私たち民族は自分の（民族の一筆者補）ことを敢えてしませんでした。

筆者：その時、どのような文化活動をやりましたか？

OM さん：他の国の文化を上演しました。新聞で見たこと、その時にはテレビがなかったのでテープレコーダーで歌を聴くことができたのです。新聞では踊りの動作の絵がありました。これによって、自分で踊りを作りました。子どもたちは児童節<sup>150</sup>の時に踊りました。他には何もありません、全部自分で勝手に作ったものです。

筆者：<sup>m i n z u</sup>民族舞踊（魯日格樂一筆者注）はいつ始まりましたか？

OM さん：<sup>m i n z u</sup>民族舞踊として成立した時、（魯日格樂は一筆者補）すでに民間にありました。

筆者：上演したことはありませんでしたか。

OM さん：当時は<sup>m i n z u</sup>民族舞踊の専門団体はありませんでした。民間では、ただ何人かのお婆ちゃんが踊っていたことがあります。

筆者：いつのことですか？

OM さん：1958年のことです。1963年、自治旗成立5周年記念に（<sup>m i n z u</sup>民族舞踊の上演が一筆者補）行われました。そのときは、達斡爾民族の作曲家である通福さんを誘って歌を歌いました。自分たち（達斡爾民族一筆者注）の歌を改作したものです。これは私たちが次第に発展させたものです。次に、彼（通福一筆者注）の創った歌が流行しました。そのとき、私は既に文化局（当時は文教科のはず一筆者注）で働いていました。普段から彼の面倒を見ていました。題材や資料は、私たちが彼に探してあげました。

筆者：先生の言った民間（のもの一筆者補）というのは作ったものですか？民間で収集したものですか？

OM さん：民間で作ったものは、田舎から人を探しました。中年と老年の人を探しました。数人程度です。四人にすぎませんでした。（人数が一筆者補）多くなると招待できませんでした。四人から六人が一つの演目を演じました。（田舎から人を呼ぶ以外

---

<sup>149</sup> 達斡爾語 *lurgiel*。達斡爾民族の民間舞踊のひとつ（恩和巴図 1983 : 142）。

<sup>150</sup> 子供たちの祝日、毎年の六月の一日で行う。



の一筆者補) 他のことはやったことがありません。当時は、(踊りを上手に踊れるさほど多くの一筆者補) 人が見つかりませんでした。

筆者：踊れるが少なかったのですか？

OM さん：踊れる人は多くいました。民間には多くいました。しかし、見つかりませんでした。後になって、次第に(民族一筆者注) 工作が展開するようになってから発見されるようになりました。また、上も(中央、フフホトあるいはフルンボイルの政府一筆者注) 文化芸術の公演を行いました。この状況になって、(民族踊りを踊れる人一筆者補) 比較的好く発見できるようになりました。

筆者：それらの仕事は全部当時の文化局が行ったのですか？

OM さん：はい。

筆者：当時、(文化局は一筆者補) どのような仕事をしていましたか？

OM さん：その当時は、文化に関する宣伝教育、民衆に対する文化活動は行っていませんでした。私が(文教科に一筆者補) 来た後に(ようやく始まりました一筆者補)。それ以前は、全部漢民族の芝居でした。(中略) まったくでたらめなもので、牛鬼蛇神<sup>151</sup>さもなければ下品なものを演じていました。それで、(下品な芝居を見せる漢民族は) 農村で活動します。その時はそれら活動を(なくすことは) 大変難しかったです。こちらで断られたらあちらでやる。民衆には他には何の活動もありませんでしたから、彼らは(漢民族の下品な芝居を) 見聞きするのが好きでした。(後略)

筆者：では、民族(文化一筆者補) に関する活動はいつから始まりましたか？

OM さん：民族(文化一筆者補) に関する活動は 1955 年から始まりました。

筆者：先生が(文教科に一筆者補) 行った後ですか？

OM さん：私が来た後に展開しました。その時(OM さんが文教科に来た時一筆者注) には専任の人はいませんでした。なぜその時(OM さんが文教科に来た時一筆者注) に(民族文化の活動を一筆者補) 行ったかと言えば、内モンゴル(のフフホト一筆者補) で一つの民衆文化公演をやったからです。全区(内モンゴル自治区一筆者補) の第一回目の民衆文化公演でした。今では、内モンゴルではこのような公演はできません。その時(内モンゴル自治区全区で民衆文化公演を行った時一筆者注)、どのようにして行ったかわかりません。一ヶ月やりました。(内モンゴル自治区の政府は一筆者補) あの人たち(民衆文化公演に参加する人一筆者補?) の料金を払いました。(自分の演目を一筆者補) 上演した後、(すぐに故郷には一筆者補) 帰りませんでした。今は、(自分の演目の一筆者補?) 上演が終わったらすぐに帰りますよね。皆さん(民衆文化公演に参加した人々一筆者注) はずっと上演を見ました。彼らは(全部の演目の一筆者補) 上演が終わるまで毎日見に行きました。

筆者：これはいつのことですか？

OM さん：1955 年の 10 月 1 日から 31 日まででした。私たちは 11 月の時に(モリダワ

---

151 「牛鬼蛇神」とは妖怪変化の意味。

一旗に一筆者補) 帰りました。帰る時はもう 11 月の初めになっていました。私たちが迎えた (モリダワー旗の一筆者補) 人はみな短く毛皮の服を持っていました。(後略)

筆者：どのような演目を演じましたか？

OM さん：魯日格樂、烏春<sup>152</sup>、民間に伝わる歌、木庫蓮を演じました。

筆者：先生も参加しましたか？

OM さん：いいえ、私は上演隊を率いました。

筆者：(公演に参加した人は一筆者補) 何人ぐらい行きましたか。

OM さん：10 人ぐらいでした。全員民衆でした。田舎に選びに行って、努図科に推薦された人でした。踊り (魯日格樂一筆者注) は 6 人、烏春は 2 人、(木庫蓮の一筆者補) 演奏は 1 人、私を加えて 10 人でした。当時は「草原列」という<sup>153</sup>汽車がまだ通っていませんでした。(中略) フフホトに行くときには、北京では下車しませんでした。(モリダワー旗に一筆者補) 戻る時には北京で三日間泊まりました。頤和園、故宮に行きました。(公演に参加した一筆者補) 民衆たちはすごく喜びました。(中略) 私たちの (隊の一筆者補) 烏春を演じたお爺さんは、あの物 (故宮にある扁額に書かれている満州文字一筆者補) が分かりました。彼は満州文字が読めますから、満州文字を見たらわかります。彼はすごく喜びました。(中略) 彼は (モリダワー旗に一筆者補) 戻った後、旗 (の政府一筆者補?) も彼を重視して、また活動があった時に、烏春と口胡<sup>154</sup>を演じました。今、彼のように (口胡を演じる技術一筆者補) を持っている人はいません。彼は 15 の調子を奏することができます。今、(口胡を演奏) できる人はただ一つか二つ (の調子一筆者補) しか奏できません。彼は幾つかの鳥の鳴き声もできます。魯日格樂の踊り手が出す叫び声もできます。

以上は OM さんが 1950 年代に行った<sup>m i n z u</sup>民族文化関連の仕事に関するインタビュー内容であるが、さらに OM さんに木庫蓮のことを尋ねた時の模様を紹介してもらったインタビュー内容を加えよう。

筆者：先生は小さいころ、だれに木庫蓮を学びましたか。

OM：この仕事 (民族文化の仕事一筆者注) を始めてから勉強しました。

筆者：小さいころは出来なかったのですか？

OM：できなかつたです。私は小さいころから町で育ちました。私の父親と母親もできなかつたです。魯日格樂などは、私のお母さんもできないです。私はこの仕事を始めてから勉強を始めました。民間に伝わる歌を収集する時に、民間に伝わる歌

<sup>152</sup> 達斡爾語 *uqun, uqin*。「詩歌」という意味である (恩和巴圖 1983 : 221)。

<sup>153</sup> フフホトへの直行汽車のこと。

<sup>154</sup> 形状と吹奏の方法が口琴に似ており、調べが二胡に似ている楽器のこと。

を学びました。収集したものは何でも勉強しました。踊りを収集する時には彼らの踊りを学びました。(民族文化の一筆者補) 仕事する時には何もわからなかったらだめです。

OMさんは最初の民族文化幹部であるが、彼女は民族文化の収集及び創出に積極的に参加した。上の④のOFさんと同じくOMさんも1950年代の達斡爾民族が識別されたことに直面した。OMさんも最初は仕事として民族文化の活動を展開した。OMさんは「私が(文教科に一筆者補)来た後に(ようやく始まりました一筆者補)。それ以前は、全部漢民族の芝居でした」というような民族文化活動を展開したことに言及している。これはOMさんが“私たち達斡爾民族の文化”という考えをもって民族文化活動を展開したことなのだが、梶谷真司の文化的アイデンティティに関する叙述に基づいて分析すれば、達斡爾民族が識別されることを背景に、民族文化幹部であるOMさんには、民族文化に対する「憧れ」があったのである。OMさんが民族文化活動を展開するに伴って、OMさんには達斡爾民族文化的アイデンティティが形成され始めたと考えられる。

以上から見れば、達斡爾民族の識別後、達斡爾民族の学者と達斡爾民族人集中地域の民族文化幹部の中に、達斡爾民族の文化の収集と達斡爾民族文化活動の展開を通じて達斡爾民族の文化的アイデンティティが形成され始めたといえるであろう。

## (2) 達斡爾民族の学者と民族文化幹部以外の人々の民族文化的アイデンティティの形成

上では達斡爾民族の学者と民族文化幹部が達斡爾民族の文化的アイデンティティを形成したことを明らかにした。では、達斡爾民族の達斡爾民族の学者と民族文化幹部以外の人々は民族文化的アイデンティティをいつから形成し始めたのだろうか。

以下に論じるように、彼らの民族文化的アイデンティティ形成は、学者と民族文化幹部における形成の後のことであった。達斡爾民族の学者と民族文化幹部以外の人々の民族文化的アイデンティティ形成は書籍、メディア、民族活動(文化交流)、学校教育など幾つかのルートを通じてなされたのであった。

### ①書籍

達斡爾民族の族源に関し、民族識別の前になされた研究では、モンゴルの一部族、契丹の後裔あるいは混血した契丹の後裔、更に體質学的観点からツングースとするなど、幾つかの説が出されていた。こうした諸説乱立の状態にあった中、中国で民族識別活動が行われたに伴い、陳術の「關於達呼爾族的来源(ダフル族の来源について)」(中央民族学院研究部編1955:89-121)という学術論文が現れた。この論文には、「達呼爾(ダフル—筆者注)の来源は契丹である」(中央民族学院研究部編1955:121)と結論されている。

特に、1980年代以降に中国国内で現れた研究では「契丹」の後裔とみる傾向が強くなり、とりわけ「契丹の後裔説」を検討する学者が目立つようになった。たとえば王咏曦は「歴

史文献と学者たちの著述から見れば、達斡爾族の族源は契丹である。言語と民間伝説から見ても族源が契丹であることを証明できる」(黒龍江省民族研究会、黒龍江省民族研究所 1987:157)と論じている。烏力斯・衛戎は「達斡爾は蒙古、ソロン、満州の後裔ではなく、契丹の皇族の遺部族である」(方衍 1992:59)と断じている。董國堯は「契丹説、蒙古説、ソロン説、室韋説、白韃靼説があるが、達斡爾は契丹に起源を持つという観点は人々に認定されている」(董國堯 1997:51)と論じている。

これら書籍や研究の出版は、達斡爾民族の学者と民族文化幹部以外の人々の民族文化的アイデンティティの形成に重要な役割を果たしている。なぜならば、学者と民族文化幹部以外の人々が持っている民族文化に関する知識の大部分は書籍から得ていることがわかるからである。たとえば、上でも提示した⑧の QF さんである。

筆者：ムルス区の達斡爾民族人はどこから来ましたか。

QF：300年前、17世紀の30、40年代、大体1640何年、黒龍江の中、上流から南に移動して、嫩江流域にきました。このことについては一つの歴史の伝説があります。当時(1640年ごろ)ロシア帝国は黒龍江の中、上流を侵略しました。300年前には黒龍江は中国の疆域に属していました。ロシア帝国はこの地方を侵略しようとしていました。黒龍江地域は達斡爾の生活の地方でした。ロシア帝国のコサックの軍人が侵略した時には、特に達斡爾が初めて抵抗しました。(後略)

筆者：あなたは族源についてどう思っていますか。

QF：基本的に、契丹の後裔と定着しています。幾つかの説があります。この中には主には契丹説です。北京の科学者が通遼と赤峰一帯で掘り出した古い死体のDNAを鑑定しました。この鑑定された契丹の女性の古い死体を今のモリダワー達斡爾民族自治旗の達斡爾(民族一筆者補)、エヴェンキ(民族一筆者補)、漢民族のDNAと比較する研究を行いました。(この研究の結果、一筆者補)達斡爾(民族人一筆者)のDNAが契丹(人一筆者補)のDNAと最も近かったのです。

筆者：内モンゴル大学の恩和巴図先生の「大夏説」についてどう思っていますか。

QF：関係資料を読んだことがあります。でも、(私は一筆者補)契丹説に傾いています。学術はいろんな話があるはずですが、科学的論証をより信じます。

筆者：あなたはホッケーをやったことがありますか。

QF：やったことがあります。一つは牛の毛で作ったボールです。もう一つは火のボールです。火のボールはボールの上に油を塗って夜に遊びます。きれいです。世界中でも達斡爾(民族一筆者補)だけがそのようにやります。

また、筆者の友人である AH さん(29歳 達斡爾民族 モリダワー達斡爾族自治旗出身 無職 2011年7月25日)は自分の達斡爾民族の伝統、歴史について話せる人物である。

AH：私たち（達斡爾民族人一筆者補）は契丹の後裔です。DNA の検査で分かりました。達斡爾民族の先祖はシャージガルディ・ハン、モンゴル民族の先祖はチンギス・ハンです。（後略）

筆者：それをどこから知りましたか。

AH：本に全部書いてあります。

このような話を筆者との雑談で繰り返し語ってくれた。

QF さんは公務員であり AH さんは無職である。この二人は、筆者がここで着目している学者や民族幹部以外の達斡爾民族人である。QF さんが披瀝しているムルス区の達斡爾民族人の来歴、達斡爾民族の族源、ホッケーに関する知識のうち、QF さんが書物など出版物から知識を得たに違いないとおもわれるのは、達斡爾民族の族源に関する知識と情報である。QF さんは、内モンゴル大学の恩和巴図氏の「大夏説」について「関係資料を読んだことがあります」と答えている。「ムルス区の達斡爾民族人はどこから来ましたか」という筆者の問いに対する QF さんの答えは、専門でない者が知ろうとするならば、書籍や雑誌・新聞などを読まなければ知ることのできない内容である。AH さんにいたっては、語ったこと全て本に書いてあると言っている。

公務員の QF さんと無職の AH さんは確かに自分の達斡爾民族の歴史や文化をよく知っていて、これが書籍を始めとする出版物に由来するということがあきらかである。

## ②達斡爾民族文化活動

書籍が形成している民族文化的アイデンティティ以外にも、学者と民族文化幹部以外の人々は、民族文化活動に参加することによって、達斡爾民族の民族文化的アイデンティティを形成している。たとえば、筆者が 2011 年 6 月 26 日にモリダワー達斡爾族自治旗で行われた「達斡爾民族ファッションショー」でアンケートを行った（配付 30 枚、回収 22 枚、回収率 73.33%）。アンケート用紙は達斡爾民族人にのみ配付した。ここでアンケートを答えた人々の属性と紹介すべき質問（問 1、問 2）と回答を下の表にまとめて示しておく。

問 1：どうして今度の活動に参加したか？

回答選択肢	回答者数
A. 見るだけ。	0 人
B. 達斡爾民族の伝統文化を知るため。	12 人
C. 達斡爾民族の文化活動なのでぜひ参加すべきと思ったから。	9 人
D. 勤務先が組織したから。	1 人

問2：この活動を通じて達斡爾民族の民族服装についてどのぐらい了解したか。

回答選択肢	回答者数
A. 了解できなかった。	0人
B. 少しだけだった。	6人
C. 比較的多かった。	8人
D. 多かった。	8人

《表9》アンケートを受けた人々の属性と回答

略号	年齢	性別	職場	問1	問2
1	31	女	化粧品会社	C	D
2	38	女	個人経営者	B	C
3	34	女	(未記入)	C	B
4	13	女	小学生	B	D
5	13	女	小学生	B	C
6	38	女	農民	C	D
7	48	女	(未記入)	C	D
8	43	女	民政局	C	D
9	47	女	食品会社	B	C
10	38	女	幼稚園	C	C
11	22	男	公安局	D	C
12	34	女	(未記入)	C	C
13	22	男	(未記入)	B	B
14	17	女	(未記入)	B	C
15	14	女	(未記入)	B	D
16	27	男	民族実験小学校	C	D
17	27	女	(未記入)	B	B
18	35	男	無	B	B
19	21	男	無	C	B
20	19	男	(未記入)	B	D
21	17	女	無	B	B
22	40	女	(未記入)	B	C

筆者作成

以上のアンケートに答えた達斡爾民族は、その職場が確認できる範囲内では、学者と民族文化幹部以外の人々である。彼らの問1への回答がBとCに集中していることは、民族文化

化的アイデンティティの形成問題と関連があると考えられる。Bの「達斡爾民族の伝統文化を知るため」と答えた達斡爾民族人には、民族文化活動を通じて民族文化的アイデンティティが形成されていると見ることができる。Cの「達斡爾民族の文化活動なのでぜひ参加すべきと思ったから」と答えた達斡爾民族人には既に民族文化的アイデンティティが形成されていることを示している。BとCに答えが集中したことは、民族文化活動が民族文化のアイデンティティの形成を促進していることを裏付けている。

問2は、この民族文化活動が彼らの民族文化のアイデンティティにどの程度の影響を与えているかを知るための試みである。全ての回答者が何らかの了解を得たと答えており、CとDのような肯定的な回答がBのようなやや否定的な回答を大きく上回っていることがわかる。このことから、この「達斡爾民族ファッションショー」の活動を通じ、活動に参加した達斡爾民族の人々の、達斡爾民族の民族文化について認識を深めている数が多いことがわかる。達斡爾民族の民族文化活動は民族文化的アイデンティティに大きな影響を与えているといえるだろう。

反対に、このような民族文化活動があまり行われていない所の達斡爾民族の人々の民族文化的アイデンティティは、このような活動に参加する人々のように強くはない。その例として、本節の一、で示したアロン旗在住の⑩LZさんの話に再び注目しよう。

筆者：あなたは達斡爾民族人ですか。

LZ：はい。

筆者：達斡爾民族語ができますか？

LZ：あまりできません。簡単なのはできます、複雑だったらできません。

筆者：小さい時にはほとんど話せましたか。

LZ：聞くのは大丈夫でした。複雑な言葉は私はできませんでした。

筆者：どこからここに引っ越して来ましたか？

LZ：音河というところからです。

筆者：前は、チチハルにいましたでしょうか？

LZ：元々、お母さんたちはチチハルにいました。後に音河に引っ越しました。

筆者：いつ音河からここに引っ越しましたか。

LZ：私は結婚する時にここに来ました。

筆者：ここは、何年間になりましたか。

LZ：20年以上になりました。私の子供も22歳になりました。

筆者：あなたは小さい時には民族の踊りを踊りましたか。

LZ：できません。お姉さんはちょっとできました。彼女のところの達斡爾民族は（達斡爾民族らしさを持って一筆者補）いいです。あなたは、莫旗（モリダワー達斡爾族自治旗の略称一筆者補）よりは、ホランエルギ（区一筆者補）に行った方がいいです。私の姉さんの家に行って、彼女は貴方を連れて、あそこの老人は

多いですね。彼らと話したらいいでしょう。

筆者：お姉さんは仕事をしていますか。

LZ：元々はしていましたが、今はやっていません。女性の連合委員会の主任でした。今は高齢になったので仕事を辞めました。あそこ（ホランエルギ区—筆者注）では（お正月の—筆者補）15日になったら踊りを踊ります。

筆者：どのような踊りですか？

LZ：達斡爾民族踊りです。本当に、あそこでインタビューしたら一番いいです。

LZさんの住むアロン旗は、今の達斡爾民族の人々が集中して住んでいるモリダワー達斡爾族自治旗、チチハルのムルス区とホランエルギ区、ハイラルのエヴェンキ族自治旗の南屯からやや離れたところにある。LZさんは小さい時から達斡爾民族が集中して住んでいるチチハルのホランエルギ区から離れたところにいたため、そこでの民族文化活動に参加しなかった。そのためか、彼女は民族文化についても知るところが少なく、民族文化的アイデンティティも強くはないと感じさせるに十分な内容である。LZさんは、姉が住んでいるチチハル市のホランエルギ区が達斡爾民族集中地域なので、そこを調査することを勧めた。この勧めから、彼女には、達斡爾民族人が集中しているところには民族文化があるという考え方がることがわかる。達斡爾民族文化の中心から外れたところに住む達斡爾民族人LZさんの生活に達斡爾民族文化は強い影響は与えていない。

以上、達斡爾民族文化活動に関するアンケート調査と達斡爾民族人が集中していないところに住む達斡爾民族人へのインタビューから、達斡爾民族文化活動が盛んに行われているところでは、その活動が達斡爾民族の人々の民族文化的アイデンティティ形成に大きな影響を与えている。しかし、民族人が集中していないところでは、民族人が民族文化活動に参加する機会が少ないため、民族文化活動が民族文化的アイデンティティの形成に与える影響は弱い。民族文化活動への参加は、民族人口集中地域における達斡爾民族文化的アイデンティティ形成の一つのルートになっている。

### ③ 達斡爾民族教育

民族教育によって民族の文化が宣伝されたことは、すでに第2章の第2節の2で論じたが、民族教育は達斡爾民族文化的アイデンティティの形成にも大きな影響を与えていると考えられる。この民族教育を通じての影響は、学校において民族文化活動に参加することによってもたらされる。

達斡爾民族学生は、学校教育や学校が組織した民族文化活動に参加することを通じて、彼らの民族文化アイデンティティを形成し強めていると考えられる。上でも事例にした⑮DMさんの発言をここにふたたび引こう。

筆者：あなたは達斡爾民族ですか。



DM：はい。そうです。

筆者：達斡爾民族語ができますか。

DM：できます。私の故郷では人々は達斡爾民族語で話します。

筆者：いつから、自分を達斡爾民族と意識しましたか。

DM：達斡爾民族学校に入った後です。達斡爾民族学校に入った後から、この意識がありました。だから、私は学校の図書館で本を読みました。そして、私たちは本当に契丹の後裔と思っています。達斡爾民族語には“阿保吉（aboji—筆者注）”という言葉があります。契丹の耶律阿保機（阿保機の発音も aboji—筆者注）と一緒にだと思います。モンゴル民族はとてもたくさん自分の文化を持っています。達斡爾民族もモンゴル民族のような民族文化を持つ必要があります。

DMさんは達斡爾民族学校に入った後から、自分が達斡爾民族であるとの意識を持つようになり、学校で達斡爾民族の歴史に関する書籍を読み、自ら民族の歴史を理解した。このように達斡爾民族学校における民族教育は、彼女の民族文化的アイデンティティの形成に一定の役割を果たした。

また、筆者が調査した年の夏休みには19歳の高校生であったDMさんは、その年の9月からは大学に進学する予定である。進学後は大学で達斡爾民族文化活動を開催すると筆者に話した。筆者はDMさんとホッケーの試合の場所で出会った。

筆者：どうしてこの活動に参加しましたか。自分で来ましたか。

DM：いいえ。学校のボランティアで来ました。私は今年、高校卒業しました。夏休みはすることがなかったです。また、自分でも達斡爾民族の活動に参加して、自分の民族の文化を知りたいです。これは最後の機会です。だから、来ました。

筆者：あなたはどこの大学に入りましたか。

DM：内モンゴル民族大学です。

筆者：そうですか。私の故郷の学校ですね。

DM：本当、あそこはどうですか。

筆者：モンゴル（民族—筆者補）人がいっぱいですね。

DM：モンゴル民族は偉いですね。大きな民族です。私たち達斡爾民族とは違います。自分の文字を持っています。私たちは小さな民族です。われわれ達斡爾民族は文字がありません。モンゴル民族の文化もすごいです。私は、大学入学後には（大学の—筆者補）自分の民族の人々を集めて、達斡爾民族の（文化—筆者補）活動を行います。

DMさんは大学に入学する直前の夏休みに、高校（達斡爾民族学校—筆者注）が組織したボランティアを通じて自発的に達斡爾民族の文化活動に参加している。これを通じて達斡

爾民族を了解したいとの思いからであるという。この思いも、DMさんが達斡爾民族学校に通って受けた民族教育の結果である。したがって、達斡爾民族学校の学生たちが民族教育を通じて民族文化的アイデンティティを形成していると判断してよいだろう。達斡爾民族学校入学後、民族学校という雰囲気のもとでの民族文化活動は、達斡爾民族の学生における民族文化のアイデンティティの形成を促進した。民族の一部若者の民族文化のアイデンティティは学校の教育を通じて形成されているのである。

## 2) まとめ

1950年代、達斡爾民族の民族文化的アイデンティティは学者と民族文化幹部たちが行った民族文化の収集を通じ、初めて彼らの中に形成された。学者と民族文化幹部以外の民族の人々の民族文化的アイデンティティは達斡爾民族の学者と民族文化幹部たちが刊行した民族文化に関する書籍や文章を読むことや、民族人口集中地域や民族教育を担う民族学校で実施される民族文化活動に参加することによって形成された。つまり、達斡爾民族の民族文化的アイデンティティは学者と民族文化幹部に発し、ほかの民族の人々までへ形成された。

## 小結

本章では達斡爾民族のアイデンティティについて考察を行った。第1節では民族識別活動が行われる前のダフル人のアイデンティティについて、第2節では民族として識別された達斡爾民族のアイデンティティについて考察を行った。

民族と識別される前のダフル人のアイデンティティは重層的であり、ダフル人のアイデンティティ以外にハイラル地方の一部分のダフル人にはモンゴル人というアイデンティティがあった。民族識別活動の展開に伴って、彼らには新しく民族というアイデンティティが形成された。現在、達斡爾民族が居住する各地の老人の中には、民族識別以前の元来からのもとのダフル人というアイデンティティが若干重なって残っており、ハイラル地方の一部分の老人にはモンゴル人というアイデンティティが重なって存在している以外には、達斡爾民族としてのアイデンティティがますます強くなっている。識別された民族である達斡爾民族は、もとのダフル人が持っていた重層的アイデンティティを民族としてのアイデンティティに単一化している過程にある。

また、達斡爾民族人には新たな民族文化的アイデンティティも形成された。このアイデンティティは最初、達斡爾民族の学者と民族文化幹部の中に形成され、現在では、学者と民族文化幹部以外の達斡爾民族人の中にも形成されるに至っている。この、国家によって創造された民族名称によって形成された民族としてのアイデンティティにせよ、民族の学者と民族文化幹部たちによって創出された民族文化を通じて形成された民族文化的アイデンティティにせよ、識別された民族である達斡爾民族にとっては、全て民族としてのアイデンティティに他ならない。国家によって民族として公定されたこと、このことが識別さ

れた民族である達斡爾民族のアイデンティティ形成の根源的動因となったのである。

## 結論

### 1. 論文の内容のまとめ

本論文の第1章では達斡爾民族の識別、第2章では達斡爾民族の創造と民族文化の創出、第3章では達斡爾民族のアイデンティティについて考察した。

#### 1) 達斡爾民族の識別

第1章は二つの節から成る。第1節では、中国の民族識別工作について検討した。第2節では、達斡爾民族の識別工作について検討した。

第1節では、本論文全体の背景ならびに考察のきっかけとして、中国の民族識別工作を検討して、この工作を概論することを試みた。この概論で意を用いたのは、中国の民族識別工作の開始の背景と民族識別工作の作業を明らかにして、民族識別工作に関する先行研究によってすでに知られるようになっている民族識別工作の四つのプロセスのうち、第一段階に含まれている、中国中央政府からの中央民族訪問団派遣、少数民族代表の国慶節への招待、民族地方での少数民族幹部の養成、民族高校の設立、少数民族の貿易・教育・衛生に関する調査などの活動が、少数民族地域において、その後に続く民族識別活動への雰囲気醸成する役割を果たしたことを特筆した。また、中国の識別工作の基準では、共通の言語、共通の地域、共通の経済生活、共通の心理要素という四点の特徴以外、民族と識別される側の意願が持つ重要性をも特筆した。

第2節では、達斡爾民族の民族識別工作について考察を行った。達斡爾民族識別以前のダフル人の民族識別までの動向、達斡爾民族として識別されたプロセスに関する考察を通じて、ダフル人が達斡爾民族として識別されたことにおいては、中央政府による民族政策の実行以外の部分で、ダフル人のエリートたちが大きな役割を果たしたことを力説した。彼らの努力がなかったら、ダフル人は達斡爾民族として識別されなかったであろう。達斡爾民族が識別されたことは中央政府とダフル人エリートたちの両方の合力の結果である。どちらか一方でも無くなったら、民族として識別されることは困難であった。

この章を通して、筆者は、中国における民族の創造と民族識別を検討する時には、中央政府の役割だけではなく、創造される側、識別される側の役割が重要な意味を持つことを主張した。

#### 2) 達斡爾民族の創造と民族文化の創出

第2章は、達斡爾民族の創造と民族文化の創出を扱った。とくに、民族として識別された後の達斡爾民族の政治的創造と文化の創出について考察を行った。

第1節では達斡爾民族の政治的創造を論じた。ここでは、文化大革命によって時期を分かって、前半を1950年代から1960年代まで、後半を1970年代末・80年代から現在まで

として考察を進めた。民族として識別された 1950、60 年代、達斡爾民族は自己の民族名称を得て、自己の民族自治地域を獲得し、大量の民族幹部を養成する機会を得た。文化大革命の時には民族工作は一時停滞したが、1970 年代末から 80 年代の初めになって工作が復活し活発となった。この時期には、民族工作の中心が変わり、民族の経済と文化を建設することが重要な民族工作となった。このような変化のもと、達斡爾民族の政治的創造は一層活発化した。1950、60 年代に果たされた民族の創造に加えて、自己の自治条例を制定し、民族幹部の数を増やし、新しく民族地域として認定された地点も増えた。つまり、国家は、達斡爾民族という名称と、それが存在するための達斡爾民族の場所を与えたということである。これらは、達斡爾民族の名と場所にふさわしい実体的要素を納めるための「器」のようなものであると考えてよい。

第 2 節では民族文化の創出を扱った。上の同じく二つの時期に分けて考察を進めた。1950、60 年代には、学者たちの研究がさかんに行われた。学者たちの研究によって、民族文字が創出され、民族史が創出され、民族の伝統が創出された。これが、上に述べた「器」に収める実体的要素に他ならない。以上の創出された文化は、民族文化幹部が組織・実行した民族文化活動において応用（実用）され、それは今もなお変わらない。民族文化活動は民族文化の伝播と認知に大きな役割を果たしている。

1970、80 年代から現在までの間、民族文化が次々と創出されたことに伴って、民族文化の宣伝工作がさらに活発となり、民族文化機関が増加した。学校での民族文化教育も始まった。1950、60 年代の民族文化活動の中心が文化を収集する活動であったことに比べ、この時期の民族文化活動は、民族文化の伝播が重要になった。これと軌を一にして、民族歴史文化施設の建築が始まった。とりわけ重要なのは、達斡爾民族文化を専門に研究する機関である達斡爾学会が達斡爾民族の各集中地域に設立したことである。達斡爾学会が、今の達斡爾民族の民族文化の創出と宣伝に果たした貢献は巨大である。

一方、この時期に入ると、学者、民族文化幹部、知識人が民族文化を創出するだけでなく、民衆が民族文化活動に参加しはじめた。彼らはインターネット上に「達斡爾論談」という掲示板を作り、民族文化の交流を広範に展開するようになった。また、政府が開催している民族文化活動にも、民衆が積極的に参加するようになった。

第 3 節では、創出した民族文化の伝統化について検討を行った。達斡爾民族の学者はまず、民族文化の伝統化の基礎になる民族の歴史を構築した。この上に民族文化の要素として民族文学、民族の祭典、民族の体育活動、民族の踊り、民族の食品を位置づけ、民族文化を伝統化した。つまり、1950 年代に達斡爾民族が識別されてから今日に至るまでの 60 年間を経て、達斡爾民族は民族の内実としての民族伝統文化を持つ民族となることに成功したのであった。達斡爾民族の名称と創出した民族文化は、達斡爾民族が自らの存在を他民族の人間に向けてだけでなく、自民族に向けて主張する手段を整えたという点で大きな意義があると思われる。言い換えれば、達斡爾民族としての明確なアイデンティティの形成に大きな役割を果たしていると考えられる。

### 3) 達斡爾民族のアイデンティティ

第3章では、達斡爾民族のアイデンティティについて検討を行った。

第1節では、ダフール人の書いた文献資料と1950年代にはダフール人であった今の達斡爾民族の老人に対して行ったインタビュー内容の分析によって、ダフール人のアイデンティティを考察した。清朝のエリート知識人であった華靈阿の『達斡爾索倫源流考』（1833年）には「私たちダフール・ソロン」という表現が見えていることから、清朝の時のダフール人エリート知識人には「ダフール・ソロン」というアイデンティティがあったことが判明する。民国・満洲国期の郭克興はダフール人というアイデンティティを、阿勒坦噶塔と徳古来はモンゴル人というアイデンティティを、孟定恭はダフール人というアイデンティティを、欽同普はダフール人というアイデンティティを持っていた。何維忠のアイデンティティは文献資料に発見できなかった。以上から見れば、民国・満洲国期のダフール人のエリート知識人たちには、ダフール人というアイデンティティとモンゴル人というアイデンティティが重層化しているアイデンティティがあった。

新中国で民族識別工作が展開するに伴い、ダフール人幹部の中には民族というアイデンティティが萌芽始めた。

インタビュー資料によると、ダフール人のアイデンティティには、以下のような微妙な差が見られる。ひとつ目は、出身地によるアイデンティティの差である。内モンゴルのハイラル地方のダフール人はモンゴル人とダフール人という二つのアイデンティティを持っているが、モリダワ達斡爾族自治旗と黒龍江省地方のダフール人はダフール人のアイデンティティしか持っていない。二つ目は、職業によるアイデンティティの差である。ダフール人のエリート知識人の持つアイデンティティ意識は農民より強い。

つまり、文献資料によると、ダフール人の中には「ダフール・ソロン人」、「ダフール人」、「モンゴル人」とアイデンティティがあったことがわかり、インタビューの内容によると、ダフール人の中にはダフール人というアイデンティティとモンゴル人というアイデンティティがある。識別される前のハイラルのダフール人には複数のアイデンティティが存在したのである。

このような複数のアイデンティティが存在するようになった要因には、ダフール人エリート知識人が“モンゴル”の名の下に行った政治活動があったという歴史的要因、モンゴル人とモンゴル人居住地からの距離という地理的要因、エリート知識人・学者・知識人・農民という階層的要因があった。

第2節では、達斡爾民族の民族としてのアイデンティティについて考察を行った。この達斡爾民族の民族としてのアイデンティティには、民族呼称によって形成した民族としてのアイデンティティと、民族文化によって形成した民族としてのアイデンティティがある。現在の達斡爾民族人の60代から10代までの8人全員が達斡爾民族としてのアイデンティティを持っている。60代以上のダフール老人が持つダフール人のアイデンティティも、ハイラルの一老人がモンゴル人のアイデンティティを持っている以外は、達斡爾民族として

のアイデンティティと重なっている。達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>として識別された後、ダフル人が持っていた複数のアイデンティティは達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>としてのアイデンティティに収斂するという単一化が起こり、またアイデンティティの強さには差がみられるようになった。これらの要因としては、年齢、職業、地域がある。このような変遷・変化は、①ダフル人のアイデンティティから達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>としてのアイデンティティへ、②モンゴル人のアイデンティティから達斡爾民族<sup>mǐn zú</sup>としてのアイデンティティへ、③少数民族<sup>mǐn zú</sup>のアイデンティティから小少数民族<sup>mǐn zú</sup>のアイデンティティへ、④エリート的アイデンティティから大衆的アイデンティティへ、とまとめることができる。

民族文化によって形成された民族<sup>mǐn zú</sup>としてのアイデンティティを筆者は民族文化的アイデンティティと呼称している。民族文化的アイデンティティの形成は、先に達斡爾民族知識人と民族文化幹部の中に起こり、次第に達斡爾民族知識人と民族文化幹部以外の民族の人々の間にも形成された。達斡爾民族知識人と民族文化幹部の民族文化的アイデンティティは民族文化の研究と収集によって形成され、ほかの達斡爾民族人のアイデンティティは達斡爾民族学者の著書と民族文化幹部の開催した民族文化活動を通じて形成された。

## 2. 本論文における理論的意義

中国の少数民族<sup>mǐn zú</sup>は、ふたつの「そうぞう」の繰り返しが大きく作用している。筆者の研究で明らかになった過程を単純化して述べよう。中央からの働きかけ（民族政策・民族工作）によって、識別される側は自分たちは何らかの共通性を持った集団である民族であると「想像」する。そしてその「想像」を中央政府と識別される民族側のエリートが識別活動を通じて「創造」して実現する。このような「想像による創造された共同体」である民族は、民族名称と民族自治地域を有するので、その名称と地域の地理的特性からイメージされる文化的特長を帯びた存在であると「想像」され、学者・知識人・幹部が民族の歴史・文化・伝統を「想像」通りに「創造」し、民族の伝統文化を獲得する。民族としての名実ともに想像され創造された。これが民族なのである。

本論文で作業理論として採用した、ベネディクト・アンダーソンの想像の共同体論とエリック・ホブズボウムの作られた伝統論を踏まえて、筆者は、中国における少数民族とは、民族識別をきっかけとして獲得した民族名称と民族自治地域、この二つに相応して想像され創造され伝統化された民族文化、さらに民族名称と民族文化によって形成されている民族としてのアイデンティティを持っていると想像する人々が創造した共同体、さらに端的に言うならば「想像と創造の共同体」である、と定義する。言うまでもなく、「漢民族に比して人口が少ない」ことがこれに加わる。重ねて強調しておきたいのは、中国における民族の創造は、政府による政策を通じての創造なのではなく、政府による識別を通じ、民族側の人々が創造した民族文化を通じての創造なのであるという点と、創造の結果として、民族としての実体がそこにあるという点である。

一方、中国のマジョリティである漢民族については、本論文での考察の範囲外に置いた

都合上、厳格な定義には至ることはできないが、上の少数民族の定義との顕著な差異を明確にしておけば、民族自治地域を有しない点が異なることだけは挙げうる。

このように、本論文で提示した定義は、中国の一少数民族のみを事例にしたものであり、マジョリティとしての漢民族、そして達斡爾以外の少数民族や、民族として識別されていない集団をも視座に入れた検討を行っていない以上、広く中国全体の民族論としては不完全な段階にあることは、筆者自身が十分に自覚しているところである。しかしながら、本論文での到達点は、筆者独自の中国の民族論の完成に向けての出発点を明示していると捉え、広義の中国の民族論は今後の筆者に課された課題としておきたい。

もう一点、筆者が自覚している課題として、ここまでの、中国における民族、とりわけ少数民族の創造に関する研究に基づいて、中国という多民族国家における国民形成の問題にも取り組めるのではないかと考えている。なぜならば、多民族中国における国民の形成は、国民の形成と、その国民を形成する民族の形成があるからに他ならないからである。



## 参考文献

### 【中国語】

- 阿勒坦噶塔『達斡爾蒙古考』東布特哈八旗籌弁處、1933（內蒙古自治區社會科學院民族研究室、內蒙古自治區民族問題五種叢書編委會、1980）。
- 阿如娜『達斡爾族服飾文化現狀的人類學闡釋』內蒙古大學碩士論文、2012年5月12日。
- 奧登掛、呼恩樂『達斡爾族傳統詩歌選譯』內蒙古人民出版社、1991。
- 謝·弗·巴赫魯申『哥薩克在黑龍江上』（郝建恒·高分風譯）商務印書館、1975。
- 巴圖寶音、鄂景海『中國達斡爾族史話』民族出版社 2005。
- 布赫『民族區域自治基本知識』中國經濟出版社、1989。
- 『達斡爾資料集』編集委員會、全國少數民族古籍整理研究室『達斡爾資料集』（第一集）民族出版社、1996。
- 『達斡爾資料集』編集委員會、全國少數民族古籍整理研究室『達斡爾資料集』（第二集）民族出版社、1998。
- 達斡爾族簡史編纂組『達斡爾族簡史』內蒙古人民出版社、1986。
- 丁石慶『莫旗達斡爾族語言使用現狀與發展趨勢』商務印書館、2009。
- 杜興毅『梅里斯達斡爾族志』黃山書社、1999。
- 戴小明、盛義龍、劉木球「民族識別與法律認定—以\_\_家人認定個案為研究樣本」『中央民族大學學報（哲學社會學學版）』2011-5。
- 鄂溫克族自治旗志編纂委員會『鄂溫克族自治旗志』中國城市出版社、1997。
- 恩和巴圖『達漢小詞典』內蒙古人民出版社、1983
- 恩和巴圖『達斡爾語和蒙古語』內蒙古人民出版社、1988。
- 恩和巴圖『達斡爾語話語材料』內蒙古人民出版社 1985。
- 方衍『黑龍江省少數民族族源研究』黑龍江省民族研究所、1992。
- 費孝通『費孝通民族研究文集新編』上卷（1951-1984）、中央民族大學出版社、2006。
- 符拉基米爾佐夫『蒙古書面語與喀爾喀方言比較語法』（陳偉·陳鵬譯）、青海人民出版社、1988。
- 傅朗曇、楊暘、黑龍江省民族研究會·黑龍江省民族研究所『黑龍江省民族研究論文集』（1987-1）
- 干志耿、孫秀仁『黑龍江古代民族史綱』黑龍江人民出版社、1987。
- 菅志翔『族群歸屬的自我認同與社會定義—關於保安族的一項專題研究』民族出版社、2006。
- 何群『環境與小民族生存—鄂倫春文化的變遷』社會科學文獻出版社、2006。
- 何文均、敖海林『吳維榮文集』齊齊哈爾市達斡爾族學會、黑龍江省達斡爾族研究會、2007。
- 何文均、楊優臣『二十一世紀達斡爾族發展研究』黑龍江省達斡爾族學會、2000。
- 何潤「論斯達林民族定義」『民族研究』1998-6。
- 黃光學、施聯朱『中國的民族識別—56個民族的來歷』民族出版社、2005。
- 樂志德 娜日斯『達斡爾論壇』（中）、內蒙古文化出版社、2008。

- 樂志德『達斡爾論壇』(下)、內蒙古文化出版社、2009。
- 樂志德『達斡爾論壇』(第二部)、內蒙古文化出版社、2010。
- 李資源『中國共產黨民族工作史』廣西人民出版社、2000。
- 羅樹杰、徐杰舜『民族理論和民族政策教程』民族出版社、2005。
- 馬鴻林、劉沛霖『嫩水達斡爾人』(齊齊哈爾文史資料第19輯)、齊齊哈爾市政協文史資料研究委員會、1989。
- 馬戎『民族社會學—社會學的族群關係研究』北京大學出版社、2004。
- 滿都爾圖『達斡爾族百科詞典』內蒙古文化出版社、2007。
- 孟志東『中國達斡爾族古籍彙編』內蒙古文化出版社、2007。
- 孟志東『中國達斡爾族民間故事選集』內蒙古文化出版社、2007。
- 孟志東『中國達斡爾語韻文體文學作品選集』(上、下)內蒙古文化出版社、2007。
- 孟志東、恩和巴圖、吳團英『達斡爾族研究』(第一集)內蒙古達斡爾歷史言語文學學會、1987。
- 民族歷史研究室『中國北方古代民族關係史論著目錄』黑龍江省民族研究所、1987。
- 莫力達瓦達斡爾族自治旗、達斡爾學會『莫力達瓦達斡爾族自治旗達斡爾學會通訊』(37期) 2009年9月7日。
- 莫力達瓦達斡爾族自治旗概況編纂組『莫力達瓦達斡爾族自治旗概況』內蒙古人民出版社、1985。
- 內蒙古自治區編集組『達斡爾族社會歷史調查』內蒙古人民出版社、1985。
- 納日碧力格「民族與民族概念辨正」、『民族研究』1990-5。
- 彭勃「我是土家族—記田心桃女士」『民族大家庭』1997-6。
- 祁惠君、叢靜『傳統與現代達斡爾農民的生活』中央民族大學出版社、2006。
- 瓊斯『1931年以降的中國東北』(胡繼瑗譯)商務印書館、1959。
- 曲木鐵西『少數民族傳統教育學』民族出版社、2007。
- 人民出版社編『民族政策文獻彙編』人民出版社、1953。
- 少數民族語言調查第五工作隊達呼爾語調查組『關於達呼爾族的文字問題』、1956。
- 舒景祥『黑龍江省志·民族志資料編』哈爾濱出版社、2006。
- 蘇勇『呼倫貝爾盟民族志』內蒙古人民出版社、1997。
- 蘇勇『呼倫貝爾市人物志』內蒙古文化出版社、2006。
- 孫進己『東北民族源流』黑龍江人民出版社、1989。
- 賽音塔娜、托婭『達斡爾文學史』內蒙古大學出版社、1997。
- 鐵林嘎『莫力達瓦達斡爾族自治旗志』內蒙古人民出版社、1998。
- 熊坤新「斯達林民族定義之我見」、『政界民族』1998-2。
- 王豐『中華人民共和國民族自治地方自治條例彙編(1985~1988)』海洋出版社、1992。
- 巫達『社會變遷與文化認同—涼山彝族的個案研究』學林出版社、2008。
- 燕京·清華·北大1950年暑期內蒙古工作調查團編『內蒙古呼納盟民族調查報告』內蒙古人民出版社、1997。
- 楊建新『中國少數民族通論』民族出版社、2005。

岳曉嶺『關於斡包節達斡爾族傳統文化重構』內蒙古大學碩士論文、2011年5月23日。  
雲南大學歷史研究所民族組『納西族識別和研究資料』1976。  
中國達斡爾族人物錄編委會『中國達斡爾族人物錄』黑龍江人民出版社、1997。  
中央民族學院研究部編『中國民族問題研究集刊』（第一輯）、1955。  
中央民族學院研究部『中國民族問題研究集刊』、1955。  
卓仁、孟大偉『莫力達瓦達斡爾族自治旗志』內蒙古文化出版社、2008。  
龔永輝「可否引入分形思想—關於中國民族理論創新和發展的一點思考」『廣西民族研究』2004-2

### 【日本語】

池尻登『達斡爾族』滿州事情案内所、1949。  
伊藤正子『民族という政治—ベトナム民族分類の歴史と現在』三元社、2008。  
梶谷真司「文化的アイデンティティとグローバリゼーション—社会現象学的考察」『帝京国際文化』17(2003)：121-152。  
エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編、『作られた伝統』（前川啓治、梶原景昭他訳）紀伊国屋書店、1992。  
岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社 1999。  
曉敏「近代におけるダフル人の政治活動—そのアイデンティティに関する一考察—」、『中国研究月報』62-2(2008)：3-19。  
クリュチュフ『アジアロシア民族誌』（沼田市郎訳）彰考書院 1945。  
五十嵐武士『アメリカの多民族体制：「民族」の創出』東京大学出版社、2000。  
坂部晶子『「満州」経験の社会学：植民地の記憶のかたち』世界思想社、2008。  
坂部晶子「中国少数民族の人類学的・社会学的研究についての一考察—主として何群『民族社会学和人類学応用研究』をとおして—」、『北東アジア研究』20(2011)：127-136。  
シロコゴロフ『北方ツングースの社会構成』（川久保悌郎 田中克己訳）岩波書店、1982。  
シンジルト『民族の語りの文法：中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』風響社、2003。  
スターリン『マルクス主義と民族問題』（平沢三郎訳）、国民文庫社、1953。  
白鳥庫吉『白鳥庫吉全集』（第四卷）岩波書店 1970。  
ベネディクト・アンダーソン『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（白石さや・白石隆訳）NTT出版、1997。  
松田素二『抵抗する都市—ナイロビ：移民の世界から』岩波書店、1999。  
松本光太郎「雲南省の彝語支諸集団の民族識別をめぐって（下）」『東京経済大学人文自然科学論集』101(1995)：47-82。  
毛里和子『周縁からの中国：民族問題と国家』東京大学出版社、1998。  
毛里和子『現代中国の構造変動：中国世界—アイデンティティの再編』東京大学出版社、2001。  
余志清「中国における『民族』概念：その理論と実践—民族識別作業を中心して—」、『比較民俗研究』18(2002)：3-21。

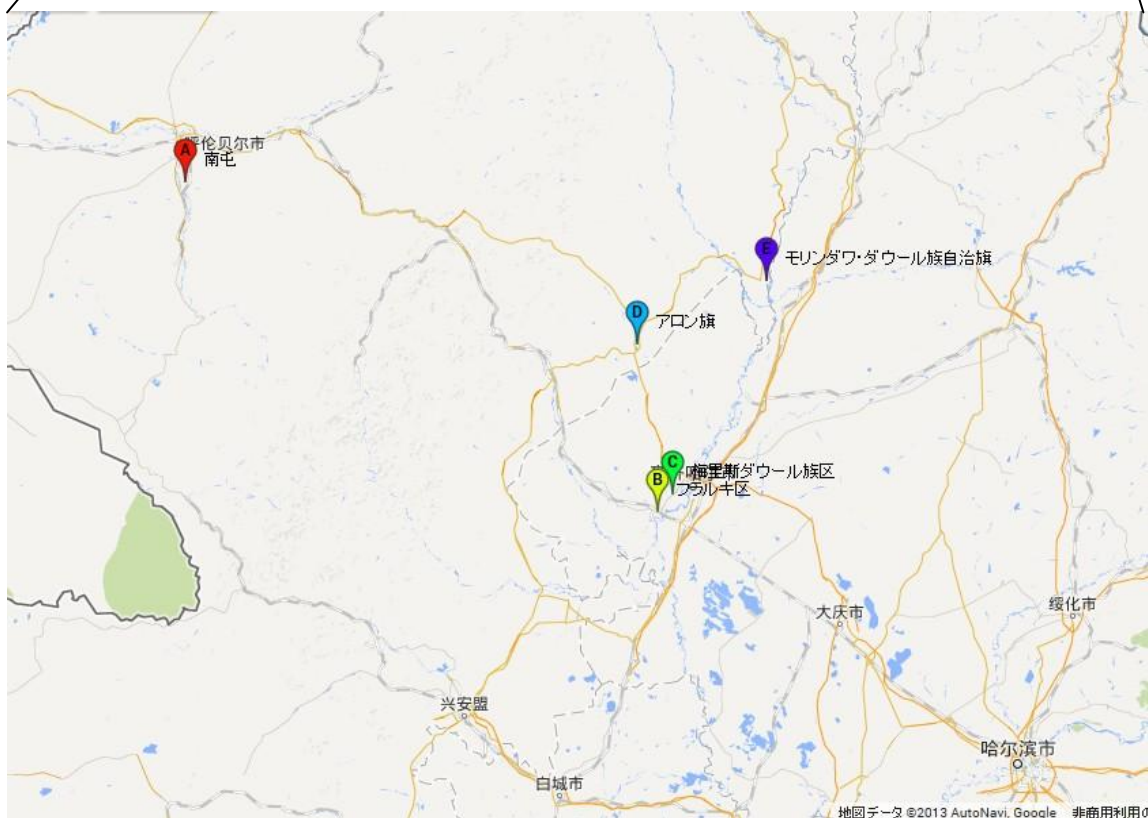
ユ・ヒョジョン、ボルジギン・ブレンサイン『境界に生きるモンゴル世界—二十世紀における民族と国家—』八月書館、2008。

綾部恒雄『講座世界の先住民族 ファースト・ピープルズの現在 10 失われる文化・失われるアイデンティティ』明石書店、2007。

劉正愛『民族生成の歴史人類学—満洲・旗人・満族』風響社、2006。

渡邊昌史「中国・少数民族伝統体育運動会にみるアイデンティティの諸相」、『体育学研究』51-3(2006) : 287-298。

付録 調査地



## 謝辞

本論文の作成に当たり、多くの先生方のご指導とご助言をいただきました。

大学院の博士後期課程の 5 年間において、指導教員であり恩師である井上治先生は私を社会学の分野へと導き、博士論文の完成まで細かくご指導してくださいました。心より感謝申し上げます。

副指導教員になってくださった飯田泰三先生と江口伸吾先生のご指導によって、私の論文が抱えていた問題点をより明確にすることができました。あわせて感謝申し上げます。

大学院合同発表会での発表の時、熱心な助言をくださった沖村理史先生、佐藤壮先生、福原裕二先生、井上厚史先生、林裕明先生の諸先生方をはじめ、論文の執筆から完成にかけて、日本語の修正から製本まで、熱心なご支援をくださった助手の新井健一郎氏、王鳳氏、石田徹氏、孟達来氏に心から感謝申し上げます。

また、弱気になった時、温かく励ましてくださった李曉東先生、坂部晶子先生、張忠任先生にも深く感謝申し上げます。

民族博物館の共同利用研究員として研究を行っていた時、貴重な資料を提供してくださった民族博物館の小長谷有紀先生にも感謝申し上げます。ありがとうございました。また、現地調査の時、熱心に援助をくださった達斡爾<sup>ninzu</sup>民族の人々に心から感謝を申し上げねばなりません。彼らの協力がなければ私の博士論文は完成できなかったでしょう。

最後に、幼稚園から今まで教育育ててくださった先生方、そして、いつも支えになってくれた家族、友達に感謝申し上げます。